大阪大学 GLOCOL 海外体験型教育企画オフィス（FIELDO）

2015 年度　海外フィールドスタディプログラム　報告書

みち

～草原の海に描く未来～

監修：思沁夫　編集：猪熊洋子・阪本悠佑・轟晃成

Fieldwork, Internship and Experiential Learning Design Office GLOCOL Osaka University fieldo

GLOCOL GLOBAL COLLABORATION CENTER

OSAKA UNIVERSITY

本報告書をモンゴルの生存哲学を教えてくれた
マンゴードションホル・ネルグイ（**Мангууд Шонхорын Нэргүй**）氏にささげたい。

Мод байвал ус байна.
Ус байвал бэлчээр байна.
Бэлчээр байвал амьдрал байна.

訳：
木あれば、水あり
水あれば、草原ある
草原あれば、遊牧ができる
（昔からの言い伝え）

目　次

序 ---------- 1

謝辞 ---------- 3

まえがき ---------- 思沁夫 4

第１章　モンゴル・フィールドスタディ概要 ---------- 猪熊洋子、阪本悠佑、轟晃成 6

第Ⅰ部　遊　牧 ---------- 17

第２章　モンゴルの文化と生活様式 ---------- 猪熊洋子 19

コラム　私を野生化させた 10 日間 ---------- 猪熊洋子 27

第３章　モンゴルにおける自然環境および社会変動―遊牧と移動に着目して―
---------- ツェレンダグワ・ムンフバヤスガラン 28

第Ⅱ部　鉱　山 ---------- 37

第４章　オンギー川との出会い ---------- 思沁夫 39

第５章　鉱山開発と関係者の意識構造 ---------- 阪本悠佑 55

コラム　モンゴルでの学び～環境問題の捉え方の変化～ ---------- 阪本悠佑 66

第Ⅲ部　リスク ---------- 67

第６章　モンゴルの自動車交通 ---------- 轟晃成 69

第７章　リスク化するモンゴル ---------- 岸本紗也加、思沁夫 84

コラム　わたしとモンゴル ---------- 岸本紗也加 96

第Ⅳ部　意　識 ---------- 97

第８章　自然観と美的感覚 ---------- 轟晃成、岸本紗也加 99

コラム　『生命の大地』モンゴルで生きた 10 日間を歌に ---------- 轟晃成 107

第９章　国際協力時代のモンゴルを問う ---------- マンゴードションホル・ネルグイ 110

コラム　オンギー川と地球の将来 ---------- 思沁夫 114

紹　介　日本の子どもたちの感想文

モンゴルの心 ---------- 小林馨 117

モンゴル大冒険 ---------- 上須百花、上須美咲 118

第Ⅴ部　提　案 ---------- 121

第 10 章　モンゴルボードゲーム ---------- 阪本悠佑、猪熊洋子、轟晃成 123

終 ---------- 127

あとがき ---------- 思沁夫 129

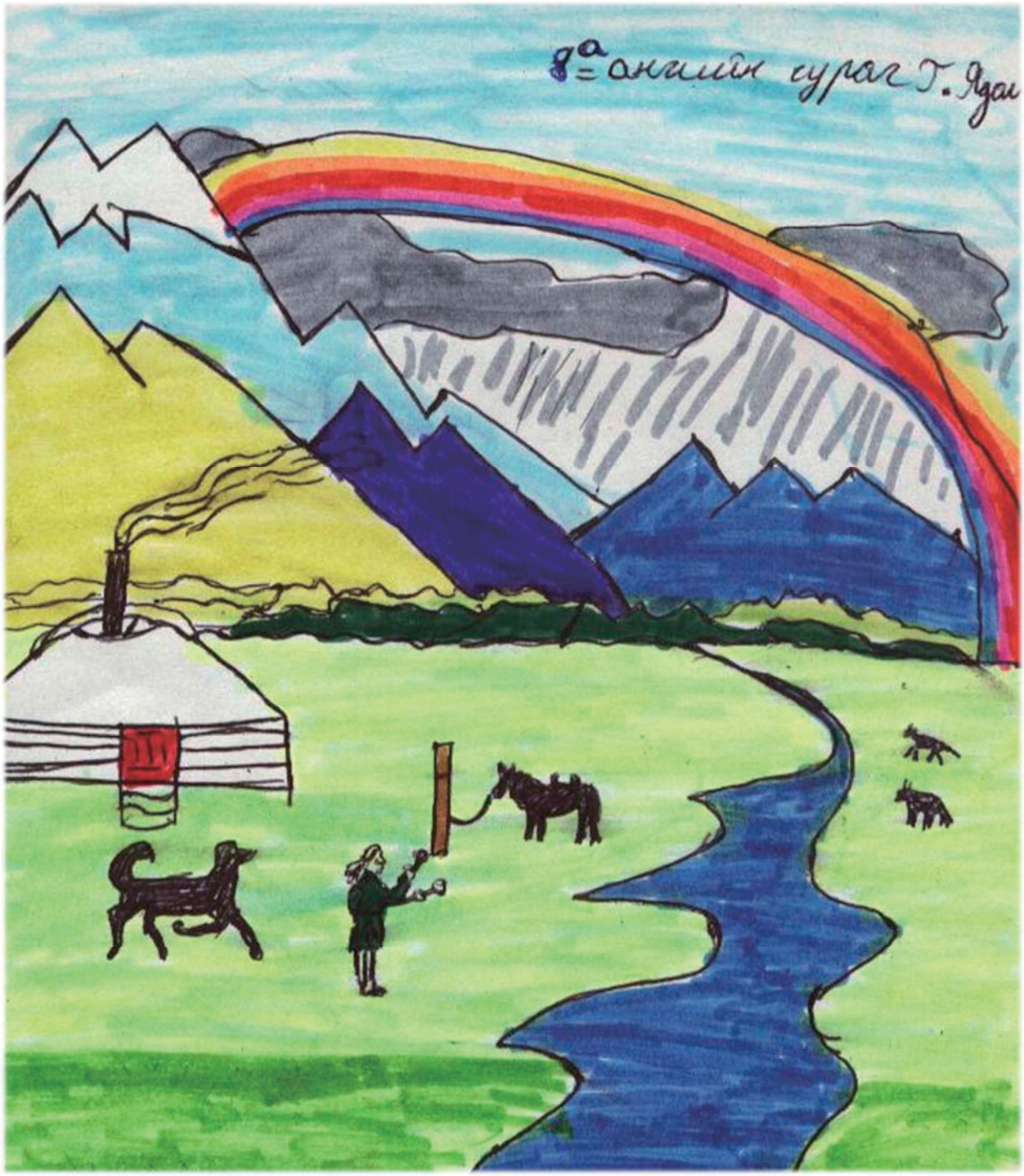
資料Ａ　モンゴル国立大学での発表資料 ---------- 131

資料Ｂ　自動車に関するアンケート調査票 ---------- 134

資料Ｃ　リスクに関するアンケート調査票 ---------- 139

執筆者および翻訳者のプロフィール ---------- 141

序



本報告書に登場する挿絵は、オンギー川流域の小学 5 年生から高校 1 年生が描いた作品である。

2007 年～2010 年まで、思沁夫はオンギー川流域の 11 年生学校で環境教育を実施し、水とオンギー川をテーマにした絵・作文コンクールを実施したことがある。ここでは優秀作品に限らず、生徒たちの様々な絵を選んだ。

謝辞

2015 年度モンゴル・フィールドスタディ（以下、モンゴル FS と略す）は多くの方々のご協力なしには実現できないし、また実現出来なかった。ここで特別にまず深く感謝申し上げたいのは、ネルグイさんである。彼はモンゴルにおける素晴らしい環境活動家であるだけでなく、私たちの良き協力者、理解者である。私たちはネルグイさんが設立したツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合を活動拠点に無事にモンゴル FS を終えることができた。ネルグイさんは地元のみならず、モンゴルの環境保護に対する厚い眼差しを絶やすことはなく、私たちに対して常に熱心に指導して下さった。

ネルグイさんの息子であるバトバヤルさんにはモンゴル FS 期間中、ドライバーを務めてくれた。ウランバートルの空港や市内ホテルから遠く 430 キロメートル以上も離れた調査地へと私たちを運んでくれたし、地方の移動でも彼の存在は欠かせなかった。彼は常に時間に正確だったし、安全運転に努めてくれた。車両は常に清潔で、車内は快適に保たれていた。彼の口数は少ないものの、彼の真摯な態度が私たちへの信頼と協力を示していた。

バトバヤルさんの奥さんであるウヌーさんは、英語の良き通訳者であっただけでなく、良き料理人であり、調査の最終日にはセンス抜群のプレゼントを私たちに提供してくれた。

ズーン・バヤン・ウラン・ソム局の関係者やバヤサさんご一家が、私たちを温かく受け入れてくださり、仕事の合間をぬって面談の時間を割いてくれた。

遊牧民のご家庭の皆さんは、放牧や夏の家畜の乳搾りなど繁忙期にも関わらず、インタビューやアンケート調査に丁寧に応じて下さった。

モンゴル国立大学における参加学生たちの調査成果報告会では、（第 2 回目のフィールドスタディに引き続いて）2 人の講師に講義して頂いた。ビャンバートルさん（モンゴル国立大学社会文化人類学学科）からは、鉱山開発について文化人類学的な視点から研究報告があった。ナラさん（モンゴル行政アカデミー）からは最新の統計データなどを交えて、モンゴル社会の実態について説明がなされた。また二人からは学生の発表に対して、貴重なコメントを残してくれた。

最後に、モンゴル FS の表舞台には登場しなかったが、調査成果報告会のセッティングはガンバトゾリグさんおよびメンデーさんがご多忙中にも関わらず、快く協力して下さった。ソソルボラムさん（モンゴル科学アカデミー）にはアンケート調査票の翻訳にご協力頂いている。また、片山さん（大阪大学 GLOCOL）の迅速で丁寧な対応のお陰で、私たちは安心して準備、調査、帰国できたと思っている。私たちの調査を陰で支えてくれた大勢の皆さんに、もう一度“Bayarlalaa.”（ありがとう）と言いたい。

本報告書では、2015 年度モンゴル FS の参加者および関係者による調査の記録や論考が編まれている。皆さんと内容を共有し、感謝の印としたし、たくさんの率直なご意見やご批判も期待したい。

2015 年度モンゴル FS　参加者一同

まえがき

思沁夫

2015 年 8 月 9 日～18 日、大阪大学 GLOCOL モンゴル・フィールドスタディ（以下、モンゴル FS と略す）「開発と生存環境」が実施された。今回が第 3 回目である。例年、モンゴル FS には文系理系問わず、様々な研究科から学生たちが参加しているが、今回は工学研究科出身の大学院生たち 3 名のほか、人間科学研究科出身の岸本さん（2016 年 2 月現在工学研究科　特任研究員）も同行し、現地滞在経験から参加学生の事前学習や現地調査においてサポート役を果たしてくれた。

モンゴル FS の特徴は主に 2 つある。第一に、グローバル化、市場化が進行する中で、鉱山開発による環境破壊、遊牧民の生活、文化、社会環境の変化、とりわけ現代モンゴルの「開発と生存基盤」を主題として継承し、一貫して取り組んできたことである。第二は、参加学生の専門や興味・関心、現地の諸事情を考慮し、新たなテーマや内容を盛り込むことである。

この度のモンゴル FS では、鉱山開発と遊牧民の生活を切り口に学生それぞれが調査課題を設定した。鉱山開発については阪本くん、遊牧民の生活に関しては猪熊さんが担当した。また、轟くんは市場経済化に伴う自動車社会の発展と環境問題について調査することとなった。学生のユニークな発想も採用し、「モンゴルと美意識」というテーマも織り交ぜることにした。モンゴル FS で初めて学生たちが乗馬体験をしたことも印象深い。これまでのモンゴル FS で採用された手法、つまりインタビュー、参与観察に加え、アンケート調査法も導入した。特にアンケート調査票は遊牧民などの対象者が答えやすいように改良を重ねた。モンゴル FS ではツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合長のネルグイ氏をはじめ、モンゴル国立大学における教師陣のモンゴル社会、文化に関する講義がなされた。彼らのレクチャーは非常に丁寧に分かりやすくまとめられていたため、学生たちがモンゴルを理解する上で大きな助けになったに違いない。また、学生たちは毎晩、調査研究の成果を議事録にまとめ、さらに意見交換や議論を重ねたが、この記録と議論は円滑に実施されていた。多様な調査テーマや手法を設定し、調査を実施、展開する中に、参加者一人ひとりの個性が反映されていたと思う。

2015 年は特別な年だった。それは第 3 回目のモンゴル FS が実施できたからという理由だけではない。現地では日蒙間をつなぐ新しい交流が芽生えたからでもある。2015 年 7 月下旬、りそなアジア・オセアニア財団の廣冨理事長、仁井専務理事、産経新聞の西山様が当地を視察され、ウブルハンガイ県環境局政府を訪問したほか、現地の遊牧民とも交流した。ここでなぜ、りそなアジア・オセアニア財団なのかと言うと、当財団の環境助成金をもとに現地における白い柳の保護活動と遊牧民の組織化が順調に進展しており、遊牧民の自立や地域の持続可能性の目標達成に大きく貢献しているからである。　　続いて同年の 8 月上旬、関西在住の青少年たちや彼らの家族がモンゴルを訪れた。遊牧文化を体験し、地域の子どもたちとの文化交流も行った。そして日本の子供たちの帰国とほぼ入れ替わるようにして、大阪大学からモンゴル FS の参加者たちが到着した。モンゴル地元メディアにおける報道から理解できるように、大阪あるいは大阪大学との交流、結びつきは年々盛んになっており、交流活動も密度の濃い、充実したものとなっている。ネルグイ氏が遊牧民環境保護組合の組合員に学生たち用の馬乳酒を頂くとき、「あなたのところに日本人が移住したんですか？」と聞かれたそうである。当然これは冗談で、日本人は移住していないが、日本の財団や青少年、大学生の訪問と滞在が継続されている、交流の証が端的に示されたことばだと理解される。

また 2015 年は、モンゴルの民主化 25 周年という節目の年だった。1990 年代以降、日蒙は良好な関係を維持しており、政治、経済分野だけでなく、教育や文化の面でも、モンゴル人学生や子供たちの日本語学習や日本留学の関心も高い。

モンゴル FS を企画運営し、他の交流活動にも関わりながら、現地との信頼関係を構築し、親睦を深めてゆく中で、改めて感じたことがある。まず、モンゴルは民主化に伴い、グローバル社会および市場経済社会を構成する一国に加わったことで、経済発展のチャンスを手にし、成長の可能性が膨らむ一方、鉱山開発や大気汚染をはじめとする人間の安全保障を脅かすあらゆるリスクに脅かされるようになったことである。また、個人の自由が保障され、選択肢が拡大した一方、国家や地域、コミュニティなど公共性や集団としての共通のビジョンや理念をいかに創造し、実行するかという課題を抱えるようになった。地球温暖化による異常気象やゾドの頻発、急速な経済成長の陰で、グローバル経済への参入と依存による政治、経済、社会的問題が山積している。これらの諸事象はモンゴルの社会基盤を脆弱化させている主要因であるに

もかかわらず、国内では社会支援と救済体制も脆弱であり、家畜を失った遊牧民が都市部に流入したり、鉱山開発に手を染めている。モンゴル社会の流動化、不安定化は止むことがない。モンゴルの人々はますます不安と不満を募らせている。つまり、モンゴルの社会基盤をいかに確立し、持続可能性を維持してゆくのかという課題もある。これらの問題群には基礎から取り組む必要があるが、まずはモンゴル社会が抱える課題を自分の目で観察し、現地の人々から学び、理解しなければならない。

私は、既述したモンゴルの現状と課題を理解し、解決するために、モンゴル現地との親密な関係の構築と維持が最重要だと考えている。ネルグイ氏、ウブルハンガイ県環境保護局長のバヤスガランさん、大阪大学大学院人間科学研究科に留学中（2016 年 2 月時点）でウブルハンガイ県出身のバヤサさんおよびご家族の皆様、モンゴル国立大学の教職員の皆様、モンゴルで活躍する日本人の皆様方の温かいご支援を受けていることに深く感謝しなければならない。

本報告書は参加学生たちがデザインを担当し、まとめた。学生たちの論文には非常に重要な知見が記されていると同時に、現地で調査研究し、成果物を我が物にするのではなく、現地とともにいかに考え続け、行動してゆけるかということを考えた足跡も読み取れる。

さらに、モンゴル FS 参加者以外の皆さまのご意見やご感想も掲載したため、内容の非常に充実した報告書に仕上がったと思っている。先ほど紹介したバヤサさんのほか、ネルグイ氏、同じく 2015 年夏に同地域に滞在した皆さまからも原稿を書いていただいた。バヤサさんはモンゴルの遊牧と移動について研究を進めており、今回は彼女の研究成果の一部をご報告頂いた。また、ネルグイ氏はモンゴルで環境保護を精力的に進める中で、日本からの訪問者を常に温かく迎えてくださる方であり、今回は保護と協力の視点から彼のご意見をまとめていただいた。また、ウブルハンガイ県を訪れた青少年たちの感想文も寄せていただいた。

日本から来た学生たちだけでなく、モンゴルの学生たちも、日本や韓国、アメリカなど外国に留学し、留学から得た学びをモンゴルにどう活かし、モンゴルの未来を描いてゆくのか、考え、議論する必要性も高まっている。

モンゴルの課題を現地の人々とともに考え、協働で解決を目指す姿勢には発展性があり、モンゴル FS やその他交流活動も今後も必ず継続してゆきたい。だが、相互信頼の裏にはモンゴルの日本に対する期待が見え隠れしている。モンゴル FS や環境保護活動だけでな、現地の期待に十分応えられないのではないかという不安と悩みは、FS スタート時から変わることがない。しかし地味だが丁寧に交流と調査を積み重ねてゆくことが、現地に何らかの良い変化をもたらすのだと信じている。

本報告書を通じて、モンゴル FS だけでなく、モンゴルに関心を抱く、教職員、学生たちや一般の読者の皆様に少しでも学習や参照の機会を提供できれば幸いである。

第 1 章　モンゴル・フィールドスタディ概要

猪熊洋子・阪本悠佑・轟晃成

1.1　フィールドスタディの目的

1.1.1　授業の目的

本科目は、海外フィールドスタディに参加することにより、学生が自らの専門性を土台にしながら社会の諸問題に実践的に取り組む力を養うことを目的とします。海外フィールドスタディの事前準備から事後学習までの学習プロセスを学生が主体的にデザインし、実行することを支援するとともに、調整力、コミュニケーション力、柔軟性といった、卒業後にプロフェッショナルとして自主的に活動し、他者や他機関と協働するために必要な資質を養います。また、フィールドスタディを通した学習と実践経験を通じ、多角的視点を持って社会を批判的に思考し行動する学生を育成します[1]。

1.1.2　各自の応募動機

猪熊洋子

モンゴルでのフィールドスタディに参加することで異文化と環境問題の双方を肌で実感し、広い視野と多面的な考え方を身につけたい。日本では「当たり前」の考えを、自然の中で生きる遊牧民と交流することで気付き・変えたい。

バイオエタノール生産についての研究を行っており、環境問題への関心がある。しかし地球温暖化などの環境問題を体感することはほとんどないため､モンゴルでの経験を元に生態系と人間活動の調和のとれた社会づくりのヒントを得たい。

阪本悠佑

環境問題を専攻しており、自然が豊かなイメージのモンゴルで環境破壊が進行しているという現実を知り驚いた。そこから、実際に現場を訪れ現地の人々と直接話をすることでモンゴルにおける環境問題に対する知見を深めたいと考え、フィールドスタディに応募した。また、GLOCOL の授業で十津川村にフィールドスタディを行った経験があり、フィールドスタディという調査方法に魅力を感じていた。

轟晃成

環境問題を専門に勉強しており、研究では環境政策のシミュレーションをしていたが、実際に、ある地域の環境を自分の目で見て体で感じることで、環境を良くするために必要な制度を考えるためのアイデアを得ることで、研究に活かしたいと思ったから。

モンゴルを選んだのは、思先生の授業で何度もモンゴルの情報を聞いており、興味を持ち、雄大な自然を見てみたかったからである。

1.2　モンゴルおよび調査地域の概要

1.2.1　モンゴルの概要[2]

モンゴル国（Mongolia）（地図 1-1 を参照）

1．面積

156 万 4,100 平方キロメートル（日本の約 4 倍）

2．人口

299 万 5,900 人（2014 年，モンゴル国家統計委員会（以下「NSO」））大阪市とほぼ同じ人口である）

3．首都

ウランバートル（人口 136 万 3,000 人）（2014 年，NSO）

4．民族

モンゴル人（全体の 95%）及びカザフ人等

---

[1] 大阪大学グローバルコラボレーションセンター、海外フィールドスタディ
http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/fieldo/fieldstudy.html （アクセス日：2015 年 11 月 29 日）

[2] 外務省 HP より引用　http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/

5. 言語

モンゴル語（国家公用語），カザフ語

6. 宗教

チベット仏教等（社会主義時代は衰退していたが民主化（1990 年）以降に復活。1992 年 2 月の新憲法は信教の自由を保障。）

1.2.2 調査地詳細[3]

私たちは主にウブルハンガイ県（地図 1-2 を参照）のアルバイヘールとツァガンボルガソを中心に調査した。ウブルハンガイ県はモンゴルの中央部に位置し、首都ウランバートルから約 430km 地点にある（車でおよそ 8 時間）。ウブルハンガイ県の人口は 11 万 3000 人(2014 年)であり、そのうち町の人口は 28.4%に対し、遊牧地域の人口は 71.6%である。就職や進学に伴い町への移住者、仕事のための鉱山開発地域への移住者が増加傾向にあり、遊牧地域に暮らす人々は減少している。産業構造としては、サービス業（15%）、 製造業（20%）、牧畜業（65%）であり、主要産品は伝統産業である羊毛製造と乳製品加工である。県北部はハンガイ（山脈）で森や緑が多く（県土の 23%）、中央部は草原（28.2%）、南部は草原および砂漠地帯のゴビ（48.8%）となっており、生態系が豊かである。モンゴルでは牧畜業が盛んな地域であることがわかる。

また、ウブルハンガイ県はモンゴルにおける宗教文化の重要な信仰地のひとつに当たる。

ウブルハンガイ県はエルデニゾー寺院（2004 年　ユネスコ世界遺産登録）をはじめ、55 の寺院や宗教施設がある。それ以外にもたくさんの聖地、歴史および文化遺産が残され、木版（バル）印刷、彫刻、伝統工芸などでも有名だった。

アルバイヘールはウブルハンガイ県の県庁所在地である。ツァガンボルガソ(モンゴル語で白い柳)はアルバイヘールから車で 30 分（北東に約 30km）ほどのところに位置する地域である。この地域固有の白い柳（写真 1-1）を保護するための組合が結成されており、観光業も営まれている。

《モンゴル研究の歴史的背景》

- モンゴルは遊牧民の国で、歴史が非常に長い国である。人類の移動を考えるときに、遺伝学・人類学的にモンゴルは非常に重要である。
- ジャミングバッツォイル（モンゴルの人類学者）が初めてモンゴルの中でもこのあたりが中心というのを説いた。彼は八万年から十万年くらいまえに人類の痕跡が残されているといった。

《地理的特徴》

- いまのモンゴルは三つにわかれている。ゴビ・草原・山（ハンガイ）。ハンガイは２８％、草原は２７％、残り４５％はゴビ。
- モンゴルは独特な地理的特徴。世界で最も多い恐竜の化石が発掘された。

《歴史》

- 歴史的視点から見るとゴビが恐竜だけではなく、人類の発展に大きく重要であったことがわかる。
- 世界的な帝国は 4 回。ローマ帝国の前には匈奴というアジアとヨーロッパを横断した人々とその文明があった。匈奴はモンゴルもトルコも一部分、先祖。
- 2000 年～3000 年前に大きな文明を作った。全体像をとらえる研究は無い。分断されている。
- 意外に思うかもしれないが、チンギスハーンの作った帝国の中心がこの地域。当時ここから 120~130km 離れたところにチンギスハーンの首都があった。
- 当時ここは、帝国の中心で、グローバル化が進んでいた。ウブルハンガイは三つの地理的特徴をバランスよく含んだ地域。南～中部・ゴビ、東・草原、西北・山。この場所はちょうど山と草原のあいだ。

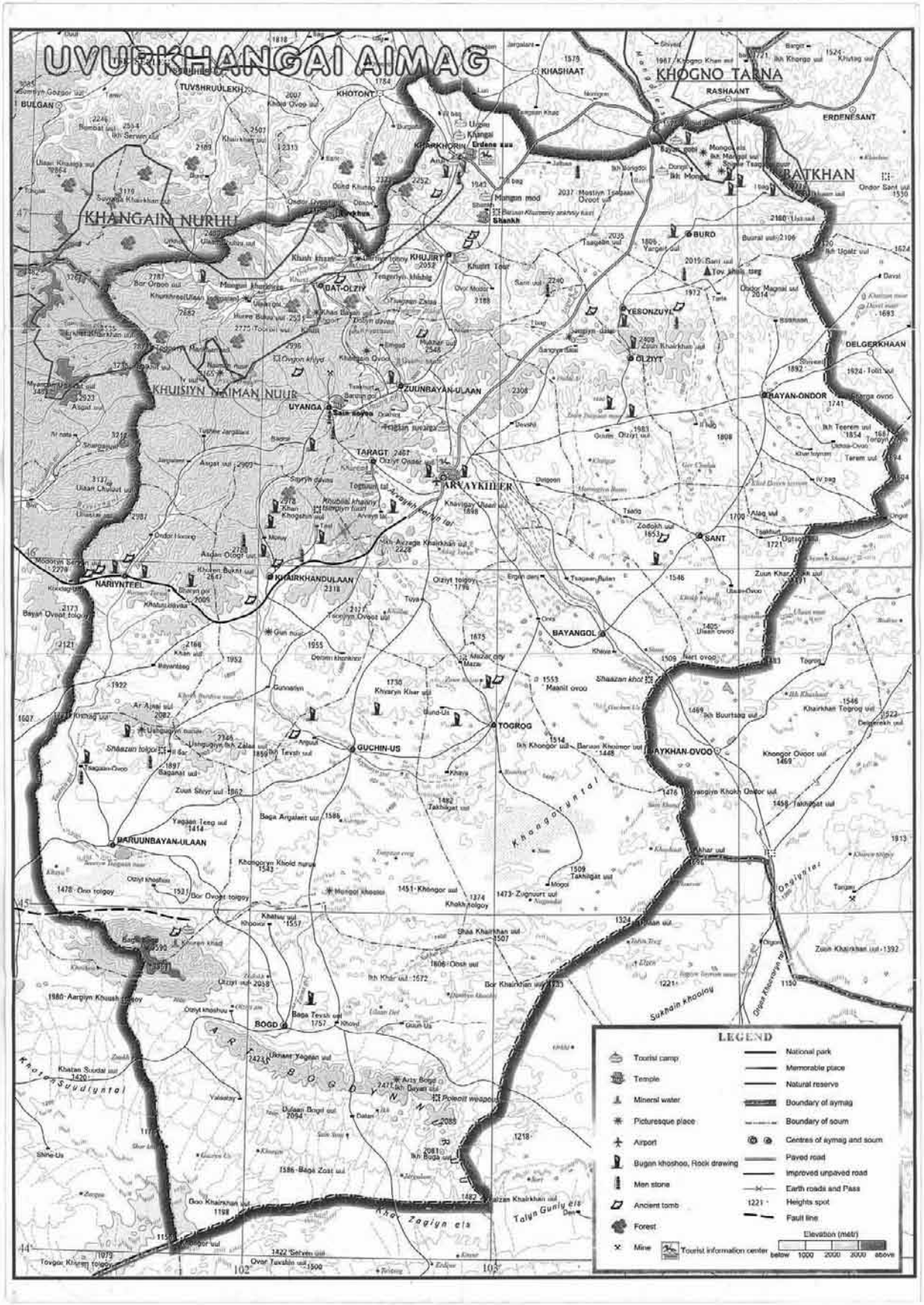
《ネルグイさんの活動》

- 社会主義もここを観光や遊び場にした。民主化以降は誰も入ってくるようになった。白い柳を勝手にとって燃料にしたり、家畜を放牧したり。

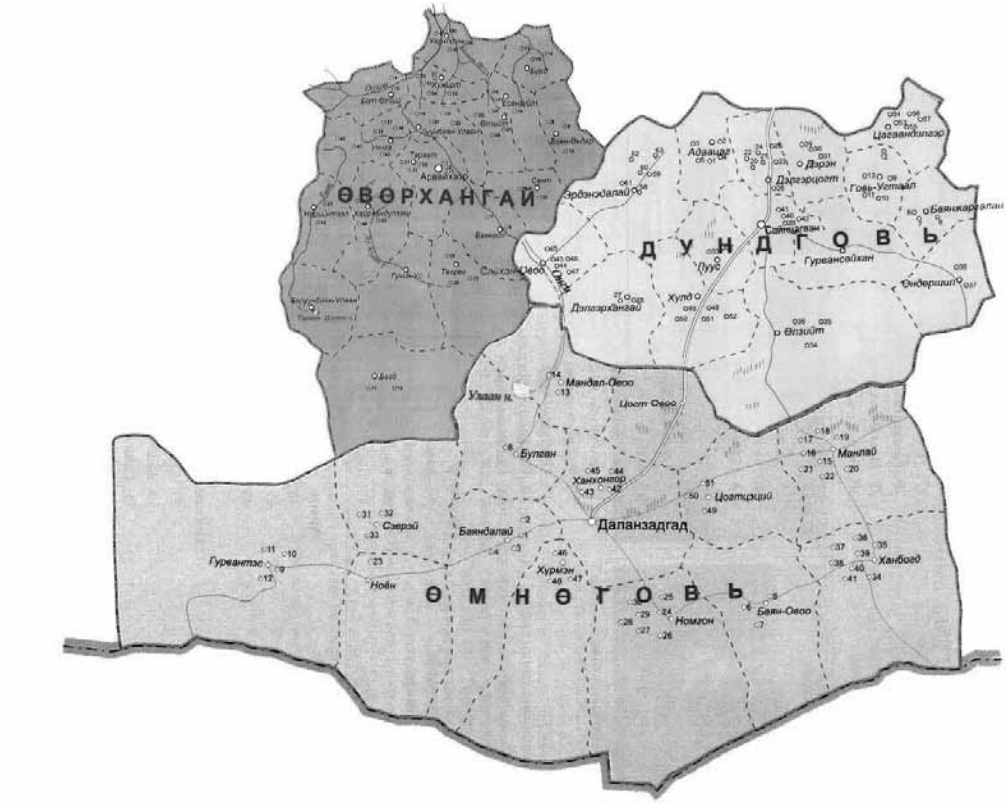
[3] 東南アジア自治体連合 HP より引用　http://neargov.org/jp/page.jsp?mnu_uid=3733

- 2001 年に、この柳を保護することを決心した。
- 2007 年に、思先生は環境保護を始めて、環境教育が始まった。
- 2011 年に国際資金を獲得し、それも使って保護を始めた。柵を作ったり植林したり。
- モンゴルは 1154 万 mm の３４％を保護しようという政策を出したが、年々環境は悪化。
  - 原因①: 開発
  - 原因②モンゴル人は保護したいがやり方がわからない、モデルが無い。
    - このフィールドスタディで環境保護が素晴らしいということを示したい。

地図 1-1　モンゴル（黒枠内がウブルハンガイ県）



地図 1-2　ウブルハンガイ県



地図 1-3　ウブルハンガイ県および周辺における宗教施設
（出典：S.ツェデンダンバーほか『モンゴルの寺院に関する歴史概説』
Atmon 出版社、2009 年）

写真 1-1　ツァガンボルガソにおける白い柳林

1.3　事前学習について（日程・内容・学び・課題）

モンゴルへの渡航前に、事前学習会を 6 月 17 日・6 月 23 日・7 月 10 日・7 月 30 日の 4 回にわたり吹田 GLOCOL で開催した。内容としては調査対象地であるモンゴル・オブルハンガイ県についての学習や、各々の調査テーマ・目的の設定等である。

また「海外フィールドスタディ A」に参加しているインドネシア班とバングラディシュ班との合同勉強会は 6 月 2 日・6 月 9 日・6 月 30 日・7 月 14 日・7 月 22 日に開催された。こちらは海外渡航における注意点やフィールドスタディという手法についての理解を深める内容がメインであった。特に 7 月 14 日は各班の調査計画を発表する研究計画発表会であり、他班や他班の担当教員から研究計画について指摘をいただいた。

以下、事前学習のスケジュールを簡単に記す。

表 1-1　事前学習

日程	内容	課題
6 月 17 日	①　モンゴルに関する文献、資料、報告書の紹介 ②　モンゴル・フィールドスタディの紹介、注意事項 ③　今後のスケジュール確認 ④　参加者の興味関心の発表、共有	-
6 月 23 日	①　モンゴルにおける調査について ②　調査内容の検討（個人ワーク）	調査テーマの設定（各自）
7 月 10 日	①　調査希望内容の共有 ②　研究発表会・最終打ち合わせに向けて	研究計画発表会の資料作成
7 月 14 日	研究計画発表会	
7 月 30 日	①　思先生から連絡事項 ②　調査協力者へのおみやげに関して意見の共有 ③　学生から思先生へ研究テーマについて最終報告・確認	-

1.4　スケジュール（活動内容と食事）

ここでは、フィールドスタディでの私たちの活動および食事の内容を簡単に整理する。

表 1-2　フィールドスタディの活動概要

日にち		場所	活動内容
8 月 9 日 (1 日目)	夕	関西空港（日本）	集合・出国
	夜	金浦・雲西（韓国）	航空機乗継のためホテル宿泊
8 月 10 日 (2 日目)	朝	仁川空港（韓国）	モンゴルに向けて出発
	昼	チンギスハーン空港	モンゴル（ウランバートル）到着 すぐにバトバヤルさんの車で移動開始
	夜	ツァガンボルガソ	キャンプ地に到着、ネルグイさんと食事・交流
8 月 11 日 (3 日目)	朝	ツァガンボルガソ	ネルグイさんの講義
	昼		滞在先周辺の散策
8 月 12 日 (4 日目)	朝	ズーンバヤンウランソム	ソム局長・議長と会談、小学校記念品を頂く
	昼	オインク	鉱山開発現場で遊牧民・開発企業の社長と会談
8 月 13 日 (5 日目)	昼	アルバイヘール	博物館見学、市場調査、公衆シャワー施設利用、 バイラーさん、バイラーさんのお母さん、バトバヤルさんの奥さんらとランチ
	夕	ツァガンボルガソ	ツァッツァルガン（さじ）畑を見学、白い柳の生息域調査

8月14日 (6日目)	朝	ホジルトソム	人間国宝の遊牧民にインタビュー
	昼	タラグトソム	馬の乳搾りを見学・乗馬体験
8月15日 (7日目)	朝	タラグトソム	ラマ高僧（バイラーさんの祖父）にインタビュー
	昼	アルバイヘール	バイラーさん宅に訪問
	夜	ツァガンボルガソ	バトバヤルさん一家を交えて交流・歌も披露
8月16日 (8日目)	朝	ツァガンボルガソ	ウランバートルに向けて出発
	昼	ウブルハンガイ県境	ネルグイさんとお別れ。モンゴル名を頂く
	夜	ウランバートル	フラワーホテル到着、発表準備
8月17日 (9日目)	朝	モンゴル国立大学	調査成果を報告 ビャンバートル先生、ナラ先生による講義
	昼	ウランバートル	成果報告会のご協力者、参加者らを招いて食事
	夜	ウランバートル チンギスハーン空港	郵便局、国会見学、デパートでお土産購入 ホテルに一度戻って休憩した後、空港へと移動
8月18日 (10日目)	朝	仁川・金浦空港	航空機乗継
	朝	関西空港	帰国・解散

表 1-3　フィールドスタディ中の食事内容

日にち		食事内容	備考
8月9日 (1日目)	夜	お菓子、機内食（サンドイッチ）	
8月10日 (2日目) 移動日	朝	韓国のホテルで朝食	
	昼	★肉料理	滞在先に向かう道中のレストラン
	夜	★ボーズ	
8月11日 (3日目) 宿泊先	朝	パン、ハム、チーズなど	
	昼	辛口ラーメン、★アーロール（固形チーズ）	
	夜	★モンゴルうどん	
8月12日 (4日目) 鉱山開発現場	朝	パン、ハム、マフィン	
	昼	肉、ビール、パン、腸詰、チーズ、ポテト	鉱山会社社長と
	夜	パスタ、★馬乳酒	
8月13日 (5日目) 街	朝	パン、ハム、ピクルス	
	昼	★ホーショール、★ボーズ、★マントー、野菜スープ、★モンゴルミルクティー	レストラン
	夜	★ホーショール、おかゆ、野菜炒め	
8月14日 (6日目) 遊牧地域	朝	★ホーショール、★マントー、おにぎり	
	昼	パン、ハム、野菜炒め	草原にビニールシートを広げて食事
	夜	★羊のゆで肉、スープ、ごはん、カクテル	
8月15日 (7日目) 遊牧地域	朝	おにぎり、クッキー、ハム	
	昼	★ボーズ、ハム入りおにぎり、★ウルム	ラマ高僧のゲルにて
		お菓子	アルバイヘール市内のレストラン

&街			およびバイラーのアパート
	夜	★ツォイワン、★羊のゆで肉	ツォイワンの調理を手伝った
8月16日 (8日目) 移動日	朝	パン、クッキー、ドライフルーツ	
	昼	弁当（羊のゆで肉と白米）	
	夜	中華料理	フラワーホテル内のレストラン
8月17日 (9日目) 発表	朝	ホテルバイキング（洋食）	
	昼	ウランバートルのレストランで食事 （西洋風モンゴル料理を各自注文した）	
	夜	思先生はレストラン、学生は食事スキップ	体調不良のため
8月18日 (10日目)	朝	機内食	

★印はモンゴルにおける主な料理。以下に写真を示す。モンゴルの伝統食は「赤い食（肉）」と「白い食（乳製品）」が中心であり、調味料はほとんどモンゴル岩塩のみである。モンゴル料理の中には、中国やロシア等の食文化を取り込んだものもある（例えば、マントー、ツォイワン）。なお、私たちの主な飲み物は紅茶、モンゴルミルクティー、馬乳酒、ウォッカであった。

ボーズ（肉まん）

・結構大きいので、たくさん食べるとお腹が膨れる。（轟）
・一番好き。（猪熊）

マントー（蒸しパン）

・肉まんの生地と同じ味。一番日本と近い味がした。（阪本）
・毎朝でも食べられそう。（轟）

ツォイワン（焼きそば）

唯一一緒に調理したモンゴル料理。作り方はシンプルなので日本でも作ってみたい。（猪熊）

ノゴートイシュル（野菜スープ）

野菜たっぷりで健康的で美味しかった。日本の味付けに近い。（轟）

ホーショール（揚げ餃子）

唯一の揚げ物。中身の羊か牛のミンチ肉の味をダイレクトに感じることができる。（阪本）

チャンスンマハ（茹で羊肉）

肉を豪快に食らう瞬間は爽快そのもの。羊は日本のものと異なる。（轟）

塩入りミルクティー

・塩とミルクティーの不思議な相性は意外と癖になる。味の変化も楽しめる。（轟）
・私は少し苦手でした（猪熊）

ウルムと馬乳酒（乳製品）

・馬乳酒の酸味に初めは抵抗があったが、帰る頃にはなくてはならない存在に。（猪熊）
・元気の源。（轟）

アーロール（固形チーズ）

味はチーズ、硬さは堅焼きせんべいよりも遥かに硬い。これなら年をとっても丈夫な歯を維持できそう。（阪本）

写真 1-2　モンゴル料理（写真はすべて私たちが撮影した）

1.5　モンゴル国立大学での報告会

1.5.1　報告会概要

すべての調査終了後、モンゴル国立大学で調査内容及びその結果の報告会を開催した。当日の参加者はフィールドスタディ参加教職員、学生を除き、6 名の参加者がいた。報告会においては、思先生が司会・通訳を担当した。学生からの発表（口頭で日本語、スライドは英語）をモンゴル語で報告会参加者に伝えてくださったほか、モンゴル側のご報告を日本語で通訳していただいた。

本報告会では、まずはじめにフィールドスタディの概要をまとめたビデオを上映した後、①鉱山開発（阪本）、②自動車交通と美意識（轟）、③遊牧生活（猪熊）について発表した。最後にフィールドスタディ参加者として学んだことを日本の学生やモンゴルの都市部学生に知ってもらう方法としてボードゲームを提案した。これはモンゴルにおける環境汚染を遊牧民・都市部住民・鉱山開発企業の 3 者でロールプレイングを通じて体感するものである。

休憩時間を挟んで、次にモンゴル側から 2 名の講師にご発表いただいた。当大学は夏季休暇機関中であったが、文化人類学がご専門のビャンバートル氏（モンゴル国立大学所属）にはモンゴルにおける鉱山開発の現状について、またナラ氏（モンゴル行政アカデミー所属）からは社会学的観点からモンゴル人の移動に関してご報告いただいた。調査はフィールドワークおよびインタビューが中心であったため、調査地域について深く知ることができ、レクチャーではモンゴル全域単位での鉱山開発や人口の偏りについて学ぶことができた。

発表後、参加者とのディスカッションを行い、特に 2 名の専門家から有意義な意見をいただくことができた。発表スライドは巻末に載せている。

写真 1-3　発表の様子（モンゴル国立大学にて）

1.5.2　発表後のディスカッション（専門家からのコメント）

①　鉱山開発

＜ビャンバートル氏＞

- 会社が「遊牧民はずるい」と言っていたとあったが、それだけで判断はできない。会社と言ってもほとんどはニンジャ。遊牧民と会社の対立の原因を考える際は、色々なことを考えないといけない。例えば会社の一部のお金を、政府を通じて遊牧民が受け取る仕組みがある。しかし政府が受け取ったお金をすべて遊牧民に渡したかというとそんなこともない。また助成金が不十分ということで、受け取っている人と受け取っていない人がおり、受け取っていない人は不満を言う。
- 鉱山開発は歴史深い問題。政府にも問題がある。遊牧民と企業に揉め事が度々起こるが、実は企業側は企業の人間ではなくセキュリティとして雇用している人が遊牧民とトラブルを起こしている。セキュリティとして雇われるひとは荒々しい人ばかりで、そのセキュリティを遊牧民は「企業」と認識してしまっている。
- 企業と遊牧民の関係だけでなく、行政との関係にも注目する必要がある。ウィング地区では、行政は初め遊牧民側に立っていたが、その税金などの関係から企業側に立つようになった。
- 発表にあった外国が遊牧民や鉱山開発企業に大きな影響を与えている点は賛成。非常に本質的なこと。一番利益を得ているのは鉱山開発会社ではなく、資本力・技術力を持つ日本を含めた世界の大企業。帰国後ここを切り口にもう少し深めてはどうか。
- Q.鉱山で採掘された鉱石の輸出ルートについて
- A.鉱物の種類で分けて考える必要がある（ビャンバートル氏）。
  - 金：すべてモンゴルの国家銀行を経由して世界へ。金は世界的な金融基準があり、流通量の調整機能が必要になる。しかし税金を逃れるために、一部は闇市などを通じて中国に流れている。
  - レアアース：まず中国に輸出され、中国から世界各国へ出回る。
  - 石炭：多くが中国に輸出され、そのほとんどが中国で消費される。南ゴビで良質な石炭鉱山が見つかっている。
  - 鉄：原料として中国に輸出される。

②　自動車交通と美意識

＜ビャンバートル氏＞

- 「どのように道路敷設のルート選択がなされたのか？」という疑問があったが、経済効果を考えているのであれば先進国の視点だと感じた。モンゴルでは既に都市部に人口が集中しているため、経済効果ではなく「どこに道を通せば人々の生活に役に立つか」という視点で道路が作られている。
- ガススタンドの発想は素晴らしい。観光や季節の要素を加えて考えると面白いのではないか。
- モンゴルの都市部は経済発展に大きな役割を持っているが、そのできる過程で一番大切なことは宗教の時代でもなく現在の民主主義の時代でもなく、社会主義の時代に形成された。社会主義と都市の関係についての資料はたくさんあるので見てほしい。
- モンゴル人は交通ルールをあまり守らないとの発表があった。私もそう思うが自分（日本人の価値観）からみて良い・悪いではなく、それぞれの文化の特徴だと思う。面白い研究としては、道路についての習慣の違いを通じて日本とモンゴルの文化の違いを発見できれば面白いのではないか。

＜ナラ氏＞

- 国連は「利益にならない」と道路工事の資金援助をしないため、民間のわずかなで工事を行われている。モンゴルの道路は真ん中に穴が開いているなど質の良くないものが多く、国際社会共通の批判として「モンゴル人は道路づくりに関して怠惰」ということが言われている。しかし、なぜ現実としてそうなっているかはあまり知られていない。

③　遊牧生活

＜ビャンバートル氏＞

- 遊牧民はいつか消えてしまうのではないか？という疑問があった。ある研究では、モンゴルの多くの地域では生活が豊かになればなるほど、自然環境が豊かになればなるほど遊牧民になりたい人が増える、と言われている。みなさんの調査地域は乾燥した気候で町に近く、生活環境が良くない。自然的・地理的要素を考える必要がある）。
- 流通の疑問点について、単に「遊牧民が言っていたから」ではなくもう少し疑問点を明確にするとよい。モンゴルで

はモノの受け渡しは贈答（プレゼント）になりやすい。例えば馬乳酒は非常に高価なものだが、モンゴル人はお客さんにはいくらでも馬乳酒を振る舞う。馬乳酒をお客さんに販売することで現金を得ることもできるが、それは遊牧民の信念に反する。そこも含めた文化を理解する必要がある。

④　全体

＜ビャンバートル氏＞

- フィールドスタディで感じた問題の現状把握は文献調査を行い、みなさんはそれを踏まえてどうするか？ということを考えてほしい。それがボードゲームなどの形で実現するとよい。

＜ナラ氏＞

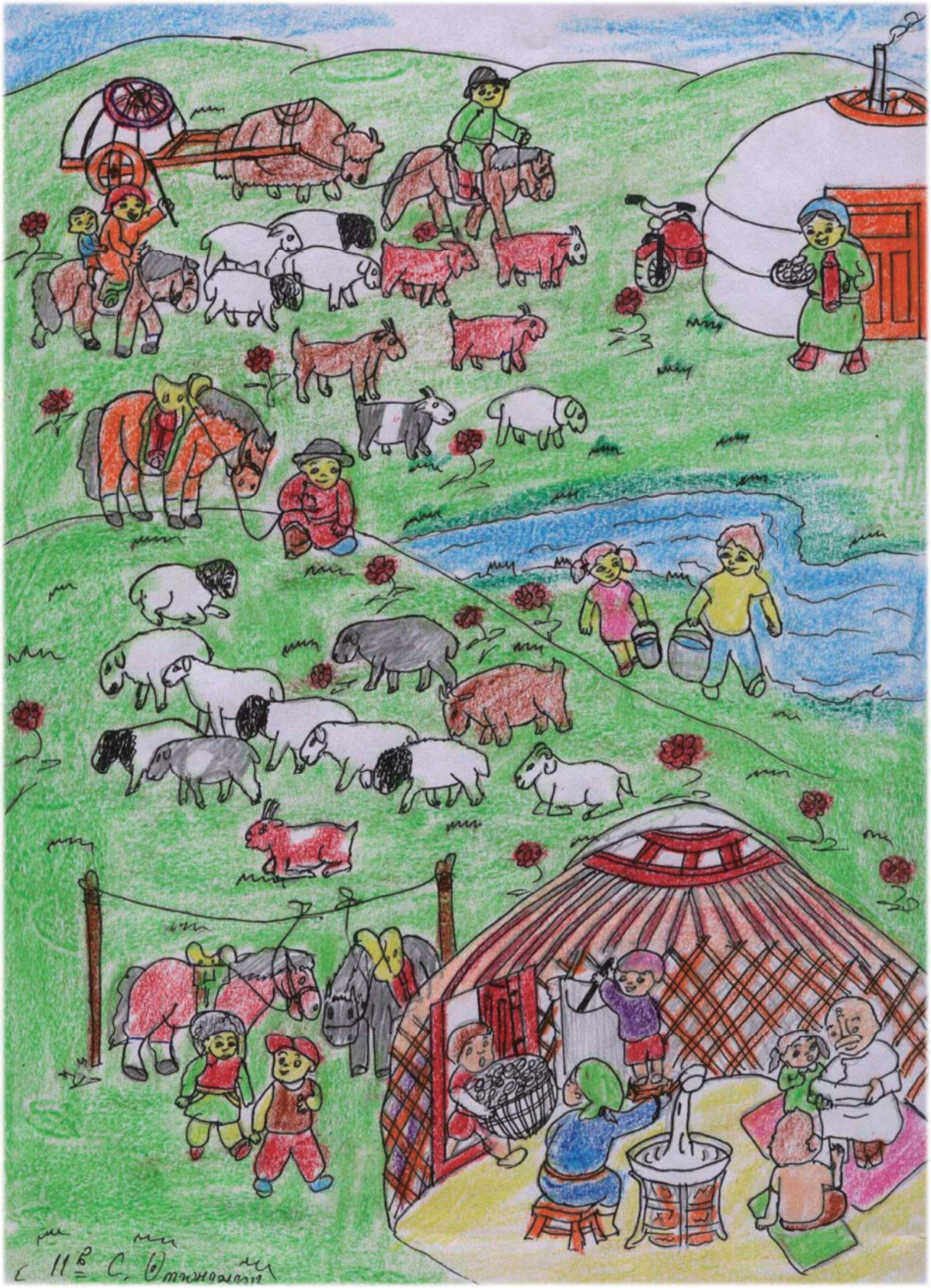
- モンゴルにおいて町と地方の定義ははっきりしている。モンゴルで町といえるのはウランバートルと 21 の県庁所在地だけ。その他の地域を地方という。
- 社会主義時代と異なり、移動の自由の保証が必要だが同時に都市部への極端な一極集中は課題を生む。戸籍制度が十分でない。
- よくある議論だが、近代的な生活をしている人が発展していない人たちはそのままでいて欲しいという議論は人類の普遍的な価値に耐えうるものなのか。この視点からも是非考えてみて欲しい。
- 個々人の発表の関連性・全体像を見出してはどうか。

写真 1-4　ディスカッションの様子（モンゴル国立大学にて）

引用参考文献

1. 大阪大学グローバルコラボレーションセンター、海外フィールドスタディ http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/fieldo/fieldstudy.html(閲覧日：2015 年 11 月 29 日)
2. 外務省 HP　http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/

第Ⅰ部　遊牧



第 2 章　モンゴルの文化と生活様式
― 遊牧と都市生活の共存 ―

猪熊洋子

2.1　はじめに

「異文化と環境問題の両方を肌で感じたい」、そう思った私は海外フィールドスタディに参加し、モンゴルを訪れた。上記のような理由ならば、モンゴルではなく他国でもいいのではないか、同時期に募集されていた、バングラデシュやインドネシアでもその目標は達成できるのではないかと思われるだろう。あえてそこでモンゴルを選んだのは、自然環境も、文化も日本と全く異なるモンゴルという国、場所そのものに、ただ足を踏み入れてみたかったからである。大草原の中で生活している遊牧民が何を考え、どのように暮らしているのかに興味があった。実際に目の当たりにすることは、自分の慣れ親しんだ生活や考え方にも影響を与えるだろうと考えていた。

いざフィールドスタディへの参加が決定し、モンゴルについて調べているうちに、伝統的な遊牧生活の中でのひとつひとつの作業は煩雑で手間ではないのか、技術を加えることでもっと効率よく、そして手間を減らすことはできないのか、と感じた。遊牧民の間にも自動車やスマホが普及していることは事実だが、まだ伝統的な方法で行われていることはたくさんある。ひとつ例に挙げるとすれば、乳製品づくりの工程である。夏は乳製品づくりの季節だが、一日何回も馬の乳を搾り、様々な工程を重ねてチーズにする、そのひとつひとつの作業がもっと効率よくできないか、と感じた。

そこで、今回フィールドスタディに参加するにあたって私は以下のような目的を掲げ、それに基づき、現地に赴いて得られたことをこの報告書にまとめたい。

I.　人々の暮らしの観察
II.　遊牧民の生活に科学技術を取りいれることで作業の効率化を図ることはできないか

方法としては、現地の人々に対するインタビューや、観察などによる。

2.2 観察結果

観察から得られた結果を以下にまとめたい。

2.2.1　（調査目標Ｉ）現地調査による、人々の暮らしの観察結果

- 遊牧民の生活

モンゴルにおいて遊牧民は国民の約３０％を占める[1]。ゲルと呼ばれるテント状の住居で遊牧しながら生活している。ゲルの入り口は狭いが、中に入ってみると意外と広いと感じた。ベッドや、伝統的な美しい柄の小さなタンス、ゲルの中央にかまどがあり、これがゲルの基本的なスタイルであろう。ほとんどのゲルの外には、ソーラーパネルが設置されており、いくらか発電を行っているようであったが、どのくらいの電力を補えているのかは不明。ゲルの中には冷蔵庫やテレビなどの電化製品もあった。移動のために車やバイクを所有している家庭がほとんどであった。

写真 2-1 ゲル（右端にはソーラーパネルとパラボラアンテナがある）

写真 2-2 ゲル内のかまど

写真 2-3　遊牧民が所有する自動車・バイク

調査中、ゲルを訪問すると、突然の訪問であるにもかかわらず快く家の中に入れてもらえることがほとんどだった。家の中に入ると、器に並々と注がれた馬乳酒とチーズでもてなされた。モンゴルは遊牧民の国であるから、かつては国中の誰しもが遊牧民＝旅人で、足りないものがあれば隣人に分けてもらったり、物々交換をしたりして生きてきた。このようなバックグラウンドをもつため、訪問者を手厚くもてなすのがモンゴル流であるのだ。

私たちが訪れた夏の季節は、男性が遊牧を、女性はゲルで乳製品づくりに忙しい時期であった。男性は日の出ている時間はずっと家畜を放牧していた。馬に乗って放牧している人は少なく、バイクや車で放牧を行っていた。一方ゲルで乳製品作りにいそしむ女性たちは、朝の 9 時から 2 時間おきに、一日に５、６回ほど馬の乳を搾り、その都度馬乳酒を仕込む。羊の乳はチーズに、牛の乳はモンゴルの伝統的な蒸留酒にする。馬乳酒は、牛の胃袋でできている、大人の背丈の半分くらいある大きな袋に馬の乳を入れて、発酵させていた。何十年も使用しており、ずっとそのなかで酵母が生きているのである。静かに耳を澄ませると、「シュワー…」とまるで炭酸水のボトルを空けた時のような音が聞こえてきた。馬乳酒は、生きている。

小学校高学年くらいの年齢の子供たちは、それぞれ家庭の仕事を手伝い、一家総出で放牧・乳製品づくりをしていた。モンゴルでは、遊牧民の子供たちは大学に通う年齢になると草原を離れて、大学のある町で一人暮らしをする。私たちが訪れた時期はモンゴルでも夏休みの時期であったため、普段は町で一人暮らしをしている子供たちが帰省していた。今回帰省中であった大学生の子供たちは、医学・看護学・建築などを専攻しており、看護専攻の子供（１８歳ほどの女性）は、将来日本に留学し病院で研修するそうだ。皆、口をそろえて将来は遊牧民にはならず、街に出て働きたいと言っていた。一方、現在遊牧民である彼らの親が遊牧を続けている理由として、「遊牧生活が好きだから」「都会は合わない」という理由だけでなく「遊牧民以外の仕事をするのに十分な教育を受けていないから」という理由が、聞き取り調査の中で見受けられた。

- 街（アルバイヘール）に住む人の生活

調査のなかで、私たちはウブルハンガイ県の県庁所在地である、アルバイヘールに住む A さん（20 代女性）の家を訪ねることができた。モンゴルでは、県庁所在地は「街」、それ以外は「地方」と考えられており、バイラーは所謂「シティガール」であるといえる。銀行勤めである彼女の部屋は、アルバイヘールにあるマンションの最上階にあった。マンションの外観は日本のそれとは似て非なるもので、コンクリートの打ちっぱなしで、外観の美しさにはまったく拘られていない（そもそもそのような建物はアルバイヘールには無かったように感じた）。しかし部屋に入るとその印象は一変した。室内は高い天井、広いダイニングキッチン、寝室が二つ。ウォーターサーバーやシャンデリア、大きな液晶テレビがあった。草原での生活とあまりにも違いすぎるため、これが同じモンゴルなのかと目を疑った。私たちは、たくさんのお酒とお菓子でもてなされた。遊牧民のゲルを訪れると必ずたくさんの乳製品をふるまわれるのと同じである。生活が変わっても、来客を盛大にもてなすのはモンゴルの国民性なのである。A さんと彼女のお母さんは料理もふるまってくれたのだが、出された料理は、草原で食べていたのと同じ、干し肉が入ったモンゴルうどんであった。生活様式が変化しても、伝統的な料理は食べ続けられている。おもてなし精神や伝統料理がモンゴルの都市生活に適切な形で変化し、続いていることが観察できた。

写真　2-4　アルバイヘール某所のマンションのリビング
（液晶とシャンデリアが印象的である）

A さんは、国立大学を卒業後、2 年間日本に留学していたという経験があるため、私たちと A さんは日本語で交流ができる。さらに彼女の姉は、現在大阪大学の人間科学研究科の博士後期課程に留学中であり、とても親近感がわいた。現在のモンゴルでは、大学進学も「普通」になり、国外の大学へ留学することも、驚くべきことではなくなっている。このことは、社会主義時

代では考えられないことである。生活水準の向上ももちろんのこと、国民の教育という観点から見ても、モンゴルの社会は街を中心に確実に発展し、グローバル化していることがうかがえた。

- モンゴルの人々と宗教

今回私たちはモンゴル、特に遊牧民の生活と宗教が密に関わっていることを肌で感じた。日本以外の多くの国では人々の生活に宗教が大きな影響を与えていることは言わずもがなである。しかし今回のフィールドスタディ参加者の 3 人とも、モンゴルにおける宗教の影響について、おそらく強く意識していなかったのではないだろうか（自動車や鉱山開発、生活様式などそれぞれのテーマに集中しすぎていた）。しかし実際に現地を訪問し、私たちはその影響を強く目の当たりにしたのだった。それが、チベット仏教の最高指導者、“ゲゲン”の出現である。ここで、モンゴルにおいて信仰されているチベット仏教について言及したい。チベット仏教の特徴は、その最高指導者であるダライ・ラマ（モンゴル語でゲゲン）が観音菩薩の化身で、チベットの人々を救済するために輪廻転生すると考えられていることである。チベット仏教において、生きとし生けるものはすべて六道輪廻(神・人間・非神・地獄・餓鬼・畜生)のいずれかの世界に生まれ変わらなければならないが、悟りを開いた一部の人間はもう一度人間に生まれ変わることができるのである。ダライ・ラマが他界すると、チベット政府は国中に代表団を派遣し、新しい転生者（＝ゲゲン）を探す[2]。その新しい転生者がつい最近見つかり、ちょうど私たちが家族を訪問する日に、ゲゲンもすぐ近くまでやってくるというのだ。私たちは事前に訪問する日時を伝えてはいたが、家族はゲゲンのところへ出向き、結果予定が大幅に変更になってしまった。チベット仏教の僧侶（ラマ）であるバイラーの祖父を訪ねることがあったが、そこでもラマは、ゲゲンの出現でモンゴル中（特に信仰が深い傾向にある遊牧民）がわいているとおっしゃっていた。

予定が大きく変わってしまったのは残念ではあったが、それによって遊牧民と宗教の密接な関係を認識することができた。ゲゲンの出現というのは、人間の寿命から考えておよそ 100 年に一度の出来事である。このような貴重な歴史的な場に立ち会えて、むしろとても感動した。そして、突然予定が変わるのもまた旅の一興であるのだ。

- ゾドへの不安

ゾドとは、自然災害全般を指し、そのなかでも冬の降雪により草が雪に埋もれて放牧が困難になることを指す場合もある。また、雪が無くて温度が低いだけの凍害もゾドと呼ばれている（詳しくは本書第 3 部・7 章参照）。私たちの訪れたとき、草原は少しくすんだ緑で、土が露呈している部分もあった。7，8 月の降水量が少なく、草原が枯れ気味であるということだった。また、経験上、ゾドは未年から申年に移行する冬に来やすいといわれているが、次の冬がまさに申年の冬である。ということもあって、人々は見え隠れするゾドの陰に不安を隠せない様子だった。ゾドで家畜が死ぬ前に、肉にして売ってしまおうという考えの人も多いようで、市場の肉売り場で売られる生肉の量が多い（肉が余っている）ように見えたのはそのせいなのかもしれない。しかし、気候の観点からも、経験的にも、次の冬は厳しくなる見込みがあるにも関わらず、ゾドの被害を最小限にとどめようとするような対策は、人々からはうかがえなかった。自然に人間はかなわない、ゾドが来るのは仕方ない、と考えている人が多いように感じられる。もちろん人間は自然の下では無力である。しかし、私たちが発展させてきた科学技術を使えば、その自然の脅威を少しは軽減できる。モンゴルは、グローバル化が進み、科学技術の恩恵も大きく受けている。にもかかわらず、にゾドに対する考え方に関していえば、経験や宗教といった、非科学的な要素にしたがって人々が動いているように感じられる（ゾドに関しては第 4 章および第 7 章において詳しく述べている）。

- 食文化

モンゴルは日本に比べて、野菜よりも肉を多く食べる傾向にある。国内で生産されている野菜は非常に限られており、市場を歩いて売られているのは、じゃがいも、玉ねぎ、人参くらいしかない。その他ピーマンや葉物野菜などは中国やロシアからの輸入品で、それ故値段も張る。モンゴルの人々はビタミンやミネラルを野菜からではなく乳製品から補っている。肉は、ウマ、牛、羊を、生肉から干し肉までそれぞれの肉に合った方法で保存・接種されている。

町の市場では、屋内にいくつか小さなスーパーマーケットがあり、食料や生活に必要なものをそろえることができる。また、道を歩いているとちらほらと野菜を売っている人も見かけた。スーパーマーケットとは別に、各々が肉や乳製品を売っている場所もあった。スーパーマーケット、肉屋、露店、すべてに共通しているのが、売り物にこれといった違いは無いということである。どのように買い手は商品（買う店）を選んでいるのが疑問に感じた。

写真 2-5　市場の肉売り場（豪快に積み上げられる羊肉がモンゴルらしい）

写真 2-6　市場の路上で売られる野菜
（そのほとんどが地元で生産されている、ジャガイモ、ネギ、ニンジン、キャベツである。森の松の実、ベリー科植物の実もよく売られていた。松の実はヨーロッパ、日本などにも輸出されている）

ウランバートル郊外にはアメリカ式の大きなスーパーがあり、生活に必要な物資はほぼ揃えることができる。商品はモンゴル産のものから、中国、ロシア、韓国などから輸入されたものまで様々。

写真 2-7　アメリカ式の巨大スーパーマーケット

モンゴルの伝統料理は第 1 章でまとめてあるが、今回そのなかのモンゴル風やきそば作りを手伝うことができた。手作りの麺はモンゴルうどんと同じで、調理の仕方でやきそばかうどんかに分けられる。日本のうどんと違い、コシや歯ごたえは無く、日本のほうとうに似たような触感である。麺のレシピはいたってシンプルで、小麦粉に水を適量入れ、まとめて、薄く延ばし、細く切る。食べやすい大きさに切った野菜と羊肉に火が通ったら、そこへうどんを入れ、蒸し焼きにして完成である。味付けはやはり、塩と胡椒のみである。特別な材料や設備は必要なく、日本に帰って作ってみようかと思った。

写真 2-8　麺を作る子供たち

写真 2-9　火を通した野菜

写真 2-10　できたうどんを投入

写真 2-11 蒸し焼きにして、混ぜた後

2.2.2 （調査目的Ⅱ）遊牧民の生活に科学技術を取りいれることで作業の効率化を図る～技術の導入により、失われる本質～

既に遊牧民の半数は自動車を所有しており（第 6 章参照）、それによる移動が効率化されている。ここで、更なる効率化のために技術の提案をしたいところではあるが、果たしてそれが本当に必要なことなのか、という疑問が、現地に赴いて生じた。外部の人間からは一見すると煩雑な作業はたくさんあった。乳製品づくりのため一連の工程や、ゲルの組み立て、放牧 etc。それらは機械による効率化が図れないことはない。しかし遊牧民たちは、一見煩雑そうに見えるその工程を行うことで、季節を感じ、家畜への愛情をはぐくみ、生きている実感を得ているのではないかと考えた。そのような作業を奪うことは、遊牧民の生活を奪うことにつながってしまうように感じ、提案はできないと結論付けたい。作業効率化のための技術の導入は必要ないが、遊牧民がこれまでの生活を持続していくための技術と制度であることに気付いた。これに関しては本稿の、2.考察・気づき　の中の　モンゴルの将来　で詳しく述べることとする。

2.3 調査から得られた考察・気づき

以上の観察結果をふまえて、考察はもちろんのこと、気づいたことを以下にまとめた。

2.3.1 モンゴルの将来について、調査中と帰国後の心境の変化

モンゴルの将来について、調査中と帰国後で、自分の中で心境の変化があったのでここに記したい。

今回の訪問中で出会った遊牧民の子供たちで、将来遊牧民になりたいと言っている者は一人もいなかった。この素晴らしい遊牧という文化が、今まさに消えようとしている現場に自分は立ちあっている。家畜の飼育はなくならないかもしれない(なぜなら家畜は重要な食料だから)かもしれないが、モンゴル式遊牧というのは既に減少傾向にあり、このまま消えてしまいそうだと感じた。全く自分は遊牧生活などしたこともないが、その文化が無くなってしまうことに、さみしさを感じた。経済が発展することはもちろん必要であるが、モンゴル独自の遊牧という文化を残しながら、モンゴル独自の発展が必要であることを現地では強く感じた。今まで、自分とは関係ないと思っていた世界のことを知り、考え、その世界のことを心配するようになるというのは大きな変化である。自分が地域とつながった瞬間である。

調査中は、上記のような感情を抱いたが、帰国してこの問題についても熟考したところ、少し心境に変化があった。このままモンゴル社会が経済発展をとげ、遊牧文化は消え去ってしまうのか？それは結局のところ、モンゴル社会がその段階まで到達してみなければわからないことであるし、今よりももっと遊牧民が少なくなっていても、それはそうなる運命だったと言ってもいいのではないだろうか。なぜなら、社会・文化は流動的で、変化し続けるものだからだ。今私たちが「伝統」として大切にしているものも、何回も変化を重ねたうえでの「伝統」なのだ。そう考えると、対極にいる「科学」と「伝統」は、めまぐるしく変化し更新され、蓄積された過去があるなかで、最新のものが素晴らしいとするか、過去を含めたすべてを素晴らしいとするのかの違いしかないのではないか。少し話がそれてしまったが、モンゴルの人々が開発を求め、遊牧文化が薄れてしまっても、それはそれで良いのかもしれない。モンゴルという国で、モンゴル人としてのアイデンティティを抱きながら生活が続けば、遊牧文化が跡形もなく完全に無くなることはなく、きっとまたその時代に適切な形に変化して、残っているのだろう。ただ、その変化が、内部から自発的に起こるのではなく、外的な要因-私たちのような他国からの強制-によって起こってはならない。私たちの都合で鉱山を過剰に開発し、遊牧民の生活を奪ってしまうようなことはするべきではない。鉱山開発のような、直接的な環境破壊だけでなく、地球温暖化による気候変動によって砂漠化するモンゴルもまた、私たちの都合によって生み出される結果であり、あってはならないことだ。逆も然りで、伝統を維持するべきだ、という外部の人間の考えで、経済発展を妨げることも、するべきではない。その国が、自ら望む方向へと進んでいくのを見守ることが、私たちのあるべき姿なのではなかろうか。また、一足先に開発を進め経済を発展させ、生活様式や環境を変化させてきたことで得られた学びや失敗を還元することで、その国が目指したい方向へとスムーズに進めるようにしていきたい。

本稿の 1. 調査結果の Ⅱ)において、作業の効率化のための技術は必要ではなく、遊牧民が今までの生活を持続させるための技術や制度が必要であると述べた。私たちが訪れた夏は、雨が少なかったために草原は土が顔を出していた。遊牧民たちはこの冬が厳しいゾドとなることを予感し、不安が募っている様子であった。このような気候でも、家畜が弱ってしまわないように、家畜のための暖かい小屋や、牧草に代わるような栄養のある家畜の餌、ゾドで家畜を失った際の保険や援助などの制度が必要であると感じた。例えば日本には、農業災害補償制度というものがある。国の農業災害対策として実施している公的な保険制度で、農業者の方が出し合った共済掛金を原資として、自然災害により被害に遭った農業者の

方に、被害程度に応じて共済金が支払われるというしくみである [3]。農作物だけでなく家畜にもこの制度は適用され、人間の手ではどうにもならない自然災害による被害がこれによりカバーされることとなる。このような制度をモンゴルでも導入できれば、遊牧生活のリスクが減少するだろう。

2.3.2　商業的生活と伝統的生活の共存するモンゴル

「遊牧民」という、まったく想像もできない生活をしている人たちと、自分と同じように都市に住み仕事をしている人が同じ国内にいることが不思議に感じた。特に、世界各国の少数民族とは違い、遊牧民の割合が（減少はしたものの）多いのがモンゴルの特徴である。そしてその遊牧民は利益を増大させるというよりは、伝統的な生活を守り、現状をしっかりと維持していくような生活を送っている。その一方で、都市の人々は自己利益の増幅を目指して商業的・資本主義的生活を送っている。日本と同様に、都会生活に疲れ、自然を求めて田舎で時間を過ごす人も確認される。近代的な側面と、伝統的な側面が一国の中で共存しているといえる。これは、急速な経済発展を遂げたことによるためなのか、それとも、遊牧民の国モンゴルの故なのだろうか。いずれの理由にせよ、全く真逆な目的をもって生活していること人々が共存しているのがモンゴルの大きな特徴であり、これからさら発展を進めるうえでキーポイントとなる点であろう。

2.3.3　シンプルなモンゴル料理から気づく日本料理の多様性

モンゴルの食材や味付けは、スパイスを使わずに塩と胡椒のみといったシンプルなものが多い。このことから、日本の食文化における、食材、調理法、味付けの多様性を再確認することができた。モンゴルは大陸国であり、かつては非常に巨大な国であった。一方日本は小さい島国である。この事実だけ見ると、多くの国を侵略していたモンゴルの方が、食の多様性が幅広いように思えるが、その逆なのが興味深い。

2.3.4　国際社会でのモンゴルの位置

モンゴルは現在、中国とロシアとの関係が強い。特に中国との経済的なつながりは強く、2012 年上半期の輸出先の 94%が中国であるという統計結果が出ている [4]。このため中国経済の影響を非常に強く受けるのはいうまでもない。一国との貿易が国の大半を占めることは非常にリスクが高いと言えるため、中国以外のアジア・欧米諸国とも今後経済的つながりを作っていかなければならい。モンゴルは民主化以降、日蒙間の良好な関係を構築、維持しているが、モンゴルを市場としている日本企業はまだ少ない。大きな可能性を秘めていると考え、日本企業とも積極的につながりをもっていってほしいところである。

2.4　おわりに

最後に、この調査から得られたことを大まかにまとめたい。

2.4.1　伝統か、開発かはその国次第

モンゴルの伝統文化が今のまま維持されるのか、それとも経済発展の陰で衰退していくのかは、モンゴルの人々が決めるべきことである。私たちが外的な力を加えて、維持したり、衰退させたりするようなことではない。むしろ私たちは、ひと足さきにそれを経験した身として、モンゴルの歩んでいく道を切り開く手伝いをするべきである。

2.4.2　モンゴル独自の無理のない経済発展を

モンゴル国内には、伝統的な遊牧生活と商業主義的な都市の生活が共存しており、伝統的な部分の割合が高いことがこの国の特徴である。よって、この点を十分配慮し、活かすような経済発展が望まれる。

引用参考文献

1. http://www.unicef.or.jp/kodomo/teacher/pdf/st/st_42.pdf
2. ダライ・ラマ法王日本代表部事務所: http://www.tibethouse.jp/
3. 農林水産省: http://www.maff.go.jp/j/keiei/hoken/saigai_hosyo/
4. http://www.rotobo.or.jp/activities/committees/mn/mntrade2013.pdf

本章で用いられている写真はすべて猪熊が撮影した。

コラム
私を野生化させた 10 日間

猪熊洋子

「そろそろトイレ休憩を取ろうか。女子はあっち、男子はそっちへ。」車で草原の中を走って３時間くらいだろうか。その一声で各々は外に出て、思い思いの場所へ。いくら草原で、誰にも見られていないとわかっていても、屋外で用を足すことに抵抗がないわけない。風がひんやり通っていって、ひゅんっとした。いつぶりだろうか。もしかしたら、小学校の低学年、いや、幼稚園ぶりかもしれない。日本で生活していては、この年齢ではもうできない経験をして、嬉し恥ずかし、なぜかちょっと誇らしい気もした。

キャンプ地に到着した。やはり屋根のある場所というのは安心するものだ。ただ、虫が多い。蛾やハエが、夜になると光につられて部屋中のあちこちで飛び回っているし、死骸も床に落ちている。うれしい光景ではないが、この虫たちも必死に生きているのだ、仕方ない。しかし、もし日本で同じ状況になったら、気持ち悪いとか、全部いなくなってしまえばいいのにとか思うんだろうな。

夜。お待ちかね、天体観測の時間だ。外は月が煌々と輝いているだけで、人工的な光は一切ない。背中でひんやりと土の感触を感じながら見上げる星は格別である。これが同じ空なのかと疑ってしまうほど、たくさんの星が輝いていた。こんなに星がたくさんあって、空が落ちてこないか心配になるほどだ。手を伸ばすと今にもつかめそうで、いざ手を伸ばしてみるとその遠さに気づく。不思議な感覚だ。

モンゴルの伝統的な料理であるチャンスンマハは、骨付きの羊肉を茹でて塩味で頂くといういたってシンプルな料理である（第 2 章の料理を参照）。食べ方もいたってシンプル。骨を掴んで豪快にかぶりつくのだ。1 ピースが結構な大きさで、しかも大草原で育った羊肉は身が引き締まっていて、骨から身がホロリと取れるなんてことはない。両手で肉を掴み、大きな口を開けて肉を貪ることは、野生に帰るってこういうことなのかも・・・と思わせた。

１０日間ではあったが、日本にとどまっているだけなら絶対にできないような「野性的な」経験をし、それは同時に無邪気に外を走り回っていた子供のころのことを思い出させた。そして、わずか１０日間のモンゴル滞在は、確実に私を野生化させた。帰国後、屋外で食事をとる状況になったときのことだ。お手拭きやアルコール消毒の類のものがなく、手を洗わずに屋外で食事をしなければならなかった。これまでの自分なら、「なんだか嫌だな…」と思いながら食事をしただろう。しかし、モンゴルで野生化した私は、「モンゴルでもこんな感じだったし、まあ大丈夫か」と思うようになっていた。このような日常の何気ない場面で、「モンゴルではこうだったし、大丈夫」と思うことがたびたびある。こう思うたび、野生化した自分が恥ずかしいながらも誇らく、心の中でふふふっと笑ってしまうのだ。

第 3 章　モンゴルにおける自然環境および社会変動
― 遊牧と移動に着目して ―

ツェレンダグワ・ムンフバヤスガラン

3.1　はじめに

本稿ではモンゴルの自然環境と伝統的な遊牧について概観したうえで、牧畜社会と移動に注目し、その変化を歴史的に解明し、分析したい。

そこで、筆者は、故郷であるモンゴル国ウブルハンガイ県において 2013 年～2015 年まで 4 回（合計 109 日間）に渡って、人々の移動から地域の変容を解明するため、フィールド調査を実施した。本稿では、主に第 1 回目のフィールド調査の結果を示したい。

第 1 回目のフィールド調査は、2013 年 8 月 2 日～9 月 24 日（52 日間）に実施した。「卓越した大学院拠点形成支援補助金 『コンフリクトの人文学国際研究教育拠点』」の支援を得て行った。

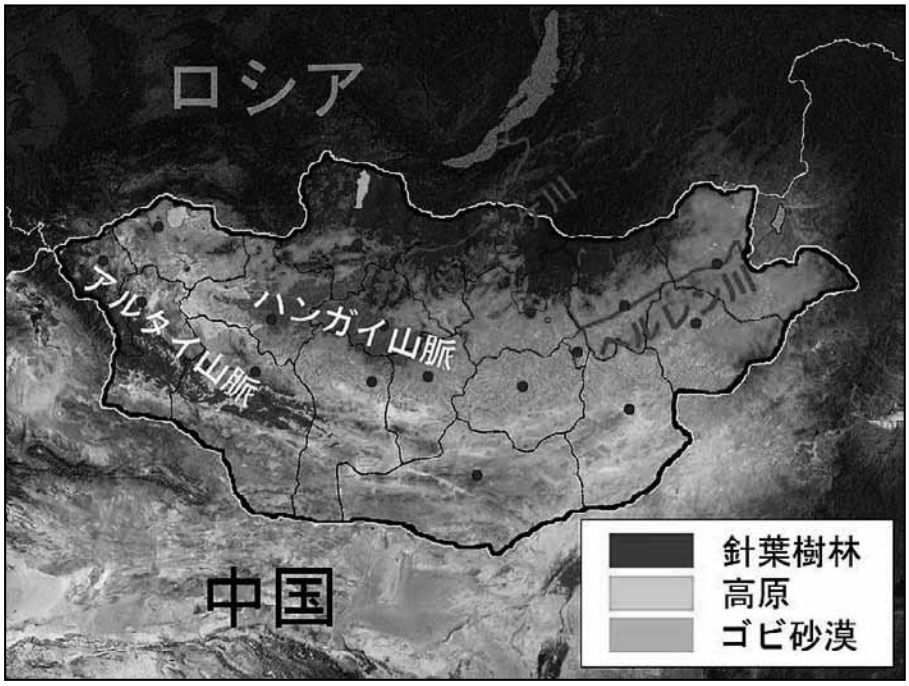
筆者は森林、草原、砂漠という 3 つの地域の遊牧民の家庭に滞在し、遊牧における移動を参与観察し、遊牧民における移動の実態や生活面での変化についてインタビューを行った。また、遊牧民の 1 年間における移動の回数、目的、形態、手段についても調査し、定住しつつある遊牧民に「移動しない理由」について問うた。

3.2　伝統的な遊牧社会と移動

3.2.1　モンゴルの自然環境

モンゴルは内陸に位置し、典型的な大陸性気候の気候となっており、降水量が少なく、日中あるいは季節間の寒暖差が激しい。モンゴルは高緯度で標高が高いため（平均標高 1580m）、冬季は非常に厳寒である。夏季の日中は摂氏 40℃を上回ることもある一方で、冬季の夜間には氷点下 40℃を下回る。（一年の平均気温は 0℃を下回る。）また、年間の降水量はわずか 281.4mm（東京の 1/4 程度）でほとんど夏期に集中しているため、年間を通して乾燥している。

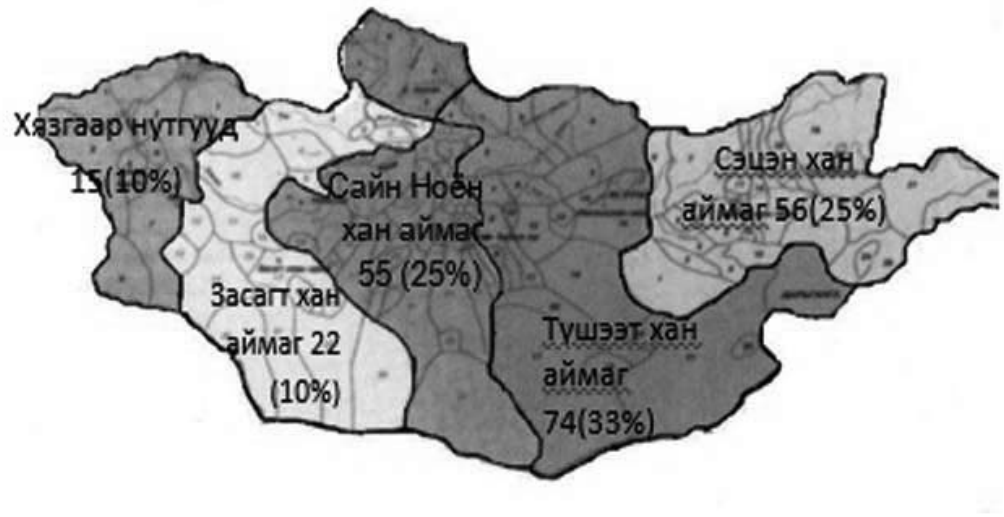
モンゴルは「草原の国」というイメージが強いようだが、草原以外にも森林と砂漠が広がり、北部はハンガイ地域（森林や水資源が豊富という意味）、中央部はタル地域（草原）、南部はゴビ地域（砂漠）と大きく分けて 3 つの地帯に分類される（地図 3-１）。従って、年間降水量だけでなく、気候と植生も地域によって大きく異なっている。



地図3-1　モンゴルの地形（出所：ウィキペディアhttps://ja.wikipedia.org/wiki/）

3.2.2　近代化以前の遊牧社会と移動

モンゴルは1931年の行政単位細分化まで、ホブド地域以外に、ザサグトハン県・サインノヨンハン県・トゥシェートハン県・セツェンハン県という４つの県から構成されており、県の領域は地理的にハンガイ、タル、ゴビ地帯の３つの地域を含んでいた（地図3-2）。



地図 3-2　1931 年までのモンゴルの行政区分（出所：http://www.touristinfocenter.mn/cate14_more.aspx?ItemID=47）

当時はモンゴルの人々は行政県内における自由な移動が認められていた。遊牧民は基本的に年間を通して、南から北へ、北から南へと、ゴビとハンガイを往復するように移動していた。長くて厳しい冬を比較的暖かい砂漠地帯で過ごし、春の家畜の出産期が終われば、今度は芽吹いた牧草のある場所（モンゴル語で sor）を求め、緑の草原へと向かって移動していた。夏は風通しがよく、涼しい、水資源が豊かな森林地帯で過ごし、秋は草が枯れずに生息している場所（モンゴル語で suli）を求め、草原に戻っていた。このような季節的移動をモンゴル語で ugsuj uruudah nuudel という。つまり、遊牧民は 3 つを地帯を含む広大な空間において 1 年のスパンで頻繁な移動を繰り返していた。したがって、遊牧において移動の距離、目的、形態などが異なる多様な移動の種類が存在していた[1]が、現代は移動の形態だけではなく、意味も大きく変化しているといえる。たとえば、「オトル」と呼ばれる移動は現代も維持されているが、草の不足、自然災害による被害など「緊急・避難的な移動」の形式として使われている。しかし、オトルの本来の意味と形態は、遊牧民の居住地と牧草地は固定し、家族の中の一部が、小型のゲルや軽便なテント、少しばかりの必要品を持って、草、水、塩分その他条件が良好な牧草地を求めて、比較的遠くへ移動する。オトルの目的を果たせば、また家族のいる居住地に戻るという移動のことだった。

冬は寒さが厳しく、移動は困難であるため、遊牧民は冬季は殆ど移動しない。夏は草に恵まれるため、春や秋に比べ、草を求めて頻繁に移動する必要がない。従って、遊牧民の冬営地と夏営地として利用する場所はおおよそ定まっていた。

一方、春は冬越した家畜の体力を増強させるため、新鮮な草を求めて移動を繰り返し、秋は冬越するための準備として、家畜のよく太らせる、その調整のため、枯れていない草やニガヨモギ（モンゴル語で agi）などの植物を求めて移動を繰り返す。つまり、春は新しい草、秋は枯れていない草を求めて移動を頻繁に繰り返すため、居住地は変わりやすい。

遊牧民の移動手段は主にラクダ・牛車だったが、放牧を目的とする日帰り移動の場合は、馬が主な移動手段になっていた。筆者の調査では、ウブルハンガイ県の場合、近代化以前の遊牧民の年間平均移動の回数は、少なくて 7～8 回、多い場合は 20 回以上だった。

このように近代化以前は、遊牧民は地域の気候や植生の変化に順応するかたちで家畜と共に広大な空間を移動し、遊牧生活を営んできた。言い換えれば、伝統的な遊牧生活は、生態環境に大きく依存しながら、移動によって①自然の資源（草・水・塩分など）を利用し、家畜と自然環境を調和せながら「生業」を立て、②自らが住む場所を選び、居住地を転々と変えながら「生活」を維持する生活様式である。すなわち、遊牧では①「移動形の生業」と「移動式の生活」は一体化

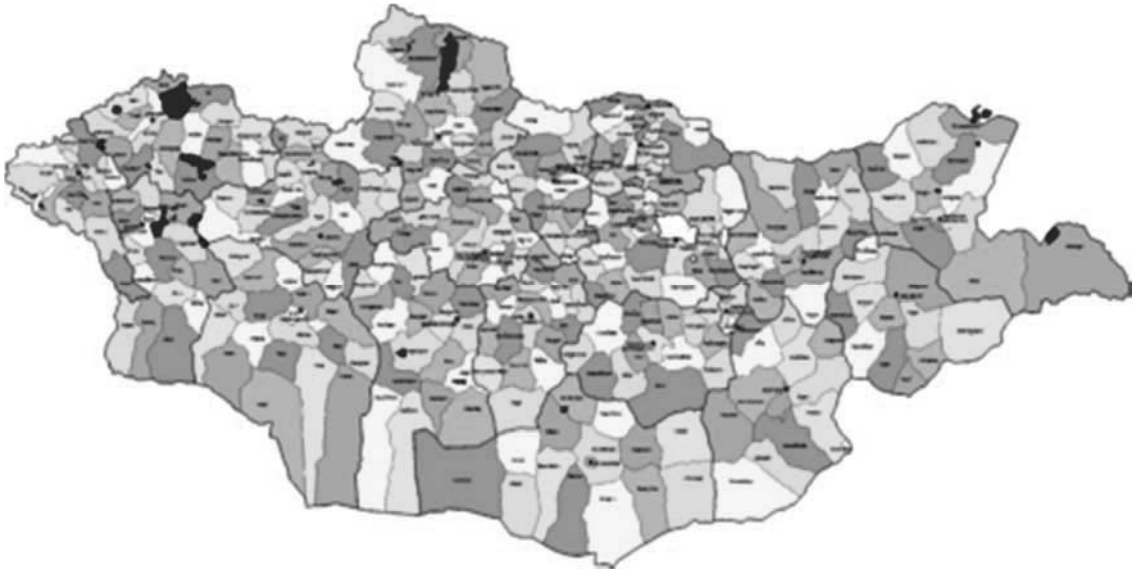
[1]季節的移動以外にも、多様な移動があったが、本稿では割愛させていただく。詳しくは吉田順一（1982）を参照いただきたい。

しており、遊牧民は、移動によって①「牧草地（belcheer)」と②「居住地（nutag)」、いわゆる「土地（gazar)」を得るといえよう。

3.3　社会主義時代と遊牧の変容

3.3.1　定住化と移動

1921 年、モンゴルはロシア（当時はソ連）に次いで世界で第 2 番目に社会主義国となり、モンゴル人民共和国が誕生し、モンゴル党政府は人々の集団化と定住化を推進した。「牧畜民の定住化」という名の大方針のもとで行政単位の細分化を行った。17 世紀以降より維持されてきたモンゴルの行政制度は社会主義時代に根本的な変化がなされた。1950 年代に突入すると、第 2 章で述べた 4 県が、首都のほか、2 つの工業都市、18 の県、318 の郡に細分化された（地図 3-3)。



地図 3-3　モンゴルの郡単位（1950 年代以降）

さらに、党政府は人々の移動を郡の領域範囲を超えないよう制限した。例えば、一時的にウランバートルや他の地域に出かける場合でも、その許可を申請しなければならない。許可がおりると、「移動許可書」が発行される。移動中に、その許可書を所持なかければならなかった。

行政単位の細分化に伴い、制度的に遊牧民は郡に在籍するようになった。さらに、森林・草原・ゴビ地域を含んだ多様な自然環境と広大な土地を有する県で自由に季節的移動を繰り返していた遊牧民は、限定的な地域で遊牧生活を維持せざるを得なくなった。政府からその対策の一環として、「冬営地（uvuljuu)」、「春営地（khavarjaa)」、「夏営地（zuslan)」、「秋営地（namarjaa)」が計画的に設定された。冬営地において家畜小屋や家畜囲いなどの固定施設が建設された。また、必要に応じて井戸が設置された。本来は、家畜は移動しつつ、多様な草や植物を食べていたが、規定区間内で理想とされる飼料が不足している場合は、刈草支給などの政策を講じて補っていた。したがって、遊牧の移動は基本的に、郡の領土内に設定された各宿営地で季節移動（つまり 1 年に 4 回に決定され）を行い、季草の不足、自然災害による被害など、緊急時には「オトル」形式に変更する形で対応するふうに変化された。なお、移動手段は、ラクダや牛、馬ではなく、トラック車に変わった。

3.3.2　集団化とネグデル

社会主義的思想のもとで遊牧民の集団化が謳われ、ソ連のコルホーズに倣い、農牧業協同組合（モンゴル語でネグデル）が設立された。郡ごとにネグデルを設立し、ネグデル長は郡長を兼任するという制度に変わった。ネグデルの加入は、個人所有の家畜をネグデルの所有に変更し、財産である家畜はネグデルに「投資」させられるということである。以来、牧民は共有財産の家畜を放牧し、ネグデルの組合員、つまりネグデルのの労働者として賃金をもらう身分となる。労働の動機づけとして、ノルマ割り当てだったが、ノルマを達成すると報奨金もある成果主義的特徴もあった。また、労働者として、社会保障が受けられるようになる。さらに、定住化政策のもとで、ネグデルによってスーリ[2]という生産隊を結成された。マルクス史観によれば、遊牧は農業未満で農業にも至ったない位置づけになっているため、モンゴルは、「遊牧とい

[2]スーリとは、定住する suuri-shih というモンゴル語に由来し、定住化を目指して作られた、新組織の名称ともいえる。

う生活様式」を全面的に改変していくことを示した。しかし、一方で経済基盤となる「遊牧という生業」を維持しなければならない問題に直面した。つまり、モンゴル党政府は「生活様式」としての遊牧を否定するものの、「生業」として遊牧は肯定したため、遊牧形態の根本的なシステム構造変化がなされた。以来、本来は一体化していたはずの「生業」と「生活様式」はの２つの移動に分離した。つまり、遊牧民の移動は、①「牧草地（belcheer)」をめぐる移動は推薦され、②「居住地（nutag)」の選択肢に関する移動は制限されたということである。

スーリの結成を通して、人の移動だけでなく、生業維持のための移動も、ネグデルが指示、管理できると考えられた。元ネグデル長の Ch さんによると、スーリ結成は、遊牧民の居住地を固定化させ、遊牧民の移動を制限し、移動を把握し、放牧に伴う移動を指示することが目的だった。ネグデルが放牧の管理も行った。家畜は移動させなければ牧畜が成立しないが、ネグデルの計画に基づき、家畜を放牧していた。

スーリは、基本的に、親族関係にない遊牧民２～３世帯で組織され、家畜は種別、性別に応じて分類し、ある定まった家畜群の飼育を理想としていた。親族関係にない小規模集団の構成によって人の頻繁な移動を減少させ、五畜の放牧でなく、特定の家畜群に限定して飼育することで、さらに伝統的な移動を避ける目的や期待があったと考えられる。自由な移動が限定されると、改めて牧草地の利用を計画し、適切な利用を考えなければならなくなる。従って、ネグデルの専門家と幹部は牧草地利用に関する計画を立て、移動ルートや形態、距離、回数などを決定し、遊牧民がその計画に従っていた。

郡およびネグデルによって地理的条件は異なるため、政府は地域の自然環境を配慮しつつ、家畜の生態分布が敷かれた。具体的には、ハンガイ地域では牛（ヤク）を中心に馬、羊を、ゴビ地域では主にヤギとラクダを、草原地域では主に馬、牛、羊を飼育するようになった。

3.3.3　遊牧と移住

ネグデルの組合員という身分となった遊牧民は、「上」からの指示に従い、スーリで各遊牧民に特定の家畜を飼い慣らすなど、与えられた「仕事」を実行し、畜産物をネグデルに提供する。ネグデルはその畜産物を回収し、ウランバートルの工場に運搬、工場で生産された商品はエージェントという組織を通じ、遊牧民に届けられ、購入する仕組みができた。すなわち、畜産物の流通、販売はすべてネグデルの「仕事」であり、遊牧民個人は関わることはなかった。遊牧民には厳しいノルマ達成義務が課されていた。共同で行われた作業が単独のスーリで行う構造が構築されたため、労働力不足に陥ったり、個人の「仕事」の量が増えたりするなどして、精神的にも肉体的にも負担が大きくなったと言われる。

一方、首都ウランバートルは遊牧民が生み出した「資源」の代価やソ連の援助によって近代化が進み、市民の生活は国によって保障され、安定していた。だが、遊牧民の場合、「上」から新制度が押し付けられただけであり、労働と生活形態に変化はなかった。遊牧民が生産した「資源」は都市で循環するのみで、都市および地方間の格差は拡大したほか、遊牧民は社会の最下層部に位置づけられた。このような状況下で若者たちは兵役制度や高等教育を通じて地方から首都へと「脱出」し、安定した生活を求めるようになった。

3.4　現代のモンゴルの遊牧社会と移動

3.4.1　遊牧における移動の変化

筆者のフィールド調査にもとづくと、遊牧民は特定の場所で「冬営地」と「夏営地」それぞれ1箇所を設けていたが、冬と春は冬営地で過ごし、夏と秋は「夏営地」で過ごしており、基本的に１年間に2回しか移動していなかった。しかしながら、「冬営地」と「夏営地」の距離は、3～10kmであり、伝統的な遊牧に比べ、極めて短距離である。したがって、遊牧民はゲル（移動式の住居）よりも、むしろ木造家屋を好む傾向が見られた（写真3-1、3-2)。

写真 3-1　A さんの冬営地　　写真 3-2　A さんの夏営地

遊牧民は普段、日帰り移動によって家畜の放牧を行っている。遊牧民の移動手段としては車とバイクが普及しており、家畜の放牧はバイクが日常化している（写真 3-3、3-4）

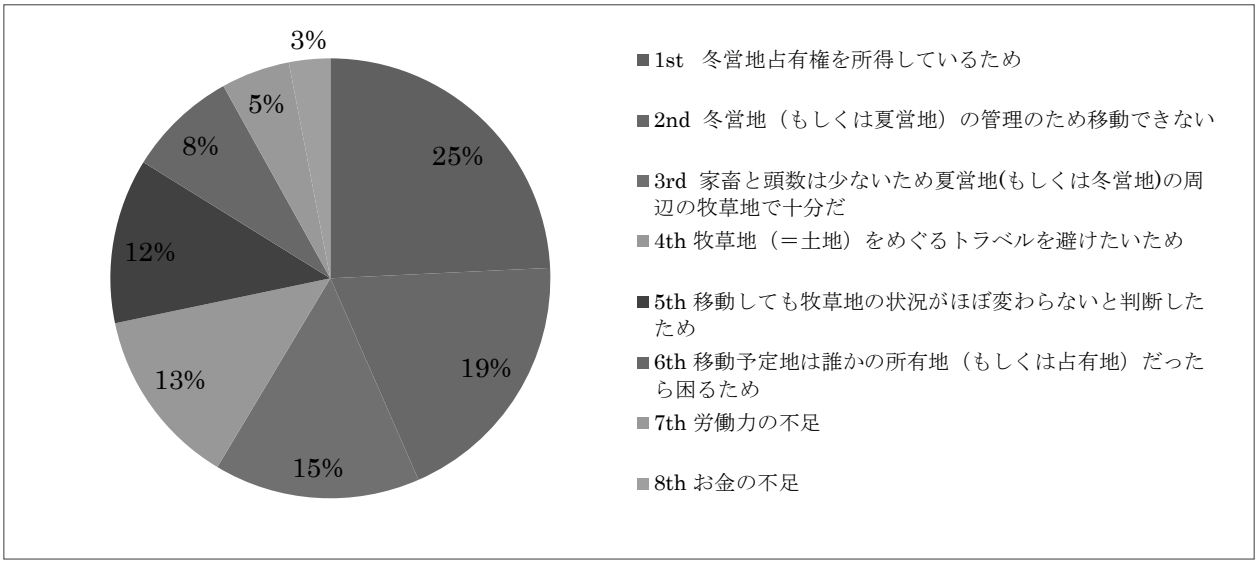
写真 3-3, 3-4　A さんの所有する車およびバイク

現在は宿営集団（ホトアイル）を構成していない単独世帯が増加しているが、遊牧民同士や定住地の人々の間の相互扶助関係は維持されている。長距離であっても、携帯電話や自動車やバイクの普及に伴い、移動時間が短縮されたため、ホトアイルを構成しなくとも労働力の相互補完が維持されているといえる。遊牧における移動回数と距離は激減したが、遊牧民は必要に応じ、「オトル」形式の移動の形態を維持している。

3.4.2 遊牧民の移動の減少と理由

上記から、遊牧における移動回数と距離は全体的に激減したことが言える。移動によって遊牧を維持してきたはずの遊牧民が、なぜ現代は移動しない傾向にあるのだろうか。

このような移動の変化は、草原の劣化や砂漠化などの環境問題を引き起こしているという議論がある。先行研究においては、遊牧民が移動しない理由について、移動するために、労働コストや移動コストを自ら負担しなければならなくなったことで、季節移動の距離とその回数が全体的に減少し、特定の宿営地への定住化が増加傾向にあると指摘されている（Fernandez-Gimenez2001:63）。また、医療や教育など公有サービスを受けるため、移動コストが比較的低く、市場に近い定住地周辺や道路脇の放牧集中がみられることも述べられている（Fernandez-Gimenez 1999:10-11；尾崎 2015；藤田 2013）。しかし、筆者が独自に実施したアンケート調査結果によると、ウブルハンガイ県の遊牧民の場合、移動回数が激減した最たる、根本的な理由は土地の私有化だと考えられた（グラフ 3-1）。



グラフ3-1 遊牧民の移動の変化理由

3.4.3 土地私有化と遊牧

1990 年代初頭、ソ連崩壊に伴い、モンゴルは民主主儀・市場経済という新しい道を歩むこととなった。モンゴル政府は市場経済へ移行する際、国際金融機関（ADB, WB, IMF など）や援助国（日本、アメリカなどの先進国）の介入を受け入れ、移行に必要な融資受給条件として、国際金融機関による構造調整が課され、それらの意思に沿った開発が進められた。

1991 年、モンゴル政府は、社会主義時代に共有されていた様々な財を私有化したが、広大な国土に対する権利は国家が保持していた。しかしながら、世界銀行やアジア開発銀行などの国際金融機関は、新たな法律によって土地私有化の規定を要請した。従って、1992 年の民主化後の新憲法において、モンゴル政府は土地私有化の方向性を提示し、1994 年に土地法を制定した。しかし、土地（牧地）は私有になじまないという国民認識があるため、土地私有化があまり進まず、ADB や IMF の批判を受けつつ、1997 年、1999 年、2002 年と三度にわたる改正が行われ、2003 年 3 月から「土地私有化法」が施行された。そこで、遊牧民に「冬営地占有権」が付与されることとなった。「冬営地占有権」によって、冬営地が明確に規定され、その土地の範囲は 800 ㎡という境界まで具体的に決定されている。現地調査では、遊牧民が「冬営地占有権」を否定すれば、居住地すらも確保できなくなるのではないかという不安が聞かれた。

3.4.4 遊牧民の居住地と移動

筆者の現地調査から、「冬営地占有権」によって遊牧民の居住地は固定化されつつも、町で土地を所有し、居住地を持つ遊牧民が増えていることがわかった。町での居住地を確保する最大の理由は土地私有化である。次いで、教育を目的とする子どもや、家族の一員の一時的な移住が理由に挙げられている。その他、財産として土地を銀行のローンで使用しやすいといった理由も述べられている。

民主化によって人々の移動が自由になったとはいえ、制度的に遊牧民の移動は変わらず、郡内に留まっている。すなわち、遊牧民には一人の人間として自由な移動が保障されているが、伝統的な遊牧のように居住地を自由に変え、家畜とともに郡外に自由に移動することはできない。郡外に家畜群と居住地を移す場合、「移住」になり、移籍手続きをしなければならない。

3.4.5　家畜の放牧の距離と移動

遊牧民の居住地は定住化しているが、遊牧民は「家畜の放牧」というかたちで移動を行っている。季節と家畜の種類によって、放牧の距離が大きく異なる。以下、筆者がインタビューを行った遊牧民 A さんを事例に、家畜の放牧の距離と移動に関するデータを提示したい。以下は、A さんの居住地から離れた、片道の距離である。

表 3-1　季節および家畜別の放牧距離（A さんの所有する家畜の場合）

	家畜の種類			
季節	馬	牛	ヒツジとヤギの混群	子牛
冬	約50ｋｍ	約10ｋｍ	約3ｋｍ	約500m
春	約20ｋｍ	約10ｋｍ	約3ｋｍ	約１ｋｍ
夏	約25ｋｍ	約10ｋｍ	約5ｋｍ	約１ｋｍ
秋	約40ｋｍ	約10ｋｍ	約7ｋｍ	約１ｋｍ

表3-１より、馬の移動距離が最も長く、次いで牛、羊と山羊だと言える。子牛は最も短距離で移動させている。移動の様相を全体的にみると、春において、移動距離が居住地から最も近いのは出生時期からである。夏は家畜の乳搾りを行うため、近辺で放牧している。秋は越冬に向けて家畜のよく太らせるため、四季の中でも最も長距離を移動させていると言える。馬の移動距離は、季節によって大きく変化するが、逆に牛の場合は年間を通して移動距離が変わらない。牛は出生時期を除き、一年を通して乳搾りしていることが影響している。馬の場合、乗馬に適した馬を居住地近辺まで連れてくるが、他の馬は放牧している。夏と春は毎日、冬と秋は１日から3日まで乗馬用の馬を交替させている。しかし、バイクや車の普及により、乗馬用の馬の利用が減少している。人間が馬の移動を意図的に制限し、管理するのは困難なことも馬の移動距離と移動範囲に影響している。夏は乳搾りのため馬を毎日、居住地の近辺まで連れてくるが、冬は比較的に自由に放牧させている。しかし、馬は遠くまで行ってしまうため、日々の管理が難しくなるが、他の遊牧民との協力と情報伝達によって遠距離であるが、馬の管理を行っている。ゆえに、遊牧民を対象にした社会保障やセーフティネットが十分整備されていない状況下において、

個人が異なる方法や能力を駆使して遊牧を営んでおり、遊牧民同士や遊牧民と都市定住地における人々の相互扶助関係によって遊牧生活が支えられていると言える。

3.4.6 「上」から否定される遊牧

エンフバヤル政権（2000 年～2004 年）以降、モンゴルの経済基盤を牧畜から鉱山開発に移行させ、遊牧の産業化および商業化を目指し、地下資源開発による国家の発展という方針を示してきた。具体的に言えば、当時全人口の 3 分の 1 を占めていた遊牧民人口を総人口の 10 分の 1 までに減らし、移動の制限によって遊牧民を主要道路沿いに定住させる構想を発表していた。

しかし、国民の多くは反対し、政権構想は直接的に実現していないが、結果として、現在の遊牧民の総人口は全人口のうち約 1 割となっている（モンゴル国家統計集、2014 年）。また、現在の牧畜部門における政策は牧畜の産業化と商業化に重点を置く一方、国際金融機関はモンゴルが貧困から脱出し「持続可能な発展」を実現するため、自然環境への依存性とリスクが高く、生産率が低い遊牧ではなく、遊牧民は遊牧以外の生計および生活様式へ転換すべきだと提唱し、それを支持する様々な開発プロジェクトを展開している。

3.5 最後に

モンゴルの遊牧社会は、社会主義制度の導入と民主主義制度の移行という 2 度に渡る、構造的変容を経るにつれ、遊牧民の移動が大きく変化し、全体的にみて、遊牧の移動回数が激減している。

その根本的な要因は、社会主義時代に行われた定住化政策と土地私有化政策によって、遊牧民が居住地を自由に移動できなくなったことにある。移動回数から考えれば、社会主義時代の季節移動に比べ、年 4 回から 2 回まで減ったが、居住地の特徴から考えれば、冬営地と夏営地は特定の地域に限定され、居住地の移動がほとんど行われない状態が続いているのではないかと考えられる。一方、牧草地の自然条件が重要とされる秋と春は、家畜の放牧によって季節ごとに異なる距離で家畜を移動させる。そこで移動を調整し、生業を維持していると考えられる。広大な土地、多様な自然環境、自由な移動によって可能になった伝統的な遊牧は、限定された地理的条件と政治的・経済的な要因などによって、生活様式として定住生活に変化しつつある。しかしながら、生業としての遊牧が依然として存在しており、遊牧民は生業維持のために家畜の移動を余儀なくされている。従って、遊牧民の労働、生産様式、生活環境はほとんど変わってないと言える。それは遊牧民や遊牧社会を対象にした、彼らの立場や視点に立った対策が十分に講じられていないことにあるだろう。それでも、「上」から遊牧民を否定し、遊牧の産業化と商業化を推薦していることに筆者は疑問を感じる。

参考文献

（英語）

ADB

1995 Report and Recommendation of the President to the Board of Directors on Proposed Loans and Technical Assistance Grant to Mongolia for theAgriculture Sector Program. RRP MON:27536

2002 Program Performance Audit Report on the Agriculture Sector Program (Loan1409-MON[SF]) in Mongolia. PPA:MON 27536.

2003 Mongolia`s Environment: Implications for ADB`s Operations.

2015 Mongolia: Country Operations Business Plan 2015

Fernandez-Gimenez, Maria.E

1999 Reconsidering the Role of Absentee Herd Owners: A View from Mongolia.Human Ecology 27(1): 1-27.

2001 The Effects of Livestock Privatization on Pastoral Land Use and Land Tenure in Post-Socialist Mongolia. Nomadic peoples 5(2): 49-66.

World Bank

2006 Report of Mongolia Poverty Assessment 35660-MN

（日本語）

尾崎孝宏

2015「現代牧畜社会における牧畜戦略の多様化要因についてモンゴル高原を中心に」『日本文化人類学会紀要』49：22。

藤田昇・加藤聡史・草野栄一・幸田良介

2013 『モンゴル草原生態系ネットワークの崩壊と再生』京都大学学術出版会。
吉田順一
1982 「モンゴルの遊牧における移動の理由と種類について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』28:327-342、早稲田大学大学院文学研究科。

（モンゴル語）
モンゴル食糧農牧業省ホームページ
http://www.mofa.gov.mn/new/images/banners/monitoring/2014hotolbor.pdf
2014「食料農牧分野における国家プログラムと国際開発援助によるプログラムおよびプロジェクトの 2014 年度活動における管理・分析、評価に関する報告書」
http://www.mofa.gov.mn/new/images/banners/monitoring/2013hotolbor.pdf
2013 「工業・農牧分野における国家プログラムと国際開発援助によるプロラムおよびプロジェクトの 2013 年度活動における管理・分析、評価に関する報告書」

第Ⅱ部　鉱山

第 4 章　オンギー川との出会い

思沁夫

本稿ではオンギー川との出会いに伴う自己変化をもとに、深刻化しつつあるモンゴルの環境問題について、環境保護および教育の視点から読者の皆さんと一緒に未来志向で考えてみたい。

4.1　オンギー川との出会いまで

1911 年、辛亥革命による清朝崩壊後、モンゴルは異なる独立の「運命」に導かれていった。1924 年にはソ連支援の下でモンゴル人民共和国が成立した。一方、内モンゴルは中国の領土になった。ソ連や中国、そして当時の国際情勢に翻弄され、独立・自治運動は空しくも失敗に終わっていた。1947 年、内モンゴルでは共産党勢力が政権を掌握した。1949 年には中国国内で内戦が勃発、国民党に勝利した共産党の支配勢力はチベットなどごく一部の地域を除き、内モンゴルを含む中国全土に及んでいた。

しかし、1960 年代の中ソ対立はあくまでも政治イデオロギーや制度上の軋轢に過ぎず、内モンゴルの人々にとって「モンゴルが同胞である」ことに変わりはなかった。モンゴルと内モンゴルの間には交流があった。例えば、第三インターナショナル[1]を介して政治、教育分野における人的交流や支援が行われていた。

今、私自身の人生も含めて、過去を振り返ると、内モンゴルの人々のモンゴルとの出会いと交流は、文学と歌曲、舞踊を通じて実現していたと考えられる。

私の故郷、シリンゴル草原を含む遊牧地域では、学校教育や学習塾の普及が遅れ、いわゆる「知識人」が乏しかったからだろうか。「漢化」の影響が色濃い内モンゴルの文学や歌、踊りよりも、遊牧生活の情景や遊牧民の感情を汲まなく描いたモンゴル文学のほうに親近感が覚えられた。遊牧民たちの感覚、感情に迫る「何か」があったのかもしれない。

数々のモンゴル文学作品が内モンゴルに伝わったが、以下 3 名の作家は特に有名で、彼らの作品は広く親しまれてきた。その 3 名の作家とは、ベ・リンチン（言語学者、文学者）、ナチグドルジ（詩人）、デンムデンソロン（科学アカデミーの委員長、文学者）である。私にとって彼らの文学作品は知の源であり、自文化を理解する教科書的な存在でもあった。

私が日本に留学するときは、次の 5 冊を鞄に詰め込んでいた。中日辞書、ベ・リンチンの『黎明』 “Үүрийн туяа”[2]、ナチグドルジの詩集『私の故郷』“Миний нутаг”、エルデンの大河小説『清澈のタイミル川』“Тунгалаг Тамир”である。

特にナチグドルジの詩集は革命的で、民族主義的な要素が際立っており、特別な輝きを放っているように思われた。彼の作品は、社会主義のプロレタリア文学に位置づけられることが多かったが、反封建社会を罵倒する革命思想や社会主義思想の称賛の中に、故郷や民族に対する賛美が見事に編まれていた。だからこそナチグドルジはモンゴルと内モンゴルの伝統文化を代表する詩人の地位を確立したのだろう。以下は彼の詩集から一部抜粋し、和訳したものである。

> 美しい川々よ。豊かな資源を内に秘め、青くそびえる山々よ。歴史の響きを今に伝える街や遺産たちよ。遠くへわたしを導く扇動たちを辿った道々。これがわたしの故郷、美しきモンゴル。（省略）…モンゴルという名は世界に知られている。モンゴルのためという想いは、わたしの生命と繋がっている。このように生まれ、学んだ言葉は決して忘れてはならない。わたしの文化であり、死ぬまで生きるこの大地を、わたしから離すことはできない。これがわたしの故郷、美しいモンゴルである。

また、エルデンの『清澈のタイミル川』は、ミハイル・ショーロホフの『静かなドン』の影響を受けて描かれた作品である。こちらの作品も反封建、革命、人類共通目標などを謳ったプロレタリア文学とも言えるが、小説の主眼は政治喧伝

[1] ソ連共産党率いる国際組織、コミンテルンとも言う。
[2]全巻は「上・中・下」だったが、私は「上」だけ日本に持って行った。

や政党称賛ではなかった。清朝独立を果したモンゴル封建社会を舞台に、強烈な個性をもつ二人の主人公（エルデンとトムル）、清朝の官僚、遊牧民女性やバイン（地主）などが登場し、一人ひとりの人間性、民族性が鮮明かつ表現力豊かに描写されていた。次の一節に象徴されるように。

犬に嫌われればデールの裾が破れる。[3]

文化大革命期の草原に生まれ、中国支配下の政治動乱期に生きた人々にとって、モンゴルの文学作品はアイデンティティの確立になくてはならない、まさに知の源泉そのものだった。私もモンゴルの作品を通じてモンゴル的、あるいは民族的な感覚を意識するようになった。

その影響は文学作品にとどまらない。歌や舞踊もそうである。これらは文学作品とは異なる経路で内モンゴルに普及した。ここでは 3 つのエピソードからその影響の一端を示したい。

まずは「カセットテープ事件」である。1970 年代半ばから末にかけて、モンゴルと内モンゴルの国境沿いに暮らす人々は、ラジオから流れるモンゴルの歌を聴いていた。私はモンゴルのドルノド県に近い、シリンゴル盟に暮らしていたが、モンゴルからラジオ電波が届いていた[4]。ラジオから流れる中国共産党の政治批判、討論（たたき合い）の合間のコマーシャルでは、モンゴルのラジオ番組の歌曲が聴こえていた。同僚とともに夜中にこっそりとこのラジオ放送を聴いていた私の知り合い、スチンバートルは、この放送をカセットテープに録音した。彼のカセットテープは人から人へと伝ってゆき、密かなブームを巻き起こし、「カセットテープ事件」に発展したのである。

2 つ目のエピソードは、テンゲル先輩の話である。テンゲルは内モンゴル芸術大学出身で、私より 2 年上の先輩だった。もともと彼は大学でモンゴル三味線を習っていたが、卒業後は歌手に転身し、「私はモンゴル人である」“Би монгол хүн”をロック風なメロディーに乗せて熱唱した。テンゲルの歌は、急速に漢化してゆくモンゴル人の心を掴んで大ヒットし、中国、台湾、香港のロックスターにまで登りつめた。作曲はテンゲルだが、歌詞はモンゴルの詩人、チムデ“Чимэд”だった。歌は次のフレーズで始まる。

牛糞の煙に満ちた遊牧民のゲルで生まれた。この果てしない荒野を故郷と呼びたい…

モンゴル人の歌は、内モンゴルでも人気があり、今でも人々に愛されている。私の知る限り、1970 年代末から 1980 年代では「軍人の歌」“Цэрэг эрийн дуу”、「ウランバートルの夜」“Улаанбаатарын үдэш”、「母よ」“Ээж минь”、「私の故郷」“Миний нутаг”が有名だった。

最後のエピソードは、モンゴル共和国国立青年劇団によるコンサート舞踊会の鑑賞である。このコンサートは 1979 年、呼和浩特（ふふほと）市[5]市立体育館で開催された。当青年劇団は当時の流行歌だった「チンギスハーン」“Чингис хаан”、「6 時 45 分」“6 цаг 45 минут”を歌い、披露されたモンゴル民族舞踊は、私の想像を遥かに超え、洗練された独自の美しい動きとリズムが生きていた。モンゴルの素晴らしさを再発見し、民族性の意味や価値を学んだ瞬間だった。

私は中国の大学に進学後、モンゴル文学や歌、踊りよりもむしろヨーロッパを中心とする西洋の文学作品にのめり込んでいった。遊牧民という自己像の払拭を渇望し、洋書の翻訳本に読み耽り、自分自身の近代化、文明化に躍起になっていた。モンゴル人と出会い、モンゴルについて再び考えを巡らせるようになったのは、日本留学後のことだった。

1997 年 11 月、金沢大学在学中のことである。ある国際会議に出席していた、当時のモンゴル国連大使と面会した。私は彼にモンゴル語で挨拶したが、彼は英語で返答し続けたため、思わず驚愕してしまった。

---

[3] ここで「犬」とは官人を指し、「デール」とは民族衣装を意味する。
[4]当時、地域ではテレビがほとんど普及していなかった。
[5]内モンゴル自治区の首都である。

また、1999 年、私が博士課程 2 年生のときのことである。大学院ゼミで自分の好きな文献を持参し、紹介する機会があった。私が選んだのは、Caroline Humphrey with Urgunge Onon 著“Shamans and Elders Experience, Knowledge, and Power among the Daur Mongols”（Clarendon press. Oxford 1996）だった。著者の一人であるオノン氏は、世界的にも著名なモンゴル研究者であるが、序文には次のようなことを書いていた。

「内モンゴルの人々はモンゴルに憧れる。現在、モンゴル、内モンゴル間に交流はあるものの、モンゴルの人々は『内モンゴル人はモンゴル語が出来ない』などと差別している。そこで内モンゴルの人々は寂しい思いをするのだ。」

他にも、1980 年代以降、モンゴルと内モンゴル間では芸術文化交流のほか、経済的交流、すなわち物々交換が行われており、内モンゴル人による悪質な販売や事件が話題になっていることは知っていた。しかし、私が実際にモンゴル、そしてオンギー川と出会うまで、「同胞」意識と現実との乖離は簡単に否定できるものではなかった。

4.2　オンギー川との出会い

オンギー川との出会いは、バヤサさんとの出会いに始まった。

2006 年冬、私は金沢在住の知人の紹介で、モンゴル人留学生のバヤサさん（当時、神戸外国語大学に在学）と知り合った。

そのとき、彼女の故郷、ウブルハンガイ県は遊牧が盛んであり、またラマ（僧侶）の祖父が暮らすと聞いた。私の祖父もラマだったため、是非ともウブルハンガイ県を訪れ、バヤサさんのお祖父さんにお会いしたい、モンゴルを自分の目で確かめてみたいという感情が次第に湧き上がってきた。また、私だけでなく、知人もモンゴル訪問に関心があったため、バヤサさんの提案と案内によって翌年の 2007 年夏には渡蒙が実現した。

ここで、ウブルハンガイ県について初めて知った読者もおられると思うので、最新の統計データ等に基づき、簡単ではあるが、基本的な情報を添えたい。

ウブルハンガイ県は首都ウランバートルから西南西に約 430 ㎞、モンゴルの地図上でほぼ中央部に位置する（地図 1-2 を参照）。遊牧文化が栄えた、宗教信仰の中心地でもある[6]。以下、モンゴル統計集（2014 年版）を参照すれば、ウブルハンガイ県における遊牧文化の豊かさが少しでも読み取れるだろう。

ウブルハンガイ県の面積は約 6 万 3 千㎢、19 のソム（日本で言う「郡」に近い）、109 のバグ（日本で言う「村」に近い）で構成されている。県人口は約 11 万 3 千人である。県人口のうち都市人口が 28.4%に対して遊牧地域の人口は 71.6%と、都市の人口は年々増加傾向にあるが、地方に暮らす人々がおよそ 7 割を占めており、牧畜業が盛んである。

県北部はハンガイ[7]で森や緑が多く（県土の 23%）、中央部は草原（28.2%）、南部は草原および砂漠地帯のゴビ（48.8%）となっており、多様な生態系を有する。

ウブルハンガイ県の家畜総頭数は 411 万 1600 頭、全国 21 県で第 4 番目である[8]。種類別にみると、ウマ 24 万 6900 頭、ヒツジ 182 万 1100 頭、ラクダ 2 万 2000 頭、ウシ（ヤック）18 万 3300 頭、ヤギ 183 万 8300 頭である。

ウブルハンガイ県の遊牧民世帯数は 1 万 4775 世帯（2011 年）、1 万 3603 世帯（2012 年）、1 万 3570 世帯（2013 年）、1 万 4115 世帯（2014 年）である。遊牧民人口でみると、2 万 8457 人（2011 年）、2 万 6687 人（2012 年）、2 万 6254 人（2013 年）、2 万 7580 人（2014 年）、2014 年は全国で第 2 番目に遊牧民が多い県となっている（なお、第 1 番目はフブスグル県）。

さて、ウブルハンガイ県を大まかに理解したところで、初めてのモンゴル滞在の話に戻りたい。

モンゴル到着時の滞在予定は地域の遊牧民に遊牧生活について話を伺い、アルバイヘール（ウブルハンガイ県の県庁所在地）におけるガンダン寺復活の立役者であるラマ、（彼がバヤサさんの祖父、ゾンドンダンバ氏である（地図 4-1-A-2 を

---

[6] かつてのモンゴル帝国の首都は、ウブルハンガイ県北東部カラコルムに設置されていた。

[7] ここで言うハンガイとは、モンゴル中央部に位置するモンゴルの分水嶺、ハンホフ山脈からデルゲルハン（山）に至るまで西北から東南へ 750 ㎞続く山脈を指す。

[8] 統計集では合計頭数が 411 万 1500 頭と記されていたが、著者が計算したところ 100 頭多かった。

参照)。なお、地図 4-1 は第 4 章の最後に掲載している）を訪ねることだった。だが、オンギー川とのあの「衝撃的な」出会いによって、私は急遽予定を変更することにした。

ウブルハンガイ県内で移動中、ある川を渡った。このときにバヤサさんが「オンギー川だ」と教えてくれた。2007 年は、比較的雨が多かったためだろうか。水かさが増しており、とても美しい川に思えた。バヤサさんは話を続けた。

「オンギー川上流域には砂金採掘者がいて、環境破壊を招いている。」

翌日、私の知り合いは町の散策に出かけたが、私はボルドーさん（バヤサさんの夫）の母（政府部門で勤務）とともに、オンギー川上流域のウヤンガ・ソム[9]に向かった（地図 4-1 の左上を参照)。ソムでは鉱山開発現場と人々の姿が観察された。このとき私は鉱山開発企業による納税の実態把握、モンゴル社会で危険視されていた「ニンジャ」たちにインタビューを試みた[10]（地図 4-1-C-5 を参照)。なお、ニンジャとは、国あるいは地方政府交付の鉱山開発許可（証）を所持せず、利益目的で川底の砂金採掘を行う、または鉱山から銅、鉄、石炭など鉱物資源を掘り起こす者を意味する、モンゴルで使用される言葉である。

現場ではオンギー川の支流が観察されるはずが、川は消滅していた。大地には掘土の山々と無数の水たまりが点在し、ウォッカの空瓶や生活ごみが散乱していた。採掘重機が轟音を響かせ、人々が小さい盆を手に砂水を洗っていた。丘の斜面から丘の頂上付近までがゲルで覆いつくされ、行き交うバイクが砂ほこりを舞い上げていた（地図 4-1 左上の写真を参照)。これが私のオンギー川との衝撃的な出会いである。

オンギー川はウブルハンガイ県北部のハンガイに水源を持ち、地域の人々、家畜、またその他の動植物の主水源である。また、モンゴルにおける主要な川でもある。オンギー川は南西方向へ 400km 以上に渡って流れ、南部ゴビ県のウランノール（オンギー川の川水によってできた湖）に注ぐと聞いていた。だが事実、オンギー川は中流域で断流していた。

ウブルハンガイ県では家畜頭数が多いことは既に述べたが、家畜の多くはオンギー川だけでなく周辺のターチン川やアルゴジン川流域（地図 1-2 を参照）にも集中している。だが、ターチン川とアルゴジン川は、常流から季節川へと姿を変えていた。雨季に川水が流れるだけで、一年のほとんどは渇水状態である。バルーン・バヤン・ウラーンソム付近に位置する、ターチン川によって成り立つはずのターチン・ツァガンノール（地図 1-2 を参照）は完全に枯渇していた[11]。事態の深刻化はソム政府も認識しており、日本に援助を求めているという話も聞いたことがある。

私はオンギー川上流域で主に鉱山開発現場におけるニンジャの調査を始めたが、2 年後の 2009 年には地域に視野を拡大し、ズーン・バヤン・ウラン・ソムからウランノールに至るまで、オンギー川の実態調査を進めることにした（地図 4-1 を参照。なお、2009 年の調査に関しては 4.3「オンギー川に育まれた地域」で詳述する)。現地調査で得られた知見や文献調査から、さらに調べた結果、オンギー川流域の変化が地域や遊牧に明白な影響を及ぼしていることが分かった。

地域の人々の話によると、かつてオンギー川の川幅は広く、雨季には幅 1km にも達し、水量も多かった。1978 年夏の選挙日では、オンギー川の大洪水が発生し、対岸の人々が足止めされた。オンギー川沿いのジュリグ（草）は栄養価に富んでおり、家畜が好む牧草がたわわに育つはずが、水量減少に伴い、牧草が乏しくなっている。

遊牧民のエンヘトヤさん（40 代、女性）は水源を確保するため、井戸を掘っていた（地図 4-1-B-3 を参照)。井戸が川

---

[9] 1931 年成立。ウブルハンガイ県に属す。面積は 3 千㎢で人口は約 1 万人。中心地はウランバートルから 492 ㎞、アルバイヘールから 62 ㎞地点にある。ソムでは木材加工、手工芸品、食品加工、観光業が行われ、3 つの学校や病院、文化センター、商店などがある。

[10] ニンジャへのインタビューについては後述する。

[11] バルーン・バヤン・ウラーンソムはバヤサさんの父の故郷である。ウブルハンガイ県最高峰の聖なる山（ボグド山、3590m）が聳(そび)えている。バヤサさんのお父さんによると、この聖なる山には野生のヤギ、ヒツジ、ユキヒョウが生息し、山の雪水、ターチン川から注ぐ清水によって豊かな大地が形成されていた。ターチン・ツァガンノールも美しい湖で、粟も豊富にあったが、現在は観察されていない。

の役割を担うわけではないが、何とか放牧を続けなければならないという切なる願いから出た行動だった。しかし、彼女のように井戸を掘る間もなく、すでに地域を移動した遊牧民もいた。彼女の息子と娘は、オンギー川の「本来の姿」を一度も見たことがない。

家畜の飲用水も確保できないほど悲惨な状態だった。ツデンバラさん（70 代、男性）は次のように話していた。

「川があるとき、希望があるというか、明るかった。今はいつ川に水が流れるようになるのか。待つか、心配するか、祈るかだ」

アルバイヘールから約 70 ㎞地点、オンギー寺院近くにオンギー・オボーがある（地図 4-1-A-4 を参照、なおオボーについては後述する）。ここにはオンギー川の水源から湧き水が流れ込むが、2007 年を除いて水が到達したことは一度もない。かつては 1m 足らずで湧水が吹き出ていたが、現在は 3.5m～4m まで水位が下がった。ラクダは 2、3 日に 1 度、ウシとヒツジは毎日引水する。地域の人々は断流が続けば、オンギー川流域の環境はさらに悪化し、モンゴル人が理想とする「五畜」（ウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダ）の遊牧生活と伝統文化の維持は困難になると憂慮していた。

地域の人々はオンギー川の断流を一度も経験したことがない。だが、2007 年以降、オンギー川の主水源である 5 つの支流のうち 2 つの支流がすでに消滅しているのである。

ナチグドルジの詩集「私の故郷」“Миний нутаг”にはモンゴルの地名のほか、川や湖の名前が多く連ねられていた。私は彼の詩を丸暗記していたため、渡蒙前からこれらの名称が脳裏にしっかりと刻まれていた。しかし、実際は単なる記号に過ぎなかった[12]。私の断片的な知識でモンゴルの現状（いま）を理解することは到底不可能だった。

モンゴルの理想（イメージ）が、あらゆる問題を抱えた現実のモンゴル、地域として眼前に現れたとき、不安が込み上げてきた。それでも事態を前向きに捉えるとすれば、オンギー川との出会いこそが、モンゴルを具現化させ、私とモンゴルの人々との交流を可能とし、モンゴルの環境問題を考える原点を築いてくれたと言える。

しかし、オンギー川をはじめとする川の断流やウランノール枯渇の要因は一体何なのだろうか。近年、モンゴルでは地球温暖化や異常気象（乾燥化）の頻発など、様々な憶測が飛び交っているが、最大の原因とされているのが砂金採掘目的の鉱山開発である。

モンゴルは世界でも有数の鉱物資源国である。2012 年の地質調査によると、モンゴルには金、銅、鉄、石炭、ウラン、リン、水晶、石油をはじめ 80 種類以上の鉱物資源が地下に眠っており、6,000 ヶ所以上の採掘地点がある。さらにモンゴル国の調査報告によれば、国内には推定 3,400 トンの金（砂金および岩金）が埋蔵されている。

民主化以降、モンゴル政府は鉱山鉱物資源法および外国投資法を制定し、鉱物資源の開発利用に伴う外国資本、技術導入を目的とした外国企業参入を促進した。法のもとでは、外国人はモンゴル国民と同じく、鉱物および鉱脈探査と開発権を有する。現在、モンゴルにおける外国の鉱山開発企業は、多い順にオーストラリア、カナダ、アメリカ、イギリス、ブラジル、ロシア、韓国、中国となっており、外資系企業および合弁企業がそのほとんどを占める。

またニンジャによる砂金採集にも触れておく必要がある。あくまで推定だが、モンゴル全国にはおよそ 3 万～10 万人の

[12] ここで、1980 年代初め、著者が病気療養中に知人の紹介でロブソン著『ガゼル』という作品に出会ったことも追記しておきたい。この作品では街（おそらくウランバートル）の人々が休暇で地方に赴き、ガゼルの狩猟を行い、孤児を発生させた、モンゴル人の生命に対する軽率さや価値観の変化について書かれていたものだと記憶している。
この作品は内モンゴルではほとんど知られていないと思うが、私に強い印象を与えた。それは 1950 年代末～1960 年代の実際にあった出来事と関係する。食糧難の時代でもあったためか、中国政府および企業が集団化、軍の戦車や銃を装備し、ガゼルをはじめとする野生動物の狩猟目的に内モンゴルにやって来ていた。これは当時の私を含む、遊牧民にとってある種、戦争のような恐怖心に触れる出来事だった。ガゼルは悲しい目をした動物であり、私にとっては身近な存在でもあった。作品中にはモンゴル人自身の狩猟に関する記述があった。真相はともかく、こちらも衝撃的な内容だった。

ニンジャが存在すると言われており（2009 年時点）、モンゴルの総人口約 299 万人を考えると決して少なくない。ニンジャは主に鉱山開発現場や開発跡地に集中傾向にある。また、長年のニンジャに関する調査の結果、ニンジャは鉱山開発によって出現したことが明らかとなっている[13]。

ニンジャの正体は遊牧民、会社員、公務員や大学生などさまざまであり、年齢や性別を問わない。また、ベテランもいればアマチュアもいる。専業者もいれば、兼業者もいる。ニンジャ集団は個人単位もあれば家族単位、大規模なグループ（共同体）、定住型や移動型など様々である。技術や資金力も様々で、採掘作業は大型重機で行う場合もあれば、笊とスコップという、ごく簡易な手作業でも行われる。

オンギー川上流域はモンゴルにおいて最初で最大のニンジャ集団が形成された地域のひとつに当たり、国内最大級の鉱山開発現場である。例えば、1992 年、エレルグループはウヤンガ・ソムのウルトという地域で鉱山開発を始めた。2009 年時点で従業員約 3,000 人を有する鉱山開発系大企業である。当企業は採掘・洗浄済みの土を中小企業に売却するための利用権を販売し、収益を上げていた。2007 年、エレルグループはほとんどの小会社と契約解除し、「AUM 有限会社」（モンゴルおよびチェコの合併企業）に全許可書を販売した。2008 年のデータに基づけば、AUM 社に所有権のある鉱山については 52 社が鉱山開発を進めていた。これらの企業は鉱山開発後の原状回復（自然の回復）契約を交わしたものの、実際は開発が進められており、原状回復した大地はほとんど観察されていない。

ニュース番組や統計資料などから鉱山開発に関する情報（採掘時期や規模、企業など）はある程度分かってきたが、私がオンギー川と出会った頃は、まだニンジャの発生要因や彼らの実態についてほとんど明らかにされていなかった。にもかかわらず、ニンジャには「環境破壊者」、「犯罪者」、「危険人物」というレッテルが貼られ、メディア等を通じて社会発信されていた。

私がニンジャの調査をしたことがあることは既に述べた通りである。地図 4-1 の写真 C-5 では、オンギー川上流域に位置するウヤンガ・ソムで筆者を挟んで 2 人の男性が写っている。彼らは男性 7 人でニンジャ集団を結成し、砂金採掘を行っていた。7 人のうち 3 人は親戚同士、残り 4 人は現地で知り合ったり、以前からの知り合いだった。

ひとりはモンゴルの中央県出身でタクシー運転手をしていたが、生活が厳しくなったため、砂金の情報を聞いてやって来た。もうひとりはドルノド県の鉱山工場で働いていたが、民主化に伴い企業は倒産、失業したため、やむを得ずニンジャになった。元公務員だったと自慢げに話していた。

また、次のような理由から当時の 7 人グループが結成された。地下の採掘現場の地下で作業中、落石で脚を怪我してしまった結果、作業効率だけでなく人間関係も悪化してしまい、別の集団への移動を決意した。また、地域の人間でなければ、砂金情報は入手し難いため、情報収集やネットワーク構築を主な理由に仲間に加わった。
彼らは「大地に手を触れるのは悪行だ」と述べていた。また、ニンジャのひとりはこう話した。

「罪深さは十分承知している。どうやって生きればよいのか、逆にその方法を教えてほしい。」

ニンジャになった理由は、生きてゆくためでもあれば、夏季限定の副収入を得るためでもあり、人によって様々だった。ある遊牧民は夏に砂金採掘し、冬は遊牧生活を送っていた。授業料納入のため、友人を頼りにニンジャになった大学生もいた。

さらにニンジャたちの情報から、砂金採掘現場は何もウヤンガ・ソムだけではないことが分かった。2008 年、バヤサさんのご両親とでターチン川沿いで調査した際には、砂金採掘後の穴跡に車が落ち込んでしまい、翌朝になってようやく車が救出されたことがあった。車両だけでなく、人間や家畜の落下事故が相次いでいると聞いたことがある。

[13]БУРЗАЙЖ БАЙНА УУНинжа нар, тэдний зохион байгуулалт хийгээд амь зуулга Г.М?нх-Эрдэнэ Meetingpoint Co,Ltd Улаанбаатар хот 2011 он（原文モンゴル語、日本語訳： 思沁夫編『"ブルザイジ　バノー？"　―"ニンジャ"、彼らの組織化及び生活様式―』Meetingpoint 社出版　ウランバートル）ニンジャの誕生や近年のニンジャの動向についてはビャンバートルおよびムンフエルデンの研究に譲る。

鉱山開発による採掘地点の拡大は、オンギー川流域における水源が枯渇し、河川が断流し、さらに土壌汚染や牧草地の減少などあらゆる地域と環境の問題を生み出していた。このような状況を前に、モンゴルの人々が皆ニンジャになってしまうのではないかという危機感が私の頭を過ぎり始めていた。

また、鉱山開発とニンジャ現象の全体像を理解する必要性も感じるようになった。2009 年、科学研究費・基盤研究（C）の申請が採択され、オンギー川流域におけるニンジャの実証的研究を 3 年間実施することになった。本プロジェクトでは法整備や政府への提言を通じて現地への研究成果の還元に努めた。大阪ではモンゴルから研究者の方々をお招きし、日蒙国際シンポジウム「遊牧の世界とニンジャたち」（2011 年 3 月 22 日～24 日）を開催、モンゴルの鉱山開発の現状を報告した。

ここでニンジャたちの言葉を思い出していただきたい。
「大地に手を触れるのは悪行だ」
これは、大地を掘り起こすことがモンゴルの伝統的な価値観、信仰、慣習に真正面から対立しているという彼らの認識を示す言葉である。では、モンゴルの伝統的な価値観、信仰、慣習とは何だろうか。

モンゴルでは、主にシャーマニズムとチベット仏教が信仰されている。シャーマニズムは古来より信仰されており、チベット仏教は清朝時代に政治的に導入された。社会主義時代、シャーマニズムは弾圧の対象となったが、むしろ地域の慣習として信仰され、完全に消滅することはなかった。

シャーマニズムにおいては、大地や水域は主が支配すると考えられている。この思想が地域に広がり、人々の自然信仰心が形成されたと言われている。これについては、オトホネー・プルブが分かりやすく紹介しているので、以下に説明を加えたい[14]。

モンゴルでチベット仏教が伝播した当初は川の神はロス、大地の神はサワテグと呼ばれていたが、大地と水は切り離して考えにくいため、次第にロス・サワテグとも呼ばれるようになった。「ロス・サワテグが起こる」あるいは「ロス・サワテグが何かする」といったような表現を用いることで自然信仰が具体化されてきた。

自然信仰はシャーマンを通じて浸透していったが、その自然を司るのがロス・サワテグである。人間と自然の調和を維持しなければならない、人間は自然を介してロス・サワテグに謙虚さや畏敬の念を示さなければならないというのがモンゴルにおける自然信仰である。

ロス・サワテグは人間界および自然界の中間に宿り、モンゴルの空（テンゲル）の信仰につながる。人間と自然との関係性が、人間によって破壊された場合は、洪水、豪雨、大雪などの天災による罰を受けなければならない。

例えば、水はロスのふるさとでもあるため、水を大切にしなければならない。さもなければロスの怒りが降りかかる。モンゴル人はスー（ミルク）、チョス（血）で物を清める慣習があるが、水中にミルクや血を混入させないのはロスの存在によるところが大きい。その他にも水源で火を熾さない、寝ない、遊ばない、大声で話さないなど、ロスに関する多くの掟があり、モンゴルの自然信仰の深さが理解できる。当然ながら、掘土や川の汚染行為も堅く禁じられてきた。川での洗濯や食器洗い、歯磨きもそうである。また、個人による川や牧草地の占有、あるいは排他的利用においても非難の対象となっていた。

2007 年夏の調査で出会ったトムルプルブさん（70 代、男性）は次のように話した。

> 「私の想像だが、今の人間が土や川を掘り起こし、ロス・サワテグの逆鱗に触れたため、オンギー川は断流したんだと思う。ロス・サワテグは人間の行為に対して厳しくなったようだ。」

[14] オトホネー・プルブ『モンゴルシャーマニズムの信仰』民族出版社、2006 年。

鉱山開発は遊牧生活、伝統文化の崩壊を意味する。それでもなぜ人々は環境を破壊するのだろうか。
モンゴルでは民主化以降、外部支配や指令、政治イデオロギーの弾圧と拘束から解放され、人々はようやく「真の」自由を手に入れたと確信したのかもしれない。しかし、ソ連崩壊はモンゴルの運命をあらゆる意味で大きく変えた。モンゴルの人々は社会主義時代から受け継いだ「負の遺産」、グローバル化と市場経済化に伴う困難や重大な選択が波のように押し寄せてくるとは予想だにしなかっただろう。

モンゴルは過去を振り返る間もなく、西洋をはじめとする先進工業国に絶大な期待と信頼を寄せ、民主主義制度を導入し、経済成長を目標に邁進してきた。だが、民主化は夢と希望に満ちあふれたものではなかった。

国営企業や工場は相次いで倒産し、従業員は一夜にして失業した。国有財産は「国債券」として人々の手に渡ったが、この券を一体どうすればよいのか、人々は理解できなかった。機密情報を知る者は「国債券」を購入、収集し、鉱山開発に利用した。国家、地域の公共性や人々の自然信仰は、個人主義、市場経済主義と入れ替わるように、モンゴルから完全に姿を消してしまったのだろうか。

4.3 オンギー川に育まれた地域

オンギー川と出会い、地域で調査や情報収集を進めてゆく中で、バヤサさんご一家、彼女の祖父のゾンドンダンバ氏も含め、地域との交流が蓄積され、今度は地元から調査協力の声が上がり始めていた。

私は地域のために、何かできないか考えた。そこでまず、2008 年にオンギー川保護会の一員になった。当保護会の仲間とともに地元の 11 年生学校で環境教育や作文・絵画コンクールを行い、現地調査も並行して進めてきた（地図 4-1-C を参照）。

しかし、私には気になることがあった。それは、鉱山開発とオンギー川の環境破壊に対する人々の様々な意見や言い分とその隔たりだった。

「ニンジャになったのは生活のため、生きるためだ。」
「鉱山開発系企業は地元に貢献している。」
「森があれば水がある、水があれば草がある、草があれば生活がある。」
「オンギー川、私たちの命の川、川を守ることは私たちの誇りである。」
「土地利用権利は法律によって保障されている。」
「現代人の過ちがロスの怒りに発展した。」
「近年の地球温暖化が要因だ。」

様々な意見が錯綜していたが、私の頭の中では決意が固まってきた。
私は JICA 大阪（当時）と協議した結果、調査助成金の給付が決定した。2009 年冬、ちょうど正月が過ぎた厳寒期、ウブルハンガイ県のズーン・バヤン・ウラン・ソムから出発し、ウランノールまで（地図 4-1 を参照）、約 4 週間かけてオンギー川とその周辺域（全 96 世帯）における地域の調査を行った。それはオンギー川に育まれた地域を知るためだった。

この調査から分かってきたことは、オンギー川流域では寺院などの宗教施設や信仰の場であるオボーが多く点在し（地図 1-3 を参照、オボーについては後述する）、宗教聖人や思想家の誕生と関わりがあることである[15]。
ウブルハンガイ県だけでなく、モンゴル全体にも言えることだが、宗教の影響は非常に大きいと思う。モンゴル人のほとんどが読み書きできなかった時代、寺院が学校の役割を果たしていた。また、寺院から数学、地理、天文学、医学、哲学などに優れた人材が輩出されたことは、モンゴル史、あるいは地域史を語る上でも重要である。

[15] 主要な寺院およびオボーを地図 4-1 上にも示したため、こちらも参照いただきたい。主に地域の寺院に関しては、S.ツェデンダンバーほか『モンゴルの寺院に関する歴史概説』（Atmon 出版社、2009 年）も参照した。

ネルグイ氏のように社会主義時代に教育を受け、合理的思考判断をされる方でも、オンギー川流域の地域史を語るとき、必ずと言ってよいほど宗教的人物が登場する。

ダライラマ 3 世がウブルハンガイ県の風光明媚な大地を褒め称えた後に白い柳林ができたと言われる。モンゴル全国で人々の篤く信仰されていた、ウンデルゲゲン（1635 年～1723 年）という宗教思想家はウブルハンガイ県の生まれである。チベット、清朝において政治的権力を保持し、モンゴル人のアイデンティティ形成に大きく貢献した人物だとも言われ、ウンデルゲゲンの記念館は 2 年前、アルバイヘールに建設されている。また、ツェウェルワンツェグドルジ（1836 年～1894 年）は五畜の病に対する 100 以上の治療法を伝授した宗教指導者である。ツェウェルワンツェグドルジはゲルで修行を積んだと言われ、遊牧民の生活向上と幸福のため、宗教・思想を構築した人物としても名高い。ツェウェルワンツェグドルジの思想は現在のアルバイヘールにおけるガンダン寺の一室に収蔵されている。その他、宗教関係者らの遺産は、地域の記念館や施設で大切に保管されており、伝説や偉業が後生に語り継がれている[16]。

ここでオンギー川流域の主要都市のひとつ、アルバイヘールの歴史と 2 つの寺院（ガンダン寺およびオンギー寺院）、最後にオボーについて現地調査から得られた情報をもとに述べたい。

オンギー川から南へ 30km、ここにアルバイヘールという町がある（地図 4-1 右上の写真）。かつてはウィーゼーグンギーン・フレーと呼ばれており、遊牧民の生活の場というよりは、むしろ人々の信仰の地だった。1707 年、ウィーゼーグンギーン（清から授かった王公名）の寺院として誕生した。フレーとは「囲い」の意味で、モンゴルの町は寺院を中心にして柵で囲まれていたことに由来する。この寺院を囲むようにしてダツン（修行場）を設置し、歴代官人によって増築され、ラマが定住し、19 世紀末には千人規模の大寺院にまで成長した。

ウィーゼーグンギーン・フレーは「木版の町」とも呼ばれていた。19 世紀のウィーゼーグンギーン・フレーでは、モンゴルでも最高水準と言われるほど、木版（バル）技術が発達しており、書籍や仏典にあらゆる言語で翻訳されていたためである。哲学、心理学、自然学、地理学、医学、家畜医学、芸術など多岐に渡る学問分野が扱われ、モンゴル語、チベット語、サンスクリット語、満洲語などで大・中・小の 3 種類の大きさに分類、木版印刷され、書物は内モンゴルにも普及し、学問開花に大きく貢献したと言われている。木版印刷は彫刻芸術の発展にも寄与し、大市には見事な民族模様が施された家具や戸の数々が連ねられていたという。

アルバイヘールの歴史を俯瞰し、お分かりいただけるように、寺院は単なる宗教施設ではない。政治、医学、哲学、教育、精神、知識など、あらゆる学問の集結地でもあり、寺院を中心に町が栄えていた。19 世紀末、モンゴルでは 700 以上の寺院が存在しており、モンゴル全人口の約 3 分の 1 がラマだった[17]。なお、18 世紀半ばから 20 世紀初頭まで、アルバイヘールの常住人口は推定 1000～1200 人であり、そのほとんどがラマあるいは寺院に関係する者だった。

しかし、モンゴルは「大粛清」時代（1936 年～1939 年）を迎え、ラマは排斥の身となった[18]。高位に就いたラマの多くは処刑されるか、投獄の運命にあった。国内の約 9 割の寺院は無残にも破壊、焼き払われ、当時、全国 1 万 7 千人のラマが無残にも殺害されたと言われている。

バヤサさんの祖父、ゾンドンダンバ氏の人生は地域における宗教史そのものでもある。彼は 1919 年、オンギー川の畔に生まれ、7 歳のときに叔父を頼り、ガンダン寺の子どもラマとなったが、17 歳のときスターリンの宗教弾圧で寺院を追放された。

多くの若僧侶が軍に徴兵されるか、自ら入隊し、祖国のために戦場へと向かった。オンギー川の畔で再び遊牧生活を始めたゾンドンダンバ氏も、ハルハ川の戦い（ノモンハン事件）で徴兵され、ハラホリーン・デンで軍医として働いた。以下、彼の言葉である。

---

[16] 私自身も宗教を題材に地域で環境教育を行ったことがある。

[17] なお、当時の内モンゴルでは約 1200 の寺院が存在していた。

[18] モンゴル政府が民主化以降に実施した調査報告に基づくと、1937 年 9 月～1939 年 4 月までの間、モンゴルの共産党は反国家罪、スパイなどの容疑で 2 万 5824 人に有罪判決を言い渡した（うち 2 万 474 人が死刑、5103 人が無期懲役）。受刑者 2 万 474 人のうち、1 万 4201 人がラマだった。

「成人男性の入隊は義務だったため、とにかく行くしかなかった。我が祖国を守るのは皆の義務だった。私もそう考えて軍隊に入った。しかし、いつの日か平和が訪れるようにと神に祈りつつ、仏に心の中で祈りつつ、ずっと待っていた。国や人々の平和はもちろん、家族、子供たちのことを考えていた。どんな苦しいときでも、いつか平和が訪れると信じてきた。」

モンゴルの民主化以降、ゾンドンダンバ氏のほか、彼の旧友のバトオチル氏やボンチグナムジル氏、寺院の木版保管者の協力もあって、ガンダン寺は復活を遂げた。オンギー川流域で最も早期に復活した寺院だった。

以下、ゾンドンダンバ氏から伺った復活の経緯である。

1990 年、地方政府を通じ、ガンダン寺復活に向けた集会実施が承認された。同年 4 月 3 日、初めての集会で集まったラマは 39 人だった。ゾンドンダンバ氏は、9 という数字は下に向いているため、縁起が悪いと判断し、自分の孫 2 人を呼び入れ、合計 41 人とした。数字の 4 は上向きで、宇宙に開かれた形をしている。1 は始まりの意味だとし、この集会をもってガンダン寺が復活した。

1991 年以降、遊牧民の寄付とラマたちの努力が実り、寺院が増築されてきた。現在、ガンダン寺は伝統や文化の信仰地、地域の人々にとって大切な場となっている。ガンダン寺のラマはモンゴル全国をはじめ、インドにも派遣され、修行を続けている。

そして、もうひとつ述べておきたいのはオンギー寺院についてである。オンギー寺院に関しては、既存文献に乏しい中で地域の人々の協力もあり、貴重な知見や情報が得られたため紹介させて頂きたい。

オンギー寺院はオンギー川の名称を取り入れた、地域で唯一の寺院であり、中部ゴビ県のサイハンオボー・ソム、ツォグトゥールに位置する（地図 4-1 を参照）。この寺院はモンゴル現地では「オンギーンヒード」、「オンギーングルバンヒード」または「バリラマのヒード」と呼ばれている。オンギー寺院はオンギー川南北を挟む 3 つの寺院で構成された複合寺院である。1760 年代（推定）、仏の転生とされるラマイシドニルルンデブ師の下、最初の寺院が建設された。続けてオンギー川南部に位置する 2 つの寺院は、1800 年頃にフタグトラマ（初期寺院主事）の弟子、バリラマのもとで建設された。オンギー寺院の廃墟から 19 世紀末に描かれたとされる南部の寺院の絵画が発見されたが（作者不明）、絵画からかなり大規模な寺院であることが推察される。寺院間交流のため、オンギー川を挟んで橋が建設され、中国人商人による交易もなされていた。

だが、1937 年には「大粛清」によってオンギー寺院における約千人以上のラマのうち 100 人余りが殺害された。一部のラマは地下に潜み続け、持ち出した仏像や経典を手に祈り続けていた。

民主化以降、オンギー寺院のかつてのラマ（5 名）が地域住民と共に寺院復活に尽力した結果、2000 年に「1937 年に殺害された僧侶たちの記念塔」が、2004 年にはチョドブ堂（経典を読むための建造物）が建設された。2009 年現在、オンギー寺院には 17 人のラマがおり、チョドブ堂にはオンギー寺院の遺産が展示されている。破壊を免れた寺院は今でも大切に守られている。

地域をより理解するためには、オンギー川流域における寺院だけでなく、オボーも重要である（地図 4-1-A を参照）。オボーは丘や山の頂上に小石を積み上げた、三角錐の小山のように見えるが、オボーの由来については様々な解釈がある。オボーでは人々は供物（主に家畜の血、火、肉、乳製品）を捧げるが、神に向かうように、石を高く積み、山を形成した。あるいは、霊魂葬祭のための堆積物として、石や木の枝などを高く積み上げているとも言われている[19]。

地図 4-1 にあるように、私はハンガイ・オボーをはじめ、バヤンゴル・ソムのオボー、サイハン・オボー、マンダル・オボー、ツェンデーさん（ゾンドンダンバ氏の末息子）のオボーなどを訪れてきた。

[19] なお、モンゴルにチベット仏教が導入され、シャーマニズムから仏教へと宗教思想が変遷する節目を迎えても、シャーマニズムの信仰は継承され、オボーの祭りと進行の様式のみが変容した。社会主義時代ではチベット仏教と同様にオボーの祭りも禁じられていたが、信者たちが身を潜めつつも信仰し続けていた。

とりわけハンガイ・オボーは、モンゴルにおけるシャーマニズム思想を象徴する最も重要な5つのオボーのひとつに数えられている。オボー信仰はその規模、方法において多様であり、モンゴルにおける自然信仰の多様性とその深さを象徴している。

また、ツェンデーさんのオボーはオンギー川付近、ホントという丘に立っている。ホントとは白鳥のことで、かつてたくさんの白鳥が飛来し、子育てしていたことにちなんで名づけられた。
この丘に登ると、オンギー川が一望できる。ゾンドンダンバ氏によると、昔はオンギー川沿いに無数の氏族、家族、ソム、地域のオボーがあったそうである。続けて、彼は次のように述べた。

「私がまだ若かった頃、ほとんどの遊牧民がオンギー川流域で夏のひとときを過ごし、山麓で越冬していた。1 年間の移動回数も 5、6 回、ときには 10 回になり、それは当然だった。春、オンギー川沿いの草々に足を踏み入れてしまえば、貴重な靴が濡れてダメになってしまうため、裸足で歩くようにしていた。

遊牧民は随分変わってしまった。まずは移動しない。また、移動したくても難しくなった。それはなぜか。荷物が多すぎるからだ。昔は牛車 2 台で十分だった。日の出から日没までには移動できた。今の遊牧民は移動で大騒ぎする。移動がなかなかできない。

環境は随分変わってしまった。文化、慣習は激変した。私のゲルの近くにはホントが飛んで来たりした。ホント以外にもたくさんの動物が生息していた。今、ホントはときどき飛来するが、子育てしなくなった。タルバグ（モンゴリアン・モルモット）がいなくなった[20]。草原の色も、意味も変わってしまった。

パンジェット大師（この地域で多大な影響力を持っていた僧侶）もオンギー川流域は自然豊かで家畜は元気、人々も明るい、まさに神から与えられた大地だと言った。なぜ人々はそれを忘れたのか。」

社会主義時代のモンゴルでは共産党支配下において社会主義思想の普及と近代的政治経済制度の導入が進められた。アルバイヘールは地域の政治経済、教育、医療の中心地としての役割を担うようになった。宗教関連施設は封建社会の象徴とみなされて破壊され、信仰地としての姿は消え失せようとしていた。アルバイヘールの都市化は進行し、1980 年代頃までにアルバイヘールの人口は 1 万 5000～2 万人まで増加したが、それでも遊牧生活を送る者が多かった。
民主化以降（とりわけ 21 世紀に入ってから）、アルバイヘールは「膨張」を続けている。住宅、アパート、ホテル建設ラッシュが進み、金融や商業施設が発展し、「消費センター」としての機能が強化されてきた。
人々のライフスタイルも急速に変化している。遊牧民が学校教育や商業目的で住宅を購入、建設するのも稀ではない。人々、自動車、バスの往来の増加、ゲルや住宅用の石炭消費の増加、インフラ整備の未整備など、近年の様々な現象が複雑重層化し、アルバイヘールの環境に大きな変化をもたらしている[21]。

オンギー川との出会いから、2016 年で 9 年目を迎えることになる。オンギー川流域の訪問はすでに 20 回を数える。この 9 年間の現地活動を通じて、私の何よりの喜びであるのは、現地の人々が私を受け入れ、地域では緊密な信頼関係とネットワーが構築され、今でも維持されていることである。

私がオンギー川流域で本格的に調査を始めた頃は、鉱山開発とニンジャの現象を地域の環境問題と自然保護という観点から捉えてきた。だが現地調査を重ねるたびに、バヤサさんご一家、ネルグイ氏ご一家をはじめ、地域の人々との確かな協力関係が構築されたことで、オンギー川の保護活動、環境教育、植林活動に加わり、ニンジャ集団との交流や対話も実現できるようになった。2011 年以降はネルグイ氏とともに遊牧民の組織化、経済的自立化に、また、りそなアジア・オセアニア財団の支援のもと、2014 年からは現地固有種である白い柳の保護と拡大に取り組んできた。

[20] 2015 年、私が現地を訪れた際には、ツェンデーさんより、タルバグ 2、3 匹が観察されたと聞いた。
[21] モンゴル環境省は世界で最も大気汚染が深刻な都市として、ウランバートルを挙げているが、国内ではウランバートルに次いでアルバイヘールの大気汚染が深刻だと報告している（2015 年）。

4.4　モンゴルにおける 3 つの課題

オンギー川との衝撃的な出会いは、モンゴルの環境問題を示す、ほんの一握りの事実に過ぎない。

モンゴルは社会主義時代より近代化を進めてきたが、主要産業が牧畜業であったこともあり、伝統文化を保持したかたちでの近代化だったと言える。だが、社会主義時代後期から民主化以降は、近代化に加えてグローバル化の影響がモンゴル全国に瞬く間に波及し、政治、経済、産業、社会構造は根本的に変わった。一見すると、モンゴルは経済成長を遂げ、豊かになったかのようにも思える。しかし、近年のモンゴルは近代化、グローバル化とともにリスク社会化しており、政治腐敗・汚職、経済不安、貧困と格差、健康環境問題をはじめとする様々な問題が、モンゴルと人々の生存を脅かす事態を招いている[22]。

私はオンギー川の断流やウランノールの枯渇を地域の環境問題としてではなく、モンゴル国全体の課題として視野を拡大し、包括的に考えてみたいと思う。モンゴルで様々な課題が渦巻く中で、環境に関する問題に注目し、以下の 3 つを優先的に考えることを提案したい。それは①災害対策、②共有資源の利用、③企業、地域、人々の健全性の構築である。

①　災害対策

モンゴルを取り巻く環境は地球規模の異常気象と地球温暖化、鉱山開発などによる環境破壊、非持続的な資源の乱開発などによって、ますます脆弱化しており、あらゆる問題を招きやすい、あるいは問題に柔軟かつ冷静に対処する体制が十分に構築されていない状況に陥っている。干害、寒害などをはじめとするゾドの被害に対する救済措置（セーフティネット）も十分とは言い難く、家畜を失った遊牧民がニンジャに変貌し、環境悪化につながってしまうケースが多い。モンゴル地域における調査と交流に基づく限り、ゾド対策は極めて重要だと言える[23]。

21 世紀以降、ウブルハンガイ県だけでも、冬季における乾燥、豪雨、防風を除くゾドが頻発している[24]。特に 1999 年～2000 年、2001 年～2002 年にかけての厳寒期にはゾドが連続的に発生した。モンゴル全国で約 5 割の家畜が失われ、日本を含む世界各国から緊急支援がなされた。

2009 年～2010 年のゾドはウブルハンガイ県のハンガイ地域で約 8 割の家畜が死んでしまうほどの大災害だった[25]。オンギー川流域の調査で知り合ったツェンデーさんはゾド被害について報告してくれたが、牛・ヤックは 56 頭から 7 頭、馬は 120 頭から 32 頭、ヒツジ・ヤギは 900 頭から 120 頭まで一気に減少したと言う。タラグト・ソムの調査では、全遊牧民世帯の約 2 割に相当する世帯が完全に家畜を失ったという。さらに、私が独自に調査を行った結果、33 人の遊牧民がニンジャになったことも分かった。ゾド発生から 2、3 年後に遊牧民に戻った者もいるが、ニンジャになった遊牧民の行方は分かっていない。

ゾド発生に伴い、国内では救援物資が用意されたが、積雪によって交通網が完全に遮断されてしまっていた。軍の大型車両やタンク・カーで道路が何とか切り開かれたものの、救援物資、外国からの寄付金などは微々たるものだった。ツェンデーさんに配給された物資は牧草 2 束（合計推定 160 kg）だった。これは羊 2 日分の飼料に相当し、ゾド被害からの復興に役立ったとは言い難いものだった。

モンゴル政府は被災遊牧民支援対策を打ち出していたものの、基本的に復興は被災者の自助努力に委ねられていた。町で就職口を探すにしても、教育、さらに「コネ」の問題があった。結局、アルバイトや単純労働、建築現場における重労働、あるいはニンジャになるという選択肢しか残されていなかったと思われる。ほとんどの遊牧民が大量の家畜を失ったため、家畜の価格は平時の 3～5 倍まで値上がりした。被災遊牧民たちはエフ・マル（出産能力を有する雌の親家畜）を買う資金すら持ち合わせていなかった。

モンゴルではすでに遊牧生活は自給自足型から市場経済依存型へと移行している。家族の生活費、自動車やバイクの購入費・燃料費・維持管理費、子どもたちの教育費など貨幣経済への依存度の高く、遊牧民の負担は大きいと言え

---

[22] リスクに関して詳しくは「第 7 章　リスク化するモンゴル」を参照いただきたい。

[23] ゾドの概念については「第 7 章　リスク化するモンゴル」で整理している。

[24]例えば、1999 年秋～2000 年春、2000 年 10 月～2001 年 4 月、2001 年 11 月～2002 年 2 月、2003 年 11 月～2004 年 3 月、2009 年 10 月～2010 年 2 月に深刻なゾドが発生している。

[25]N. バイラー&P.　ダンジン『モンゴルが直面する災害、危険』モンヒーン・ウセグ出版社より引用。

る。

遊牧民の孤立状態や困窮状態は避けなければならない。ゾドの被害を個人や家族の過去の記憶に留めてしまうのではなく、国や地域の教訓として認識し、ゾド発生に柔軟かつ迅速に対応し、被害を最小限に抑制する必要がある。

このような考えの下、ツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合ではネルグイ氏および組合員とともにサイレージ技術を導入し、家畜の越冬用飼料の生産と備蓄を行い、災害に強い遊牧民世帯を 20～30 世帯に増す計画を立てているところである。

② 共有資源の利用

モンゴルでは鉱物資源、言い換えれば共有資源（CPR, Common-pool resource）の私有化が進められてきたが、この資源利用を今後も続けてゆくのであれば、持続可能な方法で利用しなければならない。

共有資源の利用は世界の課題でもある。周知の通り、市場機能と政府管理への依存では問題解決にならない。「共有地の悲劇」[26]が証明するように、共有資源へのオープンアクセスは地域の崩壊と文化の衰退を招く危険性がある。共有資源に対する調整、例えば法整備や管理制度の運用は不可欠であり調整機能なしでは、さらに大きなリスクを伴う市場開放となってしまう。そこで一つの解決策としてエリノア・オストロムの理論を提案したい。

2009 年、女性初のノーベル経済学賞を受賞したオストロムは、共有資源に利害関係を持つ当事者による自主管理の可能性を示した。つまり、彼女は市場および政府による共有資源管理ではなく、コミュニティの役割が最大の効果をもたらすと説明した。

しかし、モンゴルの場合で注意しなければならないのは、社会主義崩壊に伴い、コミュニティ機能は弱まり、人々の地理的流動性も高いため、コミュニティの形成と維持は一筋縄では行かないことである。モンゴルでは政府、企業、都市在住民、遊牧民、富裕層と貧困層などの間における対立や格差の拡大、深刻化が様々な分野の研究者から指摘されているが、もはや法的規制や国際協力では解決され難い課題となっている。

オンギー川流域の調査より、共有資源の乱獲が進行していることは明白だが、ウブルハンガイ県に限らず、モンゴル全国に共通する問題だと考えられる。だからこそ、コミュニティ機能を強化し、企業、地域、人々が一体となって共有資源の持続的利用を考えてゆく必要がある。

③ 企業、地域、人々の健全性の構築

モンゴルの鉱物資源には世界からの注目が集まっており、国内における産業化の過程で世界規模のモンゴル大企業が誕生しても不思議ではない。だが現在、世界的に影響力を持つ企業を概観すれば、技術資本依存では一流企業とは言えず、地球環境に配慮した企業活動と責任が問われる時代となっている。また、地球温暖化をはじめとするグローバルな環境問題が世界の政治や価値判断を左右する時代でもある。

2015 年末、国連気候変動パリ会議（COP21）で地球温暖化に関する歴史的合意がなされた。予防原則や地球の有限性、世代間倫理、生物多様性の保護など、多くの価値観は全世界共通となっており、国や企業に対する環境意識、配慮がますます求められてゆくだろう。それは世界という概念の受容と他国や他地域の資源に対する発言権の行使が認められないという事態の可能性も意味する。

モンゴルでは、一党独裁政治、共産党支配下における政府という、「巨大」政府による国家扇動の時代は終焉した。しかしそれと入れ替わるように、市場経済化に伴う企業の自由度と重要性は増している。（政治のグリーン化は言うまでもなく、）モンゴルの企業は環境および社会に対する責任を全うし、世界の環境基準を遵守するとともに、モンゴルの環境、地域文化、歴史に配慮した活動展開が問われているのではないだろうか。

[26] コモンズの悲劇とも言う。複数の人間によって利用可能な共有資源が乱獲されれば、資源はやがて枯渇することを説いた経済学の法則である。

2010 年以降、ニンジャは組織化・企業化し、国および地方に納税するようになった。これはひとつの重要な変化と捉えたい。また鉱山開発企業が責任を自覚し、堀土を大地に戻し、原状回復に取り組む事例も報告されている。私の共同研究者は「ニンジャの企業化」運動を行っており、国際援助のもとでニンジャの社会分断からの復帰に尽力している。ウブルハンガイ県だけでなく、ザーマル（中央県）などの他の地域においても活動成果が報告されており、成功の鍵は、企業、地元政府、地元の環境 NGO 団体、組合等の対話のチャンネルの構築と維持であることが多い。

だが、「表面的な改善」では原状回復とは言い難い。とりわけ民主化以降のモンゴルの共有資源利用と所有関係の著しい変容は、人々の価値観の変化を意味している。そのため、社会的、文化的視点から鉱山開発とそれに伴うニンジャ現象を研究してゆかなければならない。

モンゴルだけでなく内モンゴルにおいても、宗教が復活し、「歴史を取り戻す」大転換を遂げたのは事実である。では自然も宗教や文化のようにいずれ復活するのだろうか。いったん自然が破壊されれば、良くなることはあっても、かなりの時間を要するか、「本来の」姿に戻ることは永遠にないだろう。

鉱山開発企業に限らないが、企業の特徴として利益追求があるため（企業は福祉や公益の主体ではない）、持続的な視点を見落としやすい傾向にある。

企業の健全化は地域や人々の健全化でもある。政界、経済界の癒着を防ぎ、地域を民主的に長期的展望で守ってゆくことができる組織、つまり地域の再建が必要とされる。ネルグイ氏のツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合は、遊牧民の組織化による共助や資源の共有利用の役割を果たしているため、今後も大いに期待されるだろう。

また、モンゴルでは企業のほか組織や団体において、志高き理念以上に、モンゴルの課題の克服に貢献できる優秀な人材が必要とされている。事実、優秀なモンゴル人たちは外国に移住する（モンゴルに帰国し、活躍する例もないわけではないが）事例が多い。外国で学問を修め、知識や技術を習得したとしても、母国で雇用環境が整っていない。政治腐敗や汚職は事態をさらに悪化させ、経済や教育の格差を拡大しているように思う。また、1990 年代初頭のモンゴルの政治的、社会的変動期において、精神性の再建が大幅に遅れたことが、上述したような様々な問題に拍車をかけている。

かつてモンゴルの人々は知識を求め、主に西（ソ連、ヨーロッパ諸国）へと移動・移住したが、現在は南（インド、シンガポール、マレーシア、タイ、中国）、東（韓国、日本、アメリカ、カナダなど）を目指すようになった。すなわち、モンゴルの教育現場はグローバル化が急速に進んでおり、学習環境も多言語化している。外国語を学び、習得し、次のステップを踏むことは若者たちの重要な選択のひとつである。モンゴル人留学生は国民総人口から判断されるに、世界でも最多数に位置づけられている。世界の国々で教育を受け、知識や技術、能力を習得した若者たちが、母国モンゴルに戻り、生きてゆく上で、彼らの存在と活躍が非常に重要となるだろう。だが、モンゴルの若者たちが能力や可能性を自由に伸ばすことができるのは大変喜ばしいことだが、彼らが地域の自然からますます遠ざかっているような気がしてならない。

4.5　おわりにかえて

オンギー川流域では美しい神話が語り継がれており、神話はいま、真実になろうとしている。オンギー川は断流し、いくつかの支流は消えてしまった。だが 2015 年現在、オンギー川に回復の兆しがみられており、ウランノールが復活しつつある。

昔々、ハンガイ王には可愛い二人の娘がいた。
長女の名を「オルホン」、次女の名を「オンギー」と名付けた。
父の愛情を受け、二人は大変美しい娘に成長した。
彼女たちの美貌はモンゴル全土に知れ渡り、
求婚者は羊の群れより多かった。
ハンガイ王は自らの領土と民を守るため、
長女オルホンを北の森林を支配する王子と婚約させ、

次女オンギーを南（大地）の主に嫁がせることとなった。
オンギーは常に自分を愛してくれる父と姉のもとから離れたくなかった。
しかし、王の言葉は飛んだ矢のごとく
前に進む以外に選択はなかった。
オンギーは、父や姉を想い、涙を流しつつ、南へ、南へと向かっていった。
そしてオンギーの涙はやがてウランノール（赤い湖）となった。

清く、美しきオンギー川へ、地域と文化、人々を潤すオンギー川本来の姿へ蘇（よみがえ）ってほしいと願う。だが、モンゴルの人々、とりわけ若者たちがモンゴルの自然から姿を消してしまえば、このオンギー川の神話は神話で終わってしまうだろう。環境保護だけでなく、人々と自然の関係性から、どのようなコミュニティ、人間関係が構築できるのか、考えなければならない。

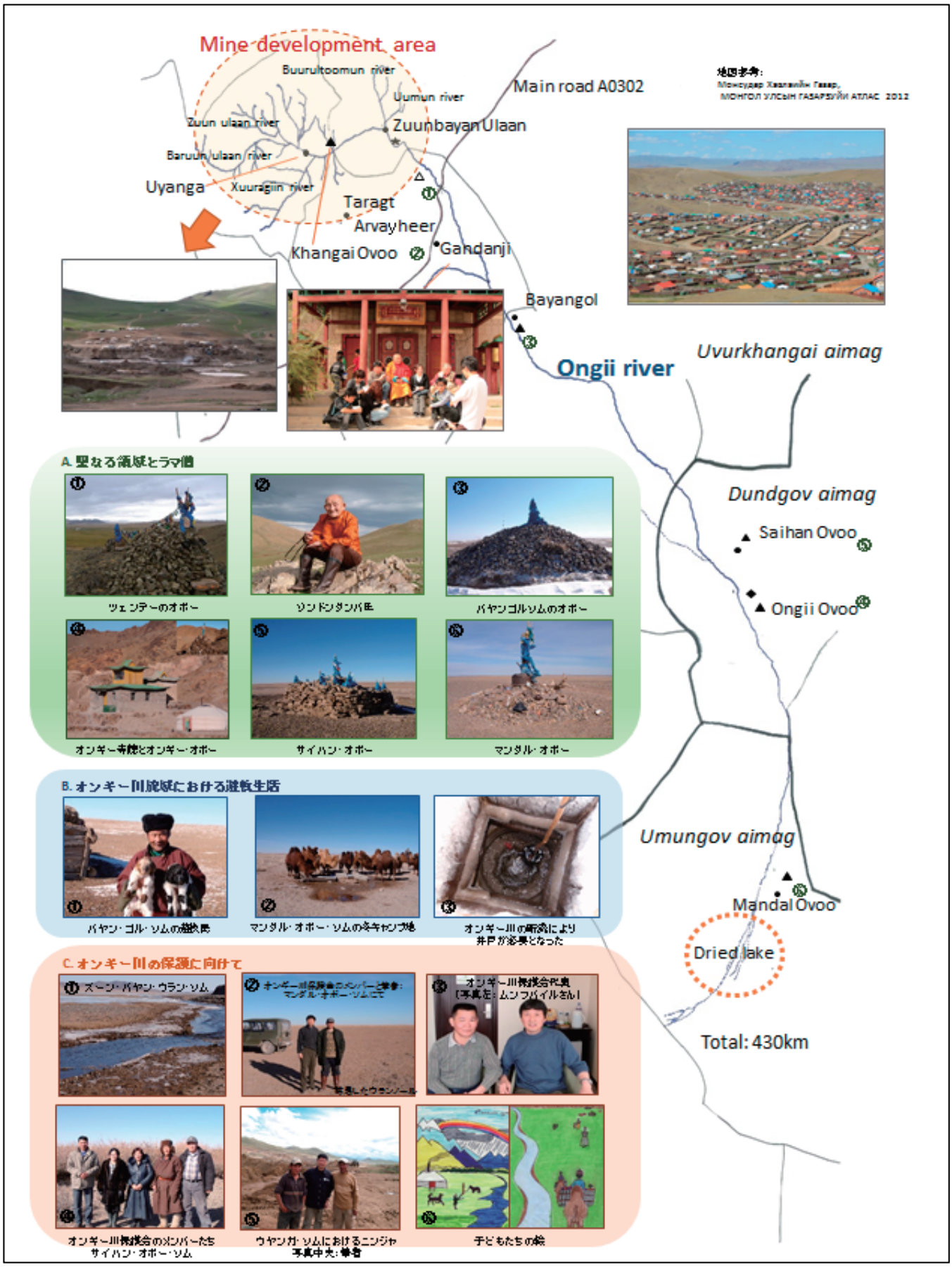
私たちは、約 1 世紀の間、西洋から学び、近代化を経験してきた。確かに私たちは自由になり、生活も豊かになった。しかし結局のところ、近代化とはひとつのプロセスであり、目標は設定されているが、私たちが望む方向に進んでいるわけではない。世界と同じく、モンゴルにおいても地球の有限性という大きな課題に直面し、生存基盤を失うような危機が迫っている。

モンゴルの文化はモンゴルの大地が育んだ。私たちはこの歴史に対する重い責任を抱えつつ、未来世代に引き渡すためのさらに重い責任を背負っているはずである。
モンゴルとはどのような存在なのか。
私たちはどのようなモンゴルを構築していきたいのか。
私という個人だけではない。より広く目を見開くときが来ている。他者と自然、お互いに思い合える社会を構築しなければ、私たちはいずれ息苦しくなるだろう。

オンギー川流域における環境保護や調査研究は、取るに足らない、ちっぽけな活動に過ぎないのかもしれない。しかし、オンギー川との出会いが、こうして大阪大学の研究・教育活動に実際に活かされており、また地域の人々との信頼関係の構築によって、小規模ながらも多くのことが実現されてきた、可能性の芽が観察されるのも事実である。

モンゴルをつなぐもの、それは結局、何だったのか。私たちは共通の祖先を持つが、政治、文化、社会の変化がモンゴルを多様化させてきた。民族間だけでなく、人間と自然をつなぐものは何か。地域の遊牧民、遊牧民と町の人々をつなぐものは何か。大人と子どもをつなぐものは何か。

オンギー川は私とモンゴル、そして地域との架け橋になってくれた。もしこの大地が私たち共通の「故郷」であると信じるのであれば、私たちは歴史の「負の遺産」に目を向けるだけでなく、未来志向で、一歩一歩、行動してゆかなければならない。



地図 4-1　オンギー川流域図

第 5 章 鉱山開発と関係者の意識構造

阪本悠佑

はじめに

「モンゴルで『環境』がテーマのフィールドスタディが開催される」。元から環境問題に関心があったこともあり、私はこのフィールドスタディに参加することに迷いはなかった。渡航前、モンゴルでは遊牧民が草原で馬と共に伝統的な生活を守っている、というイメージを持っており、その草原が破壊されていることが環境問題だと考えていた。しかし、フィールドスタディを通じ、それはあくまで問題の一面に過ぎず、様々な要素が想像以上に複雑に絡み合っていることを学んだ。それと同時に日本の環境問題とモンゴルの環境問題の大きな違いを知ることもできた。本報告を通じてその一端を紹介できればと考えている。

第 5.1 節ではモンゴルにおける鉱山開発とそれに伴う問題を背景として紹介する。次に第 5.2 節・第 5.3 節で本調査の目的・方法を示し、第 5.4 節で遊牧民・鉱山開発会社へのヒアリング調査の結果を示す。そこから得られる考察を第 5.5 節で示し、第 5.6 節にはまとめと追加考察を記す。

5.1 背景～鉱山開発による環境破壊～

5.1.1 モンゴルにおける鉱業

近年、モンゴルは経済成長率 7.8% (2014) と高い経済成長の真っ只中にある。この原動力となっているのが鉱業である。モンゴルの名目 GDP と日本・世界への輸出を見ると図 1～3 のようになっている。

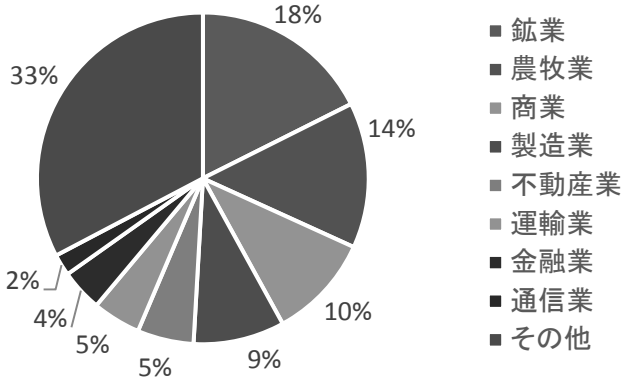


図 5-1 モンゴルの名目 GDP 内訳[1] (2014)

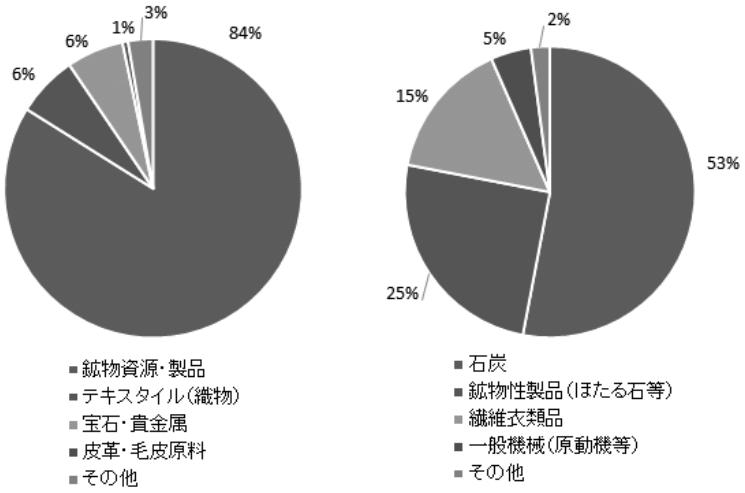


図 5-2 モンゴルの輸出総額に占めるシェア（左：対世界、右：対日本）[2]

[1] 公益金融情報センター (2015) モンゴルの概要に基づき筆者が作成
[2] 日本貿易振興機構 (2014) モンゴル経済概況に基づき筆者が作成

モンゴルのイメージから牧畜業が盛んなイメージがあるが、実際には鉱業が最大の産業となっていることが分かる。この背景には石炭・銅・モリブデン・蛍石・金など、豊かな鉱物資源の存在がある。

モンゴルには約 80 種類の鉱種と約 6000 の鉱床があるとされており[3]、それらの鉱床の中でも GDP の 5%以上に匹敵する生産高を算出する 15 の鉱床は「戦略的鉱床（deposits of strategic importance, 戦略的重要鉱床とも訳される）」として指定されている（図 5-3）。例えば南ゴビに位置するタワンドルゴイ鉱床（Tavan Tolgoi）は約 64 億 t の埋蔵量があり[4]、未開発石炭鉱床として世界で 2 番目に大きいとされている。これは日本の石炭消費量の約 1.7 億[5]（2011 年）の約 37 倍に相当する。

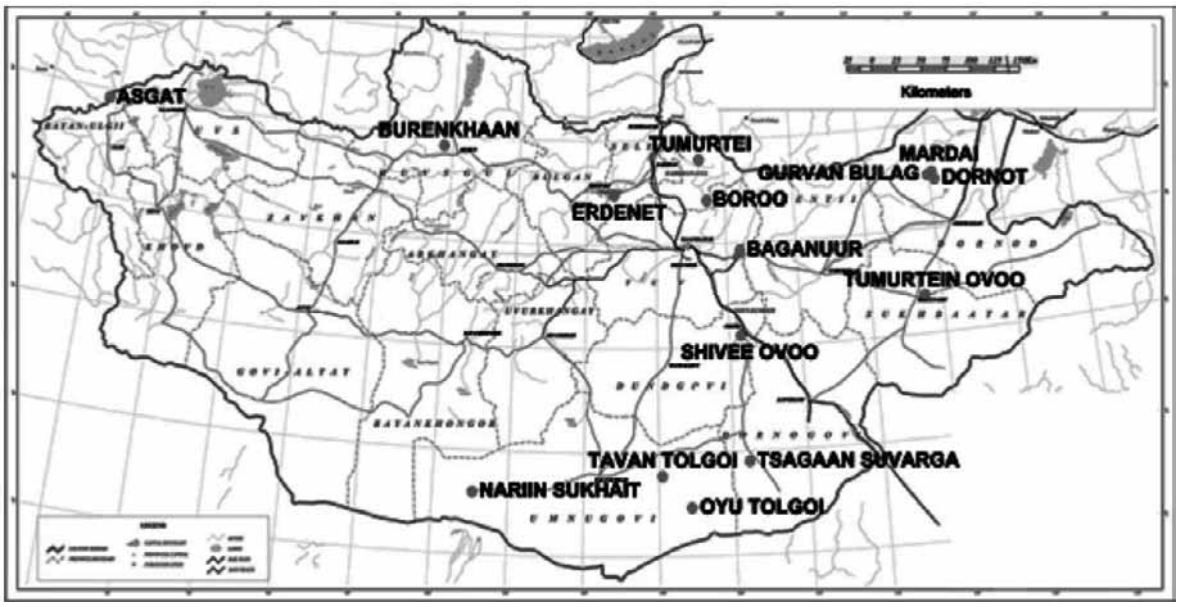


図 5-3 戦略的鉱床位置図

モンゴルの鉱業には世界が注目しており、モンゴルにおける外国投資額の分野構成では「地質探索・石油・鉱山開発」が 3/4 を占める（図 5-4）[6]。

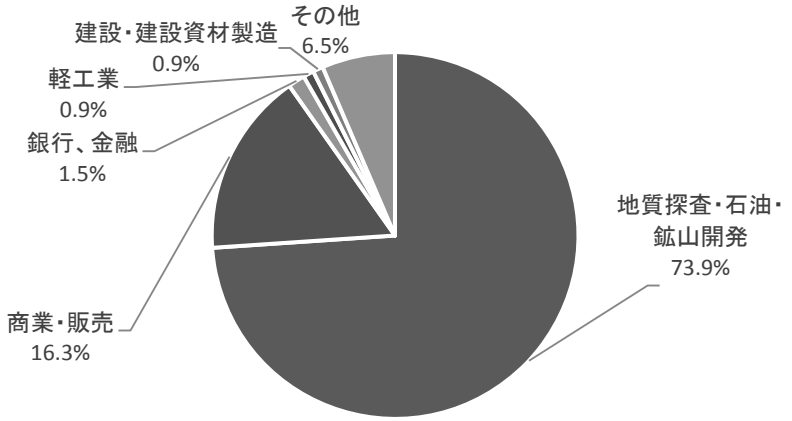


図 5-4 モンゴルにおける外国投資額の分野構成（1990 年～2012 年 6 月累計）

[3] 大江宏（2013） モンゴルにおける鉱物資源開発と企業の環境対応-戦略的鉱床への現地調査を中心に-
[4] 吉本誠（2011）モンゴルにおける鉱物資源開発の現状について
[5] 資源エネルギー庁（2014）石炭をめぐる現状と課題
[6] 日本モンゴル経済委員会事務局（2013）日本モンゴル貿易投資データブックに基づき筆者が作成

鉱山開発が環境問題に関連する要因として、採掘方法による環境負荷が挙げられる。また、モンゴルでは鉱物の採掘方法として露天採掘が採用されることがほとんどである（図 5-5[7]）。日本人が「鉱山開発」と聞くと、山肌にトンネルのような横穴を無数に掘ることで採掘している光景が思い浮かぶかもしれない。これは坑内採掘と呼ばれる採掘方法で、鉱物層をピンポイントで採掘する方法である（図 5-6[8]）。しかし、モンゴルにおいて鉱物は鉱"床"のように分布していることから、ほとんどが露天採掘である。露天採掘と坑内採掘については表 5-1 にまとめる。

図 5-5 露天採掘（モンゴル）

図 5-6 坑内採掘（吉岡銅山 笹畝坑道）

表 5-1 坑内採掘と露天採掘の比較

	露天採掘	坑内採掘
説明	地表～鉱物間の岩石を除去して鉱物を採掘する方法	地表面からトンネル（坑道）を鉱物層まで掘り、鉱物のみを地下で採掘する方法
コスト	採掘経費が安い	露天採掘と比較すると高コスト
生産規模	大規模	鉱物の分布に左右される
技術	地表面から削っていくため、高水準の技術は必要ない	高い技術力が必要
リスク	地表植生への環境負荷が大きい	崩落事故など

露天採掘は坑内採掘に比べ、高い生産性と実収率、作業環境と保安上の有利さ、操業の安定性と鉱石品位選別の容易さなどの利点がある[9]。しかし地表植生を破壊してしまうなど環境負荷が大きいとされている[10]。一方で坑内採掘は環境への負荷は少ないものの、崩落事故などの事故リスクがあるため高い技術水準が要求される。

5.1.2 鉱山開発によって引き起こされる問題

このようにモンゴルでは鉱業が主要産業となっており、今後も GDP に占めるこの割合がますます高くなると予測されている[11]。しかし、鉱山開発に伴い様々な問題が発生している。

- 河川・地下水の水質汚染・断流

鉱業では洗鉱などの段階で大量の水が利用され、その影響で河川の断流・湖沼の枯渇が各地で発生している。モンゴルでは鉱山開発により 852 河川本、泉のうち 2277 箇所、湖沼 1181 箇所、湧き水のうち 60 箇所が枯れていると発表された[12]。具体的には遊牧民の生活を支える河川であったターチン川やアゴチン川は消失し、オンギー川は断流した。

---

[7] MINING & MONEY, No3 (March, 2013)
[8] Wikipedia より引用
[9] 石灰石鉱業協会，鉱山保安テキスト（露天採掘技術保安管理士技術試験　学習用統合資料）
[10] 一般社団法人石炭エネルギーセンターHP (http://www.jcoal.or.jp/coaldb/tech/bunya/03/)
[11] 吉本誠（2011）モンゴルにおける鉱物資源開発の現状について
[12] 佐藤寛（2015）モンゴル国トーラ川の汚染の実態-ウランバートル市のソノギノキャンプ（Couwor aupaum)場周辺を中心に-

ここではオンギー川を取り上げて説明する。モンゴルを流れる内陸河川であるオンギー川は「鉱山事業者による水資源の不適切な利用のため」断流した。その総延長は百数十 km にわたり、流入湖であるウラン湖（琵琶湖とほぼおなじ面積）は完全に消滅した[13]。オンギー川の主な支流は 5 つあるが、そのうち 3 つは水量が減少もしくは断流している。しかしオンギー川は 90 年代～2000 年頃にかけて断流していたが、環境 NGO の活動や気候回復などにより、全てが確認されたわけではないが流れは回復傾向にある（GLOCOL, 思）。オンギー川について詳細は第 4 章を、またオンギー川上流における鉱山開発と環境保全についてはモンゴル FS2013 報告書を参考にされたい。

ネルゲイ氏の話によると「モンゴルブルーという言葉があるほどモンゴルは晴天が多く、1 年のうち 300 日は晴天である。これは降雨が少ないことを意味し、川も少ないことからモンゴル人は水をあまり使わない生活をする」とのことである。実際、モンゴルの年間降水量は多い地域でも約 400mm 程度であり、日本の約 1700mm の 1/4 以下であることが分かる。このような気候的背景からモンゴル人の生活と河川は密接に関係しており、鉱山開発による河川の水質汚染・断流は単に水資源不足だけではなく文化的・社会的な意味も大きいことが分かる。

- 選鉱過程の水銀利用による健康リスク

モンゴルにおける鉱山開発を語る上で欠かせない存在として「ニンジャ」が挙げられる。ニンジャとは個人零細の違法採掘者のことを示し、タライを背負っている姿がアメリカの人気アニメ「ニンジャ・タートル」に似ていることから名付けられた。近年はニンジャによる採掘も一定条件を満たすことで合法化されたことから、合法的な個人採掘者のことを Artisanal miner, 違法な個人採掘者をニンジャと呼ぶこともあるようである[14]。

ニンジャが採掘を行う中で健康リスクが懸念されているのが金鉱石の選鉱・製錬段階で用いられる水銀である。金鉱石は他の鉱物との塊（山金）になって採掘されるため、そこから金鉱石のみを取り出さなければならない。そのため山金をミル（粉砕機）にかけて金鉱石を粉末状にする。そこに水銀を加えることで金アマルガムが得られ、最後に金アマルガムを加熱し水銀を気化させることで粗金が残る。この方法はアマルガム法と呼ばれる（図 5-7）。アマルガム法は設備費が安いことから小規模生産では金回収法としていまだに広く利用されているが、人や環境の水銀中毒が深刻な問題となっている。

近年、モンゴルではニンジャを組織化する傾向にある。そのような組織に国際支援がなされ製錬に水銀を使用しなくなった事例もあり、根絶の確認はできていないが水銀利用は著しく減少している。具体例として、思沁夫から以下の情報を得ることができた。

> 2007 年前後、中央県・ブルノール・ソムで 800 人以上のニンジャが岩金をとるため水銀を使い、9 ガー[15]以上の土地が汚染され、家畜、人体被害も報告された。このような事態をなくすため、国際支援とニンジャ及び地域の協力で、ブルノール・ソムのニンジャたちを組織し、XAMO という会社を作り、岩を砕く、砂金選別方法で砂金を取るシステムを導入し、またニンジャ自身がモンゴル全国ニンジャ連合会（2009 年）を作り、「違法採掘」から「合法採掘」へ努力することを社会に公約するなど、一連の動きによって水銀の使用はほとんどなくなったと言われている。(以上の情報は、思沁夫の 2012 年の現地調査による)

[13] 坪内俊憲（2009）地球規模環境問題のカナリア、変化にさらされるモンゴルの脆弱な環境
[14] ビャンバートル氏による講義資料（モンゴル FS2012）
[15] モンゴルにおける面積の単位。1 ガー=0.01km^2 (=100m×100m)

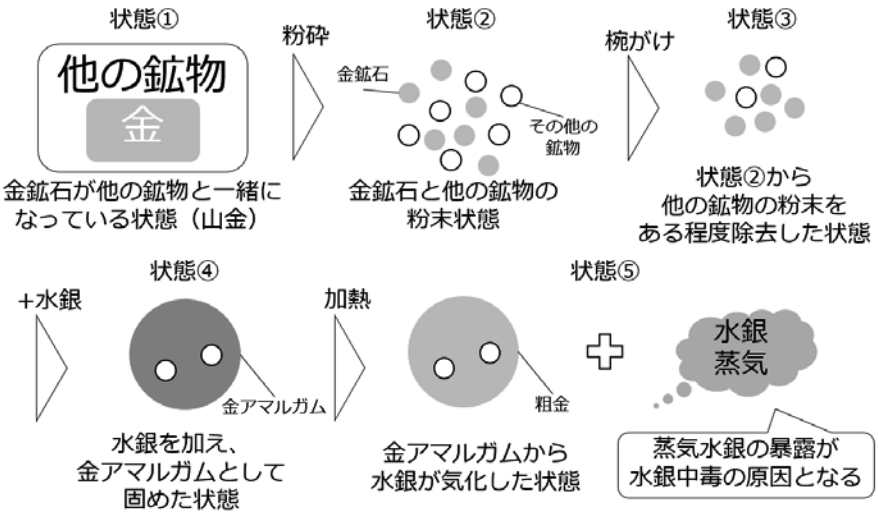


図 5-7 金鉱石の選鉱・製錬手順（アマルガム法）

● 原状復帰がされないことによる影響

モンゴルは鉱物資源法によって鉱山開発会社に対し採掘現場の原状復帰の義務を課している。原状復帰とは採掘時に掘り返した部分への土の埋め戻し・植生の回復を示しており、モンゴルでは環境保護計画（CSR レポート）の提出が義務付けられており、その実行に必要な費用の 50%を保証金として行政機関に支払うことが定められている[16]。

しかし現実には原状復帰が必ず行われているというわけではなく、私達が訪れた開発現場でも原状復帰がなされていないであろうということが伺われた。このような現状復帰の不履行によって起こる問題が 2 点挙げられる。

図 5-8 鉱山開発現場（岸本撮影）

図 5-9 鉱山開発現場（思撮影）

①遊牧エリアの減少による負のスパイラル

鉱山開発は河川付近で行われることが多いが、同時に河川付近の草原は良質な牧草地となることも知られている。その牧草地の原状復帰が行われないことで、牧草地あたりの家畜数が増えることとなり、残された牧草地へ過剰なダメージを与えてしまう。さらに残された牧草地に家畜が集中し…と負のスパイラルが発生してしまう（図 5-10）。

[16] 吉本誠（2011）モンゴルにおける鉱物資源開発の現状について

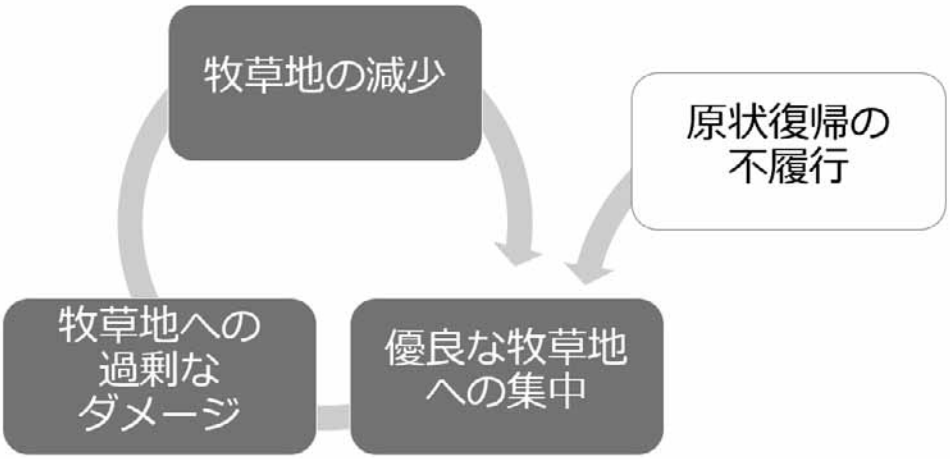


図 5-10 原状復帰の不履行による負のスパイラル

②家畜・人間の落下

もう一つの問題点として家畜・人間の落下がある。採掘時の穴が放置されるため、その穴に家畜や人間が落下し、最悪の場合死に至ることもある。遊牧民が訴訟を起こそうとするケースもあるが、行政が対応してくれないこともあるようだ。

実際、思沁夫は GLOCOL の調査で訪れた 2009 年冬・2010 年夏の 2 回、放置された穴に自動車で落下してしまった経験があるそうだ。

5.2 目的～ステークホルダーは何を考えているのか？～

モンゴルへの渡航前の事前学習会で以上のような背景について調査をするうちに、この問題が解決されない一つの要因としてステークホルダー間のミスコミュニケーションがあるのではないかと考えた。モンゴルの草原は広大であり、被害を被っている遊牧民と鉱山開発の間で話し合われる機会がないのではないか？ということである。

そこで、本調査の目的を「鉱山開発が引き起こす問題に対するステークホルダー間の意識構造を明らかにすること」とし、各ステークホルダーがこの問題についてどのように考え、お互いをどのように認識しているかについて調査を行った。

5.3 方法～ステークホルダーへのインタビュー～

調査ではステークホルダーへのインタビューを行った。2015 年 8 月 12 日にまず遊牧民の母親 5 名・子ども 3 名にインタビューを行い、その後同地区の鉱山開発の現場へ赴き、鉱山開発会社の代表 1 名へのインタビューを行った。

5.4 結果～こんなことを考えていた！～

5.4.1 遊牧民へのインタビュー

【日時】2015 年 8 月 12 日（水）　13:00~14:00（現地時間）

【場所】モンゴル　ウブルハンガイ県　ウヤンガソム　遊牧民宅

【対象者】遊牧民 5 名（母親 2 名・子ども 3 名）（図 8）

鉱山開発現場の側にゲルを構える遊牧民のゲルを訪問しインタビューを行った。以下にインタビュー内容を示す。おおまかに①現地での鉱山開発、②遊牧生活、③組合設立、④家族の将来、⑤質疑応答の 5 点となっている。

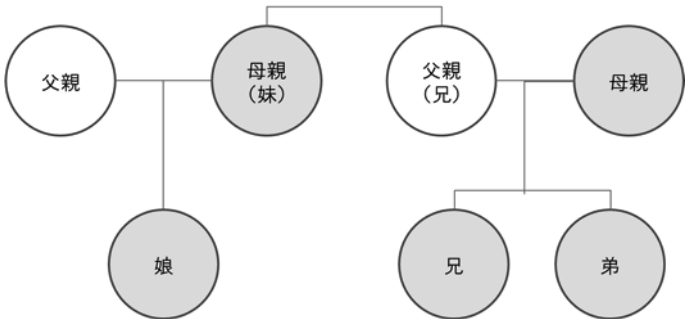


図 5-11 家族構成（色付きはインタビュー回答者）

図 5-12 インタビュー時の様子

①現地での鉱山開発

- 47 の企業が採掘活動を行っており、アーバン（大手鉱山開発会社）の子会社もいくつか参加している。企業が開発権を買い取ったことで鉱山開発が行われている場所に立ち入ることもできなくなってしまった。元々は私達が住んでいた土地なのに、、、来年の夏キャンプもここでできるかわからない。
- ニンジャは現状復帰をしない。放置された採掘穴で家畜が落下死したが何の補償もしてくれない。現状復帰の責任は業者にあることを踏まえて行政に訴えかけても取り合ってもらえない。
- 開発が行われて唯一良かったことは馬乳酒等の乳製品が彼らに売れるようになったことだけ。
- Artisanal miner（個人零細採掘者）は今はおらず、ニンジャはみんな組織化している。税金も払っているし、契約手続き上は問題ない。
- オンギー川の上流であるボルジット川では反対運動によって開発が阻止された歴史がある。そこがラマ（チベット仏教の高僧）医学発祥の地であり、遊牧民に愛されている土地であったから。
- 実は私達も 4~5 年前は半ニンジャとして砂金採掘をしていた。その時は収入もある程度良かったが、今は砂金があまり採れないこともありやっていない。
  - 1992 年～エレル社[17]が 1~2 年間開発を行った。当時は技術水準の低いロシア製の機器を使用していた。次に別の会社が開発し、そのタイミングでニンジャも参加してきた。今は金が採れなくなって他の場所に移動したニンジャもいた。残ったニンジャが組織化された。
  - 子どもをそこで働かせて欲しいと企業に言ったこともあるが断られた。

②遊牧生活

- この周辺では一般的な遊牧民よりも密集してゲルを設けている。それは個人採掘者（ニンジャ）だからではなく、他の遊牧に適した場所が鉱山開発で失われておりみんなが良い放牧地に集中しているためである。
- 夏キャンプはここで行い、秋には秋キャンプ地に、冬には冬キャンプ地に移動する。夏キャンプ地では小さな渓流をみんなで共同利用している（昔は渓流の数も多かった）。冬キャンプ地は水場がないため、バイクで 3km 先に調達する。

③組合設立

- 今年、この第 7 行政村（バグ）で初めての遊牧民組合を組織した。
  - 草原の一部を柵で囲みタマネギ・ニンジン・ジャガイモ・家畜の餌等の野菜を試験的に栽培している。上手くいけば収穫量から自家用を差し引いた分を販売する予定。
- ヤギ・ヤク・ウマ・ヒツジなどを育て、組合のマーケターを通じて売っている。
  - 組織的に販売したほうが利益は上がりやすい。

④家族の将来

- 3 人とも遊牧民にはないたくない（子ども）。

[17] モンゴルの鉱山開発会社。

- モンゴルの未来は真っ暗。子どもは教育を受けているから町から帰ってこないと思っている。
- それなら遊牧民がいなくなってしまうのでは？（思沁夫）
  - 母：モンゴル人だからきっと誰かはなるはず。
  - 建築関係の仕事をしたい、町は建築ラッシュなので仕事には困らない（子ども（男））。
  - 将来は町で看護師として働きたい。1 年間町で勉強して、その後日本でも勉強をした後にモンゴルに戻ってくる（子ども（女））。

⑤質疑応答

Q. 企業・行政に求めるものは何か？（阪本）

A. 行政：自分たちも初の試みなので組合への支援をして欲しい。

A. 企業・ニンジャも：企業は技術を持っているはずなので羊毛を加工する方法を教えて欲しい。資金も豊富だと思うので子どもへの奨学金も実施して欲しい。環境にも配慮して欲しい。

Q. これだけ遊牧生活が追いやられているのになぜ遊牧生活を辞めないのか？（猪熊）

A. お金がないことが一番の理由、学歴もなく都市へ行っても生活できないし職も得られない。それに遊牧民生活は好きで良いスタイルだと思っている。

Q. 遊牧生活の魅力とは何か？何が好きか？（阪本）

A. 都市で生活しない理由はお金が一番だが、遊牧生活は自由なのが魅力。草原も気持ちいし、家畜の世話をすることも好き。

A. どうしても現金が必要な事情がありウランバートルで清掃員として働いたことがある。しかしウランバートルの人は冷たいし、食べ物・買い物もわからない。2 ヶ月働く予定だったが、これ以上町に住みたくなかったので 1 ヶ月半で帰ってきた。

5.4.2 鉱山開発会社代表へのインタビュー

【日時】2015 年 8 月 12 日（水）　14:15~14:30（現地時間）

【場所】モンゴル　ウブルハンガイ県 ウヤンガソム　採掘場

【対象者】鉱山開発会社　社長

鉱山開発現場にて代表にインタビューを行った。なお代表にはインタビューという体を伝えず、たまたま通りかかった旅行者が何をしているのか興味を持って話しかけた、という体で話を伺うことができた。よって出席者は代表・阪本の他に思沁夫・ネルゲイ氏の 4 名のみである。

以下にインタビュー内容を示す。

- 会社が行政と 1 年間の契約を結び採掘活動を行っている。
- 1 年間採掘を行った後に現状復帰を行い、現状復帰できれば翌年も採掘活動を行う。現状復帰とは採掘した土地を土砂で埋戻し植生を戻すこと。
- 既に何度か砂金が回収された砂から再び砂金を洗い出す作業を行っている。多い場所では 5~6 回砂金が取られた土砂からさらに洗い出している。
- この会社は従業員数 20 名程度、月収は 100 万 Tg[18]（6 万円）。開発大企業アーバンの下請けの一つ。アーバンは元々チェコの会社で、月収は 200 万 Tg（12 万円）（モンゴル人の平均月収は 48 万 Tg（3 万円））。
- このエリアは 20 年前ほど前から複数の企業が採掘してきたため、最近ではあまり砂金が採れなくなってきている。
- エナンガノという大きな会社も採掘活動を行っている。

なおインタビュー後に一緒に昼食を取り、追加で話を聞くことができた。

- 社長は現状復帰に興味がある様子。
- アーバンの従業員数は 100 名程度
- 採掘は 7～10 月初旬まで行い、10 月～6 月は町で休憩する。

[18] Tg（トゥグルグ）はモンゴルの通貨単位であり、1Tg=0.06086 円である（2015 年 12 月 21 日現在）。

- 遊牧民はずるい。遊牧民も鉱山開発の恩恵を受けているのに（自分たちもニンジャとして採掘しているのに）、NGO には「開発会社は悪者」として話す。

5.5 考察～ミスコミュニケーション・日本もステークホルダー？～

以上のインタビュー調査の結果及び考察をまとめたものを図 5-13 に示す。それぞれの矢印の説明を行う。

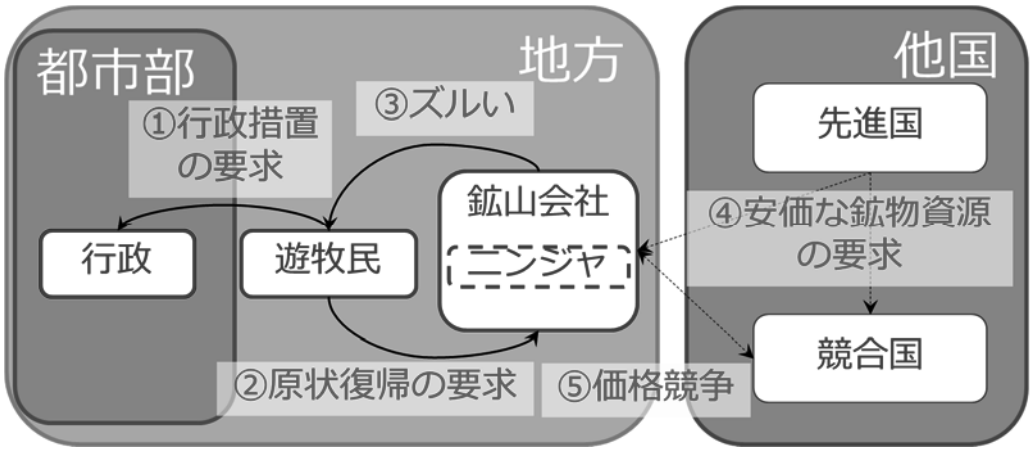


図 5-13 モンゴルにおける鉱山開発をめぐる意識構造

①行政措置の要求（遊牧民→行政）／②原状復帰の要求（遊牧民→鉱山開発会社）

鉱山開発会社には採掘現場の原状回復の義務がある。これはモンゴルの鉱物資源法によって定められており、ここでは採掘権者の環境保護に関する義務が以下のように記されている[19]。

- 環境保護並びに回復のための設備を所有していること。
- 鉱区利用、環境回復のための費用が鉱山事業の利益を超える場合、採掘権は不許可となる。
- 環境保護計画、環境管理検査計画、鉱山事業計画を、毎年度、環境省及び関連官庁に提出し、その結果を行政機関に報告する。
- 年間の環境保護計画の実行に必要な費用の 50% を保証金として行政機関に支払う。保証金の返還は環境評価を行う官庁が決定する。
- 当該年度の環境保護計画の実行内容を国家専門検査庁及び行政環境担当者が管理する。

しかし、この環境保護に関する義務が必ずしも遵守されているわけではない。その背景として、モンゴルで汚職が広がっていることが挙げられる。Transparency International が公表する腐敗認識指数で、モンゴルは 177 カ国中 83 位と汚職が広がっている。ちなみに反腐敗運動[20]が展開されている中国は 80 位、ロシアは 127 位であり、日本は 18 位となっている[21]。また、アジア財団などによる”Survey on perceptions and knowledge of corruption –Strengthening transparency in Mongolia project-”では、2009 年 9 月を除く全ての期間で鉱業が汚職レベル上位 3 位以内になっていることから（表 5-2）、鉱業分野での汚職が特に広がっていることが伺われる[22]。このような背景が法律では義務付けられている現状回復が実行されない一因である可能性がある。

また、2015 年 8 月 17 日ビャンバートル氏（モンゴル国立大学社会文化人類学学科）からモンゴル国立大学での報告会でいただいたコメントの一つに以下のようなものがあった。

---

[19] 吉本誠（2011）モンゴルにおける鉱物資源開発の現状について

[20] 中国共産党による腐敗撲滅運動。習近平氏主導で行われている。

[21] Transparency International, Corruption Perception Index 2013, http://www.transparency.org/cpi2013/results（2015 年 12 月 25 日閲覧）

[22] The Asia Foundation (2015) Survey on perceptions and knowledge of corruption –Strengthening transparency in Mongolia project-

遊牧民と企業に揉め事が度々起こるが、実は企業側は企業の人間ではなくセキュリティとして雇用している人が遊牧民とトラブルを起こしている。セキュリティとして雇われる人は荒々しい人ばかりで、そのセキュリティを遊牧民は「企業」と認識してしまっている。

したがって、遊牧民が「鉱山開発会社の人間」と思って話している人間が、実はその会社の人間とは言いがたいセキュリティである場合もあることが分かる。このようなミスコミュニケーションが遊牧民と鉱山開発会社の関係を悪化させる要因の一つであると考えられる。

表 5-2 汚職レベル上位 5 位

Time	1 rank	2 rank	3 rank	4 rank	5 rank
Mar-06	Land Utilization	Customs	Mining	Judges	Police
Sep-06	Land Utilization	Customs	Mining	Judges	Police
Mar-07	Land Utilization	Customs	Mining	Judges	Registry and Permit Service
Sep-07	Land Utilization	Mining	Customs	Registry and Permit Service	Judges
Mar-08	Land Utilization	Mining	Customs	Registry and Permit Service	Judges
Sep-08	Land Utilization	Mining	Customs	Judges	Prosecutors
Mar-09	Land Utilization	Mining	Judges	Customs	Prosecutors
Sep-09	Land Utilization	Judges	Police	Prosecutors	Mining
Mar-10	Land Utilization	Mining	Political Parties	Customs	Parliament/ Legislature
Sep-10	Land Utilization	Mining	Judges	Customs	Political Parties
Apr-11	Land Utilization	Mining	Judges	Customs	Political Parties
Nov-12	Land Utilization	Mining	Local Procurement Tenders	Professional Inspection Agency	Political Parties
Mar-13	Land Utilization	State Administration of Mining	Local Procurement Tenders	Political Parties	Customs
Sep-13	Land Utilization	State Administration of Mining	Local Procurement Tenders	Political Parties	Private Companies in Mining Sector
Mar-14	Land Utilization	State Administration of Mining	Local Procurement Tenders	Judges	Customs
Apr-15	Land Utilization	Political Parties	Mining	National Government	Parliament/ Legislature

③ズルい（鉱山開発会社→遊牧民）

鉱山開発会社の社長は、遊牧民は被害者（遊牧民としての面）と加害者（ニンジャとしての面）を使い分ける二面性を持つことから「ズルい」と話していた。つまり私達のような外部の人間には「鉱山開発会社は悪者」と言うにも関わらず、自分たちもニンジャとして鉱物の採掘を行っているということである。

しかし今回のインタビューのみからでは「遊牧民がズルい」ということを一般化することはできない。遊牧民の中には純粋に遊牧のみで生活する人もいれば、社長が指摘するような人もいるだろう。立場が変われば認識も変わる・ねじれることを感じる事例であった。このような認識のズレが重なり、関係悪化が負のスパイラルで生じているのではないかと感じた。

④安価な鉱物資源の要求（先進国→鉱物資源輸出国・企業）／⑤価格競争（鉱物資源輸出国・企業同士）

④・⑤について記す。点線矢印はインタビュー調査外での知見から、ある程度一般的に言えるであろう関係を記している。

モンゴルの輸出する鉱物資源の輸入量・利用量が多いのは日本を含む先進国であると考えられる)。実際にモンゴルの輸出総額の約 9 割を中国が占める。そして世界が市場経済の上にある以上、鉱物の輸入・利用国である先進国はより安価な鉱物資源を求める（④)。それに伴い、鉱物資源の産出国は探鉱・採掘・運搬などにかかるコストを削減し、他国・他社よりも安価な鉱物資源を提供しようとする。このようにモンゴルから世界全体に視点を広げると、間接的にではあるが日本などの先進国もこの問題の一旦を担っていることが分かる。

5.6 まとめと追加考察

最後にこれまでの内容をまとめ、追加で考察を行う。

5.6.1 まとめ

＜①鉱山開発とステークホルダー間の意識構造＞

モンゴルの急速な発展の原動力として、鉱山開発が各地で進んでいる。それに伴い様々な問題が発生しており、これまでの伝統的な遊牧生活に影響を及ぼしている。そこで本調査では「鉱山開発が引き起こす問題に対するステークホルダー間の意識構造を明らかにすること」を目的とし、遊牧民・鉱山開発会社の社長へヒアリング調査を行った。結果として、遊牧民が鉱山開発会社･行政に対して考えていること､鉱山開発会社が遊牧民に対して考えていることが明らかになった。

＜②汚職と環境保全＞

モンゴルにおける社会的背景と環境保全の関係についても考察する。モンゴルでは汚職が広がっており、これによって環境保全に関係する人々の間で対立や分断が発生していることが考えられる。自然環境は公共的なものであり、関係する人数・立場が多くなる。これを保全するためには、多くの関係者の間で社会的な合意形成が必要となる。しかしモンゴルでは汚職によりステークホルダー間で対立が生まれ、今回の調査であったように遊牧民の行政への不信感や鉱山開発会社が遊牧民に対して「ズルい」という印象など、環境保全が進まない原因の一つとなっているのではないだろうか。

＜③日本とモンゴル＞

さらにモンゴル国内だけでなく、他国との関係性についても考察をすることができた。モンゴルの鉱物資源は直接ではなく、中国を経て間接的に日本へ輸出されている。これは日本もモンゴルの鉱山開発に関わっているということであり、鉱山開発に伴い発生している問題に無関係ではないはずである。この関係性はモンゴル・中国・日本の 3 カ国にまたがる国際産業連関分析などを行うことで明らかすることが可能であろう。

今回は時間的制約もあり、収集データが限られていたため、産業関連分析には至らなかったが、今後の課題として引き続き取り組んでいく。

5.6.2 モンゴルに対し、私が考えること

国を形作るのはその国の国民一人ひとりである。社会・経済・環境の面から急速に変化するモンゴル、この国の未来設計図はモンゴルに住まう人々しか描くことができない。これはいくら国際化が進み、海外資本が参入してきても変わらないはずだ。私はモンゴルに滞在し、モンゴルが先進国のように発展するのか、それとも伝統的な生活が残るのか、今まさにモンゴルは分岐点にあると感じた。そのような変化の中で、経済的に力の弱い遊牧民がその意思決定に参加できず、時代の流れに振り回されているように思えてならなかった。日本も十分とは言えないかもしれないが、今後モンゴルでは経済的に弱い立場の人々の声にも十分耳を傾けることが必要となる。これは制度やシステムではなく、そのような文化・社会的な機運という形で求められるだろう。

出典

1) 公益金融情報センター（2015）モンゴルの概要

2) 日本貿易振興機構（2014）モンゴル経済概況

3) 大江宏（2013）モンゴルにおける鉱物資源開発と企業の環境対応-戦略的鉱床への現地調査を中心に-

4)7)11)14) 吉本誠（2011）モンゴルにおける鉱物資源開発の現状について

5) 資源エネルギー庁（2014）石炭をめぐる現状と課題

6) 日本モンゴル経済委員会事務局（2013）日本モンゴル貿易投資データブック

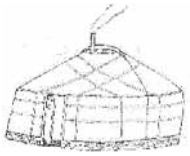
8) 佐藤寛（2015）モンゴル国トーラ川の汚染の実態-ウランバートル市のソノギノキャンプ（Couwor aupaum)場周辺を中心に-

9) 坪内俊憲（2009）地球規模環境問題のカナリア、変化にさらされるモンゴルの脆弱な環境

10) ビャンバートル氏による講義資料（モンゴル FS2012）

15) Transparency International, Corruption Perception Index 2013, http://www.transparency.org/cpi2013/results（2015 年 12 月 25 日閲覧）

16) The Asia Foundation (2015) Survey on perceptions and knowledge of corruption –Strengthening transparency in Mongolia project-



コラム
モンゴルでの学び
～環境問題の捉え方の変化～

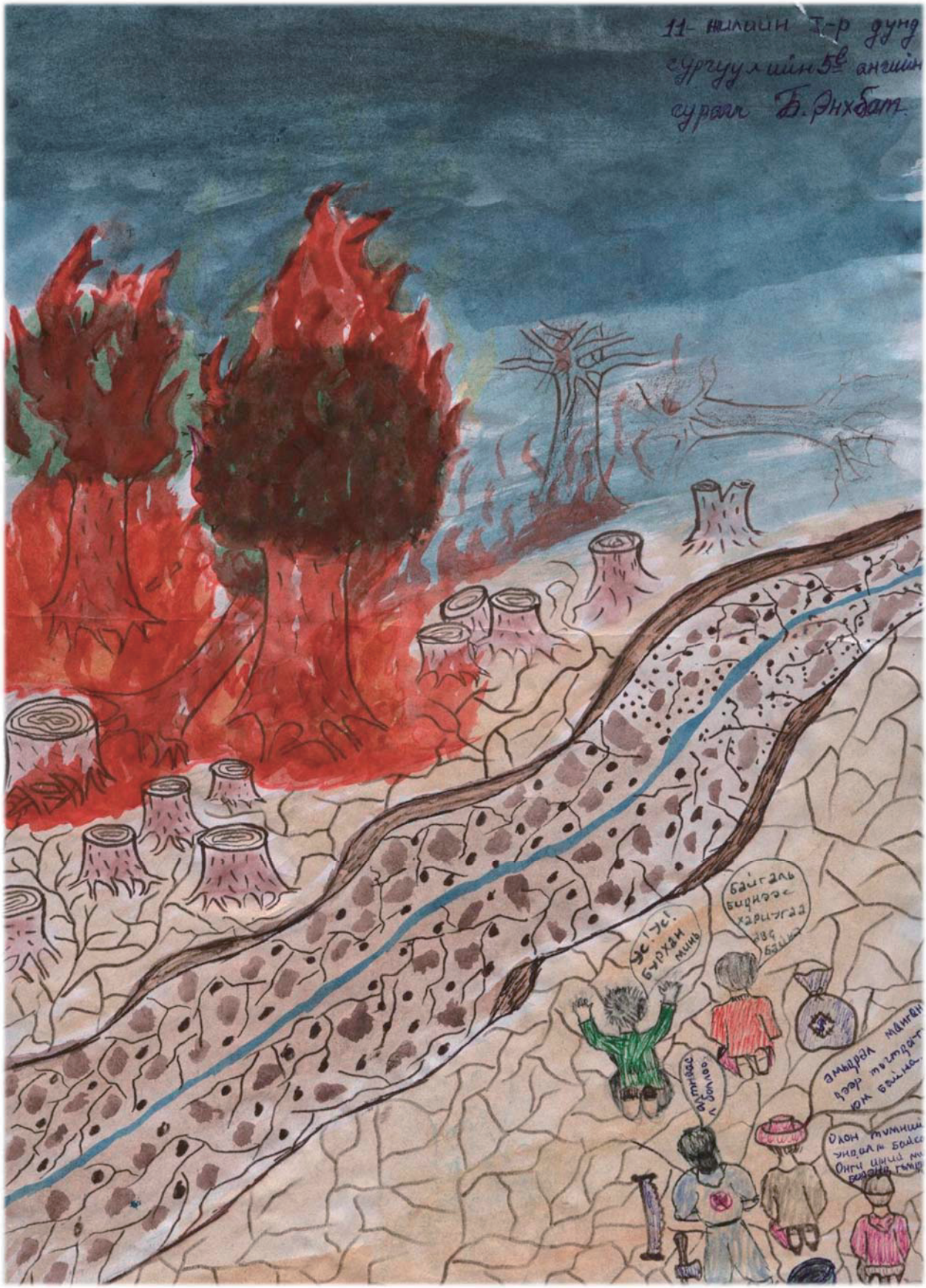
阪本悠佑

ここでは、私がモンゴルで学んだこと・感じたことついて 2 点述べる。

1 点目は「本当の意味での環境問題」を知ることができた点が非常に大きな学びであった点である。当然、日本でも「環境問題」という言葉を理解することはできる。しかし、日本で枯渇した川や大規模な採掘跡を目にする機会はほとんどない。さらに私が都市部で生まれ育っており、自然を前提とした生活を送ってきたわけでもない。つまり「既に環境が破壊された社会」に生まれ・生きてきたため、本当の意味での「環境問題」は知っているはずもなかった、ということに気付かされた。

2 点目は「人に繋がる環境問題」を実感できた点である。多くの途上国であれば第一次産業が主たる産業であるため、必然的に環境と自分の繋がりを感じるであろう。しかし日本のような第三次産業が主産業の国では必ずしもそうとは限らない。そのため環境の悪化が自分の生活の質の低下に繋がるわけでもなく、人間と環境問題の繋がりを（言葉の上では理解できるが）実感したことはほとんどなかった。反対に、モンゴルでの遊牧生活はまさに自然と共に生きるもので、そこで鉱山開発が行われることで自分たちの生活に影響していた。モンゴルでの生活を通じて、自分がいかに環境に繋がっていない（ような気がしていた）と感じていたかを自覚することができた。

第Ⅲ部　リスク



第 6 章　モンゴルの自動車交通
―現地に聞いた問題解決策とは？―

轟晃成

6.1　はじめに

6.1.1　調査背景～ウマとクルマが並走する！？～

フィールドスタディに行く前、モンゴルといえば、雄大な自然の中を遊牧民がウマに乗って爽快に駆け巡っている、そんな風景を想像していた。しかし、自動車の普及が急速に進み、渋滞や大気汚染が問題になっていると聞き、衝撃を受けた。以前から都市計画や交通計画に興味があったこともあり、自動車をテーマに調査を行いたいと思った。

6.1.2　本章の構成

本テーマでは主に 3 つの調査を行った。一つが、メインである遊牧地域および都市域を対象としたアンケート調査である。もう一つはウランバートルからウブルハンガイ県アルバイヘールへの移動中に沿道のガソリンスタンドの数を調査したものである。これは、急速に自動車が普及していることに対して、ガソリンスタンドは追い付いているのかという疑問から行った。これらの調査結果に加えて、モンゴルの道路と運転の特徴についても現地で観察したことを踏まえて考察を行った。

写真 6-1　草原に駐車されている自動車（私たちが訪問した遊牧民の夏キャンプ地にて）

6.2　自動車普及の実態と影響，問題の解決策（アンケート調査）

今回実施したアンケート概要と設問意図を表 6-1 に示す。実際に使用した用紙（日本語、モンゴル語）は付録に載せている[1]。

本調査の目的は、以下の 2 点に関する知見を得ることである。

1. 自動車の普及がモンゴルの生活や文化にどのような影響を与えたのか
2. どのような交通問題があり、モンゴルという文脈で、どう解決していけばいいのか

アンケート調査は 2 種類行った。一つは遊牧地域（主にウブルハンガイ県）を対象としたものであり、もう一つは都市域（主にウランバートル）を対象としたものである。都市域では主に 7 つの設問を設けており、その中から渋滞に関する

[1] アンケート用紙の翻訳にはソソルさん、現地での記入にはソソルさん、ネルグイさん、ウノさんたち、データ集計にはバヤサさんにご協力いただいた。この場を借りて感謝申し上げる。

ものと地下鉄に関するものを除いた 5 つを遊牧地域対象の設問とした。共通の 5 つの設問では、遊牧地域と都市域の比較を行うことができる。

表 6-1　アンケート調査の概要と設問意図

質問	対象地域		質問内容の概要	設問意図
	遊牧	都市		
属性	○	○	名前、年齢、性別、家族構成など	
1	○	○	【自動車の所有状況について】 →　自動車の購入時期など →　所有していない理由	自動車の普及状況の現状、普及の阻害要因を知るため
2	○	○	【主な移動手段について】	特に遊牧地域において、自動車普及が人の移動方法にどのような変化をもたらしたのかを知るため
3	○	○	【ガソリンスタンドについて】 ・　燃料の補給は不便だと思うか ・　燃料は高価だと思うか	ハード面としての自動車交通のインフラ（ガソリンスタンド）の現状と人々の意識について知るため
4	○	○	【交通事故について】 ・　交通事故の目撃・経験 ・　自動車はこわいものか	自動車交通の制度に問題点がないかを知るため。交通事故が多いと制度に問題がある可能性がある
5	○	○	【自動車の影響について】 ・　良い影響と悪い影響	自動車が生活や環境に与えていると思われている影響を知るため
6	―	○	【都市の渋滞について】 ・　渋滞はひどいと思うか ・　ロードプライシングに賛成か ・　渋滞を緩和する方法	首都の渋滞問題の現状を知り、モンゴルに適した解決方法を抽出するため。その一例として、MM が受け入れられるかを調査するため
7	―	○	【地下鉄について】 ・　地下鉄計画を知っているか ・　もしできたら利用したいか	地下鉄敷設計画に対する認知度と期待度（需要）を知り、可能であれば、ルート等の希望を抽出するため

今回の調査では、遊牧地域で 10 人、都市域では 38 人、合計で 48 人の方（18～63 歳）にご協力いただいた。ご協力いただいた方々に感謝の意を表したい。以下に、各設問の集計結果を示し、考察を行う。

6.2.1　アンケート調査の結果と考察

質問 1：自動車の所有状況について

自動車を所有していると回答した人は、遊牧地域では 50%、都市域では 58%であった。自動車の所有率は遊牧地域・都市域共に 50%を超えており、今回の調査範囲においては、あまり格差はないことがわかった。

所有している人には、購入時期、購入方法、購入価格、利用頻度を聞いた。購入時期の分布を図 6-1 に示す。2013 年に購入した人が多いことがわかった。図 4-2 に示すように、モンゴルにおける自動車の普及は 2012 年から 2013 年にかけて 2 倍近くに急増したことが説明できる。また、購入価格は 350 万～2500 万 Tg（平均では 1140 万 Tg：日本円では 70 万円相当）であり、購入価格にはかなりの開きがあることがわかった。

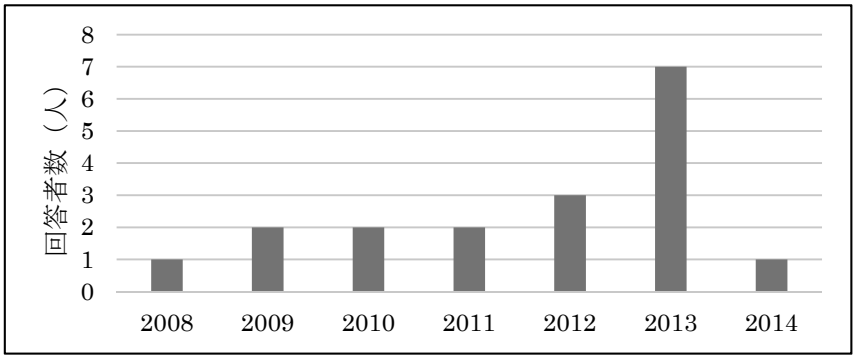


図 6-1　自動車の購入時期［年］

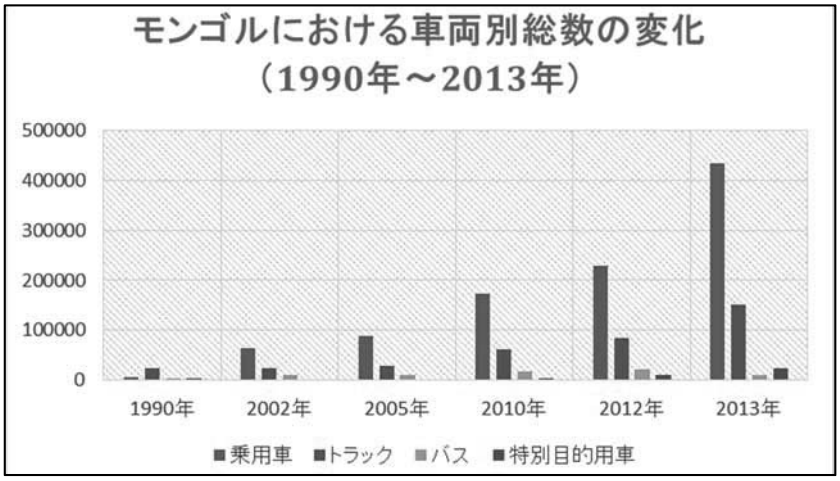


図 6-2　モンゴルにおける車両別総数（出典）モンゴル政府の統計集（2004～2013 年）

自動車を所有していない人には、所有しない理由を聞いた。その結果を図 6-3 に示す。都市域では、公共交通で十分だという理由で車を持たない人もいることがわかった。

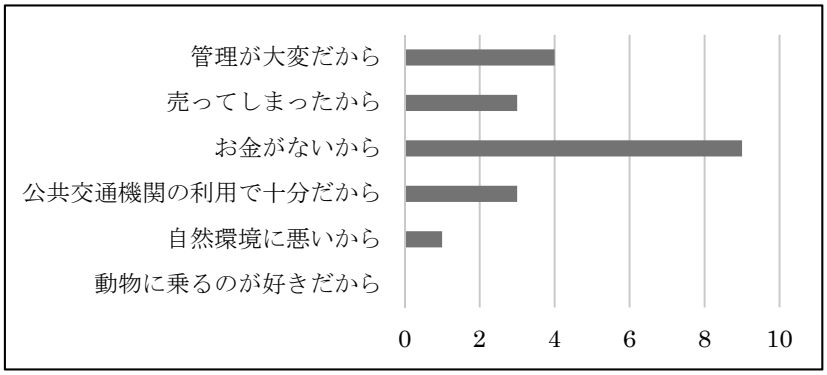


図 6-3　自動車を所有しない理由
（その他の回答：運転免許を持っていないから、運転が嫌いだからなど）

質問 2：主な移動手段について

「昨日一日で利用した移動手段とその利用時間」を聞いた。遊牧地域と都市域に分けて平均結果を表 6-2 に示す。

表 6-2　昨日一日で使用した移動手段と利用時間（平均）[分]

移動手段	遊牧地域	都市域
自動車	75	55
バイク	170	12
自転車	0	20
バス	0	40
タクシー	0	35
動物	0	0
徒歩	0	30

ここから、自動車への依存度は都市域よりも遊牧地域で高いことがわかった。都市域ではバスの利用が意外と多い。動物に乗っている人は、もうほとんどいないことがわかった。今回行った調査の範囲内においては、自動車の普及によって伝統的な移動手段が衰退したということが言えるだろう。

質問 3：ガソリンスタンドについて

ガソリンスタンド（自動車の燃料を補給する場所）で燃料を補給することは不便だと感じるかどうかを聞いた。その結果を図 6-4 に示す。ガソリンスタンドで給油することはあまり不便だとは思われていないことがわかった。特に遊牧地域でその傾向は強いのは興味深い。

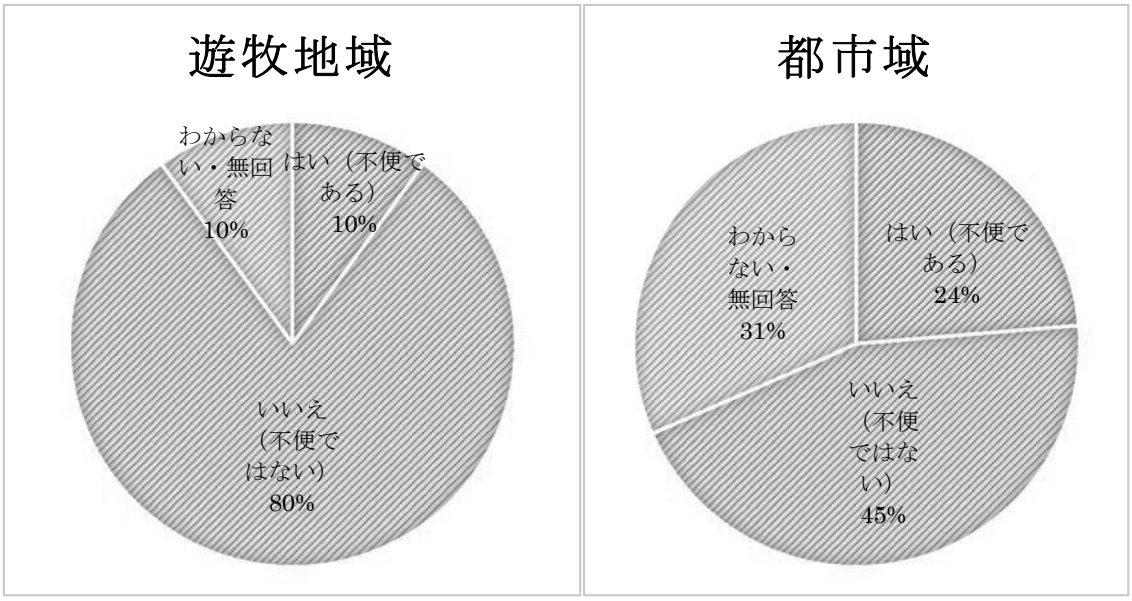


図 6-4　ガソリンスタンドで燃料を補給することは不便だと感じるか

また、ガソリンは高価だと思うかどうかについても聞いた。図 6-5 に結果を示す。遊牧地域、都市域共に多くの人がガソリンの価格に対して不満を持っていることが分かった。

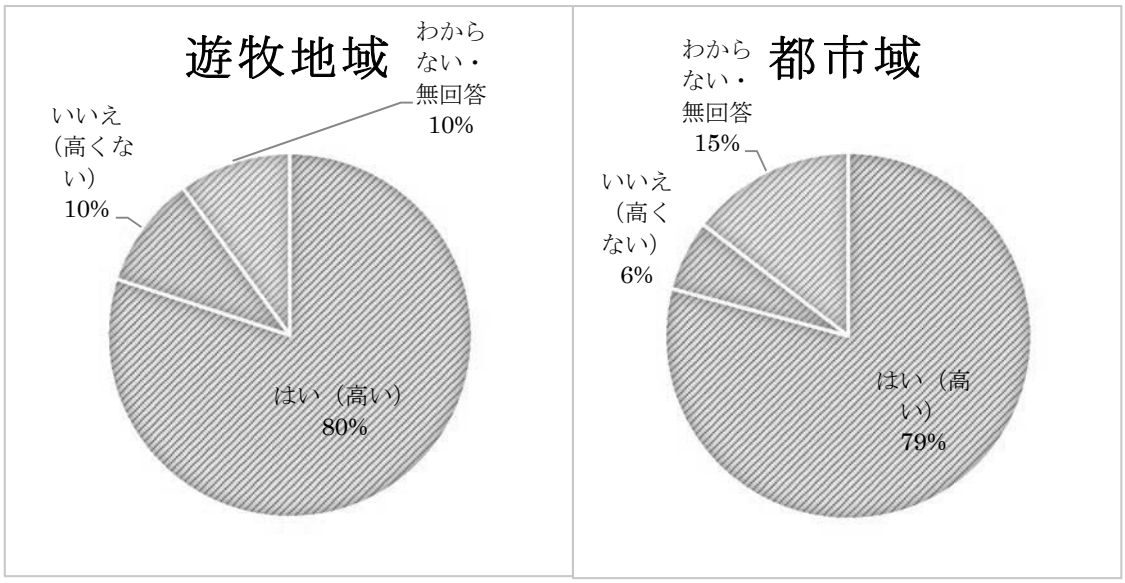


図 6-5　ガソリンは高価だと思うか

実際、私たちがモンゴルを訪れた 2015 年 8 月のガソリン価格は、1L あたり約 1500 Tg（日本円では 90 円程度）であった。当時、日本では 120～130 円であったが、所得が日本の約 5 分の 1 であったことを考えると、家計に対して相当な負担であることがうかがえる。

写真 6-2　モンゴルのガソリンスタンド

質問 4：交通事故について

WHO（2009）[2]によると、モンゴル人の 2004 年の主な死因は、脳血管疾患（14%）、肝臓がん（8.6%）、虚血性心疾患（6.4%）、交通事故（5.4%）であり、交通事故は生活習慣病と肩を並べて大きなリスクとなっている。交通事故死亡率は図 6-6 のように推移している。

また、日本相撲界で第 70 代横綱であった日馬富士公平（はるまふじこうへい）の父親のダワーニャム氏と親族が 2006 年末にウランバートル市内で交通事故により亡くなったことが日本でもニュースになった。[3] ドキュメンタリー番組にもなった「グレートジャーニー」[4]で知られる日本人探検家・関野吉晴がモンゴルで出会った遊牧民の少女プージェーも、2014 年に 12 歳で交通事故で亡くなった。この悲劇は多くの日本人を悲しませた。

[2] Disease and Injury Country Estimates, Department of Measurement and Health Information, WHO, 2009
[3] wikipedia「日馬富士公平」
[4] 角川文庫『グレートジャーニー人類 5 万キロの旅 4 極寒のツンドラ、モンゴル運命の少女との出会い』

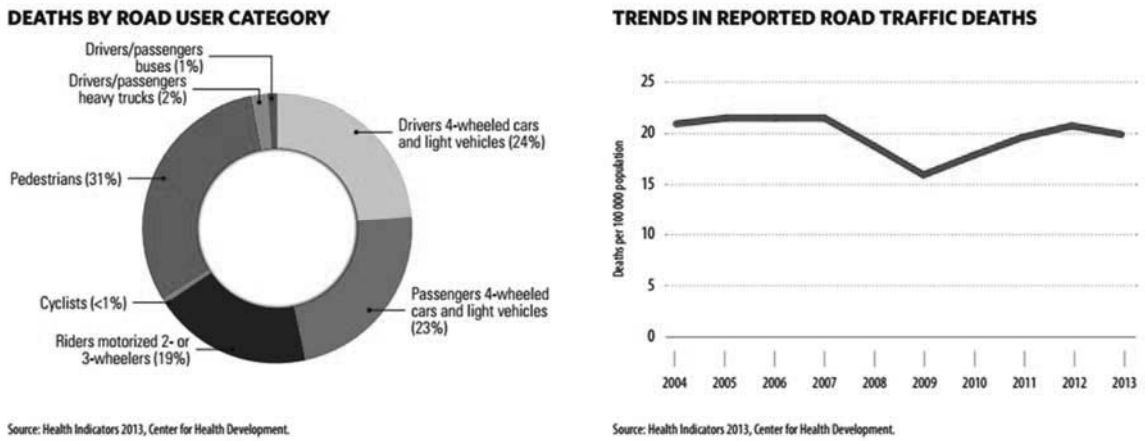


図 6-6　Death by road user category & Trends in reported traffic deaths (WHO,2009)

このように交通事故というのは自動車の大きな負の側面の一つである。そこで、今回は交通事故についてもアンケート調査を行った。

交通事故を目撃、または体験したことがあるかを聞いた。その結果を図 6-7 に示す。都市域では、半数近くの人が交通事故を目撃・経験していることがわかった。なお、事故の時期と場所を聞いたところ、交通事故の発生時期は、2013 年以降が比較的多いと思われる。

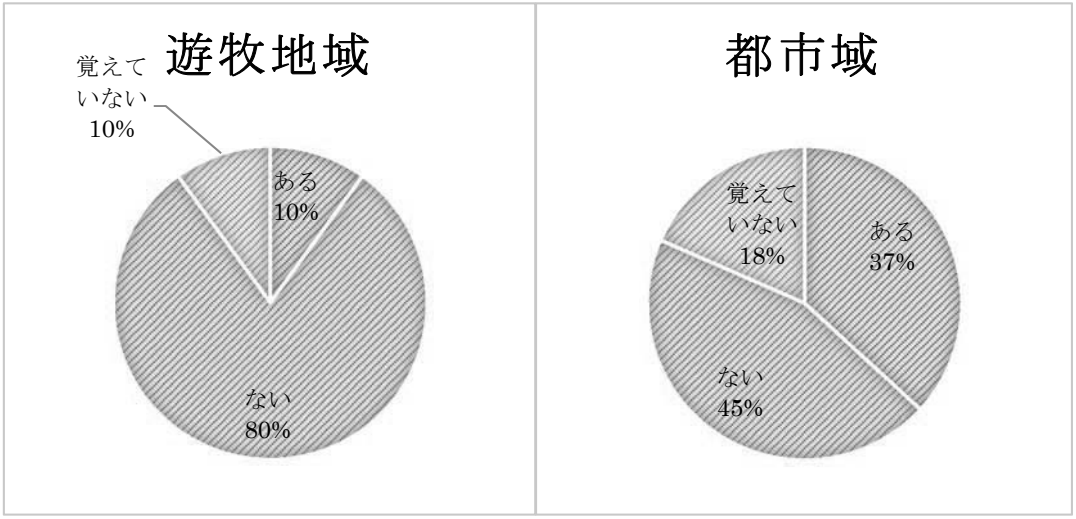


図 6-7　交通事故を目撃（または経験）したことがあるか

また、自動車は怖いものだと思うかという質問も行った。結果を図 6-8 に示す。自動車を怖いと思う人は、遊牧地域よりも都市域に多いことが確認された。また、事故を目撃・経験したことのある人でも自動車を怖いと思っていない人もいることがわかった。

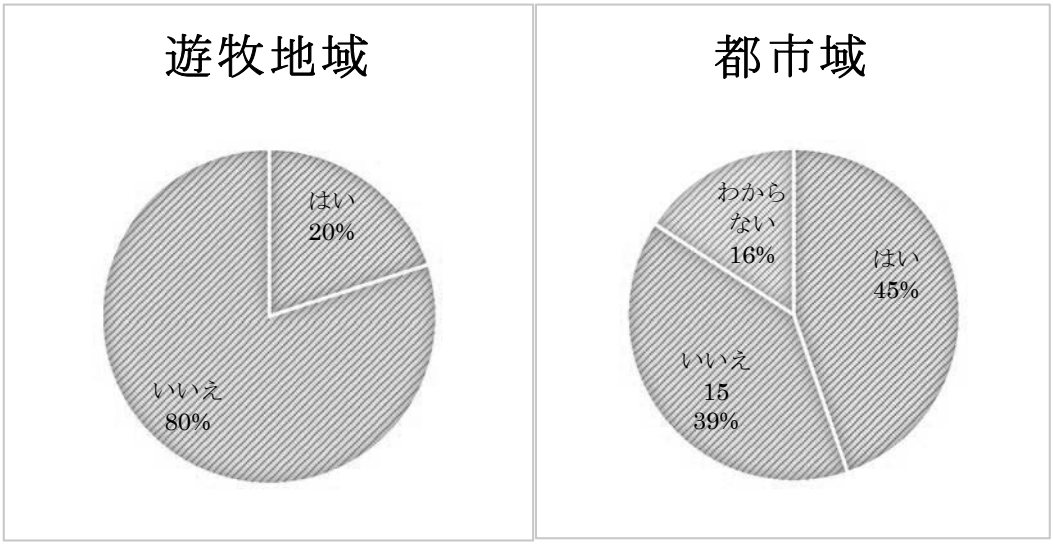


図 6-8　自動車は怖いと思うか

質問 5：自動車の影響について

自動車の良いところと悪いところを考えて、自由記述をしていただいた。その結果を以下にまとめる。同じ内容の回答が複数出た場合はまとめて示している。

自動車の良いところ

- 便利（何人も乗れる、荷物を載せることができる、子供たちの送り迎え、買い物、公共交通よりも使いやすい）＜回答者数 30 人＞
- 移動時間が短縮されて仕事の効率が上がる＜16 人＞
- 速い（歩いていけない所に早く到着できる、急用のとき必要）＜9 人＞
- 寒い時期にウマと比べて暖かい＜8 人＞
- きれい＜3 人＞
- 他人に頼らなくても自分で行動できる、自由＜3 人＞
- 自己都合に合わせる（ウマだとウマの事を考えて休ませたり食事を与えたりする必要がある）＜2 人＞
- 経済的に近代の人々に欠かせない必需品、特に遠くの親戚を訪問したり、都会から離れて自然を楽しむときの移動には欠かせない
- 家族と一緒に移動するのが楽しい

速い、便利、暖かいというのは非常に多く出てきた。自動車が生活に不可欠であることが読み取れる。また、特徴的な意見としては「自己都合に合わせる」というものがあった。

自動車の悪いところ

＜環境面＞

- 大気汚染の主な原因となる＜回答者数 15 人＞
- 自然環境に悪影響を与える＜6 人＞
- 草原を自動車やバイクが通ることで道（轍）ができて土壌が壊れている。今後遊牧に悪影響を与える可能性が考えられる、牧草地の悪化に影響する＜3 人＞
- 自動車産業は生態系破壊になる可能性がある
- 自然環境に影響を与えるので人間はその破壊された自然を回復させることも同時に考える必要がある

＜安全面＞

- 交通事故によって人間及びその他モノに危害・損害を与える＜7 人＞
- 飲酒運転が危険、運転がうまくない人、お酒を飲む人は運転を避けるべき＜3 人＞
- 速度オーバーして運転したらよくない

- 運転手のマナーによって子供の交通事故が増えているのではないか。飲酒運転の処罰をもっと厳しくするべき

＜交通渋滞＞

- 交通渋滞＜3 人＞
- ウランバートルの渋滞がひどくてナンバープレートで通行制限する制度が面倒くさい

＜費用面＞

- 費用が高い、手入れに費用がかかる＜7 人＞
- 故障した時に困る、修理にお金がかかる＜2 人＞
- 燃費の問題

＜健康面＞

- 個人の健康にもマイナスの影響がある（肥満など）、人々の運動不足への影響、便利なので怠け者になってしまう、乗れる家畜（ウマ・ラクダ・ウシ・ヤク）にあまり乗らなくなる＜5 人＞
- 騒音

出てきた意見を筆者の判断により、環境面、安全面、交通渋滞、費用面、健康面と 5 つに分類した。自動車の通行により「草・土壌が壊れる」ことによって、遊牧に悪影響があるのではないかという懸念を持つ人がいた。ガソリンの価格や事故の心配はこれまでの質問で聞いている通りである。特徴的なものとしては、乗れる家畜にあまり乗らなくなる、人間が怠け者になってしまう、といった伝統的移動手段の変容に言及するものがあった。また、自然環境を回復させる策を考えるべき、飲酒運転の処罰を厳しくするべき、といった、問題点に対する解決策を提示した意見があったことが印象的である。

質問 6：都市の渋滞について

ここまでは遊牧地域、都市域両方を対象としている。以下の質問は、都市域のみを対象としている。

都市の渋滞はひどいと感じているかを聞いた。その結果を図 6-9 に示す。都市に住む人のほとんどが渋滞に対して不満を持っていることがわかった。

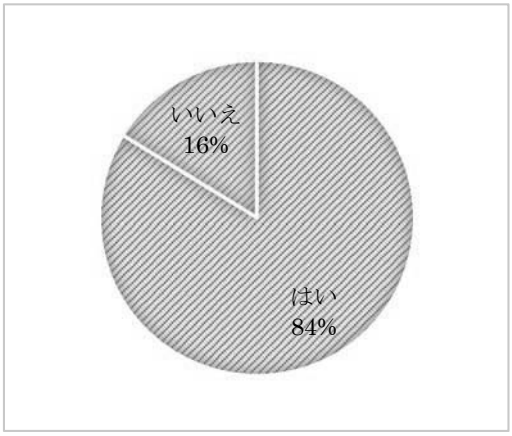


図 6-9　都市の渋滞はひどいと思うか

写真 6-3　ウランバートルの渋滞の様子

次に、モビリティマネジメント施策であるロードプライシング（首都中心部に自動車で入る時、ドライバーに一定の料金を徴収する制度）について賛成か反対かを聞いた。モンゴルの渋滞問題を解決するためには、モンゴルに住む人の意見を抽出して、モンゴルと言う文脈で考えることが必要であるのは言うまでもないが、ここでは一般的に交通工学的な発想の施策を提示し、それが受け入れられるのかということを調査するという意図がある。

結果を図 6-10 に示す。ロードプライシングの内容が伝わらず、よくわからないと回答された方も多かったが、反対を賛成が上回る結果となった。それだけ、ウランバートルの渋滞はなんとかして解消してほしいという思いがあるのだろう。

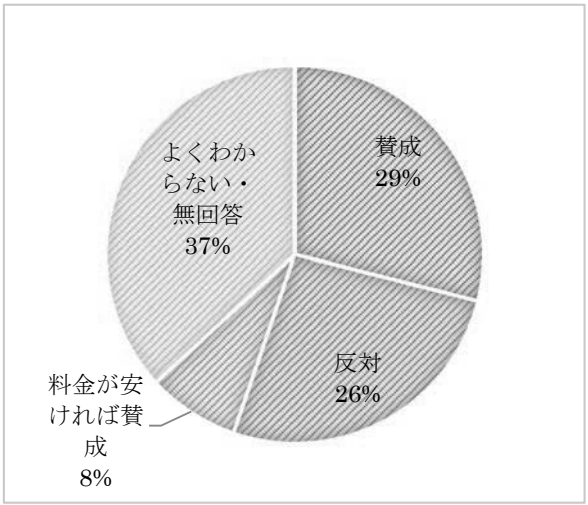


図 6-10　ウランバートルにロードプライシング制度を導入することに賛成か反対か

次に、渋滞を緩和するためにどんな方法があると思うか、自由記述で答えていただいた。その結果を以下に整理する。なお、筆者の判断で分類をしている。

渋滞を緩和するためにはどうしたらよいか

＜交通インフラなどのハード面の改善＞

- 高速道路、立体交差、橋の建設
- 道路の幅を広くする、道路の改善、道路ネットワークの改善、道路計画の改善

＜交通制度、ルール、マナーなどのソフト面の改善＞

- 税金、道路を有料にする
- 交通ルールの改善
- 人々自ら運転マナーを守るべきだ、運転マナーをよくする
- 車の台数が制限なしに増えていることを管理する
- タクシーの事業に関する管理を厳しくし、よくないタクシー事業を取り消す政策

＜モーダルシフト＞

- 公共交通を改善する
- 自転車を使う（特に暖かい時期は）
- 地下鉄の建設
- ウランバートル市のインフラ整備の改善

＜首都の一極集中に対してアプローチする＞

- 地方の開発を進め、都市の人口を減らす
- 大学のキャンパスなどを郊外に移転させる、工場や市場を郊外に移転させる
- マンションのホローロル（複数のマンションの集まり）建設計画の際に、同時に道路の建設の事も考えるべき（保育所、公園、スーパーの事も考えているのでそこにプラス道路建設のことを考えてほしい）
- 市場などの大きなサービスを提供する場所（＝車が集まる場所）を郊外に移転する。例えば、①ナラントール市場（ウランバートルで最も大きな市場；市場も服も何でもある。大量に安く仕入れて自分の店で売る。田舎からも多くの客が来る）、②建設材料の市場、③Uguumur 市場
- ウランバートル市の人口政策を改善する。地方の開発を進め、都市の人口を減らす必要がある。街を増やしてウランバートルの周りに学校や政府機関を移転させて首都の渋滞を緩和する

日本も含め、海外からの援助により高架道路や立体交差が建設されており[5]、その効果は大きいという。したがって、さらなる立体交差の建設を求める声は多かった。しかしながら、それだけにとどまらず、運転マナーや公共交通にアプローチすべきという声が上がった。また、首都の一極集中こそが渋滞の根本的な原因であるから、そこに対して都市計画的にアプローチしていくべきだという意見があった。さらに、具体的な市場の名前なども出てきたことは非常に意義があろう。私としても、どうしても交通制度にばかり目がいってしまっていたところがあり、人口集中に対するアプローチがあまり頭になかったため、この結果は非常に興味深く感じている。

ところで、交通渋滞の解消に向けた実際の政策はどのようになっているのだろうか。

バドボルド首相の提示した 2008 年～2011 年の目標は以下のようなものである。[6]

- 自動車の駐車場（屋内、地下、高層、有料）を多く作る
- ウランバートルの幹線道路および補助道路の交差点の処理能力を改善するために、立体交差を建設する
- 歩行者のための歩道橋および地下通路を建設する
- 大容量の公共交通機関を導入する
- 都市内高速道を建設する
- チンギスハーン国際空港までの道路を新たに建設する
- 一つの都心部である現在のウランバートルをいくつかの副都心部に分散する
- ウランバートルの道路基金の財源を増やす
- ウランバートルの道路および道路設備の修理・清掃システムの無駄を省く
- 全ての道路を政府または民間の専門企業に責任を持たせて施行させる

[5] モンゴル最大の鉄製橋梁「太陽橋（ナルニーグール）」が 2012 年 10 月に JFE エンジニアリング株式会社による 37 億円の投資によって建設された。

[6] http://mongolnews.blog133.fc2.com/blog-entry-396.html

- 現在使われている橋，道路設備の耐震性を補強する対策も計画・実施
- 道路建設，修理の分野に新技術を広く導入する

これらとアンケート結果を重ね合わせてみると、立体交差や高速道路の建設や大容量公共交通機関の導入、副都心部への機能分散などが含まれており、市民の希望する施策は一定程度既に政府の目標として認識されているようである。しかし、タクシーに対する施策や具体的な副都市機能分散案は、本アンケート調査によって初めて抽出されたといえる。

質問 7：地下鉄（公共交通機関）について

ここでは、ウランバートルに地下鉄敷設計画の認知度と期待度を調査した。地下鉄敷設計画の存在を知っているか、もしできたら利用したいかについて聞いた結果を図 4-11 に示す。

約 4 分の 3 の人が地下鉄計画について知っていることがわかった。地下鉄ができた場合は利用したいと答えた人は約 3 分の 2 であり、利用しないと答えた人はわずか 5%だった。したがって、地下鉄計画の認知度、期待度ともに高いことがわかった。また、計画は知らなかったけれども、乗りたいと答えた人が一定数いたことから、市民への認知は現状でも高いがさらに広めていくことが必要であるということがいえる。

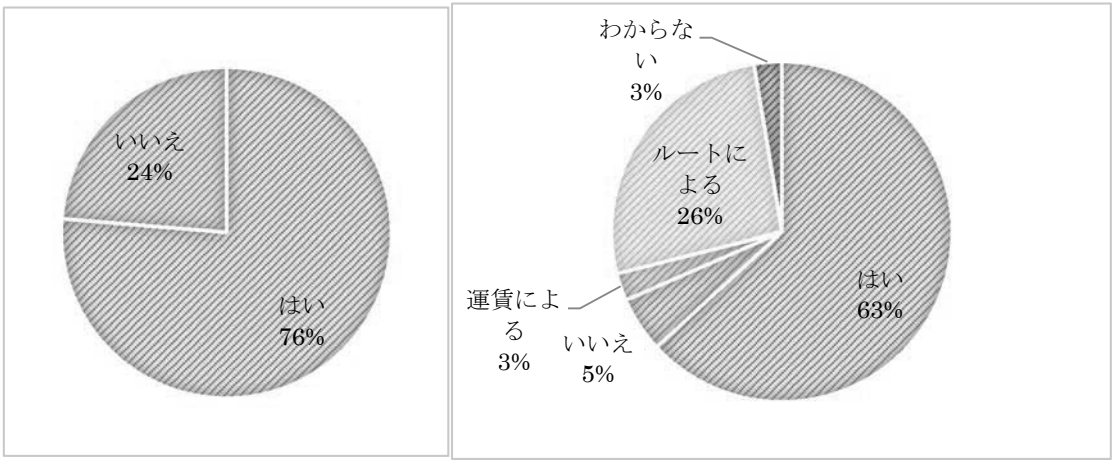


図 6-11　地下鉄敷設計画を知っているか（左）　地下鉄ができたら利用したいか（右）

6.2.2　アンケート調査の結果のまとめ

本調査によって得られた知見を以下にまとめる。

＜自動車の普及状況＞

- 自動車の普及は 2013 年ごろから加速し、2015 年で 5 割を超える
- 遊牧地域と都市域で自動車の普及状況に大きな差はない

＜伝統的移動手段へ与えた影響＞

- 遊牧地域では、自動車とバイクへの依存度が高くなっており、動物に乗る人は激減した

＜交通インフラ・制度の現状＞

- ガソリンスタンドの数は十分だが、燃料価格に不満が高まっている
- 都市域では、交通事故を目撃・経験した人が半数近くいる

＜渋滞問題の実態と解決策＞

- 都市域ではかなりの人が渋滞に不満を抱えている
- ハード面（道路の改善）、ソフト面（意識の改善）両方の改善策が提案された
- タクシーなどの制度改革、具体的に郊外へ移転すべき施設等の意見は、既存の政策にはない貴重なものである
- 地下鉄に対する認知度と期待度は既に高いが、さらなる認知度向上が必要

6.2.3　アンケート調査の結論

本調査の目的は、以下の 2 点についての知見を得ることであった。

1)　自動車の普及がモンゴルの生活や文化にどのような影響を与えたのか

2)　どのような交通問題があり、モンゴルという文脈で、どう解決していけばいいのか

最後に、結論としてそれに答えたいと思う。

1)　自動車の普及がモンゴルの生活や文化にどのような影響を与えたのか

自動車の普及は都市域だけでなく、遊牧地域でも急速に進んでいる。その理由は、「速い」「便利」「暖かい」という三大メリットをはじめとした、様々な利点によるものである。自動車はモンゴル人にとって欠かせないものになっている。その影響として、家畜に乗る習慣は激減した。そのことに対する危惧を感じている人もいる。遊牧地域では都市域以上に自動車・バイクへの依存度が高いのが現状である。

生活習慣だけでなく、金銭的にも変化をもたらした。定期的に補給しなければならないガソリンは高価であり、家計を圧迫している。故障した時の費用を心配している人もいる。また、自動車を所有しない理由の 1 位が「お金がないから」であったように、初期費用も相当な負担になっていると思われる。一方で、自動車により遠くまで速く移動できるようになり、新たな職や商売の機会が生まれている。収入・支出の両面において大きな影響があることは間違いない。また、自動車の環境への悪影響を心配する声も多かった。遊牧地域では牧草への影響、都市域では大気汚染への影響を懸念する意見があった。

民主化以降、草原や放牧地といった自然を直接利用する遊牧民が車で遠くへ移動する。それは何を意味するのか。社会主義時代、移動は制限されていた。そういう意味で、移動は自由の拡大として理解してもいいが、問題は何のために移動するのか。私たちの観測でも、移動の主な目的には、旅行、仕事、親戚訪問や遊びなどであり、遊牧のための移動は、日常的、全国規模となった移動のごくわずかを占めるに過ぎない。移動の意味が変化したのは明らかである。また、自動車やバイクの普及は伝統的移動手段を衰退させただけではなく、エネルギーの利用を家畜から石油、電力などへ、自給経済から貨幣経済へ、移動目的の多元化など遊牧社会、モンゴル社会に多くの変化をもたらしたと考えられる。

2)　どのような交通問題があり、モンゴルという文脈で、どう解決していけばいいのか

ウランバートルの渋滞問題は市民の不満も高く、解決すべき問題である。しかし、渋滞問題の本質は、自動車ではなく、実は首都への人口集中という都市構造的な問題であった。車の量を減らす（公共交通への誘導）、車の量をコントロールする（有料道路）、道路の容量を増やす（高速道路、立体交差、幅員拡張）、車の移動を円滑にする（マナー、ルール）といった表面的な対策だけでなく、もっと本質的に車の行先を分散させる（目的地の郊外移転）ことが必要であるということを、モンゴルの市民の方に教えていただいた。具体的には、市場、大学、工場などを郊外に移転すべきだという意見があった。今後の施設更新などの際には、郊外移転を検討していただくことが効果的であると考えられる。

もう一つの交通問題は、交通事故である。これも渋滞問題・渋滞対策と大きく関係する。都市の半数近くの人が事故を目撃・経験しているというのは多いように感じる。道路交通のハード面・ソフト面の改善により、渋滞と共に事故の問題も緩和されていくことを願う。

6.3　幹線道路のガソリンスタンドの立地状況（観察調査）

事前調査において、モンゴルで自動車が急激に普及していることに対して、ガソリンスタンドといったインフラは追い付いているのかという疑問を感じた。そこで、バトバヤルさんの車でウランバートル（チンギスハーン国際空港）からアルバイヘールに移動するときに移動経過時間、走行距離と共に、ガソリンスタンドの数を数えることにした。おそらくこのような調査は、初めての試みである。

ウランバートルからアルバイヘールまで約 400km あり、自動車で約 400 分かかった。その間には上下線合わせて 46 個のガソリンスタンドを確認することができた。

図 6-12 にガソリンスタンドをマッピングしたものを示す。ウランバートルに近いところでは非常に高密度にガソリンスタンドが立地しているが、離れるにつれて徐々に密度が減っていく。ただし、約 30 分走行する間に 1 箇所はガソリンスタンドがある。そこではいくつかのガソリンスタンドが隣接しており、飲食店なども一緒にあることが多い。

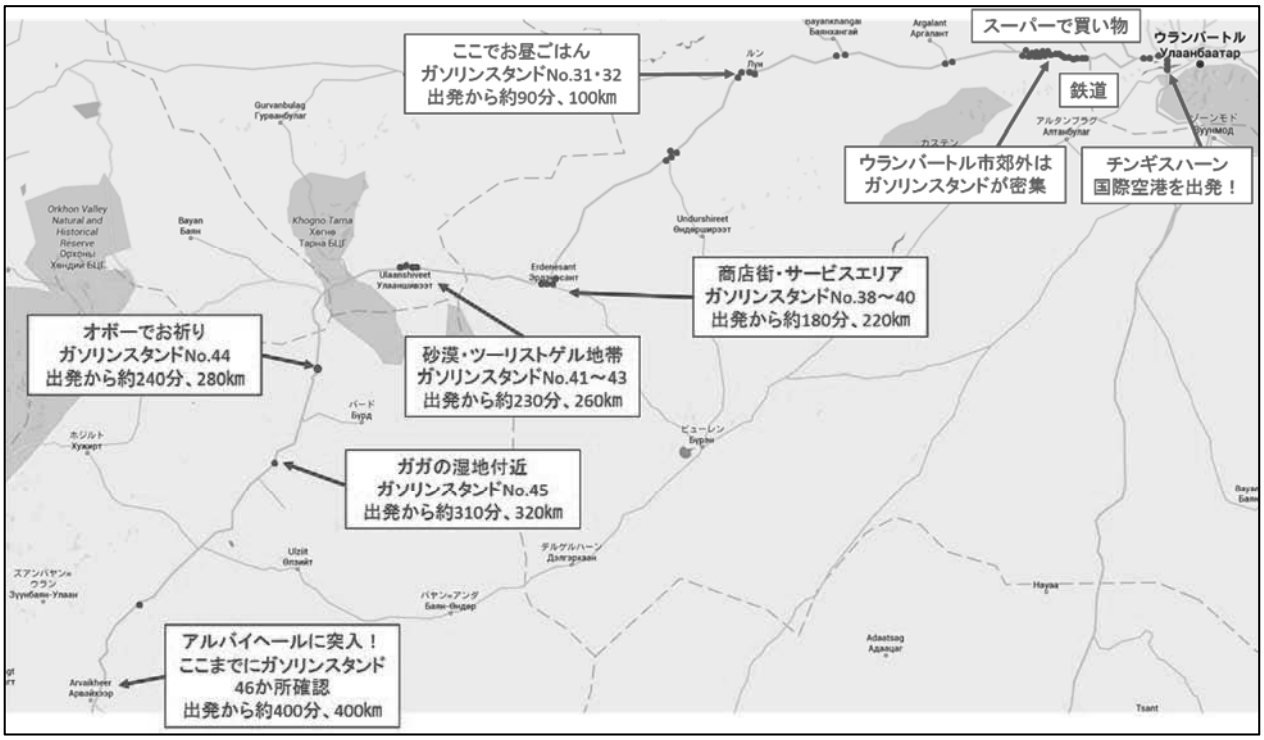


図 6-12　ガソリンスタンドの立地状況（ウランバートル～アルバイヘール）

歴史的視点から考えると、民主化以前はガソリンスタンドは 1 つもない状況であった。車は運送業社や政府は所有、管理するもので、「マイカー」不可能の時代であった。ガソリンスタンドの数は、各アイマグやソムの政府所在地に 1 つあればいいほうだった。もちろん、自動車の数もいまと比較にならないぐらい少なかった。このように、ガソリンスタンドの急増は、モンゴルの変化の側面を示している。すでに指摘したが、これはモンゴルのエネルギー利用の変化を意味し、個人の消費意識や選択の拡大を促している。

なお、モンゴル国内でガソリンを作れるようになったのは、2013 年 5 月からのようである。[7] それまでは、モンゴルには石油が出るところはあっても、工場がなかったため、モンゴル製のガソリンは作ることができず、100%ロシアからの輸入に依存していた。新しいガソリンは MGL93（モンゴル 93）という名前で、輸入ガソリンよりも少し安いようだ。

6.4　モンゴルの道路と運転の特徴（観察調査）

本節では、その他にモンゴルでの移動中に観察していてわかったことを述べる。なお、以下に述べることは 2015 年 8 月に観察したことであることに留意されたい。

6.4.1　モンゴルの道路の特徴

＜幹線道路＞

- 日本車が多い（特にプリウス）。したがって、右ハンドルと左ハンドルが混在している
- 非常に直線的であるが高低差は大きい
- 時々、四角い穴が開いている

[7] http://www.kaze-travel.co.jp/mktnews20130521.html

写真 6-4　幹線道路の様子

＜地方道路＞

- 草原に轍ができている
- 川を車で渡ることがある
- 目印となるようなものは（日本人の私にとっては）少なかった
- 飲酒運転は違法ではないようだ

写真 6-5　地方道路の様子

6.4.2　モンゴルの運転の特徴

- 基本的には右側通行であるが、穴や凸凹を避けるために、真ん中寄りを走行することがある
- 追い越しを行うときには、前を走る車に自分の存在を知らせるためにクラクションを鳴らす
- 追い越しを行うときには、対向車に自分の存在を知らせるためにハイビームにする

6.5　おわりに

最後に、本章の内容について私見も交えながらまとめてみたいと思う。

6.5.1　自動車が普及したことにより、自動車が必要な社会になった

自動車は魅力的である。広いモンゴルを速く、暖かく、便利に移動することができる。それにより、遠くの街まで通勤・通学をしたり商売をしたりすることができるようになった。それらは一度始まるとやめることはないだろう。そして、社

会は自動車を前提とするようになる。すなわち、自動車の普及は自動車の普及の原因となる。

6.5.2　自動車が必要な社会には、自動車による問題が発生する

自動車の普及により首都へと人が集まるようになる。しかし首都の一極集中が大気汚染、交通渋滞、交通事故といった問題を引き起こす。それは都市化現象と本質的に結びついているため、容易に解決できるものではない。解決の方向性は二つあるのではないか。密集を解消し郊外に機能分散をさせるか、密集を利用し公共交通機関や自転車の利用へと誘導するか。それとも第三の道はあるのだろうか。

引用参考文献

1. Disease and Injury Country Estimates, Department of Measurement and Health Information, WHO, 2009
2. https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E9%A6%AC%E5%AF%8C%E5%A3%AB%E5%85%AC%E5%B9%B3
3. 角川文庫『グレートジャーニー　人類 5 万キロの旅 4　極寒のツンドラ、モンゴル運命の少女との出会い』
4. JFE エンジニアリング株式会社　http://www.jfe-eng.co.jp/news/2012/20121025.html
5. http://mongolnews.blog133.fc2.com/blog-entry-396.html
6. 風の旅行社　http://www.kaze-travel.co.jp/mktnews20130521.html

第 7 章　リスク化するモンゴル

岸本紗也加、思沁夫

7.1　オンギー川流域の「異変」

2007 年以降、私たち筆者はモンゴル・ウブルハンガイ県のオンギー川流域を訪れてきたが、地域の人々はかつて経験したことのないほどの「異変」に直面していることが分かった。

オンギー川流域は 3 つの県、8 つのソムから成っており、家畜 100 万頭と人口 1 万 6140 人がオンギー川の水の恵みのもとに暮らしている。だが、モンゴル国の報告によると、オンギー川は 1997 年に断流、地域は深刻な水不足に陥り、家畜 70 万頭、遊牧民ら 7,000～9,000 人に影響を及ぼしているという。遊牧民たちはより良い遊牧条件を求め、放牧地を変えたり、井戸を掘るようになった。

地域の人々はオンギー川の断流という「異変」を経験的に捉えることができないでいた。彼らが経験的に捉えることができるのは、「ゾド」だからである。

ゾドとは、日本語に訳せば「自然災害」になるだろうが、自然災害はモンゴルでは「バイガリーンガムシグ（自然の災害）」と言われ、これは「近代的」な翻訳用語である。

モンゴルの『自然百科事典（最新版）』によると、ゾドとは「気象と関連性のあるとも言える、自然に被害をもたらす現象である」と定義されている。また、『モンゴル最古 21 巻の統合事典』（内モンゴル人民出版社、1979 年）の中では、ゾドとは「飼料を十分に確保できずに困った年」と書かれている。後者の事典では、ゾドを人間と自然との対立、あるいは人間による自然の監視や管理ではなく、飼料の備蓄が間に合わなかった年として解釈されている。これら 2 つの、古典とも言える事典の定義から推測するに、ゾドはモンゴルの遊牧文化に組み込まれ、自然サイクルの中に位置づけられた、日常的な概念だと言える[8]。

ゾドに関しては、文化人類学、歴史学、言語学の分野を中心として研究されてきたが、ゾドの概念は「ボイン」と「ニグル」という 2 つの概念から派生しており、自然現象と人間の精神や信仰と深く関係することが示されてきた[9]。

ボインとは、より良いものをつくる、あるいはより良い状態にすることであり、自然を崇め、また共に助け合えば、豊かな自然と遊牧生活に恵まれ、死後も幸せになれるという意味である。「ボインがある人」と言えば、良いものが集まった人、いわゆる善良な行いの結果による幸運な人物という意味になる。

一方、ニグルはボインとは正反対の概念である。人間の非正常な行為であり、自然を崇めず、利己主義に陥ることで、災いに襲われ、死後も不幸になるという意味である。

善悪は「ツウェール」（つまり、してはならないこと）によって判断可能となる。「今日は西に行ってはいけない」、「水に汚れたものを入れてはいけない」、「聖なる山に向かって唾を吐いてはいけない」、「夜、口笛を吹いてはいけない」、「家畜を叩いたり、蹴ったりしてはいけない」このように日常生活が「無限の」ツウェールで溢れているのである。このツウェールという概念も人間と自然との一体性を示していると考えられる。

モンゴルではチベット仏教とシャーマニズムの影響を受け[10]、自然（山、川、大地、火、岩など）は神聖化され、「自然の主」と人間の調和が図られてきた。つまり、自然破壊[11]は自然の主への冒涜とみなされ、人間にあらゆる災いをもたらすと信じられてきた。その災いこそがゾドであり、自然の主の「定め」として人々は理解してきた。今でもモンゴルではゾドを運命として受け入れるべきだという意見も聞かれる[12]。ゆえにゾドは（リスクのように）理論化されず、規制・管理下に置かれることもなく、むしろ人々の信仰の中に生きてきたと言える。モンゴルの人々は遊牧生活にもとづく経験や知恵（以下、経験知と呼ぶ）から、ゾドの発生を予測したり、ゾドが発生すれば、地域やコミュニティ規模で被害を最小

---

[8]また、ゾドに関連する言葉のひとつに「ガン」がある。ガンとは、雨がほとんど降らず、大地が乾燥することを意味する。

[9] ボインとニグルに関しては、以下の文献を参照した。ナラントヤー『モンゴルの伝統的禁忌』人民出版社、1998 年。

[10] モンゴルの自然信仰に関しては主に以下の文献を参照した。オットホネー・プルブ『モンゴルのシャーマニズム』民族出版社、2006 年。ハイシ『モンゴルの宗教』人民出版社、1998 年。

[11] 自然破壊につながる行為そのもののほか、自然破壊を意味するようなあらゆる言葉を発することも含む。

[12] ツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合・組合長のネルグイ氏は、未年から申年への暦の移行期にゾドが発生しやすいと言っていた。何もゾドに限らないが、モンゴル人は運命や宿命を信じたり、良い未来を信仰によって誓願することはある。旅行、出張、進学、就職、結婚、家屋建築など生活において新たな一歩を踏み出すようなときや人生の節目を迎えるとき、「占い」の結果を指針に吉なる日にちや方向を占う。

限に抑制するための対策を講じてきた。遊牧民の経験知とは、人々や地域ごとに若干異なっているが、筆者自身（思沁夫）の経験知を挙げるとすれば、「この草が生えたら今年は雨が少ない」、「仔牛が尾っぽを空に向かって高く揚げながら走り回れば大雪の冬になる」「渡り鳥が空高く飛んでゆくと今年は冬の到来が早くなり、寒波や大雪に見舞われる可能性が高くなる。渡り鳥が空で低く、大地で休憩しながら飛べば穏やかな冬になる」、「兎年は雨が多い」、「普段、ウサギがあまり観察されない地域にウサギが多いと雨がよく降る」、「申年はゾドが多い」などが挙げられる。

ここで、ヒト、自然の主、ゾドやその他の概念との関係についてまとめると、図 7-1 のようになる。ヒト、自然の主、そしてゾドが、宗教と信仰を軸に循環していることがよくわかる。既述したように、人々は自然を、自然の主として畏怖の念を抱き、主の宿る神聖な領域の侵害を禁じ、そして恐れた。

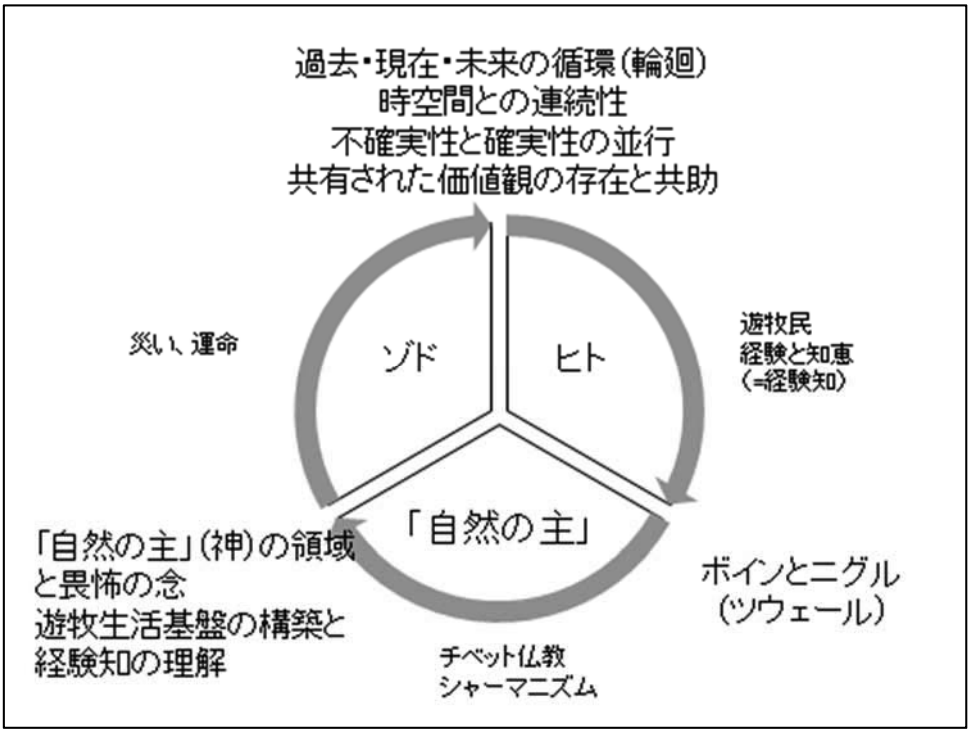


図 7-1　モンゴルにおけるヒト、自然の主、ゾドを巡る概念図

7.2　ゾドの「異変」

しかし、このゾドにも「異変」が起きているのである。ゾドの頻発・深刻化、多様化、予防制御の困難化である。

1930 年代～70 年代にかけて、ゾドは約 3～5 年周期で発生していた。しかし、80 年代以降、ほぼ毎年、連続的に発生している。特に 1999 年から 2000 年にかけて大規模なゾドの連発は、全国の家畜約 7 割が死んでしまうほどモンゴルに深刻な打撃を与えた。

また、ゾドは冬期の大寒波の到来による寒害（ツァガーン・ゾド）、春期・夏期における雨や水不足による干害（ウラーン・ゾド）だけではない。突発的なゾド、つまり集中豪雨とそれに伴う川の大氾濫や大洪水、急激な季節変化とそれに伴う生後間もない家畜や産後の雌家畜への被害も発生しやすくなっている。若い世代に遊牧の経験知が十分に継承されていない。若い遊牧民世帯が河川氾濫の危険度の高い場所（モンゴル語で「ウーリーンアム」（洪水の口））に居住地を構えてしまい、ゾド被害の深刻化を拡大している事例も報告されている。

ゾドの発生に備え、事前に越冬用飼料を備蓄しておかなけらばならないことは分かっている。しかし、現在は越冬用飼料を市場で購入している。言い換えれば、世帯における経済状況が事前準備の度合いを左右するが、生活費や子どもの養育費に出費を要しており、飼料入手の優先順位は低い。社会主義時代、地域では町の住人が増加していたが、それでも町の 4 割近くが遊牧民であり、遊牧生活の維持を念頭に地域単位の行政支援が施されていた。だが民主化以降、遊牧生活は個人や家族単位の営みとなり、自己責任として問題対処しなければならなくなった。

ゾドの「異変」に対処するため、注目されているのが携帯電話を通じた情報伝達である。モンゴルでは都市、地方を問わず、携帯電話の普及率が高い。この環境をゾド対策に有効利用し、ゾドに関する正確な情報を迅速に送受信することが

できれば、ゾド被害を最小限に食い止め、さらに被災状況を的確に把握し、救済措置が施されることが期待されているが、現在まで実用化には至っていない。たとえ遊牧民たちがゾド発生を予測できたとしても、経済的、社会的現況から予防策が講じにくい、あるいはどのように予防したらよいのかその手段を持ち得ていない。

第 4 章「オンギー川との出会い」でも少し触れたが、オンギー川流域の調査で知り合ったツェンデーさん（ゾンドンダンバ氏の末息子）は、2009 年～2010 年に発生した大寒波のゾド発生に伴い、所有していた家畜の約 8 割を失った。モンゴル政府からの支援は一部の家畜の数日分の飼料のみという微々たるものだった。ご自身の資本、兄弟たち、妻の家族からの支援や努力によって、家畜頭数は増加しているが、被害前の頭数まで回復させるには最低 5～7 年はかかるという。彼の娘は大学生になり、学費がますます必要になった。帰省などで交通費もかさむようになった。息子は大学進学を希望していたが、高校卒業後に遊牧地域に残り、両親の手伝いをしている。家庭の経済的状況を考慮しての判断だったのだろう。

モンゴル国の支援体制の不備、個人や親族に依存した自助努力、遊牧世帯の経済的逼迫状況、そして、オンギー川流域では自然環境の変容が、生存基盤を脆弱化させている。ゾドを目の前に人々はますます無力化し、困惑状態に陥っている。モンゴルの遊牧の歴史を概観しても、遊牧の基盤を揺るがし、最大の影響（被害）を及ぼしてきたのはゾドであった。しかし、本稿第 1 節で述べた現象やツェンデーさんの話などから、モンゴルの歴史、ウブルハンガイ県の地域史上、例をみない「異変」が発生していることも確かである。

私たち筆者はゾドの概念では明らかに対応不可能な、多様なリスクがモンゴル社会に蔓延し、猛威を振るっている、かつて経験したことのない「異変」に直面しているのではないかと考えるようになり、地域を取り巻くあらゆる環境や現象、事項をリスクとして捉え、さらに調査を進めることにした。

7.3　モンゴルで恐ろしいもの？モンゴルの現在と未来は？―アンケート調査内容

2015 年 7 月、モンゴルでますます顕在化し、脅威と化しているリスク群を文献調査や私たち筆者の現地調査の結果、モンゴルの近年の現状から推測した。これらリスクに関する認知の度合い、さらにモンゴルの現在と未来について問う質問票を設計した。

その際、回答者になるべく負担のかからないよう、質問数（特に記述回答）を極力少なくした。また質問票は、日本語理解能力に優れたモンゴル人に翻訳を依頼した。同年 8 月、翻訳されたアンケート調査票を筆者（思沁夫）が再確認した。アンケート調査票は約 50 部印刷し、ウランバートルおよびウブルハンガイ県在住、ウブルハンガイ県地方在住の友人、知人に配布した。

アンケート調査票は大きく分けて 2 つの質問項目があるほか、最後に簡単な属性を問う質問（性別、年齢、学歴、家族構成、居住エリア、職業など）についても任意で記入頂いた。以下、質問事項について説明する。

質問 1：

あなたにとって命や生活、環境に悪い影響を及ぼすものを 5 つまで選んでください。そして、あなたが最も恐ろしいと思う順に、選んだ 5 つの項目を並べてください。

下記以外にあれば、＜その他＞の欄に自由に書いてください。

第一に、回答者に命、生活、環境に悪影響を及ぼすと判断されるリスク（事項）を複数選択していただき、さらに恐ろしいと思われる順に並べていただいた。アンケート調査に当たり、私たち筆者は事前調査に基づき抽出されたリスク名（合計 25 個）の一覧をあらかじめ用意し、調査票に示した（表 7-1 を参照）。

表 7-1 筆者が抽出した 25 のリスク一覧

経済不安	交通事故
失業	地球温暖化
金銭不足	ゾド
政治腐敗・汚職	大気汚染
外国政府や企業	水質汚染
都市インフラの不備や途絶	土壌汚染
エネルギー不足	自然資源の枯渇

テロ・犯罪	食糧不足
インターネット障害・情報災害	食品汚染
人口減少・増加	病気
収入格差	アルコール依存症
民族差別	喫煙
原発	

質問 2：
モンゴルの現在と将来について、あなたにお聞きします。
モンゴルの今はどのような状況だと思いますか？
モンゴルの将来はどうなると思いますか？
あなたの意見に最も近いものを選んで、○を付けてください。
それはどうしてですか。上の質問でそう答えた理由を書いてください。

第二番目に、モンゴルの現在と未来に関する質問を設定した。現在のモンゴルの状況、および予測されるモンゴルの未来の状況の程度を「とても明るい」から「とても暗い」までの 5 段階で、自分の意見に最も近い回答を選択し、評価していただいた。次いで先の質問に対する回答の根拠を自由に記述していただいた。

7.4　モンゴルで恐ろしいものは？モンゴルの現在と未来は？―アンケート調査結果

アンケート調査票は 2015 年 8 月に配布を開始してから約 1～2 週間後に回収されたが、同年 10 月、バヤサさんのご協力のもと、アンケート回答項目をすべて日本語に訳した。

16 歳～60 歳までのモンゴル人男女、計 48 名から回答票が得られたことが分かり、回答者の職業は学生、遊牧民、研究員、経理士、法律関係職、エンジニア、無職など、学歴も小学校卒業から大学院卒業までさまざまだった。

はじめに、第一番目の質問の結果を表 7-2 に示す。

表 7-2　命や生活、環境に悪い影響を及ぼすもの（複数回答可）

リスク名	回答数
大気汚染	35
政治腐敗・汚職	29
水質汚染	26
経済不安	20
失業	19
アルコール依存症	18
土壌汚染	17
収入格差	15
病気	14
金銭不足	13
ゾド	11
交通事故	10
都市のインフラの不備や途絶	9
食品汚染	9
地球温暖化	8
喫煙	5
自然資源の枯渇	4
テロ・犯罪	3

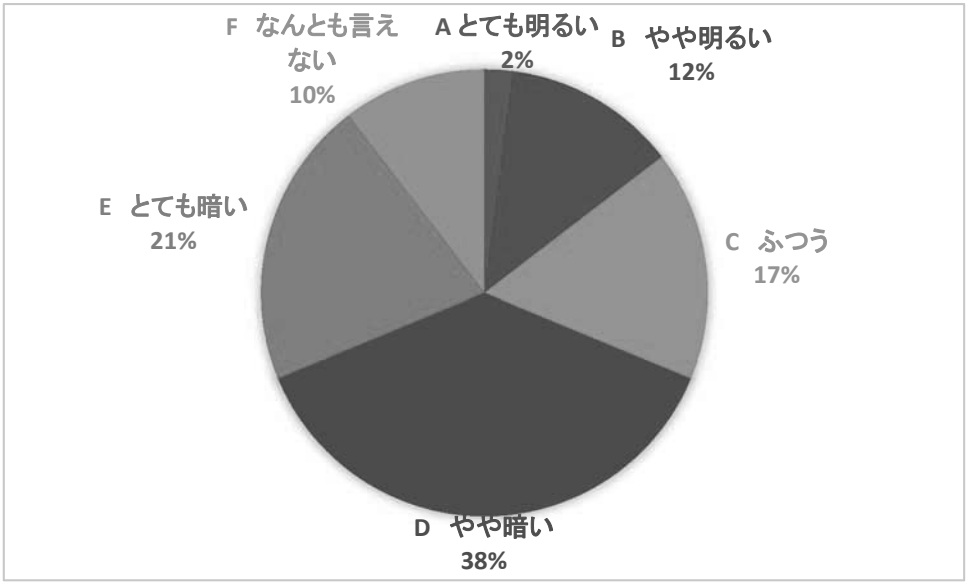
外国政府や企業	1
人口減少・増加	1　（人口減少）
民族差別	1
原発	1
食料不足	1
エネルギー不足	0
インターネット障害・情報災害	0

表 7-2 から分かるように、命、生活、環境に悪い影響を及ぼすリスクは、多い順に「大気汚染」（35 人）、「政治腐敗・汚職」（29 人）、「水質汚染」（26 人）、「政治不安」（20 人）、「失業」（19 人）が選択されていた（括弧内は該当リスクを選択した合計人数を示す）。この結果から全回答者のうち 3 分の 2 以上の回答者が、大気汚染が影響を及ぼすリスクに挙げていること分かる。ちなみにゾドを選択した回答者は 11 名だった。また、エネルギー不足およびインターネット障害・情報災害に関しては選択した回答者はいなかった。

さらに、選択したリスクを恐ろしさのレベルを基準に順位付けしていただいたところ、大気汚染および政治腐敗・汚職（どちらも 8 人）、経済不安（7 人）、失業（6 人）となっており、先の質問に対し上位に挙がった大気汚染と政治腐敗・汚職の脅威レベルが特に高いことが確認された[13]。また、その他のリスクとして記述されていたリスクに「貧富の格差」、「労働と給与価値の不一致」、「人口集中」、「収入の低下」、「情報不足」、「環境汚染」、「自然災害」、「干害」がそれぞれ 1 個ずつ挙げられていたため、これら自由記述で示された事項も考察の対象とすることにした（考察は次節「モンゴルを取り巻くリスク―考察」を参照）。

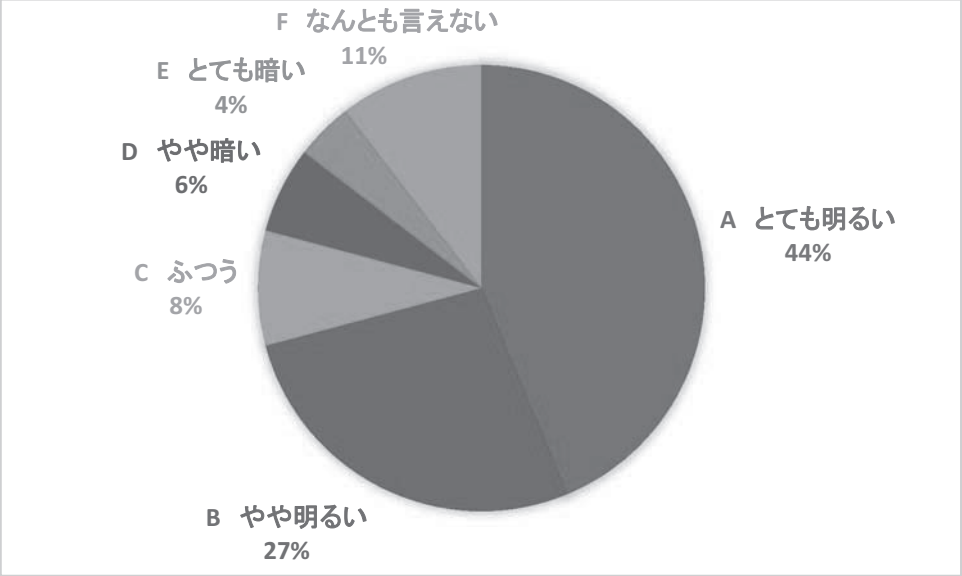
また、グラフ 7-1 および 7-2 に第二番目の質問、モンゴルの現在と未来について質問した結果を示す。

グラフ 7-1　質問：モンゴルの今はどのような状況だと思いますか？（選択式回答）



[13]順位を明記していない回答者が 1 名いたが、考察に大きな影響はないと判断した。

グラフ 7-2　質問：モンゴルの将来はどうなると思いますか？（選択式回答）



上の 2 つのグラフから読み取れるように、現在のモンゴルに関しては「やや暗い」および「とても暗い」をあわせると約 60%近くに達し、多くの回答者が悲観的な見方をしていると判断できる。一方、モンゴルの未来については「とても明るい」および「やや明るい」の回答者を合わせると約 7 割近くに及ぶため、多くの回答者が悲観的立場から一転し、「楽観的な」見解を示していることが分かる。

ではなぜ、そう思うのか。次に表 7-3 および表 7-4 に回答者の記述内容を整理した[14]。

表 7-3　モンゴルの現在に関する評価理由

回答番号	記述回答内容	回答者
A	自然資源が豊かである。	40 代、男性
B	①正しい政策がない②発展の様々な道をうまく利用できていない③高学歴の若者が増加しているが、失業問題は解決されていない④政治的なポストにいる人が傲慢にふるまう。	20 代、女性
	少しずつだが、モンゴル国は次第に発展している。	30 代、女性
	（ことわざより）「口は未来を予言する」と言われている。良いことを言えば、良い未来につながると考えている。だから私も未来を明るく考えている。しかし、改善すべきこと、考え直すことがあり、責任を持って努力していきたい。	60 代、男性
	それぞれの人々がものをつくり、生産しようとしている。彼らによってわずかでも就労の場が生まれている。	30 代、男性
	未回答（2 名）	
C	経済問題、モンゴル国としての借金問題（国際機関への返済困難）などがある。しかしこれは世界共通の課題とも考えている。モンゴルの気候、人々の精神に関してはおおよそ問題ない。	30 代、男性
	まあまあ大丈夫だと思う。	20 代、男性
	モンゴルは発展途上であるため、社会にプラスとマイナスの両面がある。	30 代、男性
	地方の生活はふつうである。	30 代、男性
	失業化、アルコール依存症が問題である。	20 代、男性
	モンゴルは一見すると良い状況である。人々（少数だが）の意識を変えれば、より良くなる。	40 代、男性

[14] 第 2 問目に関しては、同一回答者における選択項目と選択理由が一致しない場合や記述無の回答も若干みられたが、考察に大きな影響を与えるものではないと判断した。しかし、厳密かつ正確に調査研究を進めるためには、アンケート設計や質問の仕方なども含め、課題を認識し、見直す必要があると考えている。

	未回答（3 名）	
D	モンゴル国は人口が少ない。産業がほとんど発展していない。	10 代、女性
	失業者が増えている。アルコール依存症が増え、交通事故、病気、犯罪が増えている。	20 代、男性
	政治家の汚職がひどく、一般の人々は貧しいから。	30 代、女性
	ある程度発展している。建設ラッシュになっており、人々のニーズも増加している。しかし、人々の意識（マナー）が以前に比べ、低くなっている。（例えば、個人中心主義化している）	30 代、男性
	ウランバートルを事例に考えれば、失業者が多い。ゲル地区が拡大しているため、この問題を解決することが困難であると思っている。	20 代、男性
	政況の不安定性（選挙による政党の激しい変化）を改革し、安定的な、持続的な政治を行う必要がある。	20 代、女性
	良い経済政策がないから。	30 代、女性
	貧困、失業、環境汚染、政治汚職	50 代、女性
	貧困問題、失業者の増加、ゲル地区の住民の貧困化	50 代、女性
	今の政治に誤りがある。	20 代、男性
	政治的な混乱、国民教育、モラルの低下	30 代、女性
	政府の不安定、経済混乱、国民の生活水準が低い。	30 代、女性
	政治不安、経済混乱	30 代、男性
	アルコール依存症、高校生のマナー、親の愛情と子どもへのサポートが十分受け入れられない子どももたまにいる。恐喝と盗難がある。	10 代、男性
	政治腐敗	30 代、男性
	経済不安、失業が増加し、金銭が不足している。	20 代、男性
	政治不安、経済混乱、産業化の未発達、特に牧畜業による生産商品の加工工場がない。物価が高い。	40 代、男性
	政治家同士の派閥、福祉分野などの政策が良くない。	50 代、女性
E	賄賂、汚職、誤った経済政策	30 代、男性
	経済不安、政治問題	30 代、男性
	政府の誤った政策、汚職、賄賂がひどすぎる。国民の生活基準が悪化している。	30 代、女性
	情報のほとんどがマスメディアに依存している時代となっていることがよくない。政府の汚職がひどい。アルコール依存症が増加している。一番深刻であるのは、失業の深刻化である。	10 代、性別不詳
	政治汚職、賄賂、不平等、政治腐敗、モラルの低下、アルコール依存症、怠慢がある。	30 代、女性
	政治家だけが金持ちである。一般市民が貧困に陥っている。金持ちの政治家は一般市民の暮らしを理解していない。だから、政治家の打ち出す政策は間違っている。モンゴル通貨の価値が下落している。	20 代、女性
	あまり物が買えなくなった。（物価の上昇による）	20 代、男性
	発展するチャンスがある。良い政策が重要である。	30 代、男性
	未回答(2 名）	
F	鉱山開発によって、遊牧民の放牧地（牧草地）、生活圏、ふるさとが奪われ、生存基盤が破壊されている。	30 代、男性
	権力者が真面目に仕事をしない。能力に欠けている。汚職が蔓延している。	10 代、性別不詳
	政策に誤りがある。物価が上昇している。従って、国民の生活水準が低下している。	30 代、男性
	政治家同士の派閥、紛争、政治的権力によって、社会に悪影響を与えている。	20 代、女性

表 7-4　モンゴルの未来に関する評価理由

回答番号	記述回答内容	回答者
A	①高学歴の若者が増えている。 ②様々な発展の道がある。（例えば、鉱山開発、鉄道建設、国際協力（隣国と　の協力政策）） ③正しい政策　…１.医療　２．教育　３．警察機関 ①～3 の分野に関する政策を行い、良いシステムを構築できれば、国は発展するだろう。	20 代、女性
	①地下資源、鉱物資源を正しく利用できればモンゴルの未来は明るい。 ②高学歴の若者が増えている。彼らはモンゴルの未来であるため、モンゴルが発展すると期待している。	30 代、男性
	モンゴルが良く発展しているため。	30 代、女性
	私たちモンゴル人は未来を信じ、前向きに暮らしてきた国民であるため、明るい未来の暮らしを期待している。権力を握った上の者が椅子（＝ポスト）にしっかり座れば（＝責任を持って政策を実行する）、下の者（＝一般の人々）の暮らしも良くなる（マナー、意識も向上され、社会も良くなってゆく）。	60 代、男性
	モンゴル人は頭が良い国民であり、モンゴルには広大な土地がある。	30 代、男性
	自然資源、モンゴル人の能力、広大な土地	30 代、男性
	（ことわざ）苦労の末に幸せが訪れる。 そう信じられているため、良くなると信じている。平等な社会を来ると、皆が信じているから。	30 代、女性
	自然資源が豊かであるため、正しい決断をし、正しく利用できれば、モンゴルの未来は良くなると期待している。	30 代、男性
	若者である私たちはモンゴルの未来である。自分の未来のために努力し、明るい未来を期待している。	10 代、年齢不詳
	モンゴルは現在、発展途上国のひとつだが、今後はより発展してゆくだろうし、明るい未来が期待できる。	10 代、年齢不詳
	ものづくりや生産がうまくいき、発展すれば、人々が就労でき、収入も得て、生活が良くなる。	30 代、男性
	人々の教育が高くなり、意識が高くなれば、政治だけでなく、個人の生活も向上し、モンゴルは発展できると思う。	30 代、男性
	モンゴル人は口で良いことを言えば、良いことにつながると信じている。	40 代、男性
	家畜に恵まれている。土地が広い。資源が豊かである。	30 代、男性
	モンゴルは豊かな国である。（地下資源が豊富、家畜に恵まれている。）人口が増加し、若年層が増加している。彼らの努力によって、将来的に国が発展することを期待している。2 つの隣国（つまりロシアと中国）以外に日本などの第三国との国際交流、協力関係が発展している。	40 代、男性
	若者が高学歴になっている。彼らは能力が高い、重要な人材になっているため、みんながそれぞれ努力すれば、困難は乗り越えられる。	20 代、男性
	未回答（5 名）	
B	発展する。人々の意識が変わりつつある。	30 代、女性

	①モンゴルの若者が先進国で教育を受けることが増えてきた。彼らが帰国し、就職すれば状況が変わる。 ②モンゴルは遊牧国家である。牧畜と農業をバランスよく発展させれば、鉱山開発よりも、モンゴル国民のオーガニックな食品によって自給自足できる。最終的に経済も発展し、人々は健康的に生きることができる。 ③モンゴルは安全な国である。 ④地下資源が豊かで、面積が大きい。人口密度は低い。日照時間が長い（それは、太陽エネルギーを資源として利用できる可能性も考えられる）。全国的に自然がほとんど破壊されていない。自然のままが多い。	30 代、男性
	現在の経済的な混乱を乗り越え、政治的な状況も改善され、人々の希望が膨らんでいるから。人々の希望というのは、働きたい、モノを生産したいという希望のことをいう。	20 代、男性
	以前に比べ、ウランバートル市のインフラが発展しているから。	20 代、女性
	2016 年の選挙で良い政治家が当選すると期待している。	30 代、女性
	政策を改善し、全国民が平等に教育を受けられ、就職できたら国は発展する。	50 代、女性
	良い未来を期待している。	50 代、女性
	モンゴル国は資源が豊かである。モンゴルの若者が高学歴になっている。	30 代、男性
	国はきっと発展する。経済も良くなる。国民の暮らしも良くなる。	30 代、女性
	若者が高学歴になっている。彼らが政治家になる頃には、彼らの知識や高度な技術が国を発展させる。	30 代、男性
	モンゴルの未来は政党、政治、経済の安定政策による。	20 代、女性
	政治、政策を改善し、うまく実行できれば。（＝安定した政治状況になれば）	20 代、女性
	未回答(1 名）	
C	失業者に就労の機会を与える政策を考える。失業化を減少させる。職を与える際、学歴で差別しないようにする。貧困者にチャンスを与える。政治的な権力や、賄賂や知人を通して採用する等、人間関係のネットワークで職を与えることはあるが、これを止めさせる。	20 代、男性
	時間が経てば、すべてが変わる。	20 代、男性
	未回答（2 名）	
D	モンゴルの未来を担う子供たちが無責任であり、子どものしつけが不十分だから。	10 代、男性
	現状はとても暗いが、明るい未来を期待する。心が優しく、正直な人々がより増えれば、良くなるだろうと思う。	40 代、女性
	未回答(1 名）	
E	このままでは駄目ですよ。（政況の不安定）	30 代、男性
	①賄賂を渡す人②賄賂を受け取る人③政治腐敗④経済	40 代、男性
F	うまく説明できない。	10 代、女性
	社会が混乱している。政治汚職がひどい。給料が低く、物価が高い。貧富の格差が拡大し、犯罪が増加している、など。	50 代、女性
	市場経済体制に移行してから、社会、経済、政治が常に変動してきたため、説明し難い。	30 代、女性
	未回答(2 名）	

7.5　モンゴルを取り巻くリスク―考察

オンギー川の異変、ゾドの異変、また今回初めて実施したアンケート調査結果からまず明らかになったこと、それはモンゴルが明らかにリスク化しているということである。ゾドは完全に姿を消したのではなく、ゾドの概念や遊牧の経験知からは理解と対応し難い現象が発生しており、ゾドの概念を再検討すると同時にリスクを通じて、モンゴルの現状を分析し、その研究成果を政策提言や問題改善に活かさなければならない[15]。

私たち筆者はモンゴルを取り巻く諸現象や事項をリスクと考えている。リスクおよびゾドの定義はさまざまであるが、その本質は不確実性にあり、共通している。しかし、リスクとゾドの確たる違いは、リスクは多種多様な様相を持ち、あらゆるレベルであらゆる影響を及ぼす、もはや個人や家族、共同体、国家の対処可能な領域を超えてしまっていることである。リスクの発生源や結果、因果関係の究明は容易でない。あらゆる研究分野で推測や分析がなされていると思うが、リスクは非常に複雑多様なかたちで見え隠れしている。リスクが要因、結果、さらにリスクの促進/合成材料として相互補完し合い、モンゴルおよびモンゴルを取り巻く状況をより複雑重層化させ、リスク化させている。

以下、モンゴルの政治、経済、社会、文化的様相からリスク化するモンゴルについて考えてみたい。また、アンケート調査の結果、特に恐ろしいと位置付けられた大気汚染を取り上げ、筆者の経験も交えて考察したい。

モンゴルは 1990 年代初頭に民主主義制度を導入し、大転換期を迎えたと言える。モンゴルでは集団ではなく個人が尊重され、監視から解放され、人々は自由になっただろう。しかし、自由には責任を伴う。あらゆる選択や決断だけでなく、外部からの影響に対する対応も自己責任と化した。

民主化によってモンゴルの主要産業は牧畜業を抜いて鉱業がトップに立つという産業転換も起こった。モンゴルは国際社会を構成する一国として、世界約 100 か国以上の国や地域と政治的関係を結び、また経済取引を行うようになったが、国内経済はここ 2 年間をみても急速に悪化の一途を辿っている。モンゴルの輸入相手国は中国とロシアであり（輸入品目の約 6 割を占める）、輸出相手国は中国がトップ（輸出品目の約 8 割を占める）である。世界に加え、露中両国の経済変動がモンゴルの経済動向を牛耳るという、不均衡な貿易構造が成立してしまっている。モンゴルは生石炭や鉄などの鉱物資源を「付加価値なしで」中国へ流出させている。これは明らかにモンゴルにとって不利な状況である。中国経済の減速は、モンゴル産業に大きな打撃をすでに与えている。しかし、モンゴル経済はある特定の財閥によって君臨されており、政治癒着が問題に拍車をかけている。

モンゴルの政治は経済界、教育界と癒着状態にある。選挙実施の度に企業や教育機関の首座がたちまち入れ替わる。理念や活動の一貫性と継続性は明らかに欠落しており、国際協力や連携にも大きな混乱と不安を引き起こしている。実際、大阪大学がモンゴル国立大学と教育支援プログラムの提携を始めようとしたその矢先に選挙で民主党が逆転し、総長が交代、組織メンバーが刷新されたため、協議は一からやり直しとなったことがある。民主化のひとつの成果が選挙であるが、選挙の実質は果たして民主的なのか。疑問が残る。

世界のどの国や地域においても格差というのは確かに存在するのだろうが、モンゴルにおける貧富の格差は著しい。従事する職種等によって収入には雲泥の差がある。筆者（岸本）が複数のモンゴル人の友人から聞いたところによると、鉱山開発系企業のエンジニアの月収は約 30 万円、国立病院の医者の月収は約 5、6 万円である（2013 年時点）。

また、少し古いデータになるが、モンゴル国家統計委員会および世界銀行の「世帯の社会経済調査」によると、2011 年のモンゴルの貧困率は、29.8%であり、モンゴル人の 10 人に 3 人は貧困者だと言われている。モンゴル人、83 万 7600 人が最低限の食料品およびその他生活必需品が入手できないでいる。

実は、モンゴルの物価は日本とほとんど変わらない。筆者（岸本）も 2013 年～2014 年の間、ウランバートルにおいて月収 5 万円程度で生活を始めたが、友人らの物的および経済的支援なくして、生活継続はかなり厳しかったのが正直な気

[15]例えば、北海道大学や国際協力機構（JICA）は、モンゴルのゾド対策に関する共同研究を既に実施しているが、研究対象は主に牧畜分野に限定されていた。モンゴルにおける人々の移動や居住の形態はさまざまである。遊牧民も地方や都市部に居住地を構えつつ、遊牧するようになっている。人口登録上は遊牧民であっても都市との密接な関係性を持ちつつ生活している。このような社会変化も踏まえ、新しい視点を導入したゾド研究が求められている。

持ちである。
モンゴルでどのように生きてゆくのか。地域やコミュニティ間との関係性が希薄化する中で、どのようにして生きてゆけばいいのか。事実、モンゴルでは個人の責任として判断される傾向にある。

格差社会において人々の労働環境は監視と隔離という一種の暴力的側面を持っている。就業安定は難しく、常に失業の不安を抱えなければならない。筆者（思沁夫）はカシミヤを扱う某有名企業の社長と話す機会があった。彼自身の裁量で社員を退職処分にしてきた。2014 年の間にリストラした人数は正確に記憶していないが、15 人はいたと話していた。モンゴルでは鉱山開発現場も然り、労働環境や労働上の権利が全く保障されていないわけではないが、実質的に厳守されていない。協議プロセスは一部の関係者しか公開されず、行政と企業との癒着が事態を正当化してしまっている。また、モンゴルのザマールでは、2012 年および 2013 年に企業と地域間の紛争が勃発した。企業はフェンスで覆われ、厳重な警備体制が布かれた。企業が地域から身の安全と「正常な」労働現場を確保するために講じた手段だった。企業と地域との対話は遮断され、企業が収益目的に活動を展開した結果、ウブルハンガイ県における場合と同様の、鉱山開発による水資源を巡る環境問題が発生した。

地球レベルで都市化が進行するのと同様、モンゴルにおいても都市化が著しい。モンゴルでは全国人口の約半数がウランバートルに暮らすと言われる。地方においても都市化が進んでおり、全国で人口約 7 割近くが都市生活者である。世界的に見ても人口集中が顕著なウランバートルでは、居住環境や就労、進学を巡り、競争や対立が発生しやすいリスクを抱える。

人々の移動手段も変わった。馬やラクダではなく、車とバイクがモンゴルの大地を横断している。移動の利便性が高まったと言えるが、滑らかな舗装道路の少ない地方でスピードを出しすぎたり、飲酒運転によって、車両が転倒したり、家畜などに衝突したりする事故が発生している。家畜の盗難件数も増加していると聞いたことがある。羊 2 頭は 2 人の大人に挟まれ、容易に連れて去られてしまう[16]。
また、車とバイクはエネルギー、つまりガソリンなしに本来の機能を果さない。モンゴルでガソリン代は決して安くなく、経済的負担につながる。

モンゴルを取り巻くリスクが複雑重層化し、人間の生命、健康、環境を蝕む確たる現象として表れているのが、都市部、特にウランバートルを中心とする大気汚染である。筆者が今回実施したリスクに関するアンケート調査においても、悪影響を及ぼしている現象として大気汚染を挙げた回答者が特に多かった。

2013 年、世界保健機関（WHO）は、ウランバートルの大気汚染を「世界最悪レベル」と報じた。2013 年当時、ウランバートルに暮らしていた筆者（岸本）も大気汚染の深刻さを身体でもって痛感した。11 月～3 月頃の私の髪と衣服には常に煙の臭いが付着していた（これは周りのモンゴル人も同様だったが）。頭痛、目やのどの痛み、黒い鼻水、呼吸のし辛さに悩まされた。ついに体調を崩してしまい、病院で診察を受けることにしたが、医者は筆者と同じような症状を抱えた患者は山のように溢れており、何も深刻でないと話したのには驚いた。

ウランバートルは今から約 370 年前に仏教都市として誕生したと言われるが、人々は当時から大気汚染に悩まされているのではない。ウランバートルの大気汚染問題に調査のメスが入り、国家および国際レベルでの本格的な対策が講じられ始めたのは 2010 年代に入ってからであることから、近年に顕著化している問題だと考えられる。
大気汚染には、モンゴル民主化以降の社会および文化的な著しい変化（ライフスタイルの変容など）、ウランバートル市内に複数隣接する老朽化した石炭火力発電所の稼動、地区暖房ボイラ施設および小型石炭焚き温水ヒーター、ゲル地区のストーブの使用、自動車などからの大量の汚染物質の排出など、（モンゴル国内および外国でしばしば指摘される「主な」要因を挙げただけであるが、）複数多様な要因が絡み合っていることがよく分かる。
モンゴルでは大気汚染による癌、呼吸器系疾患、循環器系疾患患者の増加は指摘されている。国内ではアメリカ、ドイツ、韓国、日本など諸外国の研究機関と連携し、ウランバートルにおける大気汚染の調査研究が進められ、国家、家庭、

[16]狼による被害も報告されている。ツェンデーさんによると、ここ 5、6 年で家畜が 4 度盗まれ、3 度も狼の被害に遭った。

個人レベルで様々な対策が講じられているものの、根本的な解決方法はまだ見つかっていない。図 7-2 を粗く読むだけでもウランバートルの大気汚染の様相がかなり複雑化しており、グローバルレベルの議論が緊要と判断される。

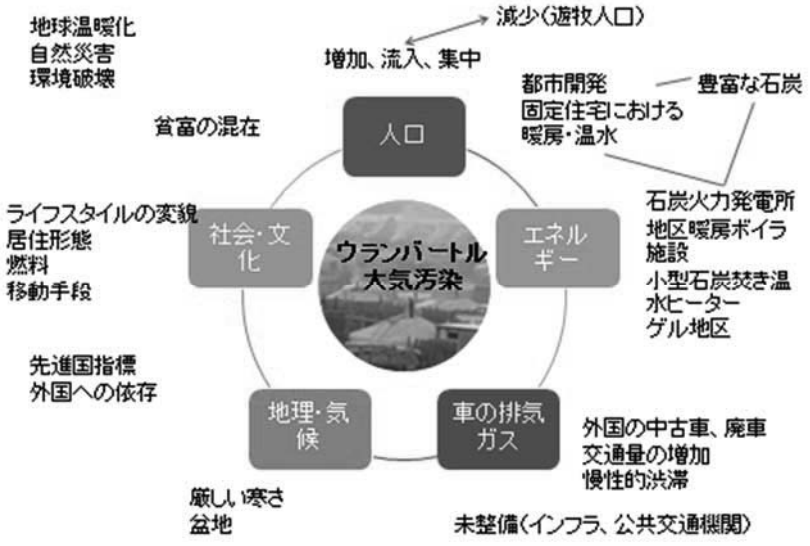


図 7-2　ウランバートルの大気汚染とその主な要因

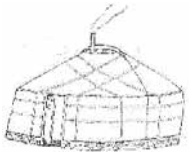
今回のアンケート調査から、モンゴルにおいて人々は現状に対する不安定性を嘆き、不安や不満を抱き、人間のモラルの低下を懸念しつつ、モンゴルの「発展」の可能性を政府の抜本的革新や若者たちに託すか、自身が祈り、モンゴルの明るい未来の到来を信じる傾向にあることが分かった。夢や希望を描くことが必ずしも悪いとは言わないが、完全な楽観主義になってしまえば、具体的手段が講じられないまま、いつまでも「理想」に終わってしまう危険性がある。ゾド、ヒト、「自然の主」の連鎖性、循環性が意味するように、過去、現在、そして未来をつなぐプロセスを明確化する必要がある。

モンゴルのリスク化は、まさにモンゴルにおける人々自身（とりわけ莫大な富を握る一部の人々を中心として）が招いている。また自分自身をふり返ってみるとどうだろうか。
目先の利益や損得に注意を奪われていないだろうか。
世界の中における自分の位置を出来る限り客観的に眺めているだろうか。

あらゆる事象と問題は遊牧文化の経験知ではもはや解決できないことは既に述べた。モンゴルの人々に限らず、私たち人間はこの世に生まれた限り、何らかのリスクを抱えて生きることになる。ゼロ・リスクというのは有り得ない。
ウルリッヒ・ベック（Ulrich Beck）が述べるように、近代化、産業化において奨励、賞賛された富の生産・増幅は、環境破壊や放射能汚染などをはじめとする地球と人間に負の影響をもたらし、人々はまさにその影響下に生きている。
しかし、私たちには望みがある。リスクを予防したり、被害を最小限に軽減させることはできるからである。

私たち筆者はモンゴルの現状や人々の声につぶさに耳を傾け、数々の課題の中から最優先課題を選択し、克服し、やみくもではなく、どのように前進してゆくか、ひとつのモンゴルの未来像を描き、前進しなければならないように思う。
本稿ではすべてのリスクについて考察を深めることはしなかったが、今回のリスク調査を皮切りに、さらに分析を進め、研究を継続していく所存である。

コラム
わたしとモンゴル



岸本紗也加

私はモンゴル・フィールドスタディ（2015 年度）に同行することになった。自分の過去をふりかえれば、これで 5 回目の渡蒙になる。かといって、私はモンゴル語が流暢に話せるわけでもないし、モンゴルの立派な研究者、専門家でもないため、まだモンゴルについて知らないことのほうが多いのが事実である。

私は学生時代にオーストラリアとフランスに留学し、北アフリカのモロッコも複数回訪れ、調査研究を行った。特に明確な目標や事前準備を重ねた結果、訪問先を決定したのではない。むしろ偶然に依拠するところが大きい。過去の留学歴、調査歴を知る周囲の人々は、必ずと言って良いほど私にこう質問する。

「何でモンゴルなん？！」

私は答えを持っていない。正直、私自身もよく分からないのである。そのあと、モンゴルがどんな国なのか、どんな生活をしている人たちがいるのか、質問攻撃にあうのが常である。

モンゴルは、私たちが知っているようで知らないような国である。小学校の国語の教科書に登場する物語『スーホの白い馬』でモンゴルに初めて「出会った」。社会の教科書では、モンゴルが遊牧国家であること、移動式の住居（ゲル）に暮らす遊牧民たちがいることを知った。テレビの大相撲中継から、モンゴル出身の力士の多いことも知った。正直なところ、私は大学院生になるまではこれぐらいの知識量、情報量しか持ち合わせていなかった。

大学院では、偶然であるが、モンゴル人留学生のツァガーンチョーローンさん（日本語ではツァガーン＝白、チョローン＝石を意味するため、日本語名は「白石さん」になるだろうか）家族の皆さんに出会った。

1990 年代初頭の民主化以降、現在に至るまで、日本はモンゴル最大の援助供与国である。経済支援だけでなく人的交流も次第に盛んになっているとも言われる。外務省によると、2014 年 12 月時点で日本ではモンゴル国籍の外国人 5,796 名が登録されている。彼らは就労やビジネス、留学などを主な目的として、日本に滞在する場合が多く、その数は増加傾向にあるようだ。

モンゴル人留学生は私と同じ研究室に所属し、指導教員も同じだった。生活チューター、論文チューターなどの事務的な、アルバイトとして顔を合わせ、話しすることから、次第に彼らの家庭も含む日常的な、親密な交流に発展していった。また、モンゴル・フィールドスタディの引率教員を務めた、思沁夫先生とも大学院の開講課目の受講を通じてお会いした。思先生からも多くのモンゴル人の方を日本でご紹介いただき、お食事や研究する機会も次第に増えていった。

初めてモンゴルの地に上陸したのは 2011 年 8 月だった。調査研究目的の滞在で、ほとんどの時間をウブルハンガイ県で過ごした。そのとき、今回のフィールドスタディの活動拠点であるウブルハンガイ県ツァガンボルガソを訪れた。そのときは宿泊することはなく、宿泊施設を見学し、遊牧民環境保護組合の設立者兼組合長であるネルグイさんにお会いし、ご挨拶したぐらいの記憶しかない。2015 年現在、ツァガンボルガソとネルグイさん、組合員の皆さんとの関係は、大阪大学のフィールドスタディの実施と受け入れというかたちで、交流がますます深まっている。

私の辿った数年間の人生をふりかえっただけでも、モンゴル留学や日本語教師／ボランティア、調査研究という様々な形態でモンゴルと関係を持つようになったことが改めてよくわかる。これは私の綿密な未来計画の実現を意味しているのではない。むしろ、自分と周囲を含めた意思の重なり合いの結果と言う方が相応しいような気がする。

日本で暮らしつつ、今でも、ふと頭をよぎるのはモンゴルで出会い、交流してきた人たちである。モンゴルの皆さんの笑顔とおもてなしの心からは想像し難いほど、彼らは本当に多くの課題を抱えている。政治腐敗、経済不安、貧困、教育格差、衛生不良、大気や土壌、水質汚染をはじめとする環境の問題、治安悪化、そして家庭や個人レベルでは、借金、家庭内暴力、アルコール中毒、自殺など。これらは彼らにとって単なる抽象概念ではなく、疑いなき事実として、彼らの生活、生命の維持を脅威に晒している。これらの現実はモンゴルでたった 1 年間生活する中で、身震いしてしまうほど、私にひしひしと伝わってきた。

そのとき、私はよく考えた。私はモンゴルで何をしているのか。何ができるのだろうか。モンゴルにどんな影響を与えているだろうか（正と負の両面において）。明確な答えはまだ出せていない。どのようなかたちになるのか、まだはっきりとは想像できないが、現地や現地の人々の声から、粘り強く、しかし謙虚に学び続けてゆきたい。

第Ⅳ部　意識

I) Нүхэдтэйгээ суугаа айлцаж бүй хүн.
II) Рашаан хүрэхэ бүй зураг.
III) Рашаанд зураг.
IV) Гол гатлах бүй хүн.
V) Усны таласт өөрчлөгдөн ирэхэ хорт могой бөгөөд сүнс бна.
VII) Тамын эрх дэр тогоонд бүй хүмүүс.

第 8 章　自然観と美的感覚
―あなたが守りたい生物は何ですか？―

轟晃成・岸本紗也加

8.1　はじめに

8.1.1　調査背景と目的～きっかけは環境保護の授業～

きっかけはある日の思先生の講義であった。“あなたが環境保護をすると想像してください。この中でどの生物を守りたいですか（生きもののリストを渡されて）。”

この問いかけが心に残っていた。自然環境の保護をするときには、すべての生物（植物・動物）を保護することはできない。一つの理由は、資金・労働力といった資源の限界があり、どこまで保護するか、すなわち優先順位を付ける必要が出てくるからである。もう一つの理由は、「すべての」生物を保護することはそもそも本質的に不可能であるからである。すなわち、食物連鎖に介入して何かの生物を保護することによって、別の何かの生物は駆逐されてしまうことになるからである。

自然環境の保護をする動機として、一つは環境保護思想・倫理が根拠として考えられる。一方で動物観は文化や地域と直接関係するので、地域・文化によって変わってくるものと考えられる。特に、いまのモンゴルは歴史的な転換期にある。社会・個人の構造的分析と個人に注目した分析の両方が必要であると考えられる。

そうした背景を踏まえて、自然豊かなモンゴルで、好きな動物・植物をインタビューし、環境保護教育や活動に貢献できるような知見を引き出すことを本調査の目的とする。

8.1.2　本章の構成

本章は、4 つの内容で構成している。まず、モンゴルにおける基本的な自然哲学について、ネルグイさんの講義で教えていただいたことを紹介する。それから、好きな動物と植物のインタビュー調査の結果に移る。それから、好ましい顔の特徴についても調査を行ったので、3 つ目の話題とする。これは、自然環境による価値観形成の他の例として、美的感覚も考えてみては面白いのではないかと考えて行ったものである。最後に 4 つ目の話題として、これもネルグイさんのお話であるが、美と平和を結び付けて話してくださったことが大変深いものであったため、ぜひ紹介したい。

自然環境、出生地、自然観・自然哲学、動物、植物、美的感覚、そして平和――これらがどう繋がっていくのだろうか。

≪自然観≫

8.2　自然哲学（ネルグイ氏の講義より）

本節では、ネルグイさんに講義を頂いた内容から、自然に関することを整理する。好きな動物や植物に繋がっていく哲学となるものである。

写真 8-1　ネルグイ氏の講義の様子

8.2.1　モンゴルの自然哲学

昔のモンゴルでは、自然との共存は自分の生活を営む上で欠かせない掟である。モンゴルの自然との共生は「自然信仰＝万物有霊」に現れる。つまり、自然界は主(神＝ロス・サバドグ)が支配するという考え方である。そのために、自然を大切に使わないといけない。

モンゴル人の自然観は大きく、シャーマニズムとチベット仏教によって構成される。チベット仏教によってシャーマニズムは大きな打撃を受けたが、無くなったわけではない。社会主義時代まで、仏教を中心とする共生関係は見られた。つまり、自然との関係は複雑化し、多様な信仰形態、習慣と文化が形成されたが、「自然信仰＝万物有霊」は継承された。

ネルグイさんは モンゴル FS のための講義で、モンゴルの自然哲学を、“すべて生命があるものには魂が宿る。すべて生命のないものも神の領域にとどまる”とまとめた。 生命あるものは敬意を払い、生命ないものも神の影響が及ぶ為、大切に扱わないといけない。また、自然を破壊する行為は神に背を向けることであり、ゾドと不幸として神の罰を受ける。

神といってもいろいろいるので、モンゴルの神は「テングル(空)」として具現化される。テングルは自由自在に形を変えることができ、すべての自然がテングルにつながっている。そういう意味でモンゴル人にとってすべての自然が信仰対象になるが、シャーマニズムや仏教などの影響をうけて、また氏族形成、民族誕生、さらに清朝の盟旗制度(宗教と政治の一体化)の影響を受けて、オボー、聖水・聖山、神秘的自然現象、聖人と関係する場所などが特に重要な祈り場となっている。しかし、地域によって、場合によって家族によって祈る場所、対象が異なるため、祈りは依然自然全体に及ぶといっても問題ないと考えられる。

8.2.2　白い柳の物語

この地域（ツァガンボルガソ）はその象徴であり、モンゴル人自身の自然哲学と深くかかわっている。こんな伝説がある。400 年くらい前、ダライ・ラマ 3 世がこの地域を旅していた。昔ここは何もなかった。彼がこの地域を通過した後、白い柳が生えてきた。この地域の人は伝説を信じている。その理由は二つある：①白い柳はこの地域にしかないため。②(民主化されるまで)ずっとある一定の規模で白い柳は生息していたから。

地域に残った言い伝えによると、今から約 400 年前ダライ・ラマ 3 世がこの土地を訪問した。その時、彼は、この地はモンゴルの中で美しい土地で、大切にしてくださいと言い残した。また、ダライ・ラマ三世が訪問後、オンギー河沿いで白い柳が生え、短い時間で数を増やし、柳の林となった。

また、この土地が生んだ 19 世紀のモンゴルを代表する宗教思想家ツェフェルワンチグドルジは、思想や宗教活動を遊牧民の生活や幸福に結びつけることが大切と考え、寺院中ではなく、ゲルの中で修業し、薬草や家畜病の治療方法も研究された。ツェフェルワンチグドルジの研究者であるネルグイさんは、自然の美しさに加えて、宗教的にも大切な土地と考えて保護活動をしようと決心した。

写真 8-2　ツァガンボルガソ

写真 8-3　白い柳を保護している様子[1]

8.2.3　社会主義～民主化による変化

モンゴルはソ連に続いて世界で第二番目に誕生した社会主義国家である。文献によると、モンゴルは封建社会から出身や身分と関係なく、平等な社会を目指していた。社会主義時代からモンゴルの自然観は大きく変わりつつある。それは、伝統が衰退し、近代化科学、知識と一緒に西洋的思想、価値観の浸透である。

社会の変化には困難を伴う。そこで、人間は固有の価値観・行動規範を疑い、新しい理念も受け入れる前に自分の利益

[1] りそなアジア・オセアニア財団により支援されている。

を優先して生きていくようになる。社会主義は制限された生活である。その強制的な社会のなかでは伝統的な文化は禁止された。民主化されたとたん、技術、資本、政党、何もないことに気付いた。生きていくためには何かを使わないといけない。そこでモンゴル人は自然を自分の資本としようとした。ロシアも同じ。中央アジアでも同じ。社会が混乱するときには自然を破壊される。

地域の人の話によると、タルバガン（モルモット）は、かつては一匹ずつ捕獲して、肉は食べて、革は帽子にしていたが、中国で売れることがわかってからは、革を売るために乱獲するようになり、革をとったら肉は捨てる。今ではもうタルベガンはほとんど見かけなくなった。周りが自然を傷つけることで加速した。そこには群衆的な心理が働いているのだろう。確かに、私たちも現地で１週間生活したが、タルベガンを見かけることはなかった。

もちろん、乱獲はタルバガンだけではない。多くの野生の動物が減少し、森、木、植物も拝金主義や社会制度の変化などによって影響を受けた。ツァガンボルガソ（白い柳）もそうである。

8.2.4　川との関係性

1988 年ではモンゴルの人口は 200 万人前後、そのうち半分以上が遊牧民であった。2015 年では人口は 300 万人で 15%だけが遊牧民、つまり 45 万人は遊牧民で、そのうち成人した遊牧民は 20 万人くらいである。

町で水を使うのと、遊牧民として水を使うのは意味が違う。社会主義までの遊牧生活は完全なものであった。夏は川沿い、秋は山、冬は山の南側の斜面でキャンプ。川の氷や雪を溶かして生活していた。これが「ハンガイスタイル」である。ゴビでは井戸を掘っていた。今の遊牧生活は「半移動」である。夏の川沿いと、冬の山。必ずしも大きな川の近くではない。

8.2.5　ごみについて

本来、モンゴル文化はごみを出さない。今から約 400 年前アルバイヘール(当時は“ウイゼングンギン・フレー”と呼んでいた)にアギ・グニー・スムという仏教寺院があった。この寺院に多いときは 1000 人近くラマ僧たちが修行していた。[2]この町にはラマや彼らの生活を支える遊牧民、巡礼者や商人などたくさんの人が住んでいた推測される。それが破壊されるまでの 400 年の間に、どれほどのごみが出ただろうか。高さ３、4m、直径 10mの土の塊が二つあるだけで、その中にもごみらしきものは何もなく、灰、土や壊れたレンガなどがあるだけである。

モンゴル人は家畜が落とすものを「糞」とは言わない（牛の糞は「アラガル」、他の動物の糞は「～のホルゴル」と言う）。ごみではなく、燃料として、子どもの遊ぶ材料として利用できるからである。遊牧民のルールは、「住んだ跡を残さない」ことであった。

民主化以降、モノが増えた。意識も変化し、自分中心の生活になった。物質的な変化があったにもかかわらず制度がない。モンゴル人は心の奥底では自然を汚すことには抵抗がある。法律が成立すればこの現状が変わるはずである。

8.3　好きな動物と植物（インタビュー調査）

モンゴルでの調査中に出会った方々に、好きな動物と好きな植物、その理由を伺った。本節ではその結果を示す。好きな動物と理由を表 8-1 に、植物については表 8-2 にまとめる。

8.3.1　好きな動物

最も人気があったのは、ウマとうさぎであった（それぞれ 4 票）。ウマはやはり昔からモンゴル人の友であり、好まれている。うさぎは可愛いからという意見や、「うさぎが増えれば家畜が増える」という言い伝えにより好きだという意見があった。次に人気があったのが犬であり、狼から家畜を守ってくれるからであった。逆に狼が好きだという意見もあり、興味深い。

[2] この寺院は恐らく 1730 年に最初の建造物が建設されたと思われる。その後は少しずつ建造物を増やして大きくなった。しかし、1930 年代の宗教弾圧政策によって壊された。1990 年頃から復活しつつある。

表 8-1　好きな動物とその理由（インタビュー調査より）

好きな動物	理由	回答者
ウマ<4 票>	人間に反発しない。死ぬまで忠実な心	40 代女性
	ナーダムの長距離乗馬レースで幼い子供たちを乗せて命ぎりぎりまで（ゴールしてから亡くなることもある）走ってくる瞬間は見るだけで涙が出る。	20 代女性
	昔はウマで移動していた。馬乳酒やチーズをくれる。馬ほどモンゴル人の友はいない。ヒーメル（幸運）をもたらしてくれる。	
	エネルギッシュで体力がある。かっこいい。	
うさぎ<4 票>	自分が兎年だから。うさぎが増えれば家畜が増えるという象徴的存在。	70 代男性
	可愛さと悲しさを備えた目と動きがたまらない。	60 代男性
		40 代女性
		10 代女性
犬<3 票>	忠実だから。	40 代女性
	モンゴル人にとって大切。夜は家畜を狼から守ってくれる。 忠実で誠実だから。	
	かわいいから（子犬）。	女性
鳴きうさぎ (ウシネズミ)	奥さんが鼠年だから。	70 代男性
オオカミ	種を超えて子育てをする。それは人間にはできない。紳士的な戦い方。領域を荒らさなければ攻撃してこない。	20 代女性
亀	飼っているから。しかし 3 年で死んだ。	女性
子羊	かわいいから。	20 代女性

写真 8-4　ウマはモンゴル人の心の友

8.3.2　好きな植物

こちらは薔薇が人気であった。愛のシンボルとしてプロポーズに用いられているようだ。それ以外の植物は、食べることができる、薬になるといった有益だからという理由や、生命力を感じるから、きれいだからという理由であった。

表 8-2　好きな植物とその理由（インタビュー調査より）

好きな植物	理由	回答者
薔薇<3 票>	プロポーズの時にもらったから。	女性
	愛のシンボルだから。	男性
	大きくてきれいだから。	20 代女性
サルナ（花）	実が食べられるから。	40 代女性
ホシュ（杉）	冬も緑で生きているから。	40 代女性
ひつじのめ		70 代男性
ヤルガイ	無名の花で雪の時期、家畜を食べたら元気になる。	60 代男性
桜	昔から写真や映像で日本の桜も見ていて綺麗だと思った。春に日本に行って桜を見た。	60 代男性
エッグ (モンゴル苔)	素朴で目立たない植物で、春に一つの命を咲かせる。大地の生命力がなくなるとき、自分の生命力を内にしまい込む。	男性
ひまわり	黄色がきれいだから。	女性
サラン	田舎にある赤い植物。止血の薬になる。	女性

モンゴルで、ある方に筆者は桜が好きなことをお話した。桜はすぐに散ってしまう刹那の花である。それは四季・変化・循環の象徴である。紅葉も同様である。桜の季節は、出会いと別れの交わる季節。それを見守ってくれる桜が好きだと。その方は、こうおっしゃった。「今の話は私が日本に行く前は理解できなかっただろう。でも日本に行ったことのある今ならわかる。日本の卒業式で、桜の前で学生たちが写真を撮るのを遠くから眺めていた。若者は恐らく同級生と大学と別れをつけて、人生の旅に出るが、写真の背景になった桜は、花びらで地面を白く染め、さらに風で舞い上がる花びらはまるで吹雪のようであった。なぜ、日本人は桜が好きなのか、少しわかった感じがした」

8.3.3　考察～環境保護にどう活かせるか～

好きな動物は家畜のウマと家畜繁栄の象徴であるうさぎ、そして家畜を守る犬が人気だった。好きな植物は何らかの個人的な思い出がある花や、食用や薬用になるものなどが挙がった。もちろん、人々の暮らしの役に立つもの、また人々に癒しを与えるものは保護していきたい。さらに、環境教育や地域文化の理解にも役立つだろう。

≪美的感覚≫

8.4　好ましい顔の特徴（アンケート調査・インタビュー調査）

好きな動物・植物と同様に、好きな人間（好ましい顔）も出会った人に伺った。こちらは、動物・植物のような自由回答形式ではなく、こちらで用意した 8 つの顔写真の中から、男性には女性の写真を、女性には男性の写真を選択していただいた。

8.4.1　調査票の設計

本調査では、モンゴルで好まれる顔の類型を調べるために、3 つの軸で分類した。3 つの軸とは、①若い/年配、②細い/太い、③黒い/白いの 3 つを考えた。そして 2×2×2＝8 種類の類型を用意し、選んでもらうことによって、3 軸で構成される「空間」において、モンゴルで好まれる顔がどのあたりになるかがわかるのではないかと考えた。

この考え方に基づき、表 8-3、図 8-1 のような類型を設計し調査票を作成した。なお、男性・女性それぞれ 2 種類作成している。インターネット検索を用いて、各類型に該当するような顔写真を芸能人を中心に収集して調査票を作成した。調査票は、肖像権の関係で、本報告書には掲載していない。

表 8-3　顔の類型

類型	①若い/年配	②細い/太い	③黒い/白い
A	若い	細い	黒い
B	年配		
C	若い	太い	
D	年配		
E	若い	細い	白い
F	年配		
G	若い	太い	
H	年配		

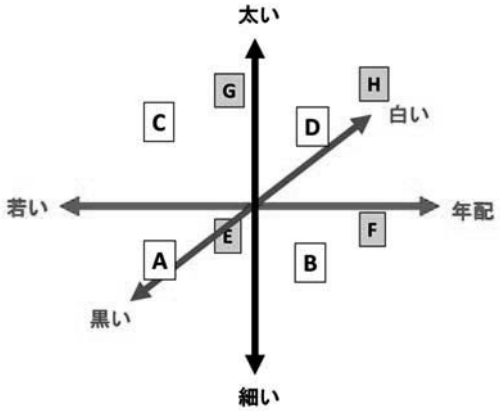


図 8-1　顔の類型（空間）

8.4.2　アンケートの結果

調査結果を表 8-4 に示す。また、中には好ましくない顔についての意見も寄せられたため、それらは表 8-5 にまとめる。

表 8-4　好ましい顔の調査の結果（有効：異性で最も好ましい場合）

有効	好ましい顔	理由	回答者
○	A1（若・細・黒）	目に力がある。でも優しい。	40 代女性
	A1（若・細・黒）	handsome, fashionable hair style	40 代女性
○	A1（若・細・黒）		10 代女性
○	C1（若・太・黒）	モンゴル人に近く、親しみやすい。	20 代女性
○	C1（若・太・黒）		40 代女性
○	C1（若・太・黒）		20 代女性
○	C1（若・太・黒）	優しくて強い。	女性
	C1（若・太・黒）	かわいい。	90 代男性
	D1（年・太・黒）	強そう、目も強い。	男性
	E1（若・細・白）	賢そう。	70 代男性
	G1（若・太・白）	男っぽい、力強い。	70 代男性
○	A2（若・細・黒）		~10 歳女性
	A3（若・細・白）	可愛い。	~10 歳女性
○	A3（若・細・白）	顔の色が白いのが好み。美しい顔。	男性
	B3（年・細・黒）		女性
	B3（年・細・黒）		20 代女性

○	E3（若・細・白）	ブロンドで高い鼻は慣れない。 黒髪で低い鼻が親しみ。	男性
	E3（若・細・白）		10 代女性
	E3（若・細・白）		女性
○	F3（年・細・白）	目、口が好み。	70 代男性
	F4（年・細・白）	安心できる。	女性

表 8-5　好ましくない顔に関する意見（任意回答）

好ましくない顔	理由	回答者
A1（若・細・黒）	目つきがこわい。	90 代男性
E1（若・細・白）	男性が髪を伸ばすと違和感。	20 代女性
F1（年・細・白）	ウソっぽい笑い方。	90 代男性
B2（年・細・黒）	身体が細すぎる。	男性
E2（若・細・白）	身体が細すぎる。	男性
C3（若・太・黒）		
H4（年・太・白）		10 代女性
H4（年・太・白）	メイクアップが最悪。	~10 歳女性
H4（年・太・白）	おかしい人みたい。	女性

8.4.3　結果の分析

表 8-4 における有効票を対象として、分析を試みる。選ばれた人が持つ各類型（若い、細いなど）にポイントが入るとすると、表 8-6 のような結果となった。

表 8-6　3 種類の類型ごとの有効獲得票数（合計 10 票）

①	
若い	年配
9	1
②	
細い	太い
6	4
③	
黒い	白い
7	3

この結果から、モンゴルでは、「若くて」「細くて」「肌が黒い」人が好まれることが示唆される。ただし、調査票の作り方や被験者に偏りがあるため、参考程度である。

8.5　美と平和（インタビュー調査）

好ましい顔の特徴の調査を、ネルグイさんにも聞いてみた。それに関連して、「外見と内面どちらが大事だと思いますか」という質問をしたところ、深い答えが返ってきた。

「もちろん、顔や身体も重要だけど、社会主義を経験した私たちの世代ではどちらかというと外見よりも内面が重要だと思う。ダライ・ラマ 14 世やガガーリンのように、スマイルというのは、人間の内面を映し出すものである。物質的な顔を素敵に見せる。

平和も美の大きな要因である。ある新聞でこのような記事があった『第二次世界大戦後、モンゴル人の女性が生まれた自分の子供を見て、「最近の子供の顔は可愛いね、もしかしたら、戦争は私たちから遠ざかっているのではないか。」』。この記事を読んで戦争は人々の美感との関係するのかと思った。戦時中の顔は、美しいとは言い難かった。終戦の時、人々

の顔が美しくなった。

日本人のあなた方は美しい。平和で落ち着いた世の中に生まれたのだろう。人類共通して世界で平和になったのだろう。私は 1956 年に初めてウランバートルの大学に行った。そこで中国人に会ったが、顔や服装があまりに醜く、かわいそうに思った。あまり長く見たいと思わなかった。しかし、最近テレビで北京の女の子を見ると可愛かった。この顔は、中国の経済成長、社会の安定を反映していると思う。人を信じる余裕ができ、自然との共生も考えるようになったことが顔として、笑顔として表現されているのではないかと思う。」

8.6　おわりに

最後に本章の内容について、私見も交えながらまとめてみたいと思う。

8.6.1　動物・植物のもつ象徴性

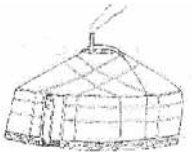
今回のインタビューでは「美しいから」という直接的な理由で特定の動物や植物が好きという意見は少なかったが、家畜繁栄の象徴とか、愛の象徴という理由があった。また、忠実さが好きだとか、生命力を感じるという理由もあり、自分をその動植物に重ね合わせているように感じた。直接的な効用のためではなく、観念的に人々が動植物を好んでいる。

8.6.2　モンゴルの家畜と日本のペット・動物園

日本での好きな動物・植物のインタビュー調査は行えていない。しかし、筆者の経験的な感覚からすると、モンゴルでのインタビュー結果は日本で行った場合と異なっているはずである。日本ではウマが一番人気にはならずに、犬か猫が選ばれるだろう。自由に生きている（ように見える）猫が日本人には人気だと感じている。日本では家畜の牛や豚や鶏はおそらく好きな動物の上位には入らないだろう。家畜ではなく、ペットとして飼われる動物が人気である。日本では、モンゴルと比較して動物との関係性が多様ではないと考えられる。日本では動物といえば、ペット、あるいは動物園で飼育されている動物を連想する人が多いのではないかと思う。日本では、動物との関係が保護に特徴が表れ、個人趣味に意味が集中しているように思われる。

8.6.3　白い柳を保護する理由

最後に、「外部の」人間としての立場から、白い柳を保護する理由についてまとめたい。①固有性（地域限定で生息しており希少である）、②歴史性（伝説が伝承されている）、③緊急性（早く保護をしないと絶滅する危険性がある）、④生態学的価値（人間にサービスを提供してくれる）の 4 つの要素が自然保護の理由になるかと私は考えている。白い柳はこのすべてに該当する。遠くからではあるが、保護活動を応援していきたい。



コラム
『生命の大地』モンゴルで生きた 10 日間を歌に

轟晃成

モンゴルでの滞在で感じたことを歌にしました。動画は次の URL で公開しています。
https://www.youtube.com/watch?v=KU7Bsrr4Hqg&feature=youtu.be

以下に、歌詞とその詞が生まれるにあたっての背景について記します。

歌詞

【1 番】

① 走る　風の中で　感じる自然の力強さ
② 歌う　灯りを囲み　通じる　言葉じゃなくても

③ 大地も凍てつく冬　冷たい運命（さだめ）越えて
④ 緑が帰る日まで待っている

⑤ 生きているんだ　鳥も人も　まだ見ぬ豊かな場所を目指し
⑥ 生きていくんだ　命をもらって　道なき道を前へと進むんだ

【2 番】

⑦ なぜだろう　これほどにも　優しくしてくれるのは
⑧ なぜだろう　これほどにも　楽しそうに笑えるのは

⑨ 厳しい乾きの季節も　分かち合う恵み
⑩ 細く浅い川ほど　枯れずに続く

⑪ 生きているんだ　矛盾を抱え　それでもより良い明日を描く
⑫ 生きていくんだ　ここにいるんだ　悩みも傷も　もう何でもいいさ

⑬ 広い大地　無限の宇宙（ほし）　自分のちっぽけさに気づいて
⑭ 生きていくんだ　生きていくんだ　みんなといれば　何も怖くはないさ

歌詞解説

① 走る　風の中で　感じる　自然の力強さ

広大な草原を移動していると、どこまでも続く景色に圧倒されました。路にゴミが落ちているところもありましたが、それすら大した問題ではないと感じました。自然があまりにも大きかったからです。人間が多少悪さをしても、それで簡単に壊れてしまうような自然ではないなと思いました。

② 歌う　灯りを囲み　通じる　言葉じゃなくても

キャンプ地に宿泊している時にも、近くのゲルで楽しそうに歌っている声が夜中まで聞こえてきました。それを子守唄に床に就いたのを覚えています。また、私たちもキャンプ地やバイラーさんの家で歌を歌いました。言葉は違えど、きっと何かは通じたでしょう。

③ 大地も凍てつく冬　冷たい運命(さだめ)越えて

④ 緑が帰る日まで待っている

私たちがモンゴルを訪れたのは 8 月でした。昼は日差しが強く、夜は冷え込みました。一方、モンゴルの冬は大変厳しいようです。寒さや雪が原因で家畜が大量に亡くなったりすることがあり、「ゾド」と呼ばれます。しかし、「ゾド」は単なる災害ではなく、ある種運命的なものであり、生きている以上は仕方のないものだと捉えられているようです。

⑤ 生きているんだ　鳥も人も　まだ見ぬ豊かな場所を目指し

モンゴルでは、人間も、ウマもウシも、ヤギもヒツジも、犬も一緒に生きていました。当たり前のことのようですが、人間だけが暮らす世界にしばらく住んでいた私にはこれが刺激的でした。

⑥ 生きていくんだ　命をもらって　道なき道を前へと進むんだ

モンゴル滞在中、たくさんのお肉を食べました。私たちは、生きものから命をもらって生きているということを再確認するとともに、感謝を忘れてはいけないなと思いました。

モンゴルの大草原を移動する時には、時には轍のないところを進むこともありました。360°の大地に囲まれると、どっちが前で、どっちが後ろといった概念はないと思いました。むしろ、「自分の向いている方向」が前であると直感的に感じたのです。

⑦ なぜだろう　これほどにも　優しくしてくれるのは

⑧ なぜだろう　これほどにも　楽しそうに笑えるのは

モンゴルでは、非常に多くのもてなしを受けました。ゲルを訪れれば必ず馬乳酒や乳製品を振る舞われ、都市の家にお邪魔しても、手料理を振る舞ってもらいました。初めて訪れてくる私たちを、これほどにまで暖かく歓迎してくれることに対して、不思議だとすら感じてしまったのが正直なところです。日本とはまた異なるホスピタビリティに感動しました。

⑨ 厳しい乾きの季節も　分かち合う恵み

私たちが訪れた 2015 年の夏は、特別に乾燥していたようです。滞在期間中も、雨が降ったのはわずか数回でした。そのためか、本来美しい緑色になるはずの草原も、心なしか、色褪せていました。また、モンゴルでは雨が降ると「天気がいい」と考えられているということに最初は驚きました。水は貴重で、手を洗ったり歯を磨いたりする時も節水。シャワーは毎日浴びるものではありませんでした。水の有難みというのを気づかされました。

⑩ 細く浅い川ほど　枯れずに続く

草原で昼食を採った後の休憩中、川の探索をしました。湖から流れた川は分岐していて、片方は枯れていました。もう片方は、僕たちがご飯を食べたところに繋がっていました。下流ではなく上流のようです。上流を確かめに行くと、とても細く、草の下に水が流れている（湿っている）だけでしたが、蛇行しながらも長く続いていました。一方、僕たちが食べたところは、かつてとても大きな川だったようです。広く深い溝。かつて大きかった川は完全に枯れて

しまい、細い川は日差しの下で生き残っています。何故でしょうか。

⑪　生きているんだ　矛盾を抱え　それでもより良い明日を描く

モンゴルは、外からの力に巻き込まれ、大きな変化の時代を迎えています。社会主義圏に取り込まれ、伝統的な文化を破壊され、さらに社会主義から資本主義へとパラダイムが変わり、周辺国や世界中から影響を受けるようになりました。自然の上に成り立つ遊牧を行いながらも、川を掘り返して砂金を拾う。そんな矛盾を抱えながらも、人々は明るく、懸命に毎日を生きている、そんな姿を垣間見ることができました。

⑫　生きていくんだ　ここにいるんだ　悩みも傷も　もう何でもいいさ

「何でもいい」というのは、私がモンゴルで感じたキーワードの 1 つです。草原にはトイレがないので、草原をトイレにします。それは例の 1 つですが、モンゴルでは細かいことは気にしないで、のびのびと生きていくことができました。日本にいるときには忘れている、もっと大事な何かがここにはある。私が悩んでいることよりももっと大きなものがある。そう思ってから、小さな悩みはもう何でもいいんだと感じました。

⑬　広い大地　無限の宇宙(ほし)　自分のちっぽけさに気づいて

山に登って頂上から見渡すパノラマの景色は感動的でした。どこまでも続く草原と高原。地球がどれだけ大きいか、自分がどれほど小さいかを考えさせられました。夜になると、日本ではまず見られないような満点の星空。流れ星も見つけるのにも苦労しません。もはや宇宙といってもいいでしょう。無数の星を自由に結んで、星座を自分で作っちゃおうなんて思ったりもしました。

⑭　生きていくんだ　生きていくんだ　みんなといれば　何も怖くはないさ

「何も怖くない」というのは私がモンゴルで感じたもう 1 つのキーワードです。自然の中で、信頼のできる人に囲まれて過ごすというのは、非常に安心できるものでした。もちろん、近代的な医療もないし、自然が牙をむくこともあるかもしれません。それでも、モンゴルで私は心から感じました。みんなといれば、何も怖くはないさ、と。

第 9 章　国際協力時代のモンゴルを問う

マンゴードションホル・ネルグイ（思沁夫、ソソルボラム　編訳）

9.1 はじめに

生きることは自然を問うことであった時代から、生きることは保護することとなり、地域の環境保護がグローバルに展開される時代へと変遷を遂げてきた。モンゴルの今がまさにそうである。

モンゴルと言う国は中央アジアの大陸が齎す乾燥と極寒という地理･気候条件の下､未曾有の環境危機に直面している。あるモンゴル人研究者によると、20 世紀半ばから 21 世紀初頭までの半世紀の間で五千ヶ所もの泉、川、湖などの水源が枯渇し、今やモンゴル国土総面積の 80%が砂漠化に瀕している。しかし、驚くのはまだ早い。これらはモンゴルが直面する環境問題のほんの一部に過ぎない。

モンゴルは森林、草原、砂漠などの多様で豊かな自然環境を有しており、自然環境に適した遊牧文化が連綿と営まれている。だが、遊牧文化は永続が危ぶまれ、近年はモンゴルの文化遺産として保護する向きがある。遊牧文化の喪失は文化の多様性および固有性の観点から、人類が抱える課題のひとつとして理解できるのではないだろうか。この世に多様な文化と生き方が消え去ることならば、多様な自然環境の必要性も、その意味をも失い、消滅の運命に落ちてゆくことは想像に難くない。

9.2 なぜモンゴルは変わったのか？

なぜモンゴルの環境は破壊されたのか。

1990 年代以降、西欧諸国の圧力によってモンゴルは計画経済―社会主義体制から市場経済へ移行した。社会主義体制の崩壊や外部の影響は、モンゴル経済と社会、人々の生活を困窮と混乱状態に貶めた。富裕層は欲望に浸り、人々は土を掘り、あらゆる自然の貨幣への交換を渇望し、自然は人間の資源と化し、個人中心的に自然を再解釈するようになった。

だが周知の通り、モンゴルでは自然に神が宿るとされ、畏怖の念を抱く慣習がある。不幸中の幸いにして、モンゴル人は本来の信仰心を完全に失ってはいない。それは、私たちにとって「光」であり、今後も「光」を注ぐ必要がある。

以下、モンゴルにおける「光」のひとつとして、僭越ながら、ウブルハンガイ県ツァガンボルガソという地域や、当地における私たちの取り組みについて紹介したい。

モンゴルの地図を眺めれば、ウブルハンガイ県はほぼその中央に位置していることが分かる。ウブルハンガイ県は、ハンガイ（山地）、ゴビ（砂漠）、ヘール（草原）、すなわちモンゴルの地理的特徴をすべて網羅した地域である。歴史を遡れば、古代の匈奴、近世ではモンゴル帝国時代において栄光の中心地域（ていこくしゅと）だった。モンゴルの文化遺産の多くが、このウブルハンガイ県に集中していることは、歴史を裏付ける証拠だと言える。例えばモンゴル唯一の世界遺産「オルホン渓谷の文化的景観」はウブルハンガイ県に広がる[1]。

ウブルハンガイ県の県庁所在地、アルバイヘール市から北へ 30 ㎞地点、そこに歴史が物語る空間がある。この地をツァガンボルガソと言う。当地の口承伝説によれば、1580 年にチベットのダライラマ 3 世、ソドノムジャムツが訪れ、「美しいところだ」という言葉を残した。彼がこの地を去ってからのこと、ツァガンボルガソには白い柳が芽吹き、林に生長したと言われる。当地はまた 19 世紀を代表する仏教学者および思想家であるイシ・ツェウェルワンツェグドルジ活仏が瞑想し、数多くの経典や自然環境に関する著作を書き下ろした地域としてもよく知られている。

ツァガンボルガソは、ハンガイとヘールが出会い(ツァガンボルガソまではハンガイ、ツァガンボルガソより東はヘールとゴビ)、さらにゴビにも近い。この地理的特性から、多様性に恵まれ、ハンガイ、ヘールとゴビ特有の動植物が観察される。

また、かつて遊牧民らにとって寺院では神への接近が可能となり、病を治療してくれるまさに「病院」の機能も果していた。僧侶らは経典から医学と自然の知識を吸収し、植物や動物の骨、内臓などから薬をつくり、人々に治療を施した。オンギー川上流域からツァガーンボルガソントホエに至る地域には多様な植物が生い茂り､「モンゴルの薬箱」とも言われていた。

---

[1] だが、ウブルハンガイ県内に保護全域（15 万 ha）のほとんどが含まれるが、一部区域は他県にまたがる。

モンゴルはロシアに次いで世界で 2 番目に成立した社会主義国家である。社会主義時代では、ツァガンボルガソの自然を利用したウブルハンガイ県の「夏の療養地」が設置され、政府の管理下にあった。しかし民主化以降、所有者(管理者)不在となり、放置されたままとなってしまった。白い柳林では周辺地域の遊牧民が通年放牧したり、燃料用に柳を伐採したりした。町の人々は、柳を燃料にバーベキューを楽しむなどして、瞬く間に白い柳は失われてゆき、絶滅寸前となってしまった。自然再生能力のある白い柳は、ごく僅かであった。

自然のこの悲惨な有様に心を痛めないモンゴル人はいない。2000 年、私は白い柳林の現状を県政府と県議会に報告し、県が保護に向けた行動を起こさないのであれば、白い柳林を私が保護すると訴えた。2001 年になり、私は親族とともにツァガンボルガソの環境保護に取り組み始めた。活動は今年でちょうど 15 年を迎えた。

私の取り組みを漏れなく紹介するとなれば大変なことである。主な活動の紹介に留めさせて頂く。

①2000 年より、モンゴル政府はツァガンボルガソのうち面積 5ha の使用権を承認、さらに約 30ha の保護活動に対する許可が得られた。2001～2007 年にかけて親族や遊牧民らとともに、「バトノミン・スワラガ」という遊牧民組合(日本語では「環境保護遊牧民組合」)の設立と保護活動に尽力した。

②白い柳のキャンプ地化および観光業も展開してきたが、ビジネスより環境保護を第一目的に運営することを決意した。この考えは現在も変わることはない。

③白い柳林の生息全域を木柵と鉄線で囲み、家畜の侵入を防ぎたいと考えている。2007 年時点で 3km の柵を設置した。

④ナキウサギの侵入を防ぐため、二重の柵を設置、白い柳の芽を人工的に生育、増加させる取り組みを行ってきた。

⑤モンゴル国自然環境観光省、ウブルハンガイ県の自然環境観光局および県労働局、国際連合地球環境基金、オランダ政府奨学助成金（「モンゴル環境イノベーション-2」プロジェクト)、大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）及び GLOCOL の海外体験型教育プログラム「フィールドスタディ」（FIELDO）のご支援、ご協力の下、様々な事業を展開、成功させてきた。

⑥2010 年、ズーンバヤンウラン・ソム（郡)、アルバイヘール・ソム（郡）の 11 年制学校の生徒およそ百名に環境教育を実施、植林活動を行った。千本の白い柳の苗を寄贈し、「地域の青少年のための人材育成―白い柳林の未来」という環境教育プロジェクトも推進した。

⑦国際連合地球環境基金のプロジェクトとして、長さ 30m の苗を生育させる温室(ビニールハウス)および菜園(柵)100㎡を設置した。自己資本や小規模プロジェクトでは 500 本のさじの苗木を植え、植林柵 2ha を 2 ヶ所設置した。

これらの活動およびその成果は国際組織や地元団体のご支援とご協力に支えられ、無事に達成できたと考えている。中でも大阪大学の GLOCOL との関係は長く、思沁夫先生らから素晴らしい着想を得ることができた。

9.3 GLOCOL、そして日本の環境保護を学ぶ

2007 年夏、大阪大学の思沁夫先生は、ご自身が指導されていた学生とともに、モンゴル、そしてウブルハンガイ県を初めて訪れ、当時の環境問題の深刻さに衝撃を受けたという。思沁夫先生はこの 9 年間で延べ 20 回以上に渡り、モンゴルおよび大阪間を行き来し、地域の支援および協力に力を尽くされ、当地では大変尊敬されている素晴らしい人物である。

2010 年 9 月、思沁夫先生は、世界的にも著名な研究者である阿部先生(国立環境科学研究所)、栗本先生(大阪大学)、宮本先生(GLOCOL)らをモンゴルに案内し、ウブルハンガイ県では相互に親睦を深めた。2012 年はツァガンボルガソで大阪大学GLOCOLの海外体験型教育プログラム第一回目となるモンゴル･フィールドスタディが実施された。2015年現在、これまで計 3 回のフィールドスタディが開催され、日本およびモンゴルから 15 名以上の学生たちが参加した。参加者たちは多くを体験し、学んだ。ツァガンボルガソは参加者らの活動拠点となったが、思沁夫先生の要請を受け、講義を行うこともあった。

大阪大学 GLOCOL のフィールドスタディは新しい教育理念に基づき考案された教育活動である。世界のあらゆる地域で実施されており、学生たちには多様なテーマが用意されたプログラムであるが、ツァガンボルガソがそのひとつの地域として選ばれたのは、まさに思沁夫先生のお陰である。

モンゴル・フィールドスタディでは、思沁夫先生と参加学生たちは私の環境保護遊牧民組を拠点に宿泊する。日中、鉱山開発現場、遊牧民のゲル、町の市場や寺院などに赴き、参与観察や聞き取り調査を行う。晩は遅くまで議事録に目を通し、意見を共有し、討論する。皆さんは早朝から深夜まで活動する。モンゴルの学生たちには、是非とも、彼らの勤勉さ、また腹痛にも負けず調査に出かけるひた向きさから学んでほしい。

また、モンゴル人からすれば、大阪大学の教員および学生間の関係はモンゴルとは異なる。例えば、思沁夫先生は教員でありながら、フィールドスタディ期間中は通訳者や料理人にもなる。私は日本語が分からないため詳細は不確かだが、教員と学生、学生同士は非常に平等で協力的な関係にあり(若干、先生が苦労しているように思えますが)、常に礼儀正しく、とても素晴らしいチームだと思う。

モンゴル・フィールドスタディの成果は、思沁夫先生のご指導のもと、『開発か伝統か、それとも...―技術者のための「エスノグラフィー」―』という書物として、2014 年春に大阪とウランバートル市で日本語およびモンゴル語で同時出版された。このことは非常に意義深く、私自身も協力者として大変嬉しく思う。GLOCOL の理念はフィールドスタディの素晴らしいメンバーによってモンゴルに浸透し、あらゆる方面に良い影響をもたらしており、モンゴルと日本の懸け橋になりつつあると言えよう。

思沁夫先生は、熱心で忠実な教育者であり、環境保護の実践者である。彼の協力があってこそ、2015 年には白い柳林の生息地の全域に柵を張り巡らせるという夢が実現した。

2015 年 7 月、日本のりそなアジア・オセアニア財団理事長の廣冨様、専務理事の仁井様が、思沁夫先生の案内でツァガンボルガソを訪問した。当財団から環境助成金を受け、実施中の思沁夫先生のプロジェクトの視察および協力地域との交流が目的であった。かなり短い現地滞在であったが、親睦を深めることができ、非常に有意義な時間を過ごしたと当時に、日本人とモンゴル人には共通性があり、親しみやすいことを感じた。廣冨理事長のお言葉は特に印象深い。確かにモンゴルの世界遺産登録件数は少ないが、モンゴルというその国自体が「世界遺産」のような存在だとおしゃっていた。私はこの素晴らしい自然と文化をいつまでも残したいと願っている。アジア・オセアニア財団は規模として小さいかもしれないが、全面協力するとの励ましの言葉を残して頂いた。

大阪大学 GLOCOL とりそなアジア・オセアニア財団には深く感謝申し上げる。白い柳林を中心として、地域の環境保全および遊牧民の生活向上を長期的ビジョンとして描けるようになったからである。具体的な目標としては以下を掲げている。

① モンゴルにおける環境保護遊牧民組合のモデル化
② ツァガンボルガソの海外体験型教育プログラムおよび環境教育拠点化に向けた努力
③ 白い柳の生息地の拡大、多様性の回復、オンギー川流域における生態環境の保全と地域の動植　物保護に向けた取り組み強化
④ サレージ技術の導入を通じた家畜の越冬用飼料の基地の設置
⑤ さじの木の増殖、さじの実の加工による健康飲料の生産
⑥ ツァガンボルガソの訪問および滞在者の増加、観光業の活性化と組合の自立化
⑦ ゴルインウンドルハイルハンにおける植林する。
⑧ バヤンウラーン山およびツァガンボルガソにおける野生のヒツジ、ヤギなど希少動物のほか植物の生息域を保護、地域全体を含む連携強化と環境教育の推進

日本の島根県簸川郡斐川町の立西野小学校、当時 6 年生の坪田愛華ちゃんは環境問題について調べてまとめる国語の宿題を得意な漫画で表現した。少女の漫画は高く評価され、『世界の秘密』という素晴らしい絵本となり、英語、中国語、フランス語やモンゴル語など世界 11 か国語に翻訳され、60 万部完売という大ベストセラー本となった。モンゴル人の子どもから大人まで誰もが感動し、環境問題を問うハンドブック的な存在となった。

愛華ちゃんは『世界の秘密』（出版文化社、2004 年）の中で、次のように述べている。

「私一人ぐらいという考えはやめようと思います。それを世界中の人がすれば、一発で地球はダメになると思います。みんなで協力しあって、美しい地球ができればいいです。」「子供は親を鏡に育つよね。人間は、地球を鏡にして生きなくっちゃあ。」

ツァガンボルガソにおける出来事は取るに足りない、小さなことである。だが、愛華ちゃんの呼びかけに応じ、この小さなことを志強く、継続してゆきたい。（なお、愛華ちゃんは、脳内出血のためわずか 12 歳で帰らぬ人となった）

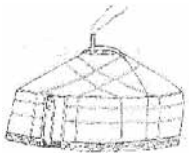
9.4 おわりに

自然を守る伝統はあった。モンゴル人が何百年も昔から、いや何千年もはるか昔から、モンゴルに彩を与える青い空を信仰していた。モンゴル出身の宗教学者、イシ・ビラ氏は「テンゲルイズム（青空主義）」という概念を構築し、青空主義をモンゴル人が環境保護の道を歩む起点にすべきだと主張している。また、オ・ラワグなどの著名な学者は、自然の神秘性は「迷信」や「瞑想」でもない、宇宙に存在するある一種のエネルギーによって引き起こされる現象であり、人類の知

恵がいまだ届いていないだけだと述べ、自然の神秘性を信ずるモンゴル人に勇気を与えている。青空、そして自然の神秘性を信じ、自らの運命を自然との繋がりで想像する習慣が消え去らぬように祈る。また、私たちの信仰心が自然を信愛する心に一致すると信じている。

既に紹介したモンゴル・フィールドスタディの成果報告書『開発か伝統か、それとも…―技術者のための「エスノグラフィー」―』の中で「（省略）･･･遊牧民環境保護組合と大阪大学の協力関係を進展させ、環境保護を推進し、モンゴルにおける環境保護の一つのモデルを構築することで、世界における保護活動の興味深い良例となる」と結論付けられていた点は、非常に意味があると考えている。これは、ひとりひとりの人間から、小さなことから自然保護をスタートすべきと述べた愛華ちゃんの確信に通ずる。

冒頭で私は環境保護の国際性について述べた。ツァガンボルガソは地球のごくわずかな大地に過ぎない。しかし、地球を構成する一部の大地とも考えられる。地球環境の保護は巨大な技術を生むための口実にしてはならない。むしろ、多様性、具体性、ローカル性に重点を置き、人間と自然の相互のつながりを心で感じ取りつつ、一歩ずつ前進してゆくことを意味する。GLOCOL とツァガンボルガソはそのように道を歩んできたと思う。



コラム

オンギー川と地球の将来（みらい）
― 子どもたちのまなざしから ―

思沁夫

「子供は親を鏡に育つよね。人間は、地球を鏡にして生きなくっちゃあ。」[1]

これは坪田愛華ちゃんが綴った文章である。恥ずかしいことに、私はネルグイ氏の原稿を和訳するまで彼女の存在すら知らなかった。

1991 年 12 月、小学 6 年生だった愛華ちゃんが国語の宿題で環境問題について考え、立派な作文と絵を完成させた。しかし、同日の深夜に体調が急変、わずか 12 年の生涯でこの世を去った。

愛華ちゃんは、得意の文章と絵でもって、地球に柔らかく、優しい眼差しを注ぎつつも、人間による環境破壊行為に対して警鐘を鳴らした。1992 年当初、愛華ちゃんの作文はふるさとの島根県の小中学校で配布され、のちに英語に翻訳された。彼女の作文は環境童話の絵本や教材として学校、教育現場だけでなく、世界のテレビ・ラジオ番組、絵画展やミュージカルに登場している。

愛華ちゃんの作品は世界 10 ヶ国語以上に翻訳されているが、モンゴルで紹介されたのは、2003 年 10 月である。モンゴル語版（1 万部）が、ウランバートル第一学校に贈呈されたことが始まりだった[2]。翌 2004 年には彼女の両親によってモンゴル語版 1000 部が、アルハンガイ県（ウブルハンガイ県の東部に隣接する）の子どもたちに届けられた。ネルグイ氏はおそらくこの頃に愛華ちゃんの作品に出会ったのだろう。

愛華ちゃんが述べたように、子どもは大人の背中をみて成長し、大人は地球をみて生きるのだろう。だが、鉱山開発で傷ついた大地を見て育ったモンゴルの子どもたちは、一体何を思うだろうか。

2008 年から 2010 年にかけて、モンゴル現地の人々やオンギー川保護会の協力の下、11 年生学校の生徒たち（主に 7 年生、8 年生、日本では中学生に相当する）に環境教育を行ってきた。その一環としてウブルハンガイ県下のソム（郡）の 5 つの学校と幼稚園 1 ヶ所で「水とふるさと」を題材にした絵画・作文コンクールを開催した。延べ 100 名の園児および生徒たちが作品を寄せてくれたが、驚いたのはほとんどの絵や作文の中に川が語られていたことだった。この川というはオンギー川（ウランノールを含む）だと推測される。

この絵画・作文コンクールによって、オンギー川が世代を超えて愛されているのがよく分かった。だがより重要なのは、オンギー川およびその周辺域の環境が破壊され、汚染され、川が枯渇してゆく悲惨な現状に対する子どもたちの警告のサイン、メッセージである。

ここでは 2009 年のコンクールで最優秀賞を受賞した詩を紹介したい。当時、中部ゴビ県サイハン・オボ郡高校 1 年生だったオランツェツェグさんの作品である。

私はオンギー川である

私はオンギー川である
草原の心髄として
賢者たちの描いた未来図を辿りながら
煌びやかに、鮮やかにその個性を放つ

[1]坪田愛華『地球の秘密―SECRET OF THE EARTH』出版文化社、2004 年より引用。
[2]出版文化社のウェブサイトを参照。http://www.shuppanbunka.com/books/3075/（アクセス日：2015 年 12 月 23 日）

私はオンギー川である
チンギスハーンの聖体を運ぶ馬隊も
溢れる河水で寄り道し
虎視眈々カラコルムを狙う清朝の軍隊も
巨竜のように躍動する川に阻まれる

私はオンギー川である
寛容な人々の記憶の中で
私は海とつながり
私のせせらぎを目指して
美しい渡り鳥が飛来する

私はオンギー川である
しかし、見てごらん！
河のせせらぎは過去のものとなり
緑溢れる草原は過去の記憶となり
渡り鳥たちの楽園は埃の渦となった

私はオンギー川である
草原の血管だった私のところに
砂金を追って人々が集う
川岸に咲き乱れた花々ではなく
転がるのは酒の空瓶

私はオンギー川である
砂に消えた私を見て、悲しむのを止めよ！
良心にかすかな光がともるなら
一本の木を植えなさい
さもないと口論の間に
明日という日は消えてゆく

私はオンギー川である
誇り高き信仰の経典に名を残し
生きとし生けるものすべてに命を吹きかける
もう一度、蘇る日が訪れるなら
生命の歌を荒野に響かせたい

私はハンガイ山地の娘であり
私は暑いゴビを冷やす青い首飾りであり
私はオンギー川である

オンギー川流域で実施された環境保護教育は、いまや日本とモンゴルの人的交流へと発展している。2012 年、第 1 回目となる大阪大学 GLOCOL モンゴル・フィールドスタディが実施されたが、私はある参加学生の提案を受け、ウブルハンガイ県の幼稚園を訪問した。この幼稚園では日本とモンゴルの園児が描いた絵を交換し合ったが、この活動を皮切りに、2015 年夏には日蒙青少年自然・文化交流が実現した。参加した青少年は作文を綴ってくれたが、後に登場する「子どもたちが感じたモンゴル」を参照頂きたい。

学校では自然を知識として学ぶが、自然を自由に体験する機会は少ないように思われる。レイチェル・カーソンは「美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目をみはる感性」、つまり「センス・オブ・ワンダー」を育む重要性を説いている

が、まさにこれこそ環境保護教育の指針ではないだろうか[3]。以下、カーソン女史の著作の一部を引用させていただく。

「知ることよりも子供たちのセンス、自然の神秘性を感じることが重要」

「子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感動に満ちあふれています。残念なことに、私たちの多くは大人になる前に、澄み切った洞察力や、美しいもの・畏怖すべきものへの直感力をにぶらせてしまいます。生まれつきそなわっている子どもの『センス・オブ・ワンダー』をいつも新鮮にたもちつづけるためには、私たちが住んでいる世界の喜び・感激・神秘などを、子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、少なくとも一人、そばにいる必要があります」

カーソン女史の言葉を胸に、愛華ちゃんやモンゴルの子どもたちの作品、また幼児や青少年の交流活動を振り返って、子どもたちを対象とした環境保護教育、交流の意味とその重要性を再認識させられた。

私は文化大革命の影響を受け、小学校から高校まで通ったことがなかった。幸いにして、1980 年代の中国は希望の時代だった。学問、知識を自由に習得でき、運命は努力によって乗り越えられるという機運が高まっていた。

だが、希望の中には危機感も漂っている。中国の小中学生は学校現場における競争の激化、両親や周囲からの重圧で自殺に追い込まれるケースが後を絶たない。モンゴルでは、貧困のほか両親の無責任な行動や態度からマンホールチルドレンが増加傾向にある。日本ではいじめや不登校が教育だけでなく社会問題にまで発展している。

閉ざされた空間に子どもたちの希望はなく、むしろ絶望感がひしめいているだろう。その中で大人が理想や目標を語ってもほとんど意味がない。子どもたちが全身を広げて、好奇心にまかせて、世界の不思議を感じ、学ぶことが今より一層難しくなっている。これは明らかに私たち大人の責任である。

今後もモンゴル青少年の交流を積極的に進め、日本の子どもたちにはモンゴルのダイナミックで神秘的、原生的な大自然と、家族や年配者に対する尊敬の念、堂々とたくましく生きることを学んでもらいたい。そしてモンゴルの子どもたちには日本人の繊細さ、勤勉さ、謙虚さ、多様な日本の姿を学んでもらいたい。

オンギー川と地球の将来(みらい)を導くのは日本とモンゴルの子どもたちであり、私自身でもある。オンギー川の復活を待ち望むのではなく、地域の人々と共にオンギー川を守ってゆきたい。モンゴルや日本の子どもたちの言葉に素直に反応し、胸を張って、堂々と自分の背中をみせられる。そんなモンゴル人になりたいと思う。

[3] レイチェル・カーソン、上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社、1996 年より引用。

紹介 ― 日本の子どもたちの感想文

モンゴルの心

小林馨（中学１年）

モンゴルは本当に広大な国でした。なにひとつさえぎるもののない大草原や、夜空に浮かぶ無数の星。その中で僕が特に心に残ったのはモンゴルでお世話になったモンゴルの方の心の広さでした。

まずネルグイさんとその家族の方々は、言葉や文化が違うなどといった小さな問題を全く気にせず、僕たちをもてなしてくれたことがとても嬉しかったです。特に、調理が大変で親しい客人が来たときにしか出さないという羊の頭をネルグイさんが作ってくれたり、白鳥の湖のほとりでバーベキューをしたときは本当においしくて幸せな気持ちがしました。僕たちのことをとても気にかけてくださり、最後まで親切にしてくださったことがとても嬉しかったです。

またモンゴルの小学生たちとの交流も楽しかったです。一緒に折り紙で蛙を作って競争したり、けん玉をやってみたりとほんとに楽しい時間を過ごせました。一緒に遊んで過ごしたことを思い出として大切にしていきたいです。

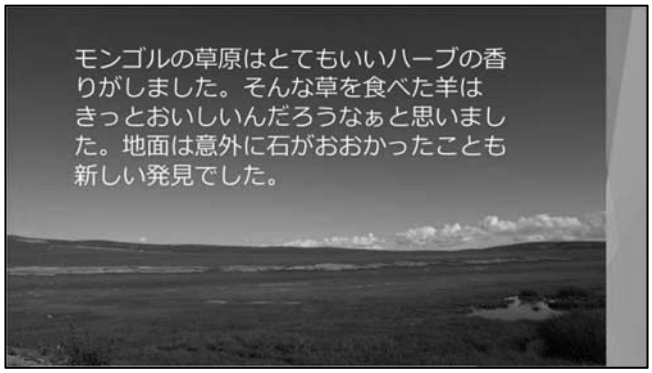
僕たちに親切にしてくれたモンゴルの皆さん、本当にありがとうございました。モンゴルの方々のおかげで本当に楽しい時間を過ごすことができました。また、モンゴルのみなさんに恩返しできたらいいなと思っています。

モンゴル大冒険

Uwasu　Momoka
上須　百花（中学1年）
Misaki
美咲（小学5年）
Michinori　Kazuko
（父：道徳、母：加寿子）

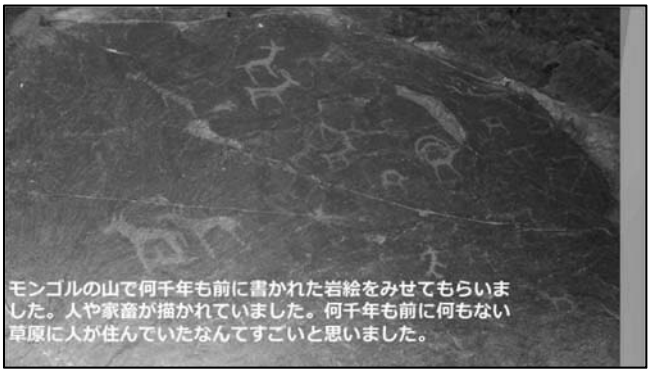
はじめに

2015年8月、私たち家族はスー先生や須和さんご夫婦、小林馨君と一緒にモンゴルを冒険旅行しました。モンゴルには日本とは全く違う自然や生活がありましたが、日本と同じ人々のやさしさがありました。これはその冒険旅行の記録です。



モンゴルの山

モンゴルの山は木が生えていなく、岩が頂上に行くにつれて多くなっていました。野生のヤギや羊が住んでいるそうです。今度はぜひ見てみたいです。



モンゴルの子供との交流

私たちは、モンゴルにいる小学生と交流し、日本の遊びをしました。交流会では、剣玉に挑戦してもらったり、折り紙を折ったりしました。

感想

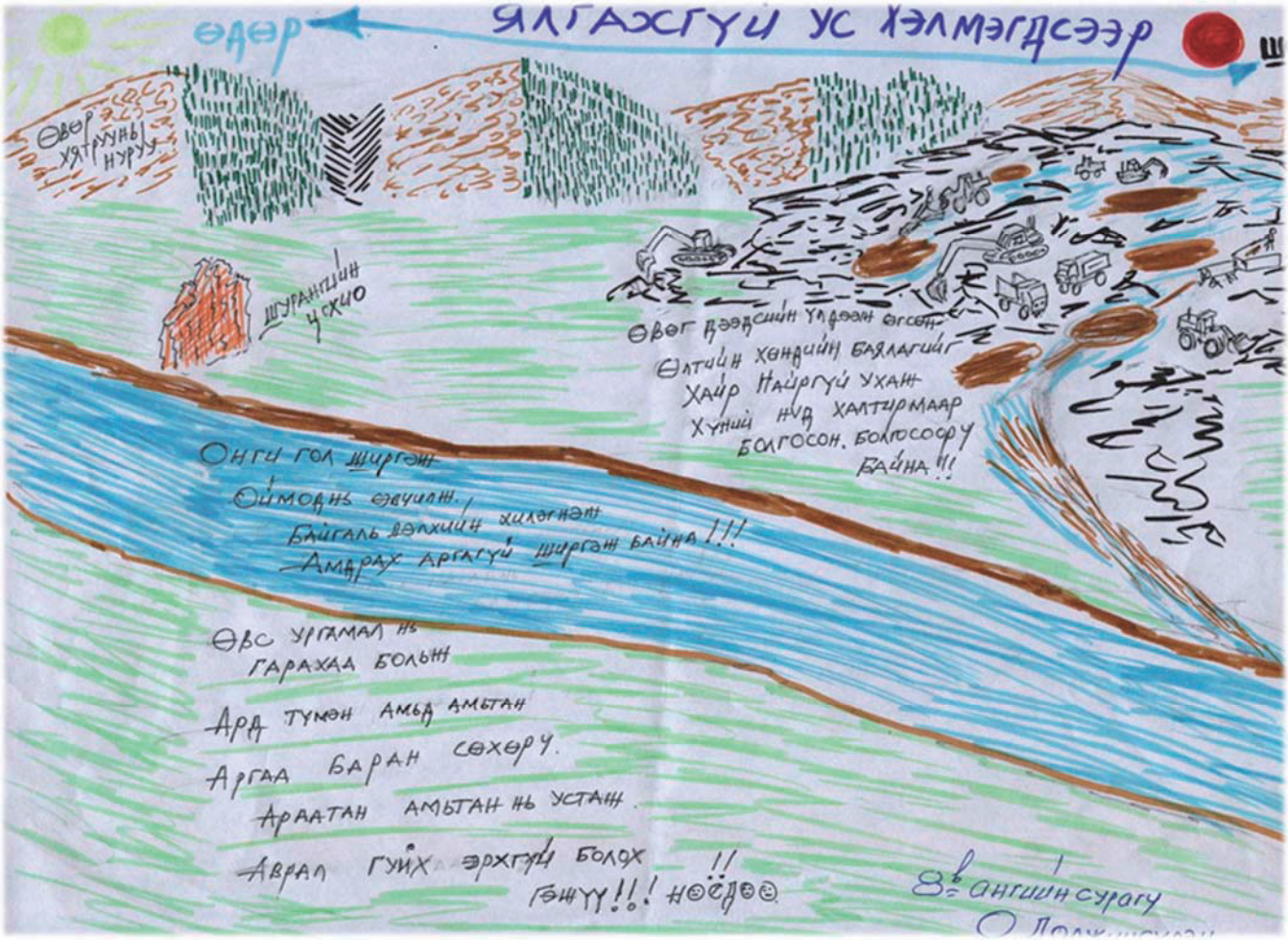
モンゴルの人は、とても剣玉が上手でした。折り紙で、かえる競争をしたときはとても盛り上がりました。言葉が通じなくてもとても楽しかったです。小学校で日本語を勉強していることにも驚きました。日本でもモンゴル語が勉強できるといいなと思いました。

モンゴル人の家族

私たちがお世話になったのは、ネルグイさん一家です。ネルグイさんの息子さんは、ウランバートルからウブルハンガイ県まで400キロも車を運転してくれました。ネルグイさんたちは、私たちに泊まる所と料理も提供してくれました。ネルグイさんの孫たちはいっしょに遊んでくれました。みんな優しくて、楽しかったです。

モンゴルの景色はとてもきれいでした。
広がる大草原にどこまでも続くような真っ
青な空、今でもしっかりと心に残っていま
す。夜空に流れ星が見えて、とてもきれい
でした。また必ず訪問したいです。

第V部　提案


ЯЛГАХГҮЙ УС ХЭЛМЭГДСЭЭР
ӨДӨР
ӨВӨР ХЭТРҮҮНЬ НУРУУ
ШУРАНГИЙН ҮСХИЙ
ӨВӨГ ДЭЭДСИЙН ҮЛДЭЭН ӨГСӨН
ӨЛТИЙН ХӨНДИЙН БАЯЛАГИЙГ
ХАЙР НАЙРГҮЙ УХАН
ХҮНИЙ НҮД ХАЛТИРМААР
БОЛГОСОН. БОЛГОСОФУ
БАЙНА!!!
ОНГИЙ ГОЛ ШИРГЭН
ОЙМОДНЬ ӨВЧИЛН.
БАЙГАЛЬ ДЭЛХИЙН ХИЛӨГНӨН
АМАРАХ АРГАГҮЙ ШИРГЭН БАЙНА!!!
ӨВС ҮРГАМАЛ НЬ
ГАРАХАА БОЛЬН
АРД ТУМӨН АМЬД АМЬТАН
АРГАА БАРАН СӨХӨРЧ.
АРААТАН АМЬТАН НЬ УСТАН.
АВРАЛ ГҮЙХ ЭРХГҮЙ БОЛОХ
ГЭНҮҮ!!! НӨӨДӨӨ
8-р ангийн сурагч

第 10 章　モンゴルボードゲーム

猪熊洋子・阪本悠佑・轟晃成

10.　はじめに～届け、この想い！～

ここまで私達がモンゴルで身をもって調査・体験したことを記した。近代化を望むモンゴル・伝統文化を大切にするモンゴル、自然を愛するモンゴル・鉱山開発を望むモンゴル、全てがモンゴルの真実の姿であり、まさにモンゴルは過渡期にある。

モンゴル滞在中、調査を進めモンゴルの現状を知るにつれ、私たちはこの現実を日本の友人やモンゴルの都市部の人々にも知ってもらいたいという想いを抱き始めた。多くの日本人はモンゴルといえば草原･遊牧民のイメージだけであるし、モンゴルであっても都市部の方々もはっきりとは知らないとのことであった。日本人も間接的にではあるがモンゴルに関わっているし、都市部の方々はまさにステークホルダーの 1 人である。

このようなことをモンゴル FS 中に考えていた際に、ボードゲームという方法を思いついた。人生ゲームやシムシティを考えても分かるように、ゲームは物事の本質を抽出し単純化することができる。この方法であれば私たちがモンゴルで学んだことを 100%ではないにしろ伝えることができるのではないかと考え、モンゴル FS 中・帰国後に案を練った。

本報告書ではその概要を示す。現在はまだまだ未完成な部分が多いが、いずれ実際に遊べる形にしたいと考えている。

10.1　プレーヤーとゲーム成功条件

モンゴルボードゲームの概要を図 10-1 に示す。このゲームはターン制で、プレーヤーは都市住民もしくは遊牧民になりきり、各々の目的達成を目指す。プレーヤーは複数の異なるレベルを保有し、与えられた初期値から各々のレベルの成功条件を全て満たすことでゲーム成功を目指す。プレーヤーに与えられるレベルは以下の 3 種類である。

- 資本レベル : プレーヤーの資本力を表す数値。これは主として現金を表しており、家畜を飼育する遊牧民にとっては生活が豊かであることが必ずしも資本レベルが高いことには繋がらない。都市住民・遊牧民共に保有するレベルである。
- 家畜レベル : 家畜の頭数・多様さを表す数値、レベル 1 が家畜 1 頭を表すわけではない。遊牧民だけが保有するレベルである。
- 環境レベル : モンゴル全体の環境の豊かさを表す数値。本来は都市と地方の環境は異なり、現れる問題も異なるが、ここでは都市部・遊牧民が共通の値を保有するレベルとする。環境レベルはターン開始時に一定量回復する。

図 10-1 モンゴルボードゲームの概要

以下、プレーヤーの属性ごとに達成すべきレベルの条件について述べる。

都市住民

このゲームにおいて、都市住民は「資本レベルの最大化を目指す」人々である。しかし生きていく上で必要な大気や水、遊牧民を通じて得る食料などは環境そのもの、もしくは環境に大きく依存しており、都市住民も環境に依存していることは間違いない。

そこで都市住民の初期条件・成功条件・失敗条件を以下のように設定した。

表 10-1 都市住民の初期条件・成功条件・失敗条件

	失敗条件	初期条件	成功条件
資本レベル	どちらかが 0 に なった時点で失敗	10	ゲーム終了時に 20 以上
環境レベル		10	ゲーム終了時に 5 以上

すなわち、都市住民の本質から資本レベルを上げて 20 にする必要があり、かつみずからの生存のために環境レベルは 5 を下回ってはいけない。したがって資本レベルを 30・40 と最大化しても、環境レベルが 4 以下の状態で最終ターンを迎えてしまうと失敗ということになる。

遊牧民

このゲームにおいて、遊牧民は「家畜レベルの最大化を目指す」人々である。家畜の飼育は草原などの環境に大きく依存するため、遊牧民は都市住民が必要とするよりも高い環境レベルが必要となる。しかし、近年の遊牧民で純粋に遊牧のみで生活している人はあまり存在せず、冷蔵庫や車・スマートフォンなどを利用している遊牧民が非常に多い。これらの購入には皮革原料を元手に得た現金が必要であり、現代の遊牧民は資本レベルも有していると言える。

そこで遊牧民の初期条件・成功条件・失敗条件を以下のように設定した。

表 10-2 遊牧民の初期条件・成功条件・失敗条件

	失敗条件	初期条件	成功条件
資本レベル	どれかが 0 に なった時点で失敗	10	ゲーム終了時に 10 以上
家畜レベル		10	ゲーム終了時に 20 以上
環境レベル		10	ゲーム終了時に 8 以上

すなわち資本レベルは増やす必要はないが一定レベル保有している必要があり、家畜レベルは最大化を目指す意味で 20 を超える必要がある。また環境レベルはターン経過（時間経過）と共にある程度損なわれることは前提として、都市住民より依存度が高いことから 8 を超える必要がある。遊牧民はこの 3 つの成功条件を全てクリアして初めてゲーム成功となる。

10.2 ターン制とイベントカード

このゲームの進行方向を説明する（図 10-2）。ここではプレーヤーが 4 人（都市住民 2 人・遊牧民 2 人）でプレーヤー1 の遊牧民からゲームがスタート場合を例にあげる。

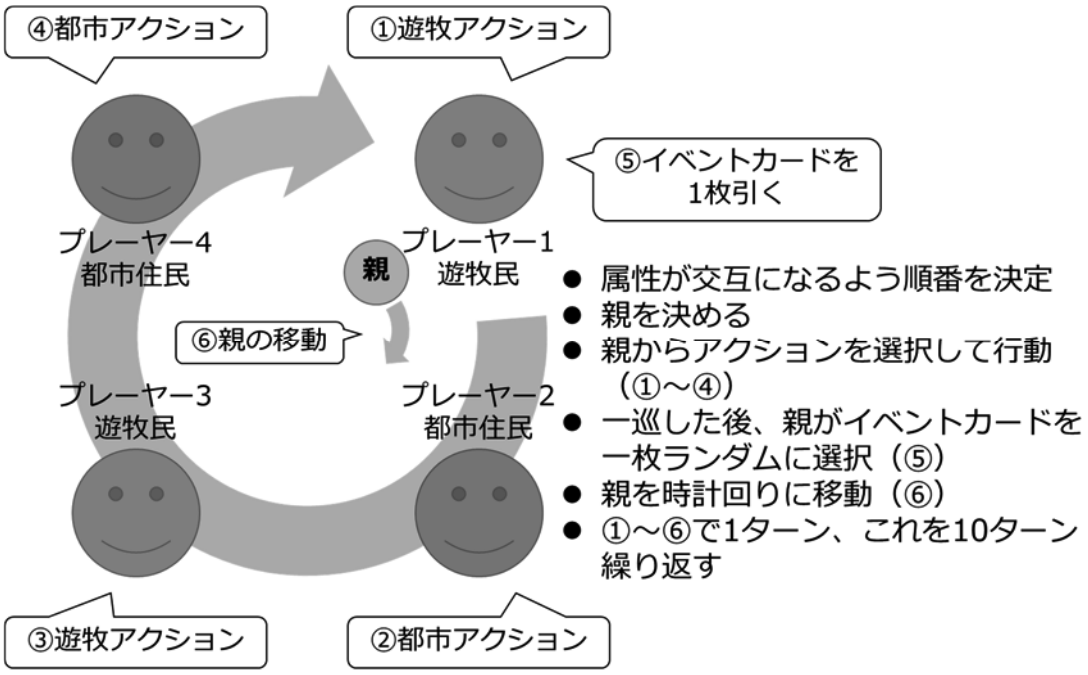


図 10-2 ゲーム進行方向の一例

まず、ゲーム開始時に属性が交互となるように順番を決める。この例であれば遊牧民→都市住民→遊牧民→都市となっている。次に親を決定し、親から順番にアクションを選択・行動し一巡する（①～④）。ターンが一巡した後、親はイベントカードを一枚ランダムに選択し、イベントが発生する(⑤)。イベント終了後、親が次の順番のプレーヤーに移動する(⑥)。この①～⑥をまとめて 1 ターンと呼び、これを 10 ターン繰り返す。10 ターン終了後に各々の属性の条件を満たしていればそのプレーヤーは成功、満たしていなければ失敗となる。

また、ターン開始時に環境レベルが自動的に 2 回復する。これは自然の回復力を表現している。

次にアクションとイベントカードについて説明する。都市住民が行うアクションを都市アクション、遊牧民が行うアクションを遊牧アクションと呼び、自分の番に 1 つ選択してアクションを起こすことができる（表 10-1）。

表 10-1 都市アクション・遊牧アクションと各レベルへの影響（一例）

	都市アクション				遊牧アクション			
	鉱山開発（原状回復なし）	鉱山開発（原状回復あり）	都市開発	…	家畜の売買	放牧	遊牧民組合結成（強化）	…
都市資本	+3	+1	+1		-1	0	0	
環境(共通)	-3	0	-1		0	-1	0	
遊牧資本	0	0	0		+1	0	+1	
遊牧家畜	-1	0	0		-1	+2	0	

例えば都市アクションの「鉱山開発（原状回復あり）」では都市住民の資本レベルが+1 される。資本レベルを大きくしたい都市住民にとっては、資本レベルが+3 される「鉱山開発（原状回復なし）」を選択したくなるが、同時に環境レベルも-3 となってしまう。

また、都市住民よりも環境に依存する遊牧民であるが、自らが環境レベルを上げることはできない。これは遊牧民の伝統的な生活が、環境の回復量を超えない範囲で行われてきたことを意味する。

イベントカードについて説明する。イベントカードは各ターンの最後にランダムに選択されるものであり、社会的な変化や地球環境の変化を表している（表 10-2）。

表 10-2 イベントと各レベルへの影響（一例）

	イベント				
	好天候	世界的な鉱物需要増加	ゾド	世界恐慌による鉱物需要低下	…
都市 資本	0	+3	-1	-5	
環境（共通）	+3	-3	-1	+1	
遊牧 資本	0	0	-1	0	
遊牧 家畜	+3	-1	-5	0	
アクションへの影響	遊牧民 家畜レベル増加値が×2（放牧）	都市住民 資本レベル増加値が×2（鉱山開発）	遊牧民 家畜レベル増加値が÷2（放牧）	都市住民 資本レベル増加値が÷2（鉱山開発）	

例えば「好天候」であれば環境レベルと家畜レベルが+3 される。さらにそのターンのアクション選択時に「放牧」を選択していれば、その増加値が 2 倍すなわち+4 となる。これは遊牧民にとって有利なイベントだが、反対に「ゾド」は不利なイベントになっている。この時は環境レベルが-1 されるだけでなく、遊牧民の資本レベルが-1、家畜レベルが-5 される。その上、そのターンのアクション選択時に「放牧」を選択していた場合、その増加値が 2 分の 1 すなわち+1 となる。

このようにイベントカードでは一都市住民・一遊牧民の与える影響よりも大きな影響が発生し、その事象はランダムとなっている。

10.3 ゲームの特徴

最後にこのゲームの特徴を記す。

- 決着：勝ち負けではなく、各プレーヤーの成功・失敗

一般的に、ゲームの決着のあり方はプレーヤー間で勝敗を決めるというものだが、このゲームにおけるプレーヤーの目的は他社との勝負ではなく自らの基準を達成することであるため勝敗は決めない。そのかわりに、各プレーヤーの終了時の状態が 3 種類ある。

一つ目が成功である。これは都市住民もしくは遊牧民が自らの求めるレベルを達成し、かつ環境レベルも保たれている状態、言うなれば持続可能な生活が成立している状態である。

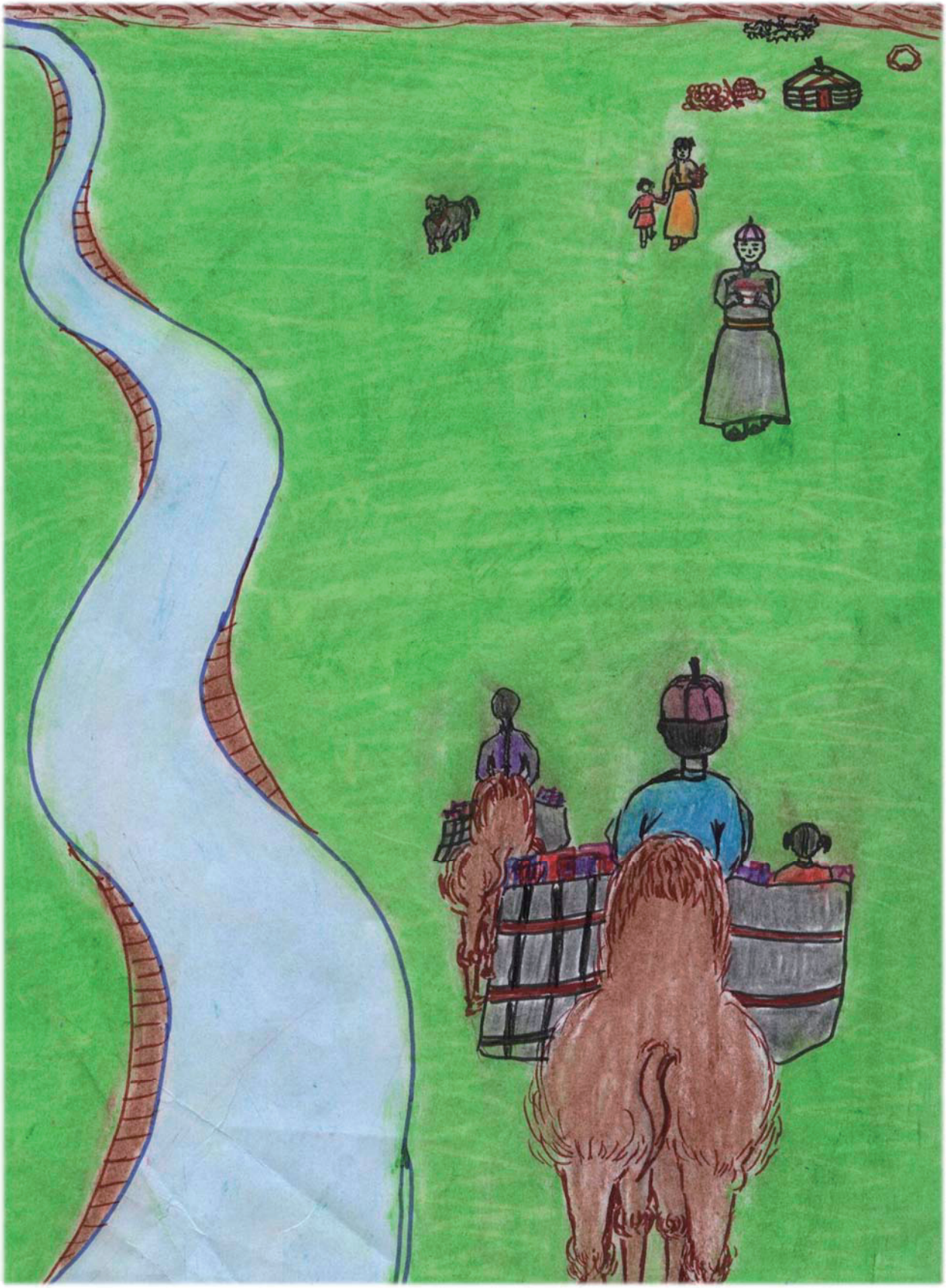
二つ目が失敗である。これはプレーヤーが求めるレベルが達成できない、もしくは環境レベルが保たれていない状態、つまり持続可能な生活が成立していない状態である。遊牧民の生活が成立しない場合、一部の遊牧民は都市での生活を始めるそうだ。しかし元々、現金収入を得る技術を持っていない遊牧民の多くは都市でも生活に苦しむそうだ。

三つ目が成功でも失敗でもない状態である。。。。

- 成功率：遊牧民が 6~7 割失敗するゲーム

このゲームはモンゴルの本質を抽出し単純化したものを目指している。そのため 10 ターン経過後の決着もモンゴルの現実を反映し、都市住民の成功率が 8 割以上、遊牧民の成功率が 3～4 割になるよう調整する。都市部では大気汚染が進行していること・鉱業への依存度が高いことなどを踏まえ、都市住民の成功率を設定した。また、遊牧生活の厳しさ・鉱山開発による影響・遊牧生活を辞め都市で生活する遊牧民がいることを踏まえ、遊牧民の成功率を設定した。

終



あとがき

思沁夫

2016年3月31日をもってGLOCOLのプロジェクト年限は終了する。今後も大阪大学で「海外フィールドスタディ(FS)」が企画、運営、実施されるのかどうか。正直なところ、予測できない。学生たちだけでなく、モンゴルで私たちを常に温かく迎え入れ、協力して下さる現地の皆さんにとって、非常に残念なことだと言わざるを得ない。

私はモンゴル FS の参加学生たちに「これが最後かもしれないよ」と言った。私の言葉が心に響いたのか、参加学生 3 名は、力一杯モンゴルを感じ取り、力一杯調査し、その成果を見事にこの報告書にまとめ上げた。

日本海を渡った向こう側、モンゴルでは今年も「春が近づいた。アネハヅルが戻った。夏になれば、阪大生がやって来る」と私たちを待ち続ける人々がいる。

また、私たちを待っているのは人だけではない。キャンプ地のイヌ、ナキウサギ、そしてガガ夫妻もきっと待っているはず…。

ガガとは実は白鳥の夫婦のことで、今から 6 年前、私が初めて出会ったとき、「ガーガー」と鳴いていたため、彼らをガガと名づけた。ガガ夫妻は、ウランバートルとアルバイヘールを結ぶ主要幹線道路（アルバイヘールから約 40km 地点）付近に位置する湿地（といっても交通量の多い、人通りのある場所）で毎年子育てをしている。ちょっと珍しい白鳥である。大勢の観光客がビデオやカメラを向けても、湿地から離れようとしない。「ここは私たちの『家』だよ!」といった感じだろうか。

白鳥は本来、警戒心の強い鳥である。子育て中であれば 500m 離れていても警戒心を緩めることはない。この習性から比較的大きな湖で子育てするのが一般的となっているようである。この湖は幹線道路から 10km 近く離れたところにある。地域では白鳥が多く飛来することで知られており、ホンノール（＝白鳥の湖）と呼ばれている。

モンゴルの青空に響くガガたちの声は、「お帰り。また来年!」と叫んでいるみたいだ。モンゴル FS で訪れる度に私たちを迎えてくれている（ようである）。

チャイコフスキーの「白鳥の湖」は有名であり、この作品で白鳥を知ったという日本の方も多いのではないのだろうか。私は長年、日本海側の地域に暮らしていたことがあるが、どんよりとした天空の下で白鳥が戯れている姿は冬の風物詩でもある。実は白鳥はモンゴル人とも深い縁がある。

モンゴルの一領域であるバイカル湖周辺のブリヤート共和国には、モンゴル人の起源を描いた神話がある。この神話によるとモンゴル人の起源は白鳥である。私の故郷、内モンゴルでは「ホン」（白鳥の意味）という歌がある（中国でも有名）。白鳥を客人に例え、つかの間の喜びと去りゆく悲しみが美しいメロディーの中に編まれている。

白鳥は国境を横断して生きるため、感染症拡大源として危険視される向きもあるが、白鳥をはじめとする渡り鳥の保護に関する条約は今から 100 年以上も前に異国間で締結されている（例えば、1916 年のアメリカ・イギリス（カナダ）間の渡り鳥保護条約）。その後、保護領域は北および西半球から地球規模に、保護対象とされる動植物も増え、生物多様性条約やラムサール条約に発展した。世界中における条約締結は、生態系保護が人類共通の意識であり、価値観だということを伝えている。そう考えれば、ガガたちの声が、私たち一人ひとりの「つながり」を促しているようにも聞こえてくる。

2015 年 7 月、りそなアジア・オセアニア財団の訪蒙では、現地の人々との親密な交流を通じて様々な学びがもたらされた。ネルグイさんは「モンゴルの世界文化遺産はオルホン渓谷のエルデニゾー寺院しかないが、ウランバートルに戻ら

れる際には是非立ち寄って頂きたい」と述べ、社会主義時代のスターリン政策によってエルデニゾー寺院は破壊から免れることはできなかったが、幸いにも寺院の半分以上は現存しており、周辺のオルホン渓谷とともに世界遺産になっていると紹介してくれた。りそなアジア・オセアニア財団の廣冨理事長は彼の話を注意深く聞き、次のように述べた。

「モンゴル国自体がひとつの世界遺産みたいなものでしょう。モンゴルを大切にし、モンゴルの素晴らしい自然環境を一緒に保護していきましょう。」

私は理事長の言葉に感銘を受けた。今後もモンゴルにおける環境プロジェクトを支援してくれることを嬉しく思うと同時に、研究プロジェクトにも力を入れて頑張っていきたいと思った。

ある地域の自然環境が良くなったとしても、モンゴルは変わらないのかもしれない。モンゴルが良くなったとしても、世界は変わらないのかもしれない。それでも保護活動を続け、現地との交流を深めてゆくのだろうか。私自身に問い続けているが、今でも納得する答えは得られていない。

科学技術は世界を根底から覆すような力を持っていること、地球が有限であり、多くの動植物や生態系は保護されなければ永遠に失われてしまうかもしれないことは分かる。そうすれば、共に行動するということは、環境保護の最も重要な手段ではないだろうか。

2015 年夏はモンゴル FS、りそなアジア・オセアニア財団の訪蒙に加え、「日蒙青少年自然探検旅行」が実現した。今後ますます日蒙間の交流が促進されることを期待したい。

最後になったが、この場をお借りして、本報告書発行にご協力下さった GLOCOL 事務員の片山歩さん、宮地薫子さんに心底からお礼申し上げたい。

資料 A
モンゴル国立大学での発表資料

Contents

- Self-introduction
- Schedule
- Mine development (Sakamoto)
- Automobile (Todoroki)
- Nomads' life (Inokuma)
- Our suggestion ~Board game~

2

Self introduction

3

Schedule

4

Nomads

- 2 mothers & 3 children
- They were **half "Ninja"** 4~5 years ago.
- Mining companies bought mining rights of this area where they stayed for a long time.
- Ninja and companies won't restore original condition. But administration have noting to do to this problem.
- The only good point is that Ninjas bought koumis from them.
- They formed the union to sell their products higher.

8

Mine development (Sakamoto)

6

Mining (Sakamoto)

- I'm interested in what stakeholders related to mine development think about each other.
- We conducted interview to
  - 5 nomads
  - 1 mining company officer

7

Schedule

Date		Contents
	9th	Osaka (Japan)→Korea→Ulaanbaatar→
	10th	ツァガンボルガン (Arvaikheer)
	11th	Walking around ツァガンボルガン
	12th	Interview to Ex-Ninjas
	13th	Visiting Arvaikheer city
Aug	14th	Interview to Nomads
	15th	Interview to Nomads
	16th	ツァガンボルガン (Arvaikheer)→Ulaanbaatar
	17th	Presentation in MUIS
	18th	Ulaanbaatar→Korea→Osaka (Japan)

Watch the video (14th Aug)

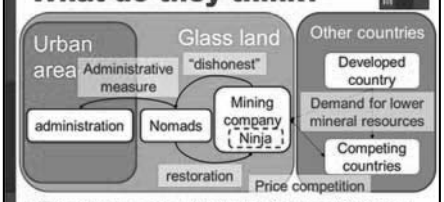
5

The head of mining company

- This company is one of the subcontractor of URBAN.
- 20 employees
- His work is **placer mining** (gold alluvial) from dirt that have already be washed for gold 5-6 times.
- "Nomads are dishonest"
  - They inform NGO "Mining are bad fellow" though they also mine gold as Ninja…
- No picture…

9

What do they think?



- There is no opportunity to discuss this issue with all stakeholders.
- Developed countries may promote estrangement and environmental destruction.

10

Automobile (Todoroki)

11

Topics of my research

1. Automobile
   - The current situation and local inhabitant's consciousness of the change of life and culture by the automobile prevalence [questionnaire survey]
   - Counting of gas station on the main road [observation]
   - Characteristics of the road and driving [observation]
2. City
   - Sprawling [observation]
   - Religion and city [interview]
3. Aesthetic sense and view of nature
   - Preferable animal, plant, and human face [Interview & questionnaire]
   - Peace & Beauty [interview]

12

自動車の急速な普及

出典）モンゴル政府の統計集（2004～2013年）

13

ウランバートルの大気汚染と渋滞

- 「世界最悪」とまで言われたウランバートルの大気汚染

- 市民のストレス源であり，時間の浪費につながる交通渋滞

14

交通渋滞の解消に向けた政策目標

- バトボルド首相の提示した目標（2008～2011年）
  - 自動車の駐車場（屋内，地下，高層，有料）を多く作る
  - ウランバートルの幹線道路および補助道路の交差点の処理能力を改善するために，立体交差を建設する
  - 歩行者のための歩道橋および地下通路を建設する
  - 大容量の公共交通機関を導入する
  - 都市内高速道を建設する
  - チンギスハーン国際空港までの道路を新たに建設する
  - 一つの都心部である現在のウランバートルをいくつかの副都心部に分散する
  - ウランバートルの道路基金の財源を増やす
  - ウランバートルの道路および道路設備の修理・清掃システムの無駄を省く
  - 全ての道路を政府または民間の専門企業に責任を持たせて施行させる
  - 現在使われている橋，道路設備の耐震性を補強する対策も計画・実施
  - 道路建設，修理の分野に新技術を広く導入する

http://mongolnews.blog133.fc2.com/blog-entry-396.html

15

ソフト面での渋滞の原因

- ドライバーの運転マナーの悪さを原因とする事故
  - 無理な割り込み
  - 自分勝手な運転で周囲を危険に巻き込む
  - 信号無視
  - 譲合いの心を持たない
- 信号を守らない歩行者
- ドライバーの整備不良に対する認識の甘さ
  - 道の真ん中で故障・ガス欠による渋滞
  - 冬でもノーマルタイヤで走る
- モンゴルの道路交通法の規定
  - 事故を起こした場合，モンゴルでは警察が到着し，現場検証が済むまでは，事故車両を動かしてはいけないことになっている
- 車検制度
  - 整備不良，耐用年数を過ぎた車両でも自動車税を払えば書類審査だけで通ってしまう（排気ガスの成分検査も行わないので，大気汚染の原因にも）

http://mongolnews.blog133.fc2.com/blog-entry-396.html

16

地下鉄敷設計画（ウランバートル・メトロ）

- ウランバートル地下鉄プロジェクトに必要な資金の融資契約案を作成
  - ウランバートル市の地下鉄建設について市議会が決定し，国家安全保障委員会が2013年6月10日に承認した。
  - 2030年までに地下鉄駅周辺の1300haを再開発し，5万世帯のアパートを建設する。
  - 15万6000人分の雇用が生み出され，税収増が期待されている。
  - 詳細調査を2015年までに完了することを決定した。

モンゴル経済概況（2013年9月）日本貿易振興機構（JETRO）
http://www.jetro.go.jp/ext_images/jfile/report/07001525/07001525.pdf

- 地下鉄ではなく，ライトレール（LRT）にするという噂も．．．

17

アンケート調査票

番号	質問（日本語）	質問（モンゴル語）
回答者情報	まず，あなたについて教えてください。名前，年齢，性別（男・女），家族構成，居住地区名，電話番号	Юуны өмнө та өөрийнхөө тухай бичиг үг. Нэр, Нас, Хүйс (эр · эм) , Гэр бүлийн гишүүд, Оршин суугаа хороололын нэр, Утасны дугаар
問1：自動車の所有状況について		
問1-ⅰ	あなた，あるいはあなたの家族は，自動車を持っていますか	Таныд болон танай гэр бүлд машин байдаг уу?
問1-ⅱ	（所有している人）あなたの自動車について教えてください 所有台数，購入時期，購入方法，購入価格，利用頻度	（Машин эзэмшдэг хүн）Та өөрийн машины талаар бичиг үг. Хэдэн машинтай вэ: Хэзээ худалдаж авсан бэ, Хэрхэн , худалдаж авсан бэ, Худалдаж авсан үнэ, Ашиглаж буй байдал: Ойролцоогоор
問1-ⅲ	（所有していない人）車を持たない理由を教えてください 動物に乗るのが好きだから，自然環境に優しいから，公共交通機関の利用で十分だから，お金がないから，言ってしまったから，管理が大変だから，その他	（Машин эзэмшдэггүй хүн）Таны машингүй байгаа шалтгаан юу вэ? Морь, нал унах дуртай учраас, Байгаль орчинд нөлөө учраас, Нийтийн тээврийн хэрэгсэлтэй хангалттай учраас, Мөнгө байхгүй учраас, Машинаа зарчихсан учраас, Машин хэцүүхэн, ашиглах тевегтэй, анхаарлаа зөвтгөй учраас, Бусад

18

アンケート調査票

番号	質問（日本語）	質問（モンゴル語）
問2：主な移動車手段について		
問2	あなたが昨日1日で使用した移動手段とだいたいの時間，その時どこからどこまで移動したのか，思い出してください 自動車，バイク，自転車，バス，タクシー，動物，徒歩，その他	Та өнгөрөг сүүлч явсан тээврийн хэрэгсэл, суух явсан хугацаа, хаанаас хаа хүртэл явсан тухайгаа бодоцоолж бичиг үгАвтомашин, Мотоцикл, Унадаг дугуй, Автобус, Такси, Морь мал, Явган, Бусад
問3：ガソリンスタンドについて		
問3-ⅰ	ガソリンスタンド（自動車の燃料を補給する場所）で燃料を補給することは，不便だと感じますか	Шатахуун тулгах станц (бензин колонк)-аас шатахуун авах тиймэрхүү санагддаг уу?
問3-ⅱ	ガソリン（燃料）は高いと思いますか	Та автомашины осол нудэлэг үзэж (эль эсвэл осолд өртөж) байсан уу?
問4：交通事故について		
問4-ⅰ	あなたは自動車の交通事故を目撃（あるいは経験）したことがありますか	Та автомашины осол нудэлэг үзэж (эль эсвэл осолд өртөж) байсан уу?
問4-ⅱ	自動車は怖いと思いますか	Автомашин аюултай, аймаар гэж бодож байна уу?

19

アンケート調査票

番号	質問（日本語）	質問（モンゴル語）
問5：自動車の影響について		
問5	自動車の良いところと悪いところを考えて，書いて下さい。 自由に，いくつでも書いて下さい。 （例）自動車に乗ると移動が便利になる。自然環境が破壊されてしまう。	Автомашины сайн тал болон муу талыг бичиг үг. Чөлөөтэй, хичээнэн н зуйл бичиж болно. (Жишээ) Автомашинаар явах нь амар, ая тухтай. Байгаль орчинг эвдэдг.
以下，都市域のみ対象		
問6：都市の渋滞について		
問6-ⅰ	都市の渋滞はひどいと思いますか	Хотын замын тугжрал айхтар их гэж бодож байна уу?
問6-ⅱ	都市の渋滞の緩和策の1つとして，首都中心部に自動車で入る時，ドライバーに一定の料金を徴収する対策が考えられます。あなたはこの対策に賛成ですか，あるいは反対ですか	Замын тугжралыг бууруулах бодлогын нэг болох хотын тив юснгт орох үед жолоочоос тогтмол тамбар хураах арга хэмжээ байдаг. Та энэхүү арга хэмжээг хүлээн зөвшөөрч байна уу, эль эсвэл үгүй эсрэг байна уу?
問6-ⅲ	渋滞を緩和するために，どんな方法があると思いますか。あなたの意見をきかせてください	Замын тугжралыг бууруулах өөр арга байна гэж бодож байна эсэх Та өөрийн саналаа бичиг үг.

20

アンケート調査票

番号	質問（日本語）	質問（モンゴル語）
問7：公共交通機関について		
問7-ⅰ	あなたは，ウランバートルで地下鉄計画があることを知っていますか	Та Улаанбаатар хотод метро барих төлөвлөгөөний тухай нэдэг байна уу?
問7-ⅱ	もしウランバートルで地下鉄ができたら，あなたは地下鉄を利用しますか	Хэрэв Улаанбаатар хотод метро баригдвал та ашиглах уу?

- We got 10 answer from nomads, and many from urban people.
- Now we are totalizing the data.

21

Counting of gas station on the main road

- I registered "the time", "which road side" ,"running distance" of the place of gas station from ウランバートル to チャガンボル・ソム
- I will make a map of Mongolian main road with gas station location

ガソリンスタンドの記録（From チンギスハーン国際空港）

No.	経過時間(h)	距離(km)	左右	備考(メモ)
1	1		右	
2	1			
3	2		右	relative
4	4		右	
5	6		右	
6	8		右	夏 Vrio_bus
7	11		右	この辺からウランバートル市内へ
8	11		右	
9	12		右	
10	12.5		右	トイスーパー屋
11	15.5		右	鉄道を右手に眺めながら
12	16		右	
13	16		右	
14	17		右	
15	17.5		右	ここで結婚した（写真あり）
16	18		右	
17	19		右	

22

Counting of gas station on the main road

- I registered "the time", "which road side" ,"running distance" of the place of gas station from ウランバートル to *Tsagaan burgas*
- I will make a map of Mongolian main road with gas station location

I found a law:
Group of gas station and shops, in 30 minutes, driving a car.

→ We won't be gasoline shortage if we are careful, when driving the main road.

23

Characteristics of the road and driving of Mongolia

■ Main road

- Most of cars are private(few taxi, bus, truck)
- Many Japanese cars (TOYOTA, PRIUS)
  - Right handle & left handle
- Straight-ward but up-down, some square hole
  Why?

■ Local road

- Rut in grass, sometimes across the river
- Few landmarks (for Japanese)
- Very bumpy because of stone
- Drunk driving is allowed?

24

Characteristics of the road and driving of Mongolia

■ Driving (main road)

- They are not always drive on the right:
  - For avoiding cars in the opposite lane
  - For avoiding hole or bumpiness
- So they use high beaming and horn when passing (overtaking)
  - High beam: to notice my existence to opposite lane car
  - Horn: to notice my existence to car in the same lane

25

City

- I saw the 鳥瞰図 of アルバイヘール
  - Sprawling

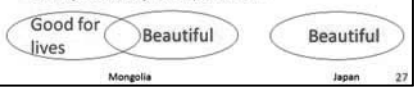
Question:
Is **urban planning** is needed in Mongolia now? If yes, what kind of it, who do it, and how to do?

- Religion (チベット仏教) and city have strong relationship in Mongolia.
  - People gather the sacred place, and it become city.
  - Management (Europe) < Regional culture
    - 都市自治機能，再生産

26

Aesthetic sense and view of nature

- Favorite animal
  - Dogs: loyal, save livestock from wolves
  - Horse: Loyal, Powerful,
  - Rabbit: cute, birth years is rabbit year
  - Wolf: save human baby
- Favorite plants
  - Rose: the symbol of love
  - Sun flower: beautiful yellow color
  - Cherry: Memory of Japan travel



27

Aesthetic sense and view of nature

①若・細・黒	②年・細・黒	③若・太・黒	④年・太・黒
⑤若・細・白	⑥年・細・白	⑦若・太・白	⑧年・太・白

28

Peace & Beauty by Nergui

質問「やっぱり顔が大事？」

- もちろん，顔や身体も重要だけど，私たちの世代（社会主義を経験した）では，どちらかというと外見よりも内面が重要．
  - スマイルというのは，（ダライラマ14世やガガーリン（1164）のような）人間の内面を映し出すものである．物質的な顔を素敵に見せる．
- 平和も美の大きな要因
  - ある新聞でこのような記事があった．第二次世界大戦後，モンゴル人の女性が生まれた自分の子供を見て，「最近の子供の顔は可愛いね．もしかしたら，戦争は私たちから遠ざかっているのではないか」この記事を読んでネルグイさんは，戦争は人々の美感との関係するのかと思った．
  - 戦時中の顔は，美しいとは言い難かった．
  - 終戦の時，人々の顔が美しくなった．
  - 日本人のあなた方は美しい，平和で落ち着いた世の中に生まれたのだろう．
- 人類共通して世界で平和になったのだろう
  - 1956年に初めてウランバートルの大学に行った．そこで中国人に会ったが，顔や服装があまりに醜く，かわいそうに思った．あまり長く見たいと思わなかった．
  - しかし，最近テレビで北京の女の子を見ると可愛い．

29

Question

1. Why so many gas stations are located densely in urban area? Are they profitable?
2. There're many 24 hours store. Are they necessary (profitable)?
3. How the route of main road determined?
4. Can public transportation (bus, train) be fit to Mongolia, which has vast land?

30

Nomads' life (Inokuma)

31

Research theme

- My research theme

Suggestion of nomadism improved by technology in order to maintain nomadic culture

- I realized through Field Study

A social system for nomads managing nomadism is more important in order to maintain the culture than improvement of nomadism itself

32

lifestyles

- Traditional nomadism
  - Religion
  - Making kumis every 2 hours
  - Mongolian Hospitality

- Modern nomadism
  - IT technology
  - Automobiles

33

lifestyles

- City life
  - A large room with a bath, a large screen, a beautiful kitchen etc.

34

My opinion and question

- My opinion and question
  - I want to support Mongolian economy improving
    - Will gold mine be dried?
    - I found Mongolian young people's will that they support the Mongolian future
    - Nomadism will be disappeared?
    - How do Mongolian people think this？
    - I am witnessing one great culture is NOW disappearing

Nomadism is unique to Mongolia. Mongolia have to develop originally in Mongolia; Modern life coexists with nomadism

35

Our suggestion ~Board game~

36

- How can other people know our experience in Mongolia?
  - Japanese friends
  - Young Mongolian etc…
- Board Game!
- They can know this issue spuriously even if they have never been to Mongolia.

37

Abstract of board game

- Winning or losing is not really important, knowing Mongolian issue is essential point.
  - Player1→aim to sustain his life
  - Player2・3→aim to maximize their own profits

38

Thank you for your attention!

39

資料 B　自動車に関するアンケート調査票

大阪大学 GLOCOL　field study2015
A.遊牧地域対象

これは短いアンケートです。回答に時間はあまりかかりません。なお、この調査は学術的研究のみを目的としています。個人の意見や情報を利用したり、公開することはありません。

【まず、あなたについて教えて下さい。】
名前：
年齢：　　性別：　男　・　女
家族構成：
居住地区名：
電話番号：

問１：自動車の所有状況について
ⅰ.あなた、あるいはあなたの家族は、自動車を持っていますか。
（該当する方に✓してください）
☐ はい（→ⅱへ進む）　☐ いいえ（→ⅲへ進む）

ⅱ.（所有している人）あなたの自動車について教えてください。
所有台数：　　台
購入時期：
購入方法：
購入価格：　　Tg
利用頻度：　　約　　回　/　１週間　（乗る・運転する両方含む）

ⅲ.（所有していない人）車を持たない理由を教えてください。（該当するものすべてにチェックしてください。当てはまるものがない場合、その他のところに自由に書いてください。）
☐ 動物に乗るのが好きだから　☐ お金がないから
☐ 自然環境に悪いから　☐ 売ってしまったから
☐ 公共交通機関の利用で十分だから　☐ 管理が大変だから
☐ その他：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

問２：主な移動手段について

あなたが**昨日１日で**使用した移動手段とだいたいの時間，その時どこからどこまで移動したのか、思い出してください。

自動車：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
バイク：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
自転車：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
バス：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
タクシー：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
動物：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
徒歩：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
その他：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）

問３：ガソリンスタンドについて

ⅰ.ガソリンスタンド（自動車の燃料を補給する場所）で燃料を補給することは、不便だと感じますか。（あてはまるものに✓してください）

☐ はい　☐ いいえ　☐ どちらでもない

ⅱ.ガソリン(燃料)は高いと思いますか。

☐ はい　☐ いいえ　☐ どちらでもない

問４：交通事故について

ⅰ.あなたは自動車の交通事故を目撃（あるいは経験）したことがありますか。

☐ ある　いつ：　どこで：

☐ ない

☐ 覚えていない

ⅱ.自動車は怖いと思いますか。

☐ はい　☐ いいえ　☐ わからない

問５：自動車の影響について

自動車の良いところと悪いところを考えて、書いて下さい。

自由に、いくつでも書いて下さい。

（例）自動車に乗ると移動が便利になる。自然環境が破壊されてしまう。

良い面	
悪い面	

以上です。ご協力、誠にありがとうございました。

大阪大学 GLOCOL　field study2015
Ｂ.都市域対象（ウランバートルと他の街）

これは短いアンケートです。回答に時間はあまりかかりません。なお、この調査は学術的研究のみを目的としています。
個人の意見や情報を利用したり、公開することはありません。

【まず、あなたについて教えて下さい。】
名前：
年齢：　　性別：　男　・　女
家族構成：
居住地区名：
電話番号：

問１：自動車の所有状況について
ⅰ.あなた、あるいはあなたの家族は、自動車を持っていますか。
（該当する方に✓してください）
☐ はい（→ⅱへ）　☐ いいえ（→ⅲへ）

ⅱ.（所有している人）あなたの自動車について教えてください。
所有台数：　　台
購入時期：
購入方法：
購入価格：　　Tg
利用頻度：　　約　　回　/　１週間　（乗る・運転する両方含む）

ⅲ.（所有していない人）車を持たない理由を教えてください。（該当するものすべてにチェックしてください。当てはまるものがない場合、その他のところに自由に書いてください）
☐ 動物に乗るのが好きだから　☐ お金がないから
☐ 自然環境に悪いから　☐ 売ってしまったから
☐ 公共交通機関の利用で十分だから　☐ 管理が大変だから
☐ その他：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

問２：主な移動手段について

あなたが**昨日１日で**使用した移動手段とだいたいの時間，その時どこからどこまで移動したのか、思い出してください。

自動車：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
バイク：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
自転車：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
バス：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
タクシー：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
動物：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
徒歩：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）
その他：	分	から	まで（	片道 ・ 往復 ）

問３：ガソリンスタンドについて

ⅰ.ガソリンスタンド（自動車の燃料を補給する場所）で燃料を補給することは、不便だと感じますか。

（あてはまるものに✓してください）

☐ はい　☐ いいえ　☐ どちらでもない

ⅱ.ガソリン(燃料)は高いと思いますか。

☐ はい　☐ いいえ　☐ どちらでもない

問４：交通事故について

ⅰ.あなたは自動車の交通事故を目撃（あるいは経験）したことがありますか。

☐ ある　いつ：　どこで：

☐ ない

☐ 覚えていない

ⅱ.自動車は怖いと思いますか。

☐ はい　☐ いいえ　☐ わからない

問５：自動車の影響について

自動車の良いところと悪いところを考えて、書いて下さい。

自由に、いくつでも書いて下さい。

（例）自動車に乗ると移動が便利になる。自然環境が破壊されてしまう。

良い面	
悪い面	

問６：都市の渋滞について

ⅰ.都市の渋滞はひどいと思いますか。当てはまる方に✓してください。

	はい（→ⅱ，ⅲへ進む）		いいえ（→問７へ進む）

ⅱ.都市の渋滞の緩和策の１つとして、首都中心部に自動車で入る時、ドライバーに一定の料金を徴収する対策が考えられます。あなたはこの対策に賛成ですか、あるいは反対ですか。

	賛成		反対
	料金が安ければ賛成		よくわからない

ⅲ.渋滞を緩和するためにどんな方法があると思いますか。 あなたの意見をきかせてください。

問７：公共交通機関について

ⅰ.あなたは、ウランバートルで地下鉄敷設計画があることを知っていますか。

	はい		いいえ

ⅱ.もしウランバートルで地下鉄ができたら、あなたは地下鉄を利用しますか。

	はい		いいえ
	運賃による		地下鉄のルートによる
	よくわからない		

以上です。ご協力、誠にありがとうございました。

資料 C　リスクに関するアンケート調査票

回答日：　　年　　月　　日
名前：
電話番号：
年齢：
職業：
学歴：
家族構成：
居住エリア:

1
以下の中から、あなたにとって命や生活、環境に悪い影響を及ぼすものを 5 つまで選んでください。
そして、あなたが最も恐ろしいと思う順に選んだ 5 つの項目を並べてください。
下記以外にあれば、＜その他＞の欄に自由に書いてください。

経済不安／失業／金銭不足／政治腐敗・汚職／外国政府や企業／都市のインフラの不備や途絶／エネルギー不足／テロ・犯罪／インターネット障害、情報災害／人口減少・増加／収入格差／民族差別／原発／交通事故／地球温暖化／ゾド／大気汚染／水質汚濁／土壌汚染／自然資源の枯渇／食料不足／食品汚染／病気／アルコール依存症／喫煙／

1.
2.
3.
4.
5.

<その他>

2　モンゴルの現在と将来について、あなたにお聞きします。

2-1 モンゴルの今はどのような状況だと思いますか？あなたの意見に最も近いものを選んで、〇を付けてください。

A　とても明るい
B　やや明るい
C　ふつう
D　やや暗い
E　とても暗い
F　なんとも言えない

2-2　それはどうしてですか。上の質問でそう答えた理由を書いてください。

2-3　モンゴルの将来はどうなると思いますか？あなたの意見に最も近いものを選んで〇を付けてください。

A　とても明るい
B　やや明るい
C　ふつう
D　やや暗い
E　とても暗い
F　なんとも言えない

2-4　それはどうしてですか。上の質問でそう答えた理由を自由に書いてください。

以上です。ご協力誠にありがとうございました。

思沁夫、岸本紗也加

執筆者および翻訳者のプロフィール

思沁夫（すちんふ）
大阪大学 GLOCOL　特任准教授
担当：まえがき、第 4 章、あとがきなど

内モンゴル生まれ。生態人類学と多言語を武器に、モンゴル、雲南、シベリアなどで環境問題の解決と環境保護活動に情熱を注いでいる。現場の人々や学生たちと学び合う中にこそ、本当の「答え」があると信じている。

岸本　紗也加（きしもと　さやか）
大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻 特任研究員
（大阪大学大学院人間科学研究科出身）担当：第 7 章など

徳島生まれ、阿波踊り少女として育つ。フランスやモンゴルでの留学をきっかけに、人間、社会、自然との共生を結構本気で考えるようになった。国境線は地図にはあっても心の中にはいらない！ということを読者の皆さんに伝えたい。

猪熊　洋子（いのくま　ようこ）
大阪大学大学院工学研究科生命先端工学専攻 M1
担当：表紙のデザイン、第 1 章（分著）、第 2 章など

奈良県生まれ。放課後はジャズピアニストとして関西圏で活動中。「おもしろそう」と思ったことは、とりあえずやってみることにしている。日本の過剰なまでの物質的豊かさに疑問を感じている。

阪本　悠佑（さかもと　ゆうすけ）
大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻 M1
担当：第 1 章（分著）、第 5 章、第 10 章など

大阪府生まれ。孫世代に顔向けできない社会は作りたくないと考え、環境問題に関心を持つ。最近は環境問題×〇〇の〇〇を絶賛模索中。

轟　晃成（とどろき　あきなり）
大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻 M1
担当：第 1 章（分著）、第 6 章、第 8 章など

広島県生まれ。環境問題は環境だけを考えていても解決できないと気付き、世界の様々な問題にも関心が広がった。モンゴル・フィールドスタディが実は私の初海外体験。モンゴルでの歌手デビューを密かに企む。

マンゴードションホル・ネルグイ

自然保護遊牧民組合「バトノミン・スワラガ」組合長

寄稿：第 9 章

1961 年、モンゴル国立農牧畜業大学を卒業し、ウブルハンガイ県農牧畜業管理局で部長などを歴任した。モンゴル自然保護協会の設立に貢献した人物のひとり。2000 年、ツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合を設立し、地域における自然保護に尽力している。廣冨理事長や大阪大学の教員、学生たちと飲みながら日本やモンゴルの未来について語るのが楽しみである。

ツェレンダグワ・ムンフバヤスガラン

大阪大学大学院人間科学研究科人類学研究室 D3

担当：第 3 章

ウブルハンガイ県生まれ。フィールドスタディをきっかけに大阪大学と故郷の架け橋になり、今後も様々なかたちで貢献できればと思っている。共に学びあい、話し合い、助け合ってゆけば、きっと良い結果が出ると信じている。

アマルバト・ソソルボラム

モンゴル科学アカデミー国際関係研究所

隣国・戦略的パートナーシップ研究室研究員

担当：原稿のモンゴル語訳

ウランバートル生まれ。日本に留学した経験があり、現在はモンゴルで日蒙間の歴史研究を行っている。大阪大学 GLOCOL が大好き。2012 年、モンゴル・フィールドスタディにも参加した。日本の皆さんと交流でき、とても良い思い出になっている。

小林　馨（こばやし　けい）

洛南高等学校附属中学校 1 年

担当：感想文「モンゴルの心」

神戸市生まれ、大阪・吹田市育ち。歴史好き。初めて訪れたモンゴルの自然に魅了された。馬乳酒にもすぐに慣れ、適応力の高さが自慢である。

上須家族（百花、美咲、加寿子、道徳）

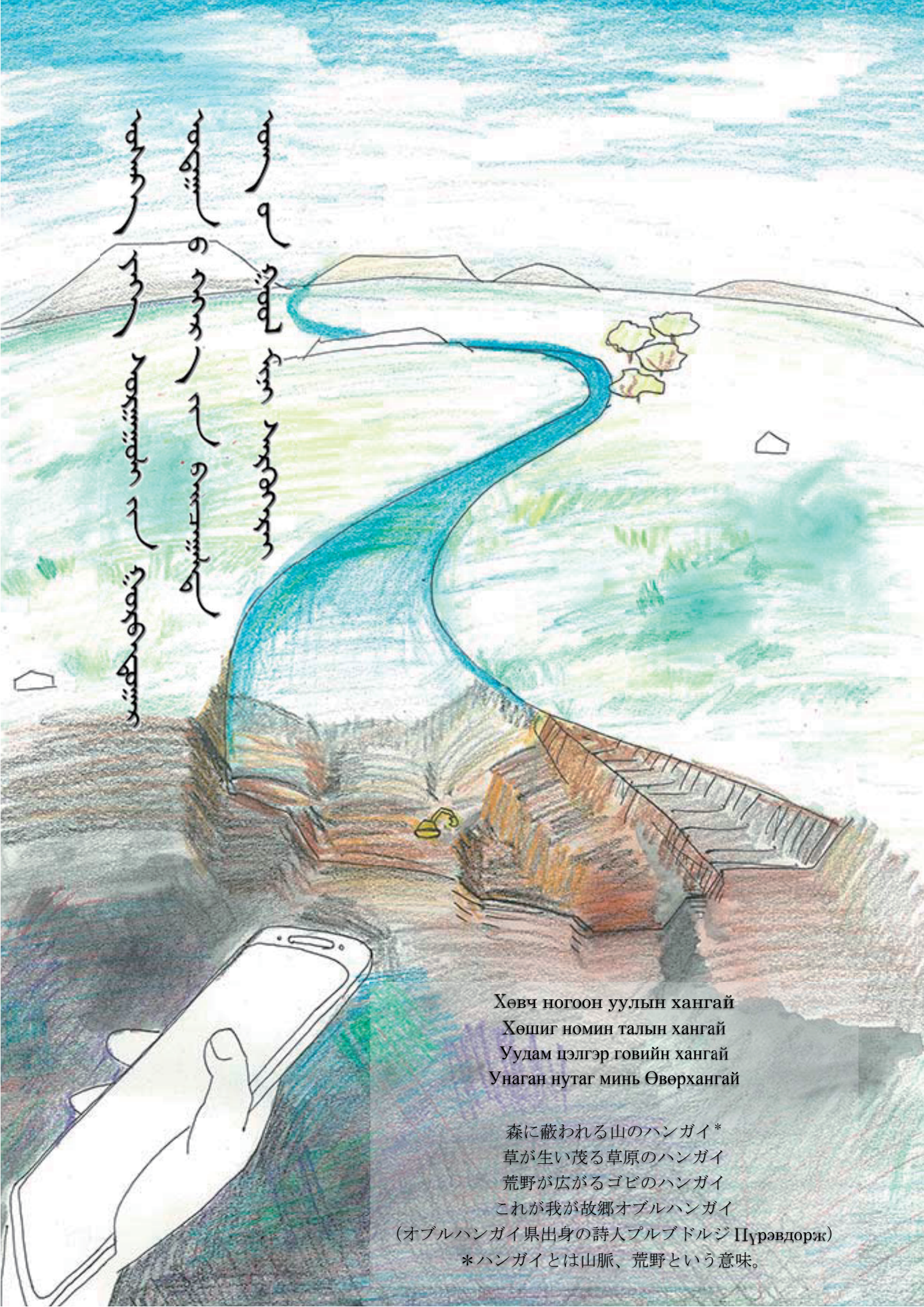
（うわす　ももか、みさき、かずこ、みちのり）

担当：感想文「モンゴル大冒険」

私たちのはじめてのモンゴル冒険旅行である。モンゴルの自然の壮大さ、暮らしの厳しさ、そして人の温かさを学んだ。モンゴル冒険隊として山に登ったり、おいしい羊肉を食べたり、友達もできた。また必ず訪れたい。

大阪大学 GLOCOL 海外体験型教育企画オフィス（FIELDO）
2015 年度　海外フィールドスタディプログラム　報告書
『みち～草原の海に描く未来～』

発行日　　2016 年 3 月 15 日（非売品）
監　修　　思沁夫
編　集　　猪熊洋子・阪本悠佑・轟晃成
発　行　　大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）
〒565-0871　大阪府吹田市山田丘 2-7
TEL　06-6879-4442　　FAX　06-6879-4444



Хөвч ногоон уулын хангай
Хөшиг номин талын хангай
Уудам цэлгэр говийн хангай
Унаган нутаг минь Өвөрхангай

森に蔽われる山のハンガイ*
草が生い茂る草原のハンガイ
荒野が広がるゴビのハンガイ
これが我が故郷オブルハンガイ
（オブルハンガイ県出身の詩人プルブドルジ Пүрэвдорж）
*ハンガイとは山脈、荒野という意味。